The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	世界システムと海域アジア交通
Author(s)	桃木, 至朗
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13024
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Osaka University
The 21st Century COE Program
Interface Humanities
Research Activities 2004-2006

世界システムと海域アジア交通

Osaka University The 21st Century COE Program Interface Humanities Research Activities 2004-2006

大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006

文学研究科　人間科学研究科　言語文化研究科　コミュニケーションデザイン・センター

第4巻
世界システムと海域アジア交通

Global History and Maritime Asia

目　次

007　巻頭言
桃木至朗

009　総論　歴史学の危機と21世紀の挑戦
桃木至朗

第Ⅰ部　躍動する周縁と開かれた中心――インターフェイスの場としての海域アジア

037　9世紀～14世紀前半の日本列島と海域アジア
山内晋次

059　A Review of the Periodization of Southeast Asian Medieval/Early Modern History, in Comparison with That of Northeast Asia
Momoki Shiro and Hasuda Takashi

091　Maritime Trade and Edo Material Culture: The Long-Term Trends in Textile Imports and Metal Exports of Tokugawa Japan, ca. 1600-1800
Fujita Kayoko

第Ⅱ部　新しい歴史学と歴史教育の対話

115　大学・高校の専門家の協働による歴史教育の刷新にむけて
―第4回全国高等学校歴史教育研究会を振り返って―
佐藤貴保

217　全国高等学校歴史教育研究会に参加して
―大学と高校の円滑な接続を目指して―
堀江嘉明

239 高校生と考える8世紀の東アジア世界
—世界史教材としての『続日本紀』—
笹川裕史

257 学びの定着をめざす歴史授業の一考察
松木謙一

巻頭言

「世界システムと海域アジア交通班」最終報告書をお届けする。当班は2002-03年度の「シルクロードと世界史班」(代表：森安孝夫教授。活動内容はCOE中間報告書、同データブックで紹介済み）の活動を引き継いだもので、メンバーは以下の通り。

代　表　者　桃木至朗（大阪大学文学研究科教授）
共同研究者　森安孝夫（同上）
平　雅行（同上）
秋田　茂（同上）
山内晋次（COE特任助手。2005年度から文学研究科助手）
佐藤貴保（COE特任研究員）
藤田加代子（同上）
ピヤダー・ションラウォーン（同上。2004年度のみ）
蓮田隆志（日本学術振興会特別研究員。2005年度からCOE特任研究員）
水田大紀（文学研究科・大学院生。2005年度から）

研究費は2004年度380万円、2005年度386万1千円、2006年度256万円（最終報告書作成費を除く）であった。本報告書は、活動全体に関する総論と、世界への発信を目指す英語論文からなる第一部、それにユニークな活動の代表例として新聞（朝日新聞2006年8月22日付夕刊文化欄、読売新聞同11月23日付教育欄）でも紹介された「全国高等学校歴史教育研究会」の成果にもとづく論考を掲載する第二部という構成をとった。総論で紹介するように別途刊行予定の報告書・書籍が数点あり、研究会・発表論文等のリストは最終データブックに含まれている。あわせてご参照いただければ幸いである。アジア海域史、中央ユーラシア史、グローバルヒストリーの3分野を中心に、世界レベルの新しい研究を

進めつつ歴史学界や歴史教育を刷新しようとする「阪大史学の挑戦」をご覧いただこう。

最後に、われわれの活動に参加したりこれを支えていただいた研究者、院生・学生、高校教員、事務職員ほかすべての皆さんに、あつくお礼申し上げたい。

2006年12月　桃木至朗

総論

歴史学の危機と21世紀の挑戦

桃木至朗

最初に考えてみよう。歴史の研究を業とするわれわれは、そもそも何者なのだろうか。

われわれは世間でしばしば歴史家と呼ばれる。それは狭義の学術研究者（大学の先生）と言うより、思想家、宗教家、作家などの仲間ということになりそうだ。その著作が「作品」としばしば呼ばれる点も、作家や芸術家に近いのかもしれない。一方われわれは歴史学者・歴史研究者とも称する。「学者」なら「物知り」に近い意味でも使用されるだろうが、「研究者」となると、思想家や作家とははっきり違った学術研究の色彩が強い。歴史研究者自身が、社会科学者の仲間であることを主張する場合もある。この「家」と「研究者」の対比は、われわれの主たる任務は歴史を「論ずる」（解釈する、叙述する）ことにあるのかそれとも歴史的「事実」や「法則」の解明にあるのかという問いにも結びつくであろう[*1]。また呼び名はさておくとして、歴史研究の専門家は、学問の世界や知識人社会でどんな位置を占めるものだろうか。ある種の歴史哲学者や史的唯物論者が主張するような人文社会系諸学の統括者か、それとも諸分野の学者（や作家、思想家、政治家、企業経営者……）に古文書解読とか系図・年表作成などのかたちで材料ないし部品を提供する下請け業者か。

もちろんこれらは「永遠の対立」であって、明瞭な答えを出そうとしても神学論争に陥るだけだろう。換言すれば、歴史研究ないし歴史学は（哲学や文学と同様に）とらえどころのない学問だ、それゆえやはり社会科学でなく人文学の一分野だ、ということでもある[*2]。以下はわれわれが、こうした歴史学（以下では仮に、専門の歴史研究を歴史学と呼

1――同僚の森安孝夫（以下原則として人名の敬称略）がしばしば語る「理科系的歴史学」（史料に基づき実証すること）と「文化系的歴史学」（狭義の実証はできない部分で「像」を組み立て「論じる」こと）の区分も、これに近い対比であろう。ただし「世界の学界を直接相手にする中央ユーラシア史」を想定する森安は、両者兼ね備えた歴史研究を主張している。

2――日本のある世代以上の読者が歴史学と聞いてすぐ思い浮かべる「歴史に法則的発展を認めるか否か（→歴史学は社会科学か人文科学か）」の対立は、ここまでで述べたような諸対立とは「ねじれの位置」にある。換言すれ

び、その専門家は場合によって呼び分ける）の性格と現況のどの部分に問題意識をいだき、21世紀COEプログラムを通じてそれにどう取り組んできたかを概観するエッセイである[*3]。自分を語れなくなっている歴史学の専門家や学生、歴史教師、歴史学の存在意義に疑いをいだいている他分野の研究者や、学術専門家でない読者などにとって、小稿が理解の助けや議論の刺激になれば幸いである。なお小稿は「世界システムと海域アジア交通班」（それ以前は「シルクロードと世界史班」）のメンバーなど研究仲間との議論を踏まえているが[*4]、あくまで筆者の責任においてまとめたものである。特に通常は「禁句」とされるような学界・大学への批判的言辞は、ひとえに筆者個人のものである[*5]。

1 歴史学の危機

(1) 歴史学というディシプリンとその危機

今日、西洋近代が生み出した多くの学問分野が危機的状況にあり、「○○は生き残れるか」式の特集記事やシンポジウムをよく見かけるように、危機を自覚する研究者・学界も少なくない[*6]。19世紀に成立した歴史学、いわゆる「近代歴史学」もその例外ではない。

ば、法則的発展の是非が歴史学を二分する対立でありうるのは特定の論理平面上においてのみであって、すべての問題をこれによって二分するのは正しくない。

3——通常こういう文章には、古今東西の厖大な文献の博引旁証が伴わねばならないという不文律があるが、そうした教養主義が成り立たない時代に、どうやって従来と違った角度から歴史学を論じるかの試みである本稿では、参考文献（特に外国の文献）はあえて行論上直接に必要なものに限った。より多くの研究者名や文献名を必要とする読者は、［尾形他編1994-］等の事典や『岩波講座』など各種の講座物、それに『歴史評論』誌に毎号載る特集や『史学雑誌』（毎年5号）の「回顧と展望」のような学界動向記事に当たられたい。分野間のページの配分など批判すべき点の多い「回顧と展望」でも、毎年全巻を読み続けると、ずいぶん勉強になる。

4——特に竹中亨教授（西洋史学）からは貴重なコメントをいただいた。記して感謝したい。

5——それが「他の学問分野はもっと良い状況にある」と言いたいのではないこと、歴史学固有ではなく人文・社会科学一般（時には近代科学一般）や日本社会共通の問題も多々含まれることは、お断りしておきたい。なお以下の分析・評価には、現在進められている「大学改革」推進の議論と合致する部分がかなりある。これは現在の日本の「改革」の仕組みに伴う大学と教員の疲弊、研究と教育の混乱を是認しているのでは断じてない。ただ現在の改革の問題点を逃げ口実に従来の歴史学がもっていた重大な欠点——「抑圧構造」すら含む——の改革を先送りする主張よりは、本稿の考え方の方が「弁証法的」であると筆者は信ずる。

6——2002年の回顧と展望（『史学雑誌』歴史理論の項）では「歴史学の苦悶」という表現が使われている［成田2003：7］。［濱田2006］には「京大らしい」問題の論じ方が見られて参考になる。大阪大学では1982年にすでに黒田

一言で言えば、歴史学の人文・社会学界や思想界、社会に対する発言力は弱まりつつある[*7]。ではどこに問題があるのだろうか。

近代社会において歴史の研究・教育が、「どこの総合大学でも歴史の専攻が開設され、ハイスクールでは必ず歴史を教える」までに普遍化した背景には、教養主義と国民国家という、近代が生み出した2つの仕掛けが働いていたとされる。その中で、ドイツを中心に確立した近代歴史学のディシプリンは、少数の知識人が一般市民を導く啓蒙主義的な全体構造に参入しつつ、その専門家を知識人一般や他の学問分野の専門家から差異化するための仕掛け（かつ分析による特定の中心的・支配的要素の検出を必須とする近代科学の方法の帰結、もしくは単なる思考の経済つまり限られた力量の重点配分）として、過去に関するあらゆる研究のなかから、特定の対象・方法論・立場のみを「正統」とする傾向をもっていた。欧米型近代と国民国家を当然の前提とした、各時代の主要国（民族・地域・文明圏）と「自国」の国家・社会——領域で言えばまず政治・制度と戦争・外交。それに時代や国家・民族の最高峰としてのみ文化を加える——に関する、文献実証主義・客観主義による、国家を担う成人男性の立場からの研究がそれである。この正統観の裏返しとして、「天下国家」を論じない、またはそれに直結しない庶民の暮らしや大衆文化の歴史、地方の歴史などは、「女子供のすること」「好事家の趣味」と軽蔑された。

「変革の学問」マルクス主義は、経済史や人民の歴史へと歴史学の視野を拡大させた。だが歴史の主役が少数のブルジョワ（の男性）から多数のプロレタリアートや農民（の男性）に替わったとしても、「天下国家を論ずる」歴史学の性格は変わらなかったか、むしろ強化された。こうして歴史学の基本的性格の重要な部分は最近まで温存された。だが今日、その前提となっていた教養主義はほぼ解体し、国民国家もゆらぎを見せている。日本の大学から「史学概論」という授業科目が急速に姿を消した1980年代以降の事態が示すように、従来の歴史学が自己を積極的に語れなくなるのは当然である[*8]。そこでおなじ

俊雄が『歴史学の再生』[黒田1982]を著し、その後も西洋史の川北稔（その考えは高校教科書［川北他2004］にも表現された）、考古学の都出比呂志らが理論・方法論に関する発言を続けてきた。竹中亨［1998；2000；2004ほか］も日本の西洋史学の方法・位置を論じる中で、歴史学全体に関わる論点をいくつも示している。

7——後述するように、社会の側の歴史への関心自体が薄れている面があるが、東アジア諸国の歴史論争に見るように、一方的な脱歴史化が進んでいるわけではない。以下で問題にするのは、歴史への関心そのものの希薄化と、歴史をめぐる社会の関心と学界の関心の乖離の両方に対する、歴史学の「責任」である。音楽の世界における近代を象徴した西洋芸術音楽（クラシック音楽）の後継者に当たる人々が、今では「誰にも分からない現代音楽」を奏でているのと同じ事を、現代歴史「学」はしていないと言い切れるか、謙虚に問い直す必要があろう。

みだったランケやピレンヌ、マルクスやウエーバー、E・H・カーの『歴史とは何か』など個々の理論や古典的作品が時代の経過とともにそのままでは使いづらくなったというだけでなく、従来の枠組による歴史家の発言を理解・尊重する社会的基盤そのものが崩れてきているのだ。

そのことは、従来の歴史学が自分を語る「形式」にも問題点を露呈させている。歴史学はもともと、歴史や歴史学を学ぼうとする者に対して系統的に教えるより、「代表的歴史家の作品から各自が思索・敷衍せよ（盗み取れ）」と突き放す志向を強く持っている（それが教養主義というものか、はたまた職人ギルドのやり方か）。代表的なテーマ・方法・作品のいくつかを特定の視角から列挙した学界動向・講座や、特定分野の細かい研究入門などは多数出版してきたが、歴史学そのものの入門となると、歴史の意義の哲学的解説と歴史家とは何者かの議論が大半で、学の対象と方法を定義した上でその内部を複数の下位領域に系統的に区分しそれぞれの課題と方法を解説するという、自然科学・社会科学型の入門書を編む習慣はほとんど存在しない[*9]。英米で鍛えられた文化人類学が系統的な入門書を次々生み出してきたこと[*10]とは対照的なこの古風な行き方は、個々人の思索の限度

8——この状況を「研究者の問題意識の拡散・消失」で説明することが多い。もちろん間違いではないが、そこで想定されているほど統一的な問題意識ないしグランドセオリーを持たずに自己を語っている学問がいくらでもあることを考えると、多様化した自分を語れない歴史学の方法にも問題があることになる。竹中［2004：24］が説くように、歴史学に必要なのはグランドセオリーより「中規模の理論」（それは必然的に複数形であろう）だとすればなおさらである。

9——「特定の視角からの列挙」に「取り上げるべき研究内容の多様化」「項目設定や分類・配列に関する論理的思考の不足」「あるべきすべての項目に適当な書き手を揃えることの困難」などの事情が重なると、「全体がよくわからないバラバラな羅列」になる（その弊害は「専門論文集」でも顕在化している）。21世紀に入って日本で出版された『現代歴史学の方法と課題　1980-2000年』［歴史学研究会編2002；2003］も残念ながら例外ではない。ユニークな切り口で歴史と歴史学がなんの役に立つのか論じた［小田中2004］のような著作も、具体的な歴史学の外延と内包を示すものではない。一方、筆者の知る貴重な例外として日本には［福井2006］がある。

10——日本では［綾部・大林・米山編1982］は羅列型に近いが、［綾部編1984］は学の発達過程と主要領域をかなり系統的に理解させる。なお学問が人の知的興奮を誘うには、「実例の面白さ」「論理の美しさ」の2つの道があるであろう。歴史学者には、博識に裏打ちされた実例の語りを重んじる一方で、（狭義の史料批判と実証の手続きを別とすれば）論理を軽んじる傾向が強く、「理論で現実を裁断してはいけない」ことを「論理性はいらない」ことだと考える幼稚な誤解もまま見られる。日本の「戦後歴史学」があれだけ一世を風靡した背景を皇国史観への反発や社会変革のアピールなどからのみ理解するのは一面的で、従前の没論理的な歴史学と比べた華麗な論理性も重要な要因だったと筆者は考える。同様の意味で、文化人類学やカルチュラル・スタディーズが繰り出す論理が近年の人々を引きつけている。

を超えて研究成果が複雑化し、しかも外部に対する「説明責任」や「宣伝」を必須とされる近年の状況の中では、明らかに不利に働いている。

より具体的な方法上の問題点をいくつかあげよう。第一は今さら言うまでもないのだが、「オリエンタリズム」などの議論が批判してきた、「(日本を除く)非西洋世界は、歴史学のなかでせいぜい二級市民でしかない」という問題である。欧米の大学・研究機関では非欧米地域は一般に、歴史学でなく「東洋学」「民族学」「植民地学」などの対象とされた。それらは今日の地域研究の萌芽を含む一方で、「欧米の人文・社会科学の普遍性に当てはまらない特殊地域の研究」という色彩をはっきり示していた。「東洋史」という独自の学問領域を成立させた日本でも、毛沢東思想華やかなりし時期を別とすれば、史学概論を東洋史の教員が担当することはまれだったと思われる。東洋史は普遍的な歴史の一部と言うより特殊な歴史だったのである[*11]。これでは「世界史」の理解は偏ったものにならざるをえない[*12]。しかも、そもそも客観的なまとまりというよりヨーロッパ人による知的ヘゲモニーの枠組みである「東洋」や「アジア」の内部にも、階層差が生じる。アフリカは歴史学の世界では「二級市民」の資格すら与えられず完全に無視されてきた。東南アジアもしばしば「歴史なき地域」したがって民族学(文化人類学)の領分とみなされ、辛うじて歴史学にしがみついた少数の研究者は、インド史・中国史などの研究者から辺境の蛮族扱いされることに耐えねばならなかった[*13]。中央アジア(内陸アジア)史も、一般社会やマスコミでの華やかなシルクロードイメージとは裏腹に、学界では「戦争だけ強い文化的には

11——こころみに手元にある『現代歴史学の名著』[樺山編 1989]で取り上げられている作品の内訳を数えてみると、「西洋史」19点、「日本史」2点、「東洋史」ゼロである。なお同書を出版した中公新書は別に『現代アジア論の名著』[長崎・山内編 1992]を出しているから、アジアを歴史学より地域研究の対象と考えているのだろう。アジア理解にとって一概にそれが悪いことだとは思わないが、歴史学にとってそれはマイナスだと断言できる。

12——一時期の日本で歴史学の救世主のごとくに言われたアナール派歴史学も、筆者の乏しい知識では、この問題の改善にさほど貢献していないようである。たとえばブローデル[Braudel 1979など]を見ると、やはりアジアの理解はごく限られたものと感じられるし、その影響を受けたウォーラーステイン[Wallerstein 1974以下]はより甚だしい。もっとも、ブローデルの影響でチョードリらのインド洋史[Chaudhuri 1985ほか]、アンソニー・リードの東南アジア海域史[Reid 1988, 1993]などアジア海域史研究が発展し、ウォーラーステインの世界システム論は英語圏の中国史研究の発展などを背景にしたフランク[Frank 1998]、ポメランツ[Pomerantz 2000]らによって、アジア史を含んだグローバルヒストリーに改造されつつある。

13——東南アジア大陸部諸国と日本、西欧、ロシアなどの8、9世紀から19世紀前半までの国家統合が類似のトレンドをもって進んだと比較史の観点から主張するリーバーマンは、従来「世界史」を議論する際に東南アジアが「システマティックに無視されてきた」ことを批判する[Lieberman 2003: 5]。

劣った遊牧民」のレッテルを貼られてきた。日本人の韓国停滞史観を正当に批判するすぐれた韓国人研究者が、勢い余って「(日本人が) 韓国をアフリカや東南アジア諸国と同列に置くという事実に対して、韓国人は強い不快感を感じている」[*14]と書いてしまうのを読むとき、歴史学を支配するオリエンタリズムとその内部格差が、すでに克服された過去の問題だとは言えない。

第二に、「文明史」への志向が強いフランスの学界など例外はあるものの、歴史学は元来国家・民族より小さな世界も、国家・民族を超える大きな世界も、語ることを得意としていない。マルクス主義 (と皆が思ったもの) や日本の「大塚史学」は、国家と民族にすべてを収斂させる研究方法を高度に磨き上げた。「少数の支配者でない多数の人民の歴史」といっても、国家・民族の発展や変革を代表しない少数派・局地的な「人民」はしばしば無視・否定された。近代以前の諸国・諸地域が構造的な関係を結ぶ可能性はほとんど否定され、近代以降の「世界資本主義」も、完全に抽象的な理念と個々の政治単位に引き裂かれていた。この一国史観・一民族史については近年、意識的な克服の努力が重ねられていると評価できるが、それでも、「中心性」「代表性」をもたないものを切り捨てる伝統的な視点と「社会史」などに見られる「マイナーの視点」との乖離はなかなか埋めがたいし[*15]、「原史料による実証」は、しばしば国境ないし史料言語の境界を越えにくくする。異なる視点をもつ研究者、違った史料言語を扱う研究者などの「共同研究」「学際的研究」は、口で言うほど簡単ではない。

このことと重なり合いながら、周辺諸学に関連した第三の問題が浮上する。文化人類学・地域研究からの批判や、日本では「昭和史論争」などが、歴史学は「生きた人間とその主観的な論理や認識」を描けるかどうかという問題を提起した。「物質世界の構造が観念世界を規定する」といかに主張してみたところで、観念世界のあり方を解明しなくてよいことにはまったくならない。人間の意識や行動は、直接には主観的な観念世界のなかで決定されるのだ。文献資料を特権化し (識字率が低かった19世紀の発想？)、客観的実証や個々人の動きを超えた社会構造の解明をことしてきた歴史学——代表性をもつものだけ

14——— [李泰鎮2000: v] の日本語版序文.

15——— 誤解のないよう一言しておくと、筆者は「社会史がすべてマイナーな研究だ」と短絡しているのではない。「メジャーなものしか研究しない」従来の歴史学への異議申し立てとしてマイナーな諸現象に着目した社会史が、「全体性」への強い関心をもってることは承知している。ただし他の多くの新しい潮流と同様、社会史のこの「戦略」が「無限の拡散」の危険をはらんだものであることも否定できないと考える。

を客観的基準に従って整序する伝統的な「思想史」ではこのハードルはクリアできない——にとって、これはたしかに難題である。一方歴史学の原史料実証主義は、特定の限られた問題を解明することはできるが、それを何万回積み重ねても、全体（世界）は永遠に論じられないのではないかという疑念を、社会学や社会哲学が突きつける。マルクスもウエーバーも、ウオーラーステインもフーコーも、狭義の歴史学者ではない。歴史学が天下国家を論じると言っても、それは哲学や社会学など「他人の褌で相撲を取っている」だけではないのか。

第四に歴史学は、「言語論的転回」などポスト近代の諸理論とあまり相性がよくない。マルクス主義が社会科学（・人文学）に持ち込んだ「弁証法的唯物論」は、物質界におけるニュートンやガリレオ・ケプラーに似た革新的役割を果たした。社会にせよ個人にせよなんの力も働いていない存在というものはありえず、常に複数の力の相互作用の中にある。だが物質界ではその後、相対性理論や量子力学によって、ニュートンやガリレオが万能でないことが明らかになった。人文・社会科学分野におけるポスト近代の諸理論は方向性としては、物質界における相対性理論や量子力学の役割を果たそうとしているものだろう。それがいろいろな「エセ理論」を含み全面的に成功してはいないからといって無視する「正統派歴史学者」は、コペルニクスの地動説が惑星の軌道を単なる円型と考えたために多くの誤りを犯したが、だからといって地動説が無意味だとはいえない、という故事を思い出すべきである。一方、流行の諸理論を振り回し「歴史における客観的事実など一切存在しない」と言い散らす者は、一定の範囲内ならニュートン・ガリレオは依然正しいことを想起せねばならない。こうした低次元の対立に安住することなく、今後の歴史学はポスト近代の諸理論が提起するものを踏まえたうえで「だれのため」「なんのため」の研究かを再構築する必要がある。

(2) 日本の歴史学の特殊事情

次に、日本の歴史学の問題点について一言しておきたい。

日本の歴史学はもともと緻密な実証研究を得意とする。自国史（日本史）だけでなく、日本の中国史研究の水準は早くから世界に知られていた。また近年では、「西洋史」はもはや単なる「翻訳の学問」ではないし、東アジアに偏っていた非西洋地域の研究は急速に広がりを増している。世界のほとんどの国・地域の専門家を揃えている——英語や旧宗主国の言語だけでなく、「現地語」を駆使した研究も常識になった——点で、日本の歴史学

界の水準と幅広さは世界一と称して間違いなかろう。

だが、強い光には深い影が伴う。歴史学に限らない縦割り学問やタコツボ型研究、徒弟奉公的な研究者養成システムなどの弊害は言い古されているが、それを支える日本的な「視野の狭い生真面目さ」と「横並びの発想」自体の問題点は、あまり認識されていないように思われる。たとえば日本史の網野善彦や中国史の谷川道雄[*16]が「歴研派」に対して立てた異説が元来は、横並びでない議論の活発化のために「わざと反対の議論を繰り広げた」もの——英語圏ではこれは珍しくない[*17]——だということを、「歴研派」も網野・谷川の「信奉者」たちも、ほとんど理解していなかった。評価の基準は常に、単一の直線上ないし平面上でどちらが正しいかだけであり、そこで「正しい」とされた課題・方法に従わない者は口汚く罵倒された。小さいときから狭い範囲の反復練習を徹底的に課せられ、それを完璧にこなした者だけがより広い世界を見ることを許されるという教育システムや、生涯一つの仕事をやり抜くことが尊い——「全体」は一つのことを究めた末にのみ見える——という価値観に支えられたこの愚直さは、世界に冠たる工業製品と国際感覚のない日本人の両方を生み出してきたのと同様に、世界最高水準の実証研究と極度に保守的で視野が狭い歴史学界の両方を支えてきたのだ。そして科学のパラダイムそのものが、単一の枠組ですべてを理解する方法に懐疑的になっている現在、日本社会の「単一の枠組にしがみつく生真面目さと横並びの発想」は不利に働くことが増えている。「マルクス主義なきあと」の歴史学の多元化・多様化を「グランドセオリーの消失、焦点の拡散」というマイナス方向でしかとらえられない研究者がいるとすれば、そこにこうした日本社会の「病根」が表現されている。

以下、短所の方を列挙する。たとえば、日本の歴史学界で「日本史」研究が中心になることは当然だが、「歴史には歴史（つまり日本史）と外国史（世界史）がある」「ここは日本だから歴史というのはまず日本史で、外国史は参考程度に研究すればよい」といった態度

16——『交感する中世』[網野・谷川 1988] という二人の対談集がある。網野の研究は今さら紹介するまでもないだろう。谷川については [谷川編著 1993] も参考になる。

17——西洋中心のグローバルヒストリーを逆転しようとしたフランク晩年の荒業 [Frank 1998] を見よ。またマルクス主義は西側諸国でしばしば「批判のための理論」とされており、アナール派史学も「大多数を占めるコンヴェンショナルな学者たち」への反抗として始まったものであろう。それらが「権威」となる日本の事態は滑稽な気もする——と言っただけでは批判されている当人たちはなにを言われているかわからない場合が多いのだが。

を露骨に示す「日本史」研究者が多いのには閉口させられる[*18]。と言っても当人たちにはどこが「露骨な態度」かわからないらしいが、たとえばベトナム中世史を専攻する筆者が日本の学術雑誌に「中世の地域社会と寺院」という論文を投稿したら「ベトナム中世の地域社会と寺院」にタイトルを直されるのに、日本史の論文や著書は日本史専門でない歴史学一般の雑誌や出版物でも、日本史であることを明示しないタイトルがしばしば許されるという事実を前にしたとき、「自分たちは日本の学界では二級市民なのだな」と悲観する外国史研究者もいることを知るべきである。

またこれは「日本史」に限らないが、日本の学界では最近まで、研究は「日本人」(日本国民)のためにおこなうものだという発想が圧倒的に強かった。日本の研究成果には「これを英訳して知らせたら世界の歴史学が変革される」というものがゴロゴロしているのだが、組織的・系統的な外国語での発信は、まだごく一部でしか行われていない[*19]。日本の歴史学界の動向を知るのに適した雑誌のひとつ『歴史評論』には誌名の英文タイトルすらない。

他方「世界のトップ——要するに欧米——から学ばねばならない」(→方法論やグランドセオリー・世界像は西洋から来る)という学界・知識人界全体の強迫観念と、「ヨコのものをタテにする」翻訳学問の作風[*20]はまだまだ根強い。批判的な研究者が日本史学界について旧弊な理論や視角を嘆かねばならないとすれば、西洋史学界についてはヨーロッパ

18——その「日本史」は、往々にして特定の「伝統的な」領域・地域をカバーするだけである。前年の研究成果を地域・時代別に列挙・論評する『史学雑誌』「回顧と展望」の日本中世史・近世史などのページにおいては、対外関係史、琉球史、北方史などの業績が無視されるという事態が最近まで見られた。2003年の回顧と展望(2004年5号)においてもなお、戦国期を除く中世各時期の担当者は琉球史を取り上げていない。

19——中国史研究者が中国語で、ベトナム史研究者がベトナム語でなどアジア史研究者が「現地語」で研究発表をおこなうことはほぼ当たり前になり、この点では欧米の研究者より積極的だと思われる。一方、日本史の場合は、欧米と中国の日本研究者の日本語能力が急速に向上し、韓国・台湾の日本研究も活発化・高度化した結果、こちらが外国語で発信する必要をかえって感じずにすむという矛盾した状況も見られるようだ。

20——最近偶見して残念に思った例として『歴史評論』2006年4月号[歴史科学協議会編2006]の「特集/歴史におけるジェンダー研究の現在」があった。個々の内容は勉強になり、「ジェンダー概念どこ吹く風」と涼しい顔をしている日本の歴史学界への批判もまことに正当である。が、特集の構成は相も変わらぬ「欧米の理論の紹介と日本に関する研究」であり、日本以外のアジアは、日本の植民地支配とアジア・太平洋戦争、現代基地問題などの影響という文脈でときおり「アジア」「東アジア」などの単語が出てくる以外は完璧に無視されている。このように、ある抑圧からの解放を真摯に希求する人々が別の抑圧に荷担する姿を見るのは、つらい。自分もどこかでそうしていないか、反省を忘れたくない。

の新しい理論や方法の流行に跳びつく主体性のなさが批判されねばならないようだ。両者の狭間で、戦後（というより大東亜共栄圏以来？）言われ続けたアジア重視のかけ声とは裏腹に、日本史・西洋史と比べた東洋史の地位は今日でも二級市民のままである[*21]。これは東洋史研究の側にも問題がある。日本のアジア史研究の中でも、中国研究を中心とする「漢文東洋史」は世界一のレベルを誇ってきた。ところがその業界は日本史以上に理論に弱く、「知識人は誰でも漢文読み下しができる（だから日本人に向けた研究をしている限り中国語会話も英語もできなくてよい）」ことを前提とした日本国内向けの研究を事とするものだった。この前提が崩れた今、「漢文東洋史」が――モンゴル時代史、明清時代史など一部に目覚ましい革新が見られるものの――中国や東アジア世界の重要性を「日本史・西洋史その他の研究者にわかるように」発信する力は、著しく弱まっている[*22]。一方、日本の学界だけではないが、アジア史研究者が西洋中心史観を覆えそうとして、その裏返しに過ぎない「自地域中心史観」（イスラーム、南アジア、中国、中央ユーラシアのそれぞれに見られる）を声高に叫ぶ状況[*23]は、世界史における非西洋世界の位置づけ全体の刷新にとって、必ずしも有益ではない。

高校世界史では現在、粗密の差はあれ世界のあらゆる地域の歴史を教える。歴史学界も世界のほとんどの国・地域の専門家を揃えてはいる。ところが上のような「視野の狭い生真面目さ」「横並びの発想」が支配する大学の史学系専攻で、制度的ないし慣習的に研究者を再生産してきた分野は、日本史、中国史、西洋の古典古代、中世以降の英独仏、近現代の米露など少数の「メジャーな」分野にほぼ限られる[*24]。その他の分野の専門家はあく

21――たしかにアジア史を専攻する大学教員は増加しているが、高度成長期以後「東洋史」「アジア史」などの専攻はほとんど拡大していない。その後に増加した地域文化系の専攻では、歴史よりも文化人類学の専門家がはるかに多い（自分を語るのが下手な歴史学者は、「実社会を知らない――しかも往々にして左翼的な――漢文読み」という「東洋史学」に貼られたレッテルをはがすことにあまり成功していない）

22――中華人民共和国への外国人の渡航が困難だった時代には、こうした日本の研究スタイルが問題にならないどころか、欧米の少なからぬ中国研究者が日本に留学し日本語と日本の中国研究を学ぶ状況が見られた。

23――中央ユーラシア史研究者が中国史研究を執拗に批判する例のように、「アジア史」内部の矛盾対立がそこに重なる。なお13世紀の世界経済をイスラーム世界中心に描いたアブー＝ルゴド［Abu-Lughod 1989］のように、ヨーロッパ中心史観の裏返しの自地域中心主義――サイードが最初から警告していたもの――は日本だけの問題ではない。

24――近年、イスラーム史がいくらか状況を改善することに成功したが、韓国・朝鮮史ですらいまだに専門家養成はきわめて遅れている。「私事」に類する例だが、筆者が専攻する東南アジア史の専門家を組織的に再生産してきた日本の大学は、東大、上智大、広島大の3校だけであろう（「東南アジア史専攻」が制度的に存在するわ

まで「変わり種」として出現したものであり、専門研究者になれたとしても、「運良く」史学科教員になった少数の例を除けば大半が外語系や地域研究系の大学・学部や研究所に属する。換言すれば日本の歴史学の主流は、それらの分野の研究は少数の変人か外語系や地域研究系の大学にやらせておけばよいと考えてきた、ということである。

同じ問題は、専門研究者が知的活動のどの部分に力を割くかにも現れている。あくまで一次史料にもとづく実証研究が研究者の本分であり、英語圏でよく見られる二次文献を使った大きな議論は軽蔑される[*25]。概説・通史類の執筆は「達人の余技」とされ、その域に達しない研究者が手を出すと「堕落だ」と非難を浴びる。学術活動としての翻訳の位置づけもはっきりしない[*26]。書評や学界動向も実証研究と比べれば低くしか評価されない（学術誌の読者がよく読むのは、他人の難解な実証論文などより辛口書評とバトル、便利な学界動向などであろうが）。したがって翻訳・解説・批評・評価などの技術は蓄積されない。また、学内運営、啓蒙活動や国際交流が大事でないとは誰も言わないが、それらはあくまで本業（実証研究）に対する付加的活動としか見なされない。教科書執筆やセンター入試の出題委員は引き受けるが、歴史教育・入試などの「専門研究」は教育学部の仕事で文学部史学科の仕事ではないと考える[*27]。

けではなく、実態として再生産がおこなわれてきただけである）。これは同じ「東洋史」でも中国史の専門家には、また人文系他分野の例をあげれば「英文学」「インド哲学」など地域指定型の専攻に属する研究者には、理解されにくい状況である。

25——実証的には確かに成立不可能な「日本人論」「日本文化論」などに対して、その社会的影響力にもかかわらず、歴史学界では往々にして非難・冷笑を浴びせるだけで「オルターナティブ」を提供しようとしないのは、同じ発想の影響であろう。また卒業論文を書く学生に対して「初めに問題意識がなければならない」と画一的に指導するのも、歴史小説と歴史学を区別させるためとはいえ、あまりに平板である。実際には「珍しい新出資料」「学界の動向」など別の入り口から入っていく研究はいくらでもある。日本がフットボール系のスポーツに弱いのは、体の小ささはもちろんだが、こうした狭い画一的指導が「目前のボール扱いは巧みでもフィールド全体を見ない選手」ばかり生み出していることも一因だろう。フットボール系のゲームは全員がフィールド全体を見ていないと勝てない。学問や社会も状況によって、大多数の成員が全体を見なければいけない場合がある。

26——西洋史の書物や西洋で書かれた理論書の翻訳は相変わらず盛んだが、その評価基準は不明瞭なままだし、「自分で出来る」研究者以外の著作を日本語から外国語に翻訳する、またはその校閲をおこなう仕事に至っては、少数の外国人を除きまともな専門家がほとんどいない状況であろう。

27——もちろん一定水準の実証研究能力は研究者にとって必須条件である。だがここで述べているような学問分野のあり方にとって、全体を見回すチームの司令塔、解説や批評のプロ、教育のプロ、学会や大学運営のプロ、翻訳や国際交流のプロ等々の存在もやはり必須条件だろう。これなしに、しかも旧態依然の研究分野だけに執着

たしかに近年の史料状況の飛躍的改善と研究の日本的緻密さをもってすれば、既存の各分野・領域にも、新しい実証研究の課題はいくらでも見つかるだろう。人文系の研究対象や活動分野はあくまで個人が自由に選ぶものだという理屈も正しい[*28]。が、日本の大学の史学系専攻の規模は一般に小さい。そこを「視野の狭いきまじめな横並び」が支配すると、それなりの支持者をもち比例代表制や大選挙区制なら一定の当選者を出しうる第三党以下の政党が小選挙区制や中選挙区制のもとではほとんど当選者を出せないのと同じメカニズムが働き、どの大学（＝選挙区）も金太郎飴的に同じ分野ないし活動領域（大政党）に属する教員・研究者（議員）ばかり並ぶということになりやすい。歴史学や歴史教育全体に対する「より広い社会的要請に応えていないのではないか」という批判・攻撃が強まったとき、「不十分な戦力しか持たない同タイプ（金太郎飴型）の各部隊（史学科）が個々に生真面目な戦いをおこなう」先に待っているのは、「ガダルカナル型の敗北」でしかありえない。戦局を打開するには最低でも、「ある規模以上の大きな戦力」「相手にない多彩な部隊編成」のどちらか一方が必要である。

その点の弱さを具現しているのが、「新しい歴史教科書」や「新自由主義史観」「靖国問題」などへの歴史学界の対応である。「トリックプレー」「ラフプレー」を含め多彩な攻撃を仕掛ける相手打線に対し、「歴史的真実に目をつぶり侵略戦争の事実を歪めている」という「140キロの直球をど真ん中に投げ込む」投手ばかり繰り出して、どうして押さえられるというのか[*29]。「球の威力でねじ伏せる投手」「コントロールや緩急で揺さぶる投手」「変則フォームで幻惑する投手」などを相手打者や試合の状況に応じて使い分けねばならない。それが可能なチーム作りをしなければならない。不勉強な筆者には、教員ポストの配分までからむこの種の問題を、日本の歴史学界が自主的に深く考えている様子が見えない。

することを肯定するなら、時代に遅れて建造され満足な護衛部隊なしに沈没させられた戦艦大和の再現となるのではないかと、心配するのは筆者だけだろうか。

28——アメリカ式の「一定期間ある活動を集中的——しばしば爆発的——におこない、期間が過ぎれば別の活動に移る」というやり方も参考になるだろう。

29——ますます脱線するが、筆者は今日の危険なナショナリズム史観を押さえるのは、歴史学者の仕事である以上に、傷ついた「日本人」の自我をケアする臨床心理学者とカウンセラーの仕事と考えている。その意味で、日本の「正統派」歴史学界に、機械的な土台＝上部構造論や心理学をブルジョワ学問と軽視する考えなど、「スターリンの影」が残っていなければ幸いである。

2 歴史学の可能性

(1) 歴史を学ぶ意義

以上、辛口の（自虐的な）現状認識を書き連ねた。学問が危機にあるのは歴史学だけではないし、日本的な弱点も歴史学だけがかかえているのではないが、いずれにしても、もはや歴史学は過去の遺物だ、21世紀に存在意義はない、などと全否定することは可能だろうか。

第一に、悪いことでない限り「人間技とは思えない」技術をもつ達人は大事にすべきである。難解な古文書を解読・博捜して過去を復元してみせる歴史学者の腕前を、直接社会の役に立たないからと言って軽視するような国は、先進国や文化国家を名乗る資格がない。ただこの理屈で政府・社会に賃金や研究費を要求できるのは、少数のトッププロだけである。それも日本の場合、以前は「国内チャンピオン」でよかったが、現在は世界に通用しなければ許されないだろう[*30]。

となると社会に、歴史学の社会的存在意義を納得させねばならない。政策提言における歴史学の役割は教育・文化政策などごく一部に限られるから、より重要なのはまず「時代や社会が要求する歴史像の提示」である。これはもちろん「権力者やナショナリストの要求通りに歴史を書く」ことではない。平和、環境、グローバル化、民族問題などさまざまな現代的課題に反応して、問題のよってきたるゆえんを歴史的に——あくまで厳密な学問を踏まえて——解き明かすことである。あわせて示すべきは、人々が歴史を学ぶ意義だろう（「学ぶ」はもちろん学校教育に限らない）。歴史を学ぶ意義——そこでは事実の学習（ここで若干の暗記は不可避となる）と考え方の学習が絡み合っている——を歴史学専攻の学部学生に尋ねても、「過去から教訓をくみ出し現在と未来に活かす」ぐらいの平板な説明しか帰ってこないことがほとんどだが、もう少し細かく論ずるべきだろう。

A. 「事実は小説より奇なり」。歴史は上質な娯楽・知的興奮を提供し、人格涵養にも役立ちうる。

30——— このことが「外国語で成果を発表する」必要に直結するかどうかは一概に言えない。大江健三郎は自分で外国語の作品を書かなくてもノーベル文学賞が取れるし、野球のイチローはスーパープレーを見せれば英会話は通訳任せでもよい。しかしキャッチャーの城島健司は英語を話さねばならない。

これを否定する歴史学はやせ細る。一方、より正統的には

B. 人間存在や社会のあり方を抽象的・一般的に思弁するのでなく、具体的な歴史的条件のもとで考える習慣が身に付く。

C. そこから現在を理解し未来を見通す力が養われる。

こうした点こそが核心であろう。Cを細かく説明すると、

①現代は過去の積み重ねの上にあるから、過去を理解すると現代がよりよく理解できる。

②時を経ても変わらないものや「歴史は繰り返す」事例をふまえて、過去から教訓をくみとることができる。

③現状に一喜一憂せず、世の中の移り変わりを長い目で／重層的に（事柄によっては構造的に／法則的に）見られる。

④時代の変遷をまなぶことにより、「現在」(の社会の仕組み）が永遠でないことを知る。

⑤いろいろな時代を学ぶことで、「違った論理」(→異文化）を理解する訓練ができる。

⑥個人や共同体の過去に関する（現在の自分に合った）説明・物語をどうしても必要とするという人間の本性からして、現代における過去の語られ方は、現代社会を理解するカギになる。

などが挙げられる。これらが21世紀には無用だなどと誰が論証できるだろうか。外国史の場合これに加えて、

⑦世界がどうできているかを学ぶ。

⑧異文化学習の一環として「外国人とのつきあい方を身につける」。

⑨自国（自己）を省察（相対化）したり、自国（自己）にとってのお手本を見いだす。

などの「実用的」効果も考えられる。

ただ、学問と教育は別である。以上の意義・効用だけでは、「すでにわかっている事実にもとづいた教科書や読み物を皆が学べばよいのであって、新たな研究をおこなう専門研究者などはごく少数居ればよい」という理屈まで覆すのは難しいかもしれない。「日本中の小中高校で教えているが、大学での存在は教育系学部以外では歴史学よりずっと小さい」地理学と同じでよいではないかと言われると困るだろう。そこで、より直接的な必要性の例として持ち出されるのが第二次世界大戦など近現代史を学ぶ必要性である。どの政治的立場からも、一般論としてこの必要性を否定することはできない。とりわけ各国が国民主権体制を取る限り、主権者としての諸国民には近現代史を踏まえて行動する義務があり、その意味で歴史（学）は実学である。ただ悩ましいのは、近現代史の専門研究は歴史

学者でなくても（政治学者、国際関係学者、経済学者、ジャーナリスト、外交官等々にも）できるという点だ。すると歴史学の広範な必要性まで主張するためには、現代世界の歴史的理解に必須の内容をもち（だから高校世界史Aに含まれる）、しかも研究に専門のディシプリンをより強く必要とし、容易に研究しつくされない資料の量がある「近世史」が主戦場だということになる[*31]。ここを中心に、現代世界が必要とする歴史像の提示、現在の高校世界史が掲げるようにきわめて広範な地域・分野にわたる歴史教育の提供、それらを支える専門研究などを「意義あり」と認めさせるならば——従来のような金太郎飴型とは違った形で——歴史学の拡大再生産も不可能ではないだろう。

(2) 新しい歴史学

旧態依然たる研究・教育をおこなう「サイレント・マジョリティ」(？)は無視して先端部分を見れば、世界と日本の歴史学は、上のような事態を克服すべく、大きな変革を遂げつつある。以下、筆者なりの整理を掲げる。なおこれは「現在の先端」である。未来永劫すべてこの種の研究が正しいとか、国民国家の研究はもはや不要だなどという「非歴史的な」俗論をするつもりは毛頭ない。ただし今後の国民国家論や「成人男子の天下国家の議論」は、現在のこれらの研究による批判を「くぐり抜けた」ものでなければならない。

最初に歴史学の変革の前提となっている現代世界の変動を見ておこう。

A. 「グローバル化」と「情報化」による世界のあり方の激変：交通やコンピューターの発達によりかつてない早さと規模で人・モノ・カネ・情報が世界をかけめぐるなかで、地球環境への負荷の高まり、国・地域ごとの激しい浮沈と格差、紛争とナショナリズムの広がりなどの問題も噴出している。

B. 「近代」の相対化と多様化：経済と市場、権力と民主主義、家族とジェンダー、生活と環境、表象と認識とその対象などあらゆる面で、「近代化」の内容と功罪が問い直されている（→ポスト＝モダニズム）。また「東アジアの奇跡」により、近代化が西欧化やアメリカナイゼーションと同義語ではなくなっている。

C. 民族・国家（国民国家）という統合の相対化：「ネットワーク」「多民族帝国」など違っ

31——この議論は、古代史が「後世の様々な夾雑物によって変質させられていない人類の社会や思想の原型を学ぶ」、中世史が「小さな政府のもとでの自力救済世界の経験を学ぶ」など、近世以前の歴史を学ぶ意義をそれぞれに主張することと対立はしない。

た原理による統合や、統合を越えた移動や複数の統合の重なり合いなどへの注目。より話を広げると、物質界なら「原子」、人間界なら「個人」など特定の単位を絶対的出発点としたり、複雑な事象を特定の要素にすべて還元する「近代」科学から、多くの単位の相互関係とそこに働く力を重視する「複雑系」の科学への発展がそこにある。

また学界や知識人界のあり方として、

ア．既存の諸学問の境界が揺れ動き、相互乗り入れが進んでいる（文化人類学の広範な影響やカルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル・スタディーズなどの隆盛）。

イ．一方でオーラルヒストリーやフィールドワークの普及、他方で図像・考古資料やコンピューターの利用により、歴史学を含む人文・社会科学が文献の学という性質を著しく変化させている。

ウ．これらを通じて、「成人男子の天下国家」に直結しない「女子供の世界」「小さな世界」が注目され、「死んだ史料」（読み取り方には唯一絶対の正解があると想定されていた）に限らない歴史の様々な「生きた声」が聞こえるようになった。

などがある。これらを踏まえて、各分野で新しい動きが見られる。まず地域や時代で考えると、

①一国史を相対化する動き：トータルな近現代「世界史」の理解を目指す近代世界システム論とグローバルヒストリー（近年では②と結びつきながら、「アジア史の組み込み」が積極的に試みられている）、それに「イスラーム世界論」など地域世界研究といった「大きな世界の研究」と、「地域社会史」のような「小さな世界の研究」の両方が進められ、そのどれかを特権化するのでない柔軟で重層的な視野が求められている。

②アジア（・アフリカ）停滞論と「オリエンタリズム」の克服をめざすあらたな試み：「植民史」でない歴史の定立（アフリカ・オセアニアほか）、文明（文化圏）の歴史の刷新（イスラーム史、東アジア史など）、生態・基層文化や歴史のトレンドの共有を指標として文化圏論で見えない「地域世界」を検出する動き（東南アジア、中央ユーラシア、環シナ海世界等）、地域をこえる広域ネットワークへの着目（アジア間交易ないしアジア交易圏論）など多彩な成果が見られる。「地域研究」「海域史」などの方法論の普及、「アジアのなかの日本」の位置づけの解明におけるおおきな進展、①②双方の焦点としてのearly modern（近世）史の見直しなど、関連する学的躍動は多岐にわたる。

③「冷戦後」を理解できる現代史研究：社会主義の総括と新自由主義の理解、国民国家のたそがれ（？）や民族紛争に対する別のかたちの統合の模索、独立をゴールとする

歴史から脱却した第3世界の近現代史などの課題が追求されている。

次に歴史の分野・領域で整理すると、仏アナール派などの「社会史」が典型的に示したごとく、

④（物質的な世界について）社会・生活と環境の歴史の多元化：まず衣食住や大衆文化の歴史がマイナーな趣味的学問ではなくなった。次に生産・生業・技術・農民などの歴史の刷新と流通・消費・都市の歴史への着目が顕著である。一方、環境、人口、家族とジェンダーなどの歴史が、社会を規定しうる「独立変数」の地位をえた。

⑤（精神世界について）観念と意味の世界への踏み込み：「アイデンティティ」「集団心性」のあり方とそれを支えるさまざまな「世界像」「他者像」（「華夷意識」「オリエンタリズム」「地域の論理」等々）、物質界での関係と支配・服従・反抗や「公共空間」「想像の共同体」の形成との間を媒介する「儀礼」や「表象」の役割などが詳しく研究されている。「思想史」「宗教史」「芸術史」などは最先端の思想や作品でなく一般庶民の理解と実践に注目し、思想や流派そのものより社会・政治的役割を含めた総合的理解を目指すものに変化した。また「歴史」をめぐっては、「対象としての歴史」と「歴史を書く」ことの関係の問い直し（歴史を書くことが必然的に歴史を創ってしまう側面、HistoryがHis story〈男の歴史〉であり続けたことなど）がおこなわれ、動き続け再解釈されつづける歴史とは裏腹につねに「伝統」をもとめる集団心性の作用（これと、「自己の周辺に非近代的なものを生み出し続ける近代世界」とが結びついたところに、さまざまな「創られた伝統」が出現した）にも光が当てられた。

という巨大な変化が見られる。この④⑤両方と関連しながら、

⑥「国家」や「政治」の新しい理解、という項目を立てることもできる。例えば軍事・戦争の独立変数としての地位が認められた（ヨーロッパの近代化に果たした戦争の役割など）。また「帝国」「劇場国家」「港市国家」など国民国家と違った国家のあり方が注目され、社会契約説や支配階級の道具説だけでない国家や王権の独自の論理と役割が研究されている（地主国家でなく小農を基盤とする中国専制国家論のような経済面の議論も含む）。そこでは支配階級だけでなく、民衆に内在する権力・規律と支配・服従が解明される（グラムシやフーコーの権力論）。一方で「人民（階級）闘争史観」とは違い、被支配者の行動は「支配への協力（権力を利用する）」「逃げる」など多様な角度から分析される。これを含む歴史全般は、「必然の発展の歴史」または「発展のための主体的闘争の歴史」というよりは、「外部の状況に対応しながら、さまざまな可能性

のなかでよりよい生存をもとめる戦略と選択の歴史」として研究される。ただし「所有」「階級」「人民闘争」を完全に忘れる傾向が世界的に見られるのは問題であろう。

①〜⑥のどれもが幅広く展開している点でも、日本の歴史学界は世界一ではないかと思われる。欧米の研究は、②の研究そのものおよびその世界史像や歴史学方法論への組み込みについて巨大な弱点をもち（インド以西のアジア・アフリカについての研究そのものは依然、日本より優勢であるとはいえ）、それが他のすべての項目について「世界の理解」を不十分なものにしている。とはいえ①や④〜⑥の方法では欧米諸国が先んじているかに見え、日本でもその翻訳・紹介を事とする研究者が再生産されている。だがそもそも、「日本製」の理論や大きな見取り図で優れたものは少なくない[*32]。ただ問題は、日本でも「西洋史」「日本史」などの研究者がアジア史に関する新しい成果をあまり理解していないように、また「日本史」「東洋史」などの専門家が自分の理論がどれほど世界史での汎用性や典型性があるかを考えようとしないように、組織と発信のあり方にある。

3 阪大史学の挑戦

(1) 横断

「横断」と「臨床」を共通キーワードとする「インターフェイスの人文学」の中で、歴史グループは「海域アジア史研究会」（桃木至朗代表）、「グローバルヒストリーセミナー」（秋田茂代表）、「中央アジア学フォーラム」（森安孝夫代表）の3つの研究会を定期的に開催し

32 ――②に直接関係する小農社会論（中村哲、宮嶋博史ら）やアジア間交易論（濱下武志、川勝平太、杉原薫ら。［溝口・浜下・平石・宮嶋編1996］が以上について優れた概観を与える）、新しい中国国家論・社会論［森正夫他編1997など］から出た専制国家論［足立1998］、貨幣論［黒田2003］、それに中央ユーラシア史・モンゴル時代史［杉山1997ほか］や東南アジア地域研究（生態学・農学の高谷好一ほか→最重要な成果は中国江南デルタの歴史像を変えさせ「高谷ショック」と言われた［渡部・桜井編1984］か）の方法的諸成果は言うまでもない。それ以外を恣意的に拾い出しても、例えばサイードの『オリエンタリズム』（［Said 1978］の和訳が出たのは1986年）の論点の重要な一部分は、小谷汪之の著作［1979；1982］ですでに示されている。ナショナリズムを論じたアンダーソン『想像の共同体』［Anderson 1991］は、ネーションに関するスターリンの発展段階図式が出発点となった石母田正［1952-53ほか］ら日本の研究者を含む東アジアの共産主義者の民族形成論争などを併読することでずっと立体的になると思われる。筆者が専門とする中世史で言えば、「権門体制論」や「顕密仏教論」［黒田俊雄1994abほか］から平雅行の鎌倉仏教論に至る「大阪大学発」の日本史中世史の理論はただちに――日本史の実態としてだけでなく世界の中世史を理解する視座・方法論として――世界に紹介されるべきである。

てきた（詳細はデータブック参照）。いずれも「日本史」「東洋史」「西洋史」などの学問分野での「横断」を狙って全国的に注目されている研究会で、前節の①～⑥のテーマで言えば、「グローバルヒストリー」が①、他の二者が②を直接の対象とする。間接的に④⑥にふれる研究も少なからずおこなわれたが、限られたメンバーの力の集中の観点から③⑤はごく散発的な研究にとどまっている。

これらや後述する歴史教育に関する研究会、関連する授業などを通じて、大阪大学の史学系には、前節までで縷言した「視野の狭いきまじめさ」「横並びの発想」を乗り越え、より幅広く柔軟な発想で新しい課題に取り組む雰囲気がかなりの程度醸成されたと、われわれは自負している。具体的な研究成果のうち、中央ユーラシア関係はすでに本COEプログラム中間報告書［森安孝夫責任編集2003］があり、その他メンバーの個別論文が『史学雑誌』の「回顧と展望」で連年取り上げられている。それらをまとめた概説［森安2007］も近刊の予定である。またグローバルヒストリーセミナーの報告書は別に出版の予定であり［Akita(ed.) 2007］、杉原薫らのGEHN (Global Economic History Network) の活動と連携しながら、新たな近現代世界史像の構築を精力的に進めている。筆者を中心とする「海域アジア史研究会」の成果は、本巻第一部に掲載するような個別論文のほか、『海域アジア史研究入門』［桃木編2007］という世界初の研究入門を刊行する予定である。

この3つの研究会はいずれも、日本が誇る緻密な実証を基礎としながら、広域のシステム・ネットワークを主対象とすることで一国史中心の歴史学を革新しようとしているだけでなく、3分野がそれぞれ一国史と同様の閉じた構造をもってしまわぬように、中央ユーラシアの陸のネットワークと海域アジアの海のネットワークの比較、海域アジアネットワークと近代世界システムとの交錯（それはグローバルヒストリーと地域研究という方法論上の斬り結びでもありうる）の研究など、相互に連動しながら研究を進めてきた。この効用はそれぞれの内部にとどまるものではない。例えば「中国」なるものは、北・西からの遊牧騎馬民やオアシス商業民のネットワーク、東と南からの海商のネットワークの重なり合う場所となり、一国史としての「農民の中国史」は脱構築されざるをえなくなる。ブームになっている日本列島のアジアへの位置づけも、通常の「日本対外関係史」が伝統的な朝鮮半島・中国との関係史しか見ようとしないのに対し、大阪大学では「東南アジア以遠へ連なる海域アジア世界」と「中央ユーラシア世界」を視野に入れることを要求される。伝統的な「業界用語を駆使した内部向けの研究発表」だけ身につけても、これには対応できない。

「横断」は国外の学界との積極的な交流、そこへの発信も意図したキーワードだった。グローバルヒストリーセミナーはそれ自体を目的とし毎回外国の研究者を招聘した。中央ユーラシア史や海域アジア史でも国際交流、海外調査が頻繁に行われたが、手前味噌を承知で紹介したいのは、海域アジア史グループが国立シンガポール大学アジア研究所（ARI）と共同でおこなった2回のワークショップである[*33]。これは東北アジア海域史と東南アジア海域史の関係や比較を論じ、両分野の研究交流の重要性を示そうとしたものだが、従来前者の成果はほとんど東北アジア諸国の研究者によって自国語で発表され、後者の研究は英語中心に進められてきた[*34]。その中で本ワークショップは、英語が得意でないがすぐれた研究を発表している日韓中台などの研究者に、英文校閲の費用も出して集団で英語で発表させた（ディスカッションにはしばしば通訳も介した）。そこには（イ）東北アジア諸国の研究者の業績はごく断片的に英語で公表されたものを参照するだけ」という英語圏の研究状況を改善する[*35]、（ロ）英語が苦手な東北アジアの研究者に、自分の研究が世界史に大きな意味をもつこと、そうであれば「生真面目な」東北アジアの人々が思うほど上手な英語でなくとも海外の研究者は真剣に聞き理解することを実体験させる、という二重の狙いがあった。

（ロ）について付言すれば、「歴史を志望する学生の中で英語の成績が良い者が西洋史に入り、そうでない者が東洋史・日本史に進む」のが常識の日本の大学ではこれまで——かつての筆者もその典型だったが——東洋史や日本史の専門家は英語で発表しろと言われてもなにをどうしたらよいのか全く見当がつかないのが普通だった。自然科学系のようにとりあえずブロークンでも英語で仕事をする、という文化がここにはない。しかもこの状態を変える必要性は、いまだに認識されにくい。前述のように日本の中国史研究者が中国

33——第1回Northeast Asia from Maritime Perspective（2004年10月沖縄。14～17世紀の近世前期が主対象）、第2回Dinamic Rimlands and Open Heartlands（2006年10月長崎。17世紀末～19世紀前半の近世後期が主対象で、本巻第1部所収の論文はこのために執筆されたものである）。いずれも報告集がある。

34——もちろん英米以外の旧植民地宗主国の言語による研究、東南アジア諸言語による研究を無視することは許されないのだが（だから日本の東南アジア史研究者は「きまじめに」旧宗主国の言語と「現地語」を習う）、その多様性が甚だしい分だけ、共通の議論は英語で（お互いブロークンな英語で平気な顔をして）おこなう習慣も発達している。

35——これだけ重要な業績があるのだからわれわれの側も英語での発信に努力するが、英語圏の側も今後は東アジア諸語の使い手を組織的に養成し、東アジア諸国の研究を体系的に摂取するようにすべきだ、というメッセージははっきり伝わったと考える。

語で発表するのは今や当たり前で、そうすれば世界の中国史研究者が読んでくれるし、日本史なら外国の研究者が日本語を読んでくれるから[*36]、アジア各国史研究や日本史研究に英語はいらないように見えるのである。だがわれわれのように東南アジアと日韓両国を結びつけた場合、ただちに問題が見えてくる。中国史の知識は日本史や東南アジア史の研究者にも必須だし、日本史は（倭寇や銀輸出など関係史の側面だけでなく国家論や家族・ジェンダー史などの比較研究においても）アジア史理解の重要なカギを握る。つまり、中国史や日本史（また韓国・朝鮮史、台湾史）を理解する必要のある研究者がすべてそれらの言語を学ぶことはありえない。となればそれらの歴史を英語で書く必要がある。

(2) 臨床

現在は、アメリカ型の「非歴史主義」が世界中に影響を広げつつあるが、上のような日本の歴史学界の弱点とも結びつきながら、日本社会でも「歴史離れ」と「歴史学離れ」の両方が着実に進行しているように思えてならない。とくに本巻第二部で詳しく論ずるように、中学・高校における歴史教育の現状には背筋が寒くなる。これを知らずに——筆者とて最近知ったに過ぎないが——従来通りの入試問題を作成し従来通りの教養・学部教育をおこなう大学教員は、怠慢のそしりを免れない。そしてここでも、深刻な事態の背後に教育機関と社会双方の視野の狭いきまじめさ、横並びの発想がある。

現実世界の動きと歴史学の刷新を踏まえて、現在の学習指導要領や歴史教科書には、これまで軽視されてきた東南アジア、アフリカその他の地域や、社会史・海域史など新しい分野の記述が急増している。ただし大学の史学科にはこうした新しい領域・地域の専門家は少ないから、専門外の研究者が起用されて間違った教科書記述をおこなうような例が珍しくない。「専門家」であっても概ね「狭い世界の外部に向けて自分を明快に説明する」「自分の地域の記述を増やすことばかり考えるのでなく全体のバランスを考える」などの意欲・能力は欠くため、出版社・編集者の力量低下と相まって、新旧の記述が入り乱れ教師や生徒のわかりにくさが増す事態が頻出する[*37]。通常は大学時代に狭い範囲の教育しか受けていない中高教員に、これを整理しなおして明快かつ正確な授業をする力量はない。

36——ただし、日本研究者と名乗るからには論文や資料の高度な日本語を読みこなせて当然、という基準を適用できるのは欧米諸国と中国（・台湾）・韓国だけだろう。

37——世界史B教科書の東南アジア史記述にどの程度問題があるかの検討を［桃木2006a］、同じく入試問題の検討を［桃木2006b］でおこなった。

加えて大学入試の保守性[*38]や教育現場の忙しさからくる高校・大学教員双方の不勉強などが、教科書やカリキュラムの全面刷新を阻んでいる。

もうひとついけないのが、採点に便利なアメリカ型の○×式・穴埋め式テストが「きまじめで視野が狭い」日本社会および「不十分なマンパワーしかもたない大半の大学の史学科の体制」とがっちりかみ合い、「戦後教育」の中の歴史という科目とその入試を「語句・年代の暗記科目」にしてしまった点である[*39]。こんな科目が普通の生徒にとって面白いわけがない。そして選択制が広がった現在の高校では、入試で選択せず面白くもない科目の学習は、以前に増して不十分になる。かくして歴史学の裾野はますます狭まる。ヨーロッパはもちろんアメリカでも「論じさせる」ことなき歴史の試験が考えにくいことは言うもでもない。東アジア型暗記・受験地獄の伝統を共有する漢字文化圏でも、科挙の伝統を有する国々では（日本でも第二次大戦前には見られた）暗記というのは語句や年代でなく長大な文章や説明の暗記であることの意義にも、注意が払われてよい[*40]。

前置きが長くなったが、こうした問題意識に基づき、われわれは「臨床」の課題に歴史教育を選んだ[*41]。タコツボ型でない大学・大学院の授業の試みとして、地域と国家、新

38——大学側は「新しい問題を出すと高校や受験業界の非難を浴びる」、高校側は「新しい教育をしたいが入試で旧態依然の暗記問題が出るからその注入を続けざるをえない」と責任のなすりあいをしている。どちらの言い分も一理あるが、昔の自分（優等生）の基準で「このぐらいは知っていてもらわねば」と難問を出す大学教員、「大学受験用」歴史教科書で暗記部分より説明を増やしたり中学では普通になった問いかけ調べさせるスタイルに変えようとすると「教えにくい」と非難する高校教員は、どちらも自己を反省すべきであろう。

39——「われわれは考えさせる教育をしてきた」という反論が、戦後教育の担い手からただちに出ることは承知している。しかし、戦前型教育を否定するあまり下記のような「論・説明の暗記」（論理的思考・説明能力の養成にとって決して無意味でないことは、英語が話せるようになるためには「構文や長文の暗記」が役立つのと同じである）を全否定してしまうなどの方法的欠点をもち、結局は受験と結びついた戦後型暗記教育（英語で言えば単語だけ覚える）に抵抗する「論理的思考・説明能力」を涵養しきれなかった「結果責任」について、これを拒否するのは困難だと筆者は判断している。なお、おそらく語句を異常に重視する教育と東アジアに伝統的な大義名分へのこだわりが結合した結果として、日本の学界や教育界では、新しい挑戦的な議論（「マルクス主義」「世界システム論」「社会史」「ポスト・モダン」「ジェンダー」……）を「中身をよく見ずに言葉だけで拒否する」（または逆に一斉に飛びつく）傾向が強いことにも注意したい。

40——そのためこれらの国々では、採点の不公平への非難を伴いつつも、論述中心の入試が当たり前に行われている。一方日本では、論述入試は特別で非常に高度なものであり、やるからには完璧な正解答案があるという、「誤解」が根強い。同じ誤解（と構文より単語を暗記する習慣）が日本人の英会話・英作文上達を阻み、ブロークンな英語を平然と使うアジア諸国出身者に多方面で遅れを取らせる原因になっているという事実を想起できる歴史教育関係者は少ないようだ。

41——COEの他の班のメンバーから、これが果たして「臨床」かという疑念がしばしば提示されたが、そこには「臨

しい史料論などテーマを設けてリレー講義をおこなう大学院の講義「歴史学のフロンティア」(COE科目。大阪外大と共同で2003年度から開講)、史学系の学部2回生向け必修講義で歴史学の方法や問題点をテーマ別に解説する新史学概論というべき「世界史・日本史研究の理論と方法」(2005年度から開講)などを開設したが、なんと言っても柱になったのは、「高大連携」の一形態としての「全国高校歴史教育研究会」である。毎年夏休みに、全国から参加した高校教員に——「日本史」「東洋史」「西洋史」を区別せずに——最新の研究成果を従来の見方と比較しながらコンパクトに解説し[*42]、まとめ方や教え方について質疑・討論をおこなうこの催しは、羅列と暗記でなく像を結び説明ができる歴史教育に向けて高校教育界を刺激し、大阪大学史学系の研究や地歴の入試問題の独自性に関する理解を広げるのに貢献しただけではない。参加した大学教員・若手研究者側にも、高校(場合によっては中学)の複雑な現状を知り教養・学部教育や入試のあり方を考え直す機会になったこと、しばしば阪大生より「手強い」高校教員相手の講義や高校での授業実践に関する情報は、大学の講義のレベルアップへの格好の刺激になったこと(特に教養課程の講義法改善に直結する)など、多くのメリットがあった。

この催しの結果、阪大教員が高校生向けの「出前講義」や高校教員側の研究会に招かれることも増加した。また2005年11月から、月例会形式で、より少人数の研究者・教員が幅広いテーマについて講義・討論をおこなう「大阪大学歴史教育研究会」が発足した。2006年度からこの研究会は「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に属する大学院演習の扱いも受け、大学院生が自分の研究を歴史学や世界史全体の中に位置づけ、それを専門外の人々に向けて説明する訓練の場にもなっている[*43]。研究はタコツボ化しがちな一方で塾講師や大学の非常勤講師など教える経験を積めるアルバイトが激減している若手研究者が、運良く大学教員になれたとしても、専門の授業だけを自分同様に優秀な学生に教えればよいという恵まれた立場に最初から着けることはまずない。雑多な成績とバックグラウンドをもつ学生たちの教養教育に当たるのは、しばしば進学校で歴史を教えるより難し

床」イコール「個々人のレベルの問題」という定義のズレがあったように思われる(「組織の問題」や「集団心理」は「臨床」の対象ではない?)。

42——2005年度にはこの研究会の講義内容を土台として、懐徳堂記念会の春秋講座で「阪大史学の挑戦」と題する市民向け連続講演会を開催した。これに基づく一般書[懐徳堂記念会編2007]が近く出版予定である。

43——本稿で論じた歴史学のあり方に対応する歴史研究者養成の問題点と、この月例研究会の趣旨については[桃木2006c]で扱っている。

い。大学院生・若手研究者をこうした研究会に巻き込むことは、すぐれて実践的な意義をもつ。

以上のようなメンバーの取り組みと今後出てくる業績が、実際に世界レベルに達しているか、日本の歴史学・歴史教育を変革しうるかについては、内外の読者・関係者の評価に委ねるしかない。ただわれわれが、問題を立体的・体系的にとらえ革新しようとしていることは、ご理解いただきたい。それは「ジーコ・ジャパン」と比べればかなり具体的な目標と方法をもっているつもりなのだが、いかがであろうか。

［ももきしろう・大阪大学大学院文学研究科教授］

［参考文献］

（日文）
足立啓二 1998.『専制国家史論　中国史から世界史へ』柏書房.
網野善彦・谷川道雄 1988.『交感する中世』株式会社ユニテ.
石母田正 1952-53.『歴史と民族の発見　正続』東京大学出版会.
『岩波講座世界歴史1　世界史へのアプローチ』岩波書店、1998年.
綾部恒雄・大林太良・米山俊直編 1982.『文化人類学入門リーディングス』アカデミア出版会.
綾部恒雄編 1984.『文化人類学15の理論』中公新書.
尾形勇他編 1994-　『歴史学事典』（全15巻の予定）弘文堂.
小田中直樹 2004.『歴史学ってなんだ？』PHP新書.
懐徳堂記念会編 2007（印刷中）.『世界史を書き直す　日本史を書き直す—阪大史学の挑戦—』和泉書院.
樺山紘一編 1989.『現代歴史学の名著』中公新書.
川北稔他 2004.『新編高等世界史B』帝国書院.
黒田明伸 2003.『貨幣システムの世界史　＜非対称性＞をよむ』岩波書店.
黒田俊雄 1982.『歴史学の再生』校倉書房.
黒田俊雄 1994a.『黒田俊雄著作集1　権門体制論』法蔵館.
黒田俊雄 1994b.『黒田俊雄著作集2　顕密体制論』法蔵館.
小谷汪之 1979.『マルクスとアジア』青木書店.
小谷汪之 1982.『共同体と近代』青木書店.
史学会編「○○年の回顧と展望」『史学雑誌』各編5号、山川出版社.
杉山正明 1997.『遊牧民から見た世界史　民族も国境もこえて』日本経済新聞社.
祖父江孝男 1990.『文化人類学入門　増補改訂版』中公新書.

竹中亨1998.「歴史学と実証」『西洋史学』191、pp.42-49.
竹中亨2000.「報告1　「発見する歴史学」か「解釈する歴史学」か？」(シンポジウム「21世紀の西洋史学」)『西洋史学』200、pp.47-50.
竹中亨2004.「歴史研究とシステム論的権力・帝国」『パブリック・ヒストリー』1, pp.19-29.
谷川道雄編著1993.『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所.
長崎暢子・山内昌之編1992.『現代アジア論の名著』中公新書.
成田龍一2003.「歴史理論」『史学雑誌』112 (5)、pp.6-10.
濱田正美2006.「湖南・樸学・「内」と「外」」『史林』89 (1)、pp.1-21.
福井憲彦2006.『歴史学入門』岩波書店. [『歴史学の現在』放送大学教育振興会、1997、2001年の改訂版]
溝口・浜下・平石・宮嶋編1996.『アジアから考える6　長期社会変動』東京大学出版会.
桃木至朗2006a.「『詳説世界史』(山川出版社)の東南アジア史記述とそれに対するコメント・解説――「見えない東南アジア史」からの脱却をめざして――」早瀬晋三編『不可視の時代の東南アジア史――文献史料読解による脱構築』平成15～17年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、大阪市大、pp.88-129.
桃木至朗2006b.「東南アジア史　誤解と正解」第4回全国高等学校歴史教育研究会報告.
桃木至朗2006c.「歴史学部門における取り組み」『魅力ある大学院教育イニシアティブ《ソーシャルネットワーク型人文学教育の構築》』中間報告書、大阪大学文学研究科、pp.29-38.
桃木至朗編2007(予定).『海域アジア史研究入門』岩波書店.
森正夫他編1997.『明清時代史の基本問題』汲古書院.
森安孝夫2007(印刷中).『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史05)講談社.
森安孝夫責任編集2003.『シルクロードと世界史』(21世紀COEプログラム《インターフェイスの人文学》中間報告書3)、大阪大学.
李泰鎮(六反田豊訳)2000.『朝鮮王朝社会と儒教』法政大学出版局.
歴史科学協議会編2006.『歴史評論672　特集／歴史におけるジェンダー研究の現在』校倉書房.
歴史学研究会編2002.『現代歴史学の成果と課題1980-2000　I歴史学における方法的転回』青木書店.
歴史学研究会編2003.『現代歴史学の成果と課題1980-2000　II国家像・社会像の変貌』青木書店.

(欧文)

Abu-Lughod, Janet 1989. *Before European Hegemony: The World System A.D.1250-1350*, Oxford University Press. [ジャネット・L.アブー＝ルゴド(佐藤・斯波・高山・三浦訳)2001.『ヨーロッパ覇権以前　もうひとつの世界システム』上下、岩波書店]
Akita, Shigeru (ed.) 2007 (forthcoming). *Creating Global History from Asian Perspectives*, Osaka University, The 21st Century COE Program《Interface Humanities》.
Anderson, Benedict.1991. *Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, New York: Verso. [ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補想像の共同体　ナショナリズムの起源と流行』NTT出版. 初版は原書1983年、和訳1987年リブロポート]
Braudel, Fernand 1979. *Civilisation matérielle, économie et capitalisme, XVe-XVIIIe siècle*, 3 tomes, Paris: Librai-

rie Armand Colin.［フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義　15-18世紀』全6巻、みすず書房、1985-1999年］

Carr, E. H. 1961. *What is Hitory?* Penguin Books.［E.H.カー著、清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波新書、1962］

Cahudhuri, K.N. 1985. *Trade and Civilization in the Indian Ocean*, Cambridge: Cambridge University Press.

Frank, Andre Gunder 1998. *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*, Cambridge Univeristy Press.［フランク、アンドレ・グンダー著、山下範久訳『リオリエント：アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、2000年］

Lieberman, Victor. 2003. *Strange Parallels, Southeast Asia in Global Context, c. 800-1830, vol.1: Integration on the Mainland*, Cambridge University Press.

Pomerantz, Kenneth. 2000. *The Great Divergence: Europe, China and the Making of the Modern World Economy*, Princeton University Press.

Reid, Anthony. 1988; 1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, 2 vols, New Haven: Yale University Press.

Said, Edward W. 1978 *Orientalism*, New York: Georges Borchardt.［エドワード・W・サイード著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年］

Wallerstein, Immanuel 1974. *The Modern World System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, New York: Academic Press, Inc.［I. ウォーラーステイン著、川北稔訳『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立I・II』岩波書店、1985、87年］

第I部
躍動する周縁と開かれた中心
——インターフェイスの場としての海域アジア

9世紀〜14世紀前半の日本列島と海域アジア

山内晋次

はじめに

本稿では、9世紀から14世紀前半頃までの日本列島とアジア諸地域との海を通じた交流史を検討する。この研究分野は、戦前の研究の盛り上がり（それはもちろん日本国家のアジア侵略と深くかかわる動きであった）とは裏腹に、戦後しばらくは研究が停滞していた。しかし、とくに1980年代以降、再びその分野の研究が活性化してきている。その研究の新展開のなかで注目すべき特徴として、まず、従来の研究の主軸であった国家・為政者間の政治・外交交渉だけでなく、海商・海民・僧侶などのさまざまなレベルの交流にも積極的に関心が向けられるようになり、「国家」や「国境」の相対化という方向性が明確になってきた点がある。また、この点と深くかかわり、これまで「日本（ヤマト）」の「辺境」・「周縁」とのみ理解され、研究の焦点があまり当てられてこなかった琉球列島や東北北部〜北海道地域に関して、列島外のより広い世界とのつながり（国境をまたぐ「地域世界」・「海域世界」）のなかで、その地域の独自な歴史展開をとらえようとする研究が活発化している点もあげることができる[*1]。

このような新たな研究の動きは、はやくは1980年代後半の［朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝（編）1987］［川添昭二（編）1988］［菊池徹夫・福田豊彦（編）1989］などに明確にみてとれる。ここ10年程の間においても、その新たな視角は、「境界」・「境界人」を中心テーマとする［村井章介・佐藤信・吉田伸之（編）1997］［バートン,ブルース2001］［村井章介2006］や、日本通史のシリーズにおいて列島の北方地域・南方地域・海域史を

1——— 以上のような近年の研究潮流の詳細については、［関周一1994］［田中史生2002］［橋本雄2003］［田中健夫2003］［皆川雅樹2005］などの研究史整理を参照。なお、この分野に関連する年表・文献目録としては、［田島公1993］［対外関係史総合年表編集委員会（編）1999］［石井正敏・川越泰博（編）1996］などがある。

あつかう独立の1巻が設定された［大石直正・高良倉吉・高橋公明2001］［入間田宣夫・豊見山和行2002］［豊見山和行（編）2003］［菊池勇夫（編）2003］、および日本歴史講座の1論文である［柳原敏昭2004］などがあいついで公刊され、枠組の面でも実証の面でもさらに研究が深められつつある。

以下、第1章では、上述のような日本列島とアジア諸地域との交流史の推移およびそれに関する研究の現状を、列島の西方・南方・北方の3海域に分けて概観する。そして、つづく第2章では、以上のような列島とアジア諸地域との海を通じたつながりを具体的に物語る1つの事例として、これまであまり注目されてこなかった、日本産硫黄の中国への輸出という問題を紹介してみたい。

1　日本列島の西方・南方・北方の動向と海域世界

(1) 列島西方の海域

◆画期としての9世紀　9世紀に入ると、来日する渤海国使節を除き、国家的使節団を介しての日本とアジア諸国との交流がほぼなくなってしまう。しかしその一方で、史料中に「新羅商人」・「大唐商人」と表記される大陸の民間海商たちがしばしば九州に来航し、大陸との民間貿易が始まる[*2]。また、同世紀の後半には、反乱・海賊事件を契機とする、日本・新羅・唐をまたぐ民衆の移動も活発化したと推測される［山内晋次2003］。このように、為政者による政治・外交中心の限られた交流から、それ以外の民間人も含めた貿易などを中心とする交流へとその交流の性質や範囲が大きく変化するという点で、この9世紀という時期は、日本とアジア諸地域との交流史において重要な画期となる。

この時期の唐・新羅・日本を結ぶ東アジア海上貿易では、唐人と新羅人—とくに唐に僑居する在唐新羅人たちが大きな役割を演じたと考えられている[*3]。ただし、10世紀から14世紀頃の日本・朝鮮・中国史料にほとんど姿をみせない朝鮮半島出身の海商が、なぜこの時期に大きな活躍をみせるのか、その理由・背景は十分には明らかにされていない。

2——［石井正敏1988］では、新羅・唐海商の日本来航の開始を8世紀後半からとする。しかし、史料上で国家的使節団とかかわらない民間海商と考えられる「新羅商人」・「大唐商人」の語が初出するのが9世紀に入ってからのことであるので、本稿では一応、彼らによる貿易の始まりを9世紀初期からと理解しておきたい。

3——この点については、［李炳魯1993］［濱田耕策2002］［田中俊明2003］［権悳永2005］など参照。

また、中国人海商たちの東アジア・東南アジア海域への進出は、まさに唐末のこの時期から本格化すると推測されるが、それに関する記録は現存の中国史料にはほとんどみあたらず、そこから具体的状況を明らかにすることは難しい。そして、その中国史料の空白をわずかなりとも埋めるのが、中国海商たちの貿易相手となった日本に残された史料群なのである。海域アジア史研究の広い視野から、今後さらにそれらの日本史料を多角的に分析していく必要がある。

◆日宋貿易の時代　つづく10世紀初頭に唐が滅亡し、中国が五代十国の混乱期に入っても、呉越国の海商を中心として中国海商たちの対日貿易は続けられた［山崎覚士2002］。そして、同世紀後半に宋が中国の大部分を再統一し、その国内の商業・流通が一段と発展した結果、中国海商たちの日本への来航も増加し、いわゆる「日宋貿易」が展開していく[*4]。

10世紀末から13世紀後半にかけての日宋貿易の展開過程については、はやく［森克己1948, 1950］の包括的研究があり、これがその後半世紀近くにわたって通説の地位を占め続けてきた。しかし、1980年代末以降、［山内晋次2003］［榎本淳一1991］［林文理1998］［榎本涉2001a, 2001d］［渡邊誠2003］をはじめとする文献研究により、この森克己説を主軸とする通説の大幅な見直しが進んでいる[*5]。このような文献研究の新展開は、ほぼ同じ頃から急速に進展してきた、［亀井明徳1986, 1995］［大庭康時1999, 2001］に代表される、貿易陶磁研究や大宰府鴻臚館遺跡・博多遺跡の発掘成果などにもとづく考古学側からの貿易研究と密接にリンクしながら進められてきた。

これらの新たな研究を通じて、たとえば、従来の通説が主張していた、10世紀後半以降の国家による対外関係・貿易の統制・管理の急速な衰退と崩壊という図式が大きく塗りかえられ、すくなくとも12世紀頃までは指定貿易港である博多を中心に国家による貿易の統制・管理が維持されていたことが明らかになった。また、とくに考古学研究における大きな成果として、11世紀後半以降、博多に中国人の貿易関係者を中心とするチャイナ

4——日宋関係および後述の日元関係のより詳しい研究史は、［榎本涉2002b］［Enomoto 2003］［山内晋次2002］を参照。また、日宋貿易期を中心とする9～13世紀頃の日本側の貿易関係史料の大枠は、［山内晋次2006］で概観が得られる。

5——これらの成果以外にも、日本の貿易管理方式・決済システムを掘り下げた［田島公1995］［渡邊誠2002, 2005］、貿易史と王権論・政治史との接点を積極的に探る［保立道久2004a］、硫黄・金をはじめとする個別的なモノの動きに注目する［五味文彦1988］［山内晋次2002］［皆川雅樹2006］、国文学研究から「唐物」論に迫る［河添房江2005］、個別の来日宋海商の動きを追う［森公章2002］、日本中世仏教史と対外関係史との積極的な架橋をめざす［上川通夫2006a, 2006b］［保立道久2004b］［横内裕人2006］などがある。

タウン（唐坊・唐房）が形成されていたことも物証をともなって明らかにされた。

ただし、この新たな見取図では、12世紀後半以降の公的貿易管理の実態がほとんど解明されていない。この点については、依然として研究の手薄な平氏政権・鎌倉幕府の貿易関与の問題などを含めて、当該時期の貿易実態を今後さらに掘り下げていかねばならない。また、近年、九州沿海地域に点在する「トウボウ」の地名や新たに発見された中国陶磁出土遺跡などから、九州各地での国家管理を離れた貿易の盛行や中国人の集住を推定する［柳原敏昭1999］［服部英雄2005］なども発表されている。このような、従来の通説へと回帰するかのような近年の研究に関しては、国家による貿易管理の本質をどのように考えるのかという問題が重要なポイントとなる。その問題については、［山内晋次2003］［榎本涉2006］などが試みた、海域アジア世界を広く見渡した貿易形態の比較史の成果なども参照しながら、「国際交易」というものの本質やそれが行われる港の機能・成立条件などをいまいちど根本的に議論しなおす必要があろう。そしてその際に、王権・国家と海商との間に「もたれあい」の関係がある点を見逃してはならないであろう。

日宋貿易の時代は、それ以前の日唐関係の時代と比べて、庶民文化までを含めたより多様な種類・レベルの中国文化が日本に流入し、それらがその後、日本人のより広い階層により深い影響を与えた時代であったと推測される。その具体的な状況を解明するために、今後さらに、従来手薄な美術・工芸・芸能・民俗・生活史分野などの多様なテーマが追求されねばならない。また、同様にほとんど解明されていない、宋の国内事情と日宋関係との連動の具体的状況や、北宋期と南宋期との間における日宋関係の共通点・相違点などについても、今後検討を深めていく必要がある。

◆日元間の戦争と貿易　13世紀後半～14世紀半ばの日元関係をめぐってはこれまで、1274年（文永の役）・1281年（弘安の役）の2度にわたる元の日本遠征（蒙古襲来・元寇）の問題を中心に、日本史家・東洋史家双方からの研究が進められてきた。日本史家はおもに、その戦争を契機とする国内政治の変質過程や国内における人・物の動員・挑発体制、および戦後の武士・寺社などへの恩賞の問題などを中心に、その戦争が中世日本の政治・経済・社会・文化に与えた広範な影響を検証してきた[*6]。一方、東洋史側においては、

6――基礎的な業績として［相田二郎1982］がある。このほか、専門書としては、［瀬野精一郎1975］［村井章介1988］［海津一朗1994］［南基鶴1996］などがあり、概説書としては、［網野善彦1974］［海津一朗1998］［佐伯弘次2003］などがある。なお、この戦争に関する研究史を網羅的に整理したものとして、刊行年はやや古いが［川添昭二1975］がある。

中国史・朝鮮史・中央ユーラシア史などの専門家がこの問題に関心を寄せ、元・高麗・日本間の外交交渉や戦争の過程を詳細に検討している[*7]。そして、近年、東洋史家の側からこの問題に対して積極的に発言をしているのが中央ユーラシア史を専門とする杉山正明であり、[杉山正明1995, 1998] などで、日本史家のほぼ日本国内に限定された狭い歴史的視野や思い込みを批判し、モンゴル帝国の眼からみた斬新な歴史像を提示している。なお、第2回目の遠征の際には、現在の長崎県鷹島沖で猛烈な嵐によって多数の元船が沈没したことが諸書に記録されているが、近年、このときの沈船のものと考えられる様々な遺物がその海底から引き揚げられ、水中考古学と文献史学の協業による新たな研究の進展が期待されている[*8]。

このような戦争の一方で、日元間においては貿易も盛んにおこなわれた。しかし、この日元貿易の問題をめぐっては、はやく [森克己1975a, 1975b] などの研究があるものの、それに続く研究がほとんどなく、近年の日宋貿易研究の進展に比べると、研究の立ち遅れが目立つ。このような研究状況にあって、最近このテーマに積極的に取り組んでいるのが榎本渉である。[榎本渉2001b, 2001c, 2002a] などで、元朝の対日貿易政策や元の国内状況が対日通交に及ぼした影響などが詳細に検討され、従来2度の戦争期間以外はほぼ一貫して盛行していたと考えられてきた日元貿易に、いくつかの中断・退潮期間を挟む波動があったことを発見するなど、重要な成果があげられている。また、[村井章介2003, 2005] は、当時の貿易の具体的状況やそれと密接にかかわる日元間における僧侶の往来（名前の判明するものだけでも300人近い）を概観するとともに、14世紀前半に幕府や大寺社の名のもとに日本から派遣された「寺社造営料唐船」の通説を批判し、当時の中国海商の経営形態により即したかたちの新たな理解を提示する。なお、日元貿易に関しては、1976年に韓国西南の多島海域で引き揚げられた「新安沈船」という、きわめて貴重な実物資料がある。この沈船は、その多くの遺物から、1323年に中国の慶元（現在の寧波）を出港して博多に向かう途中に遭難した、まさに日元貿易船そのものであると考えられている[*9]。

◆高麗との関係　10世紀前半から14世紀末まで朝鮮半島を支配した高麗との交流については、日宋・日元関係にくらべてはるかに関係史料が乏しく、ひさしく [森克己1948,

---

7――― 専門書として [池内宏1931] [青山公亮1955]、一般書として [旗田巍1965] などがある。

8――― [小川光彦2002] [四日市康博2002] など参照。

9――― [文化広報部文化財管理局（編）1988] など参照。

1975a, 1975b]［青山公亮1955］などごく限られた研究しかなかった。しかし、やはり1980年代頃から、日本・高麗における為政者たちの国際意識の問題や両国間での漂流民送還の問題、および元の日本侵寇前後の対日関係などをめぐって、［奥村周司1985］［村井章介1988］［李領1999］［南基鶴2003］［山内晋次2003］などの新たな成果がすこしずつ蓄積されている。また、日本・高麗・宋・遼間における中国海商の動きを綿密に分析した［原美和子1999, 2006］や、高麗仏教との交流のなかで日本中世仏教の展開を探った［横内裕人2002］などの新たな視点からの研究も徐々に進みつつある。

(2) 列島南方の海域

◆文献研究の成果　日本列島南方の琉球列島（薩南諸島～八重山諸島）に関する文献記録は、7世紀頃から史書にみえ始めるが、その量はきわめて限られたものである。しかし、後述の考古学の成果も援用しながら、当該地域の歴史動向を具体的に描き出そうとする文献研究が積み重ねられている。［鈴木靖民1987］［山里純一1999］［田中史生2005］では、当該地域の人々のヤマト国家への「朝貢」の背後にある社会の階層化の進展、遣唐使と当該地域との関係、南方物産の交易と密接に関わる島嶼社会の統合への動きなどの問題が論じられている。また、［永山修一1993, 2004］［村井章介1997, 1999］では、おもに薩南・奄美諸島に関して、ヤコウガイ・硫黄・赤木などの特産品交易の実態、その地域を日本の「西境」とする国家領域観念、北条氏・島津氏・千竈氏ら種々の権力によるその地域の交易支配などの問題が検討されている。

◆考古学研究の進展　近年の琉球列島史研究は、とくに考古学を牽引車として進展しており、その成果からつぎのような見取図が描かれている。11世紀頃を境に、それ以前の琉球列島は、沖縄諸島と宮古諸島の間で2つの文化圏に分かれていた。ところが、その頃から、海を越えて流通した、カムィヤキ（徳之島産）・白磁（中国産）・滑石製石鍋（九州産）・鉄器・穀物など、両文化圏に共通する考古学的遺物の出土がほぼ列島全域でみられるようになる。これらの遺物からは、琉球列島の島々が、それまでの採集経済社会の段階から農耕・交易の比重が高い交易型社会の段階に移行しつつ、文化的一体化の方向に進んでいたことがわかる。そして、この動向の延長上に15世紀初めの琉球王国の成立がみえてくることになる［池田榮史2006a］。

このような新たな研究動向における具体的成果として、たとえば［髙梨修2005, 2006］［木下尚子2003］などは、7世紀頃以降のヤマト・中国を相手とするヤコウガイ・ホラガ

イ交易から地域支配権力や国家の形成過程を探る。とくに高梨は、ヤマトと琉球にはさまれた奄美の「境界性」に着目しつつ、従来の沖縄島中心史観を乗り越える新たな奄美諸島史像を構想する。また、[池田榮史2006b][吉岡康暢2002][亀井明徳1993][鈴木康之2006]などは、カムィヤキ・白磁・石鍋などを舶載して列島の南方・西方海域を往来するヤマト・琉球・中国などの商人集団による交易から、琉球列島社会の発展を見通そうとする。近年の調査により、海を越えた中国やヤマトとの深い関係を示唆する10～13世紀頃の多くの中国陶磁や大型建物遺構などが発見された奄美大島の倉木崎海底遺跡や喜界島の城久遺跡群などを、このような交易型社会の発展を重視する新たな図式の中にどのように位置づけるのか、今後の研究の進展が期待される。このほか、中山王の初期の本拠地と推定されている沖縄島の「浦添グスク」・「浦添ようどれ」の発掘調査では、すでに13世紀において、それらの施設が沖縄地域の他勢力を圧倒する規模に達していたことが判明した。そして、この発掘調査の成果と上述の交易型社会の発達に関する研究成果とを統合し、[安里進2003, 2004]は、15世紀初めの琉球王国の成立以前にすでに「初期中山王国」とも呼ぶべき強大な支配権力が出現していたことなどを想定する新たな琉球国家形成史の仮説を提起している。

(3) 列島北方の海域

◆「防御性集落」と擦文文化　従来、律令国家による「エミシ征討」の時代が終わった後の10世紀半ば～11世紀後半頃の本州北部地域では、比較的平和で安定した社会が維持されていたと考えられてきた。ところが近年、10世紀半ば～12世紀初めの津軽海峡をまたぐ本州北部（ほぼ北緯40度以北）～北海道地域において、「防御性集落」と名付けられた環濠集落・高地性集落が広範に出現し、「戦いと緊張の時代」が到来していたことが明らかになってきた[斉藤利男1999][三浦圭介・小口雅史・斉藤利男（編）2006]。ちょうどこの頃、北海道の大部分（一部にサハリン・ユーラシア大陸の文化と関係が深い「オホーツク文化」が分布）では「擦文文化」が展開していた。この文化は鉄器・須恵器などの使用にみられるように、それ以南のヤマト社会との活発な交流・交易に支えられており、その分布は当時、津軽海峡を越えて青森北部にまで及んでいた[菊池俊彦・鈴木靖民・蓑島栄紀2006][鈴木琢也2006]。このような北方の歴史状況から、「防御性集落」の出現は、本州北部地域と北海道を結ぶ海を通じた交易ルートの変遷と密接に関わっていると推測されている[蓑島栄紀2006]。

11世紀末～12世紀になると、ヤマト国家の軍事・行政的支配力が本州最北部まで伸び、「防御性集落」も急速に姿を消し、その地域は比較的安定した状況となる。ちょうどこの時期、「日本」の「東」の境界が、津軽半島陸奥湾側一帯を指す「外が浜」と意識されるようになる事実［大石直正1980］や、「エミシ」の呼称がより北方地域の人々に限定された「エゾ」に変化していく事実［海保嶺夫1996］などは、このような状況と直結している。

◆奥州藤原氏の時代　安定した状態を取り戻した12世紀の本州北部地域を直接支配下に置いたのが、奥州藤原氏である。平泉に本拠を置いた同氏は、ヤマト国家の北方支配を肩代わりする一方で、強い自立性を持ちつつ北海道の一部までもその支配下においていた。［大石直正2001］［入間田宣夫・豊見山和行2002］などは、その支配力の基盤のひとつが、鷲羽・海獣皮などの北海道やあるいはさらに北方の地域から外が浜にもたらされる産物の交易の統括にあったと推定している。

◆安藤氏と十三湊の繁栄　12世紀末、奥州藤原氏が鎌倉幕府により滅ぼされると、本州北部は鎌倉幕府の直接支配下に置かれ、奥州総奉行・秋田城介などを通じて現地支配が行われた。しかしその支配権は次第に執権北条氏の手に移り、13世紀以降、津軽半島日本海側の十三湊を本拠地とする安藤氏が、その代官として北方地域の現地支配を担った［大石直正1990］［村井章介・斉藤利男・小口雅史（編）2002］。このように安藤氏が北方の統括者となると、従来の外が浜にかわって、その本拠地である十三湊が北方交易の拠点となった。近年、考古学的発掘の進展により、安藤氏支配下の十三湊の姿が次第に明らかにされてきている［青森県市浦村（編）2004］［前川要・十三湊フォーラム実行委員会（編）2006］。

◆アイヌ文化の形成と交易の拡大　以上のように、本州北部地域の現地支配者が奥州藤原氏から安藤氏へと推移する12～13世紀前後に、北海道は「擦文文化」から「アイヌ文化」へと移行する[*10]。このアイヌ文化においては、土器の使用がなくなり、鉄器・漆器・米などをヤマトとの交易により入手することになる。そして、北海道のアイヌたちは、それらの対価である北方産物を供給する交易の民としての性格を強め、その交易支配をめぐって階層分化が進展し、各地に首長やさらに彼らを統括する有力首長が生まれるような高度な政治社会を誕生させる（ただし琉球のような国家形成には至らなかった）。このような

10――アイヌ文化成立の画期については、12～16世紀と論者によって幅があるが、本稿では、上述の列島の西方・南方における海域交流の展開と積極的に関連づける視点から、［海保嶺夫1996］などにもとづき12～13世紀頃をその文化への移行期と理解しておきたい。

文化の移行は、ヤマト側の日本海交易の発達と連動していると考えられている。さらに、13世紀から14世紀にかけて、アイヌたちはこのような交易を中心とする活動の範囲を北海道の外へと海を越えて南北に拡大することになる。南方に関しては、13世紀後半から14世紀前半の諸文献に、津軽海峡を越えたアイヌを主体とする勢力が鎌倉幕府軍と戦ったと考えられる「エゾ反乱」の記録がいくつか登場する。北方に向かっては、13世紀末から14世紀初めにかけてアイヌたちがサハリンや千島へ活動範囲を拡大した結果、サハリン～アムール川最下流部で元朝の軍隊と何度か交戦した記録が中国史料に残されている。この後、元朝とアイヌとの交渉の記録は途絶えるが、つづく明代には、15世紀初めに、アムール川下流にヌルカン（奴児干）都司が置かれ、沿海州やサハリンの諸民族に対する服属・貢納体制が確立される［中村和之1997, 2004］［榎森進2001, 2003］「天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦（編）2006」。

以上、9世紀～14世紀前半頃の日本列島とアジア諸地域との海を通じた交流史を、西方・南方・北方の3海域に区分して概観してきた。ただし、もちろんこのような区分はおもに叙述の便宜上のものであり、実際にはこれら3海域の連動により、日本列島とアジア諸地域は緊密に結びついていたのである。これまで紹介してきた新たな諸研究を通じて、たとえば、日本列島の北部と南部で、11～13世紀頃を中心とするほぼ同じ時期に、交易の展開が地域形成・社会統合を大きく進めるという併行現象がみえはじめている。また、東シナ海や日本海をまたいで大陸から日本列島の南部・中部・北部へとひろがる交易ルートのつながりも、より具体的に解明が進んできている。

2 硫黄からみた海域アジア史

本章では、前章で概観した日本列島とアジア諸地域との海を通じた交流史、および列島「南方」海域と「西方」海域の連動を具体的に物語る事例の1つとして、日宋貿易における日本産硫黄の流通に着目してみたい。そしてさらに章末で、そのような海をまたぐ硫黄の長距離交易が、アジア西方から中国に向けてもおこなわれていたことを物語る1つの事例を紹介し、東アジア～東南アジア～西アジアにまたがる広大な海域における、硫黄からみた歴史のつながりを考察してみたい。

(1) 日宋貿易と日本産硫黄

◆日本産硫黄関係記事　10世紀末～13世紀後半の日宋貿易において日本産の硫黄が輸出されていたことは、はやくから指摘されており、つづく室町期の日朝貿易・日明貿易でも、それは日本側の重要な輸出品の1つであった［森克己1948］［小葉田淳1976］。700～1200年頃の日本・中国・朝鮮史料にみえる日本産硫黄に関する記事を検索すると、管見の限り、以下のような7つの事例がみつかる。

①【988年】(『宋史』巻491, 日本国伝)
入宋僧奝然による宋の太宗皇帝への硫黄献上

②【1053～1064年頃】(藤原明衡『新猿楽記』)
架空の大商人八郎真人が商品として取り扱う「貴賀之嶋」産の硫黄

③【1069年】(成尋『参天台五臺山記』巻2, 延久4年6月5日条)
宋海商陳詠による日本産硫黄の貿易

④【1072年】(成尋『参天台五臺山記』同日条)
宋海商曽聚による日本産硫黄の貿易

⑤【1084年】(『続資治通鑑長編』巻343, 元豊7年2月丁丑条)
宋政府による日本産硫黄の大量買付計画

⑥【1093年】(『高麗史』巻10, 宣宗10年7月癸未条)
高麗により拿捕された宋人・倭人乗組み貿易船に積まれた硫黄

⑦【1145年】(『建炎以来繫年要録』巻154, 紹興15年11月丁巳条)
宋の温州に漂着した日本国賈人船に積まれた硫黄

これらの現存事例による限り、日本産硫黄の中国への輸出は、10世紀末～11世紀初頭頃の日宋貿易において始まると考えられる。そこでつぎに、その輸出が開始される背景をさぐってみたい。

◆輸出開始の背景　日宋貿易において日本産硫黄の輸出が始まる背景を検討するにあたって、まずは宋におけるその用途の問題から考えてみたい。従来の諸研究では、宋代の硫黄の用途として、炬火・燃料用、薬用、火薬原料などが指摘されている［森克己1948］［曽我部静雄1949］［吉田光邦1967］［王曽瑜1983］［石曉軍1985］。しかし、これら3つの用途のうちで、炬火・燃料用および薬用のために、わざわざ日本から大量の硫黄を輸入する必要があったとは考えにくい。ここで、周知のように世界ではじめて火薬兵器が実用化され、そ

れが実戦にも広く使用されたのが宋代の中国であるという事実［吉田光邦1967］［王曽瑜1983］［ニーダム1984］に着目すると、宋における日本産硫黄の主要な用途は、その輸出開始時期を示唆する史料状況から考えても、従来の諸説が指摘するように火薬原料としての大量需要の可能性が最も高い。そこで、本稿では、このような日本産硫黄の輸出開始時期とその用途に関する推定をさらに確実なものとするために、これまであまり注目されていない中国歴代の本草書の硫黄記事に注目してみたい。

まず、北宋末の12世紀初頭に編纂され、その後16世紀まで中国本草学のスタンダードとなった唐慎微『証類本草（経史証類備用本草）』の硫黄に関する記述を検索すると、巻4,「石硫黄」および巻30,「二十六種玉石類」の項などがあり、そこにはこの書物以前の魏晋南北朝〜北宋期の諸本草書が引用されている。そして、それらの引用文献における硫黄産地の記述に注目すると、以下のように整理できる。

書名・著者名	編纂・活躍時期	産　地　名
「陶隠居」（陶弘景）	梁・452～536	箕山（山東省）、扶南（ベトナム・カンボジア南部）・林邑（ベトナム南部）蜀（四川省）　＊「崑崙黄」の呼称あり
『呉氏』（呉普『呉氏本草』）	魏・3世紀	易陽（河北省）、河西（黄河以西）
『図経』（蘇頌『図経本草』）	北宋・1061	東海牧羊山（未詳）、泰山（山東省）、河西山、南海諸蕃、嶺外州郡（広東省・広西省）、広南（雲南省）、榮州（四川省）
『海薬』（李珣『海薬本草』）	唐末五代・10世紀	崑崙（東南アジア）日脚下（未詳）、蜀中雅州（四川省）
『太清服練霊砂法』（道教経典？）	未詳	波斯国（ペルシャor東南アジア？）、南明之境（未詳）
未詳（陶弘景『名医別録』？）	未詳	武都（甘粛省）

つづいて、明末の16世紀末に編纂され、その後ながく東アジアにおける本草学の聖典とされた李時珍『本草綱目』巻11,「石硫黄」・「石硫赤」・「石硫青」の項における硫黄関連の記事をみてみると、上述の『証類本草』とほぼ同じ過去の諸本草書を引用しているが、それらはここでは省き、『本草綱目』のみが引用する本草書・史書の文章に関して硫黄の産地を示すと、つぎのようになる。

書名・著者名	編纂・活躍時期	産地名・補考
『魏書』(魏攸)	北斉・6世紀	盤盤国　＊『魏書』外国伝には「盤盤国」の記述なし、同じ火山の記述がみえる西域の「悦般国」の誤りか？
『博物志』(張華)	西晋・3世紀	且弥山（新彊）
『庚辛玉冊』(朱猷)	明（宣徳年間:1426～1435）	琉球（沖縄）、広南（雲南省）、倭（日本）
「普」(呉普『呉氏本草』)	魏・3世紀	羌道（甘粛省西南部・四川省西北部・青海省東部）
『別録』(陶弘景『名医別録』)	梁・452～536	武都（甘粛省）

以上2つの本草書の産地記述を比較してみると、①両本草書に引用される11世紀半ば頃までの本草書・史書では、ほぼ「山東～河西～西域」と「四川・嶺南～東南アジア」における硫黄の産出とそこからの輸入（移入）が記録されている、②明代の本草書である『庚辛玉冊』になると、東シナ海域の琉球・倭の硫黄が登場している、という2点が注目される。これらの点から、北宋以後、明までの間のいずれかの時期に日本産硫黄の中国への輸入が開始された可能性が高い[*11]。また、『本草綱目』に引用されている『庚辛玉冊』には、「今人用配消石作烽燧煙火。為軍中要物」と、当時硫黄が病気を治療する薬剤以外に火薬原料とされ、重要な軍需物資であったことが明記されているが、この軍需物資としての硫黄の記述は、上掲の11世紀半ば以前の諸本草書にはみえない。とすれば、北宋～明の間にはじめて、硫黄が従来の薬用原料としての用途以外に、火薬原料として重要軍需物資になったと推定できる。この推定は先述の宋代以後に火薬武器が実用化・一般化されるという事実となんら矛盾しない。

以上のように、中国の歴代本草書のなかの硫黄に関する記述からみても、日本産硫黄の輸出開始時期が日宋貿易期であり、それが中国における火薬原料としの大量需要を契機としていたとする上述の推定は、確度の高いものと考えられよう。ただし、従来の研究では、日本側と宋側の史料を細かくつき合わせて、日本産硫黄が輸出される契機を個別具体的に解明した研究はみあたらない。そこで、本稿では、以下に1つの事例を紹介しながら、

11――ただしそうすると、1061年成立の『本草図経』の引用文中になぜ日本が登場しないのかという疑問が残る。しかし、現時点ではこの問題に対して適切な解答を持ちあわせてはいない。後考を期したい。

その輸出のより具体的な契機・背景を考えてみたい。

◆**宋政府による日本産硫黄大量買付計画**　ここで注目したい事例は、先述の日本産硫黄関係事例の⑤として提示した1084年の『続資治通鑑長編』の記録であり、そこでは、明州（現在の寧波）の官僚が、官員の管轄のもとに日本に5組（綱）の商人を派遣して、各組10万斤ずつ、計50万斤（約300トン）の硫黄を購入しようとする計画を上奏し、それが裁可されたことが記されている。この記録は従来の諸研究においても紹介されているものであり、とくに新発見の記録というわけではない。ただ本稿では、この事例に対応すると思われる日本側の記録が存在するという点を新たに付け加えて、日本産硫黄の輸出の背景をより具体化してみたい。

その対応する日本側史料とは、12世紀に編纂された行政文書文例集である『朝野群載』巻5所収の応徳2（1085）年10月29日付の「陣定文」である。ここでいう陣定文とは、内裏の近衛陣でおこなわれる大臣・大中納言・参議らによる国政会議（陣定）の議事録であり、問題の陣定文では、九州（博多）に来航した中国海商の滞在・交易の可否が話しあわれている。この1085年の陣定文でとくに注目されるのは、5人の中国海商の名前が記されている点である。およそ当時の陣定において中国海商の来航が報告される場合には、その貿易船の代表者である綱首（船長）クラスの1名の姓名のみが記録されるのが一般的である。とすれば、問題の陣定文では、5人の綱首に率いられた5艘の貿易船の来航が記録されている可能性が高い。ここであらためて、上記の『続資治通鑑長編』の記事をみると、そこには1組（綱）あたり10万斤ずつ、合計50万斤の日本産硫黄買付計画が記されており、この計画は5組＝5艘の硫黄買付船を日本に派遣するというものであったと考えられる。そうすると、この『続資治通鑑長編』の記録時期と問題の陣定文にみえる海商たちの来日時期の1年数ヶ月という時間差を考えても、1084年に決定された宋政府による日本産硫黄の大量買付計画は実行に移され、その計画にもとづいて日本に派遣された中国海商たちの貿易船の来航が問題の陣定文に記録されていると推測されるのである。

それでは、なぜ宋政府は、この1084年という時点で日本産硫黄の大量買付計画を立案・実行したのであろうか。私は、この計画の最も重要な契機は、当時の宋と西夏の国際関係にあると考える。この硫黄買付計画前後の両国関係を概観すると、1067綏州事件等発生＜対立＞→1072熙寧和議成立＜和平＞→1081霊武の役発生＜対立＞→1086元祐和議交渉開始＜和平＞→1095元祐和議交渉決裂＜対立＞というように、対立と和平の時期を繰り返しており、問題の1084年は、霊武の役以来の両国が対立していた時期にあたるこ

とがわかる。そして、このような対立の時期にあって、『続資治通鑑長編』巻336,元豊7(1084)年1月甲寅条に神宗皇帝のある詔が記録されていることが注目される。

この神宗皇帝の詔は、当時蘭州において西夏軍と戦っていた李憲に出されたものであり、この詔の末尾で神宗は、弓箭および火薬兵器である「火砲箭」の100万有余の大量配備を命じている。そうすると、この神宗皇帝の詔の出された時期と日本産硫黄の大量買付計画の立案時期が近接していることからして、1084年の宋政府による日本産硫黄大量買付計画の直接的契機は、西夏の侵寇に対する火薬武器の原料調達にある可能性がきわめて高いと考えられる。そしてここから、日本産硫黄が宋において火薬原料として使用されていたという上述の推定がよりいっそう確実になり、さらに、その硫黄でつくられた火薬兵器が対西夏戦などの戦闘に実際に配備されていたことが推測されるのである。

◆宋への硫黄輸出と日本列島南方の島嶼　日宋貿易における日本産硫黄の輸出問題にかかわって、つぎに日本国内における硫黄の産地とその輸出港までの国内流通ルートの問題を考えてみたい。

上掲硫黄関係記事②の藤原明衡『新猿楽記』の記述において、架空の大商人八郎真人が取り扱った硫黄は、「貴賀之島」産と考えられるが、この「貴賀之島」とは鹿児島の南方約80キロメートルに浮かぶ硫黄島のことと考えられている。硫黄島は周囲約14.5キロメートルの活火山の島であり、1960年代前半まで実際に硫黄の採掘がおこなわれていた。「鬼界島」とも呼ばれたこの島で硫黄が商品として古くから採掘されていたことは、『平家物語』巻3,「有王」の段にみえる、反平氏の陰謀が露見してこの島に流罪となった俊寛僧都をめぐる一節からうかがうことができる。そこでは、『平家物語』の舞台となっている12世紀後半の硫黄島で、住人が採掘した硫黄を「九国」(九州本土)からやってくる商人たちが交易していたことが語られている。さらに、同書の巻2,「康頼祝言」では、俊寛とともにこの鬼界島に流罪となった平康頼のもとに、その舅である平教盛が領有する肥前国鹿瀬庄(現佐賀市嘉瀬町一帯)から衣服や食料が送られていたと述べられている。するとこれらの叙述から、12世紀末には、硫黄島→(薩摩)→肥前という九州西海岸の国内航路・交易ルートがすでに存在していた可能性が高い。そして、同書,巻3,「少将都帰」で、流罪を赦免になって鬼界島から都に向かった平康頼と丹波成経が、肥前国鹿瀬庄を経由して備前児島に到着したとされていることから、肥前鹿瀬庄から備前児島に向かう途中でほぼまちがいなく博多に停泊したのではないかと考えられる。そうすると、硫黄島(鬼界島)で採集された硫黄は、このような九州西海岸ルートをたどって、当時最大の対宋貿易港であ

る博多に集積され、そこで宋海商船に積み込まれたと考えるのがもっとも妥当であろう。ちなみにこのような航路は、1417年に朝鮮の申叔舟によって編纂された『海東諸国紀』所載の「日本国西海道九州之図」に、薩南諸島から博多の住吉津にいたる航路が記入されている点をみても、首肯できるルートであろう。

以上のように、日宋貿易において日本産の硫黄は、九州南方の小さな火山島から中国大陸へと東シナ海をまたぐ流通ルートを運ばれていた。そしてそれは中国で火薬原料となり、その火薬は北方や西方の異民族との実戦で使用されていたのである。

(2) アジア西部海域における硫黄

◆イラン史料にみえる硫黄　13世紀ペルシャの著名な詩人・旅行家であるサアディーの文学作品『薔薇園（グリスターン）』(1258年成立）の第3章,物語21には、硫黄貿易をめぐるつぎのような興味深い挿話がみえる[*12]。

サアディーはあるとき、ペルシャ湾に浮かぶキーシ島でひとりの年老いた商人に出会い、一夜を語り明かした。商人は、自分の商売の様子やこれまでの商用の旅にまつわるさまざまな話を聞かせてくれた。その話のなかで商人は、もう一度だけ商用の旅に出かけ、それを最後に引退したいと語った。そこでサアディーが、その最後の旅の計画はどのようなものか尋ねると、商人は「ペルシャ産の硫黄を支那へ持っていきたい。支那では値がよいということである」と語ったという。

◆海域アジアと「硫黄の道」　この史料からは、13世紀半ば頃のアジア西部海域からも中国へ硫黄が確実に流入していたことがわかる[*13]。そしてこの時期は、はるかに離れたアジア東部海域の日本からも硫黄が中国に大量に流入していたまさにその時期である。そうすると、宋代以降の中国は、アジアの海域ルートを通じて東西から大量の硫黄を吸収していたと推測できる[*14]。このような推測が認められるとすれば、宋代そしておそらくはつ

12――サアディー（蒲生礼一訳)『東洋文庫12 薔薇園（グリスターン）イラン中世の教養物語』(平凡社, 1964) p.412。

13――上掲『証類本草』所引の『太清服練霊砂法』にも、硫黄産地として「波斯国」がみえる。ただ、これが「ペルシャ」を指すとしても、『太清服練霊砂法』の成立年代が不明であるので、どの時代の状況を述べているのか特定はできない。

14――ただし、13世紀末に元朝使節団の一員としてカンボジアを訪れた周達観『真臘風土記』の「欲得唐貨」項に硫黄がみえるように、一部中国から輸出された硫黄もあった。なお、この部分では「硫黄・焔硝」と並べて記載されており、中国周辺への火薬技術の伝播を考えるうえでも興味深い記録である。

ぎの元代においても、まさに「硫黄の道Sulfur Road」とでも呼ぶべき、東は日本列島、西はペルシャ湾岸から中国を目指し、広大な海域をつなぐ、恒常的な硫黄の流通ルートが存在していたと考えられる。

ところで、最近、[Sun Laichen 2006] により、前近代のアジア軍事史に関する新たな構想が提示されている。彼によれば、1390年から1683年にかけての東部アジア地域（中国・朝鮮・日本・東南アジア・東北インド）では、中国起源の火器技術を中軸とする第1波の時代（1380～1511年頃）とヨーロッパにより改良された火器技術が波及した第2波の時代（1511～1683年頃）を経ながら、きわめて創造的・革新的な火器技術が展開していたとされる。そしてその火器技術は、アジア史全体の展開においてきわめて重要な役割を演じていたとされ、この時期を東部アジアにおける「火器の時代The Age of Gunpowder」と呼ぶべきことを提唱する。このスン・ライチェンの構想を本稿の「硫黄の道」の議論とつなげると、彼の主張する14世紀末以降の「火器の時代」の前提として、その火器の重要な原料である硫黄を大規模かつ恒常的に確保することのできる流通システムが確立されていなければならない。すなわち、この「火器の時代」を準備し、その展開を支えたのが、11～13世紀頃に形成された、広大な海域をつなぐ「硫黄の道」であったのである。

おわりに

本稿が検討の対象とした9世紀から14世紀前半頃の日本列島史においては、たしかに「蒙古襲来」という国際的大事件なども突発的に起こってはいる。とはいえ、それ以前の「遣唐使」の時代やそれ以後の「遣明船」・「倭寇」の時代と比べると、この時期は、列島とアジア諸地域との交流が比較的希薄な時代というイメージを一般に持たれているのではなかろうか。しかし実際には、本稿でこれまで述べてきたように、それは、大陸との頻繁な貿易船の往来を通じて人・物・情報などが盛んに交流し、「遣唐使」の時代よりもはるかに海域交流の規模や裾野が広がった時代であった。そして、その海域交流の拡大のなかで、日本列島の南方と北方では、つぎの時代の琉球王国や近世的アイヌ文化の成立が着々と準備されていたのである。

本稿の時代に続く14世紀後半の中国では、明朝の成立にともない、それまでの市舶司を要とする比較的ゆるい貿易の統制・管理体制から、海禁＝朝貢システムを機軸とするき

わめて限定された貿易体制にシフトする。そしてこの動きが、その体制から排除された倭寇を生みだすなど、日本列島とアジア諸地域とのかかわり方にも大きな変化をもたらし、列島をとりまくアジア海域史は新たな時代へと入っていくのである。

［やまうちしんじ・大阪大学大学院文学研究科助手］

［参考文献］

相田二郎1982『蒙古襲来の研究 増補版』吉川弘文館
青森県市浦村（編）2004『中世十三湊の世界 よみがえる北の港湾都市』新人物往来社
青山公亮1955『明治大学文学部研究報告東洋史第3冊 日麗交渉史の研究』明治大学文学部
朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝（編）1987『日本社会史1 列島内外の交通と国家』岩波書店
安里　進2003「琉球王国の形成と東アジア」豊見山和行（編）『日本の時代史18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館
安里　進2004「琉球王国形成の新展望」小野正敏・五味文彦・萩原三雄（編）『考古学と中世史研究1 中世の系譜 東と西、北と南の世界』高志書店
天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦（編）2006『北方世界の交流と変容　中世の北東アジアと日本列島』山川出版社
網野善彦1974『日本の歴史10 蒙古襲来』小学館
池内　宏1931『元寇の新研究』東洋文庫
池田榮史2006a「古代末～中世の奄美諸島――最近の考古学的成果を踏まえた展望――」吉岡康暢先生古希記念論集刊行会（編）『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房
池田榮史2006b「カムィヤキ（類須恵器）」小野正敏・萩原三雄（編）『鎌倉時代の考古学』高志書院
石井正敏1988「9世紀の日本・唐・新羅三国間貿易について」『歴史と地理』394
石井正敏・川越泰博（編）1996『増補改訂 日中・日朝関係研究文献目録』国書刊行会
入間田宣夫・豊見山和行2002『日本の中世5 北の平泉,南の琉球』中央公論新社
榎本淳一1991「『小右記』に見える「渡海制」について――律令国家の対外方針とその変質――」山中裕（編）『摂関時代と古記録』吉川弘文館
榎本　渉2001a「宋代の「日本商人」の再検討」『史学雑誌』110-2
榎本　渉2001b「順帝朝前半期における日元交通」『日本歴史』640
榎本　渉2001c「日本遠征以後における元朝の倭船対策」『日本史研究』470
榎本　渉2001d「明州市舶司と東シナ海交易圏」『歴史学研究』756
榎本　渉2002a「元末内乱期の日元交通」『東洋学報』84-1
榎本　渉2002b「日本史研究における南宋・元代」『史滴』24
榎本　渡2006「宋代市舶司貿易にたずさわる人々」歴史学研究会（編）『シリーズ港町の世界史3港町

に生きる』青木書店
Enomoto Wataru 2003 "Updates on Song History Studies in Japan: The History of Japan-Song Relations." *Journal of Song-Yuan Studies* 33.
榎森　進2001「アイヌ民族の去就（北奥からカラフトまで）——周辺民族との「交易」の視点から」網野善彦・石井進（編）『北から見直す日本史 上之国勝山館跡と夷王山墳墓群からみえるもの』大和書房
榎森　進2003「北東アジアから見たアイヌ」菊地勇夫編『日本の時代史19 蝦夷島と北方世界』吉川弘文館
王　曽瑜1983『宋朝兵制初探』（中華書局）
大石直正1980「外が浜・夷島考」関晃先生還暦記念会（編）『関晃先生還暦記念 日本古代史研究』吉川弘文館
大石直正1990「北の海の武士団・安藤氏」網野善彦・大林太良・谷川健一・宮田登・森浩一（編）『海と列島文化1 日本海と北国文化』小学館
大石直正2001『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館
大石直正・高良倉吉・高橋公明2001『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』講談社
大庭康時1999「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』448
大庭康時2001「博多綱首の時代—考古資料から見た住蕃貿易と博多—」『歴史学研究』756
小川光彦2002「水中考古学と宋元代史研究」『史滴』24
奥村周司1985「医師要請事件にみる高麗文宗朝の対日姿勢」『朝鮮学報』117
海津一朗1994『中世の変革と徳政』吉川弘文館
海津一朗1998『歴史文化ライブラリー32 蒙古襲来 対外戦争の社会史』吉川弘文館
海保嶺夫1996『講談社選書メチエ69 エゾの歴史 北の人びとと「日本」』講談社
上川通夫2006a「日本中世仏教の成立」『日本史研究』522
上川通夫2006b「平安期の仏教と対外関係」『歴史評論』680
亀井明徳1988『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版
亀井明徳1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11
亀井明徳1995「日宋貿易関係の展開」朝尾直弘他（編）『岩波講座 日本歴史6 古代5』岩波書店
川添昭二1975『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版
川添昭二（編）1988『よみがえる中世1 東アジアの国際都市 博多』平凡社
河添房江2005『源氏物語時空論』東京大学出版会
菊地勇夫（編）2003『日本の時代史19 蝦夷島と北方世界』吉川弘文館
菊池徹夫・福田豊彦（編）1989『よみがえる中世4 北の中世 津軽・北海道』平凡社
菊池俊彦・鈴木靖民・蓑島栄紀2006「古代史の舞台 北海道」上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦（編）『列島の古代史 ひと・もの・こと1 古代史の舞台』岩波書店
木下尚子2003「貝交易と国家形成—9世紀から13世紀を対象に—」木下尚子（編）『平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書　先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—（改訂版）』熊本大学文学部
権　悳永2005『在唐新羅人社会研究』一潮閣（ソウル）

小葉田淳1976「中世における硫黄の外国貿易と産出」同『金銀貿易史の研究』 法政大学出版局
五味文彦1988「日宋貿易と奥州の世界」『歴史と地理』397
斉藤利夫1999「北緯四〇度以北の十～十二世紀」入間田宣夫・小林真人・斉藤利男（編）『北の内海世界 北奥羽・蝦夷ヶ島と地域諸集団』山川出版社
佐伯弘次2003『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社
杉山正明1995『朝日選書525 クビライの挑戦 モンゴル海上帝国への道』朝日新聞社
杉山正明2003「モンゴル時代における日本」近藤成一（編）『日本の時代史8 モンゴルの襲来』吉川弘文館
鈴木琢也2006「北日本における古代末期の北方交易」『歴史評論』678
鈴木靖民1987「南島人の来朝をめぐる基礎的考察」田村円澄先生古希記念委員会（編）『田村円澄先生古希記念 東アジアと日本 歴史編』吉川弘文館
鈴木康之2006「滑石製石鍋の流通と消費」小野正敏・萩原三雄（編）『鎌倉時代の考古学』高志書院
Sun Laichen（中島楽章訳）2006「東部アジアにおける火器の時代:1390-1683」『九州大学東洋史論集』34
石　曉軍1985「宋代従日本進口的主要商品及其用途」中国中日関係史研究会（編）『中日関係史論文集1 従徐福到黄遵憲』時事出版社
関　周一1994「中世「対外関係史」研究の動向と課題」『史境』28
瀬野精一郎1975『鎮西御家人の研究』吉川弘文館
曽我部静雄1949『日宋金貨幣交流史』宝文館
対外関係史総合年表編集委員会（編）1999『対外関係史総合年表』吉川弘文館
髙梨　修2005『ものが語る歴史10 ヤコウガイの考古学』同成社
髙梨　修2006「古代～中世におけるヤコウガイの流通」小野正敏・萩原三雄（編）『鎌倉時代の考古学』高志書院
田島　公1993「日本、中国・朝鮮対外交流史年表 ——大宝元年～文治元年——」橿原考古学研究所附属博物館（編）『貿易陶磁 ——奈良・平安の中国陶磁——』臨川書店
田島　公1995「大宰府鴻臚館の終焉 ——八世紀～十一世紀の対外交易システムの解明——」『日本史研究』389
田中健夫2003『対外関係史研究のあゆみ』吉川弘文館
田中俊明2003「アジア海域の新羅人 ——九世紀を中心に——」京都女子大学東洋史研究室（編）『京都女子大学研究叢刊39 東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学
田中史生2002「揺らぐ「一国史」と対外関係史研究」『歴史評論』626
田中史生2005「7～11世紀の奄美・沖縄諸島と国際社会 ——交流が生み出す地域——」『関東学院大学経済学部総合学術論叢 自然・人間・社会』38
豊見山和行（編）2003『日本の時代史18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館
中村和之1997「十三～十六世紀の環日本海地域とアイヌ」大隅和雄・村井章介（編）『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社
中村和之2004「中世における北方からの人の流れとその変動 ——白主土城をめぐって——」『歴史と地理』580
永山修一1993「キカイガシマ・イオウガシマ考」笹山晴生先生還暦記念会（編）『日本律令制論集 下』

吉川弘文館
永山修一2004「古代・中世併行期の奄美」『現代のエスプリ』別冊（奄美 復帰50年 ヤマトとナハのはざまで）
南　基鶴1996『蒙古襲来と鎌倉幕府』臨川書店
南　基鶴（村井章介訳）2003「高麗と日本の相互認識」荒野泰典（研究代表）『平成12～平成14年度科研成果報告書 グローバリゼーションの歴史的前提に関する学際的研究』立教大学文学部
ニーダム，ジョゼフ1984『中国科学の流れ』（思索社）
バートン，ブルース2001『NHKブックス922 国境の誕生 大宰府から見た日本の原形』
橋本　雄2003「中世日本対外関係史の論点」『歴史評論』642
旗田　巍1965『中公新書80 元寇 蒙古帝国の内部事情』中央公論社
服部英雄2005「日宋貿易の実態 ——「諸国」来着の異客たちと、チャイナタウン「唐房」——」『＜九州大学21世紀COEプログラム＞東アジアと日本 ——交流と変容』2
濱田耕策2002『新羅国史の研究 ——東アジア史の視点から——』吉川弘文館
林　文理1998「「博多綱首」の歴史的位置 ——博多における権門貿易——」大阪大学日本史研究室（編）『古代中世の社会と国家』清文堂出版
原　美和子1999「宋代東アジアにおける海商の仲間関係と情報網」『歴史評論』592
原　美和子2006「宋代海商の活動に関する一試論 ——日本・高麗および日本・遼（契丹）通交をめぐって——」小野正敏・五味文彦・萩原三雄（編）『考古学と中世史研究3 中世の対外交流 場・ひと・技術』
文化広報部文化財管理局（編）1988『新安海底遺物 綜合篇』同和出版公社（ソウル）
保立道久2004a『シリーズ民族を問う3 黄金国家 東アジアと平安日本』青木書店
保立道久2004b『歴史学をみつめ直す 封建制概念の放棄』校倉書房
前川　要・十三湊フォーラム実行委員会（編）2006『考古学リーダー7 十三湊遺跡～国史跡指定記念フォーラム～』六一書房
三浦圭介・小口雅史・斉藤利男2006『北の防御性集落と激動の時代』同成社
皆川雅樹2005「古代「対外関係」史研究の行方」『歴史評論』667
皆川雅樹2006「平安期の「唐物」研究と「東アジア」」『歴史評論』680
蓑島栄紀2006「北海道・津軽の古代社会と交流」熊田亮介・坂井秀弥（編）『日本海域歴史大系2 古代篇Ⅱ』清文堂出版
村井章介1988『アジアのなかの中世日本』校倉書房
村井章介1997「中世国家の境界と琉球・蝦夷」村井章介・佐藤信・吉田伸之（編）『境界の日本史』山川出版社
村井章介1999「鬼界が島考 ——中世国家の西境——」『別府大学アジア歴史文化研究所報』17
村井章介2003「日元交通と禅律文化」村井章介（編）『日本の時代史10 南北朝の動乱』吉川弘文館
村井章介2005「寺社造営料唐船を見直す ——貿易・文化交流・沈船」歴史学研究会（編）『シリーズ港町の世界史1 港町と海域世界』青木書店
村井章介2006『日本史リブレット28 境界をまたぐ人びと』山川出版社
村井章介・佐藤信・吉田伸之（編）1997『境界の日本史』山川出版社

村井章介・斉藤利男・小口雅史（編）2002『北の環日本海世界 書きかえられる津軽安藤氏』山川出版社
森　克己1948『日宋貿易の研究』国立書院（1975国書刊行会より新訂版）
森　克己1950『日宋文化交流の諸問題』刀江書院（1975国書刊行会より増補版）
森　克己1975a『森克己著作選集2 続日宋貿易の研究』国書刊行会
森　克己1975b『森克己著作選集3 続々日宋貿易の研究』国書刊行会
森　公章2002「劉琨と陳詠 ——来日宋商人の様態——」『白山史学』38
柳原敏昭1999「中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論」『日本史研究』448
柳原敏昭2004「中世日本の北と南」歴史学研究会・日本史研究会（編）『日本史講座4 中世社会の構造』東京大学出版会
山内晋次2002「日宋貿易の展開」加藤友康（編）『日本の時代史6 摂関政治と王朝文化』吉川弘文館
山内晋次2003『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館
山内晋次2006「9～13世紀の日中貿易史をめぐる日本史料」『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号（文献資料学の新たな可能性）
山崎覚士2002「未完の海上国家 ——呉越国の試み——」『古代文化』54-2
山里純一1999『古代日本と南島の交流』吉川弘文館
横内裕人2002「高麗続蔵経と中世日本 ——院政期の東アジア世界観——」『仏教史学研究』45-1
横内裕人2006「自己認識としての顕密体制と「東アジア」」『日本史研究』522
吉岡康暢2002「南島の中世須恵器 ——中世初期環東アジア海域の陶芸交流——」『国立歴史民俗博物館研究報告』94
吉田光邦1967「宋元の軍事技術」薮内清編『宋元時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所）
四日市康博2002「鷹島海底遺跡に見る元寇研究の可能性 ——元寇遺物実見報告——」『史滴』24
李　炳魯1993「9世紀初期における「環シナ海貿易圏」の考察——張保皐と対日交易を中心として——」『神戸大学史学年報』8
李　　領1999『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会
渡邊　誠2002「平安中期、公貿易下の取引形態と唐物使」『史学研究』237
渡邊　誠2003「平安中期貿易管理の基本構造」『日本史研究』489
渡邊　誠2005「平安期の貿易決済をめぐる陸奥と大宰府」『九州史学』140

A Review of the Periodization of Southeast Asian Medieval/Early Modern History, in Comparison with That of Northeast Asia

Momoki Shiro and Hasuda Takashi

1. Framework of Comparison

This paper aims at roughly reviewing the periodization of Southeast Asia from the 9th century to the mid-19th century[*1] in comparison with that of Japan, and sometimes of Korea and China (usually called East Asia generically, but the authors of this paper prefer the term Northeast Asia, in some cases inclined to regard southern China as part of Southeast Asia[*2]), mainly focusing on the common features of East Eurasian rimlands. Southeast Asianists, including scholars outside Southeast Asia, often pay attention to common features or the entire composition of the region. Generally speaking, however, Southeast Asian historical studies are indifferent to the periodization of the regional history. Serious challenges to the ahistorical dichotomy of Ancient/Modern or Traditional/Modern Southeast Asia have only recently appeared, despite the early proposition of Benda (1962). On the contrary, the historiography of Northeast Asia, led mostly by scholars in the region, is often nation-state oriented. But it is more conscious of periodization, whether it is done to trace negative "pre-modern" or "feudal" pasts, or to find positive "premises" or "embryos" of modernity. There are ample arguments about continuities/changes among various historical stages, and standards of periodization as well. For this reason, Northeast Asian and Southeast Asian studies can be supplementary to each other.

Nevertheless, the scope of Southeast Asianists toward the northern direction usually cov-

1 It is only due to the interest of this workshop that the earlier phases are omitted. Comparisons of the metal ages and the state formation, for instance, will also be fruitful.

2 To refer generically to the countries of China, Korea, Japan, and Vietnam, the term "the Sinic World" will be employed in this paper, while China and all its adjacent areas (including North and Central Asia) will be referred to generically as East Eurasia, in spite of the term "East Asia", which is favoured by contemporary social scientists and politicians.

ers only China, while peripheral areas of Northeast Asia like the Korean Peninsula and the Japanese Archipelago are often overlooked. Most Japanologists and Koreanists in their turn are far less interested in Southeast Asia than in China. In this context, Lieberman's comparisons (Lieberman 1999; 2003) between mainland Southeast Asia and Japan, mainly concerning the major steps of state consolidation, are quite challenging. This paper is also intended to a comparison of East Eurasian rimlands. However, the authors will show slightly different viewpoints from Lieberman's brilliant comparative analysis. First, this paper refers more often to Chinese history. This requires the authors to deal with some general trends and center-periphery relations in East Eurasia, along with reviewing Lieberman's state-oriented comparisons. Second, as much attention will be paid to peripheral/frontier areas in respective states or sub-regions as to centers of the state consolidation. Third, this paper will refer to more Japanese literature than to Western literature. The time period will be divided into three stages; from the 9th or 10th century to the 14th century, from the 15th century to the 17th century, and from the late 17th century to the mid-19th century[*3].

2. From the 9th or 10th Century to the 14th Century

2.1. Criticisms of Conventional Historiographies

In the historiography of Southeast Asia, Cœdès's periodization of the "ancient" history of the "Indianized states," which was thought to have continued from the first centuries A.D. to the 13th century (Cœdès 1964, 1968), was criticized from many angles in the last three decades[*4]. In this process, many works published in English dealt with the evolution of Southeast Asian civilisation and polities from the 9th or 10th to the 14th century. K. R. Hall (1985) examined the development of maritime trade networks till the 14th century. The consolidation of mandala-like "states" in the 9th to the 14th centuries was discussed in Marr & Milner (1986). The similar time period was often regarded as the "classical period" of Southeast Asian countries (Aung-Thwin 1996). Based on these

3 The latter two stages will be examined mainly based on earlier reviews written by Hasuda (2003, 2004).

4 A general view is shown in Tarling (ed.1992).

works, Lieberman (2003) described the establishment of "charter states" on the mainland during this period.

Japanese scholars have also paid attention to the 9th or 10th century to criticise Cœdès's framework[*5]. According to Ishii & Sakurai (1985), the "medieval" history of Southeast Asia started in the 10th century following the development of the maritime trade mainly caused by the evolution of the Chinese state and society (the "Tang-Sung Transition"). The "13th-Century crisis" of Cœdès can be regarded as the final collapse of ancient states which could not enhance trade. Sakurai found a fundamental change in the fact that "historical circles" (a concept like mandala) till the 8th century left little historical memories of later ones (Sakurai 2001).

In Northeast Asia, recent academic criticism has been trying to deconstruct deeply-rooted linear nation-state-oriented historiography in every country in the region. This criticism often requires a change in the standards of periodizaiton, and sometimes to change periodization itself[*6].

In the case of Japan, the period from the 9th or 10th to the 14th centuries is usually treated as the end of the ancient period and the beginning of the Middle Ages.[*7] The ancient state and society of Japan which had been established in the 8th century began to change after the Heian (Kyoto) Capital was established in 794. The Tang-modeled political/administrative/economic systems were replaced after the 10th century, first with aristocratic systems ("*Ocho-Kokka*" or oligarchy of aristocrats in the Kinai region and "*Insei*" or senior emperor's government), and later *samurai* warrior systems (*bakufu* or shogunate). Instead of a hybrid culture before the 9th century, a "National" mode of culture emerged, as represented by the literature written in *kana* characters. The "early medieval pe-

---

5 For the general trend, see *Iwanami History of Southeast Asia* vols. I, II, and the extra volume (2001-3).

6 For instance, see Arano, Ishii and Murai (1992) for Japan, Yi Taejin (1989→2000) for Korea, and Miyajima (1994) for early modern East Asia.

7 Recent research trends of Japanese history are shown in comprehensive histories like *Iwanami History of Japan* (1993-6, 25 vols.) and Rekishigaku Kenkyu-kai & Nihonshi Kenkyu-kai (eds. 2003, 10 vols.).

8 According to the conventional Tokyo-based historiography (including that of the "Post-War Historiography" school led by Ishimoda Tadashi 〈1912-86〉, a school which developed after the Second World War under the strong influence of Marxist theories), the Middle Ages began with the rise of the *samurai* class and the establishment of the *zaichi ryosyu* system, or the rule of local societies by *samurai*. High school textbooks usually wrote that the Middle Ages began at the end of the 12th century with the establishment of the Kamakura Shogunate. However, recent scholarship (led by Osaka- and Kyoto-based scholars such as Kuroda Toshio 〈1926-93〉) regard the *Insei* (senior emperor's government) and *shoen* systems (private

riod" is thought to have started in the 11th or 12th century (and ended in the 14th century)[*8]. These changes (especially those led by the *samurai* class) were usually regarded as internal development after the diplomatic relationships with Tang and Silla (Korea) were abandoned. However, recent research of this period[*9], which does not regard *samurai* lordship as the only evolutionary engine of medieval Japan, tends to pay more attention to international backgrounds like developing maritime trade, cultural exchange, and world views. Conventional capital-centric historiography usually neglected peripheral areas of the Japanese Archipelago. However, the research on maritime trade, often conducted by archaeologists, clarified the striking evolution that took place in the Ryukyu Islands in the south and the region of *Emishi* or "barbarians" in the north (present-day northern Tohoku, Hokkaido and beyond)[*10].

Though the disasters caused by foreign invaders (the Mongols and the Japanese pirates) have been much studied, the evolution of the state and society[*11] of Koryo (918-1392) on the Korean Peninsula was usually isolated in the conventional historiography of Asia. Despite frequent reference to the impact of the "Tang-Sung Transition" (the fundamental change of Chinese state and

---

estates with multi-layered proprietorship), both established at the end of the 11th century in the process of modification of Tang-modeled systems, as the start of medieval history. They treat the "early medieval era" (until the 14th century) not as the transitional period from the ancient emperor (*Tenno*)-based period to the medieval *samurai*-centric period, but as a period of loose federation/competition of *kenmons* or power/authority groups. The *kenmons* were divided into three groups: "self-medievalised" emperors/aristocrats (mainly of administrative function), also "self-medievalised" Buddhist/Shinto powers (of religious function), and newly emerged *Buke* or *samurais* (including the Heishi family in the 11th century) (of military function). Although the major functions of the three groups were different from each other, every *kenmon* had its own political apparatus, economic basis (mainly composed of *shoen* estates), and military forces (many *samurais* served emperors/aristocrats and religious powers). See Kuroda (1994a).

9 Scholars like Amino Yoshihiko 〈1928-2004〉, Ishii Susumu 〈1931-2001〉, and especially Murai Shosuke (1988) represent this new trend.

10 A new study of Ryukyu has been led by Takara Kurayoshi (see Takara 1998). The recent achievements of the research of "Northern History" (the history of northern Tohoku, Hokkaido, and beyond) were shown in Kikuchi (ed. 2003).

11 Japanese scholars pay some attention to the regional background of Koryo history, like the simultaneous rise of military families in Koryo and Japan in the 12th century and the incorporation of the Koryo royal family into that of the Mongols in the late-Koryo state.

12 The concept of the Tang-Sung Transition was first proposed by Naito Konan 〈1866-1934〉, the first professor of Chinese History at Kyoto University. Based on this concept, a famous periodization dispute occurred after the Second World War between the "*Rekiken*" Marxist school (Rekishigaku Kenkyukai, a leading group of the "Post-War Historiography") which

society which took place from the late-Tang to the Sung Period[*12]), the role and influence of the Chinese state and society in East Eurasian history was examined less intensively in the Sung-Yuan Period (or the period of conquering dynasties) than in the Tang Period (and the Ming-Qing Period). Yet, these conventions have also been challenged by recent criticisms.

2.2. Comparable Features and Experiences

Though there were few direct relations between the two regions in this period, Southeast Asia and Northeast Asia had many comparable features and experiences.

2.2.1. Agrarian Society

Agricultural reclamation advanced greatly in "dry areas" in Southeast Asia (Fukui 1999) and the core areas of Northeast Asian countries (lowlands North and Central China, South Korea, the islands of Honshu, Kyushu, and Shikoku, and so forth). In both regions, the technology of agricultural production was still primitive[*13] and the reclamation usually took place in inland topography such as using terraces, basins or plateaus along small rivers. Only in a few cases in Eastern Eurasia , reclamation of lands along the mainstream of big rivers, coastal lowlands and deltaic areas started, like in China where a shortage of arable land became clear in traditional core areas and in northern Vietnam (Dai Viet) where inland plains between mountainous areas and deltas were too narrow[*14]. The primary engine of reclamation and production appears to have been powerful lords or land-

---

thought a feudal society was established after the transition, and the Kyoto School which regarded Chinese society after the Sung as an "early modern" one. About periodization disputes in Chinese history, see Tanigawa (ed. 1993).

13 ——— For example, fallowing was still popular in Japan and Koryo.

14 ——— Even in the lower Yangtze region in China, the center of agricultural production during the Sung-Yuan Period was still the mid-river valleys of the southern branches of the Yangtze River. The Yangtze Delta itself was fully reclaimed only in the early-Ming Period (Watabe & Sakurai eds. 1984). Concerning the reclamation of the Red River Delta in northern Vietnam, see Sakurai n.d.

15 ——— Not a few scholars regarded this period as one of "slavery". For instance, the *Yenoko* and *rodo* (bondsmen) of Japanese *samurai* before the 14th century used to be regarded as domestic slaves by Marxist historians like Matsumoto Shinpachiro 〈1913-2005〉 and Nagahara Keiji 〈1922-2004〉 (Japanese Marxist historians often thought that a slavery system dominated China until the Tang Period). These bondsmen appear to be comparable with slaves in Dai Viet during the Ly-Tran Period

owners who could mobilize dependent labourers[*15] rather than small holders, whose production using primitive technology was quite unstable.

2.2.2. Commerce and Maritime Trade

The development of commerce and long-distance trade was almost a Eurasian-wide phenomenon in this period. Both intensification in centers and extension in peripheries took place, from which states[*16] and societies were influenced in various ways. Northeast Asia was deeply incorporated into international trade networks for the first time, while the core regions of Southeast Asia had already been incorporated earlier. Nevertheless, peripheral regions of Southeast Asia like the Philippines and eastern Indonesia seem to have shared signs of primitive political integration stimulated by trade with those in Northeast Asia like the Ryukyu Islands and the northern periphery of Japan[*17].

2.2.3. Family and Gender

Southeast Asia, Japan and, Korea shared features like bilateral kinship, fluid clan/family systems, and

---

(the 11th to the 14th centuries. Some Vietnamese scholars in the 1950s and 1960s argued that the slavery period lasted until the Ly-Tran Period, although the majority maintained earlier "feudalization" under the Chinese dominion. After the 1970s, the society before the 14th century was often understood with the concept of the "Asiatic Mode of Production" accompanied by a rather loose image of rule (something like a *mandala*) and dependent people in other Southeast Asian countries before the 14th century.

16 When denied the overall impact of foreign trade upon the state with a large agrarian basis, Lieberman should have paid attention to the significance of the symbolism and rituals (for which foreign luxury items were indispensable) without which political integration could not be realised and maintained. In this period, the demand of luxury items appears to have increased generally, as with the wide consumption of *Karamono* (Chinese goods) among aristocrats in Kyoto. Moreover, some trade items became strategic, like the case of Japanese sulphur exported to China.

17 Many *gusuku* (fortifications) were built in the Ryukyu Islands in this period. Among the *gusuku*-based chiefs would appear the first kings of the Ryukyuan Kingdom in the 13th century. In the case of the land of Ezo, two different processes of political integration took place. In northern Tohoku, Emishi (barbarian) lords like Abe, Kiyohara, Fujiwara and Ando appeared after the 11th century. They officially depended on the Kyoto court or Kamakura Shogunate and were gradually Japanized in a cultural sphere but monopolized northern trade networks outside the administrative system of Japan. In Hokkaido and the adjacent islands, primitive political integration was accompanied by an ethno-cultural unity, which would become the Ainu society after the 14th century.

18 Despite the ascendance of female *tennos* in ancient Japan, Japanese academism had long been bounded by patrilineal theories. However, Makino Tasumi, a historical sociologist, proposed (since the 1940s) that bilateral kinship prevailed with

a relatively high status of women before the Early Modern Era[*18]. During the 9th to 14th centuries, patrilineal systems were created artificially in the ruling class of some countries, especially those in the peripheries of the Sinic World like Japan, Koryo, and Dai Viet[*19]. In the case of China during the Tang-Sung Period, women's power and status were higher than are usually supposed (Osawa 2005). Until the Tang Period, marriage was often impermanent, and wives' status was relatively high under loose marriage/family/clan ties, partly due to the influence of nomadic people. During the Sung Period, although the stable nuclear family became dominant and wives became more dependent, a female's right of property was still approved, especially in South China.

2.2.4. Political System

---

certain legal rights of females in all rice-growing societies (including Japan, Korea, South China, and Southeast Asia) in ancient "Eastern Asia." Since the 1980s (especially after Josei-shi Sogo Kenkyukai ed. 1982 was published), Southeast Asian sociological/anthropological models like bilateral kinship, multi-household compounds, impermanent marriage, and the independent status of women were widely accepted by "Ancient" historians of Japan, while "Medieval" historians began to study how patrilineal and patriarchal "deviations" from these models occurred. Besides the artificial creation of a patrilineal system with which ruling groups tried to maintain their power and properties for generations, medieval historians of Japan are interested in the strategy of the wife who strengthened the tie with the husband and made the marriage more indissoluble in order to secure a stable life (for her and her children) at the expense of her independent status (and later her property rights). Thereafter, women's power, still quite strong as shown by Hojo Masako (who founded the Kamakura Shogunate with her husband Minamoto Yoritomo), was exhibited mainly for the sake of the patrilineal *ye* (family, household) into which she married, and to a lesser extent, for the sake of that into which she had been born. After the 14th century, the patriarchy gradually became dominant in the *ye* of aristocrats and *samurais*, with the system that the eldest son (born by the formal wife) would inherit all the properties of his *ye*, and women's rights were almost reduced to those of the mother and the widow of the patriarch. Such an *ye* model prevailed among commoners in the early modern era. Compared to the Confucianistic family model, however, Japanese *ye* retains non-patrileneal features in that one could change his/her surname after marriage or adoption, and that, in case there was no son in a family, the husband of a daughter could become the new patriarch of the *ye*.

19 It was only after the 9th century that any powerful leader outside the *Tenno* clan could by no means ascend the Japanese throne. After the Fujiwara clan controlled the throne for a century from the maternal side, the partileneal inheritance of imperial power was ensured by the senior emperor government system from the 11th century on, which was often accompanied by endogamies, through which powerful women of the ruling family were involved in the invention of patrilineal systems. Dai Viet during the Tran Period (1225-1400) also combined a senior emperor system and endogamies for the same purpose. A contrary direction can be found in the history of Southern Sung, where the Confucianistic patrilineal/patriarchal system did not work well, so that women could have their own land properties, and the throne had to be protected with a senior emperor system.

Mandala (Wolters 1982; 1999) and Lieberman's pattern A (or charter administration or solar polity) (Lieberman 2003) both emphasize such things as the absence of developed political institutions, weak central control upon local powers, and constant territorial fluctuations. Similar polycentric and fluctuating political systems can be found in Japan in the "*kenmon* system[*20]" in general and in the organization of *bushidan* or local political alliances of *samurais* in particular. This was also the case of Koryo. After a Tang-modelled centralized system declined in the 11th century, aristocrats (mainly on the maternal side of the king's family), and then military families (represented by the Choi family) seized power. After the king surrendered to the Yuan, a Mongol-modelled segmental military organization was introduced. Throughout these processes, the central government was far from stable and many localities and local powerful families were not under the direct control of the government. Even in China after the Northern Sung centralization, a loose federation of powerful military, economic, and/or religious groups dominated the empire during the Southern Sung and Yuan Periods.

2.2.5. Religion, Culture, and State Ideology

Syncretism prevailed in the entire Eastern Eurasia area. Even in China, Neo Confucianism barely achieved its first stage of advance. Tantrism, Zen, pure-land belief, and local beliefs combined with each other, both in Dai Viet during the Ly-Tran Period and in Medieval Japan[*21]. Theravada Buddhism was not yet purified in Burma, while Tantric Buddhism and Sivaism were compatible with each other in Java. Based on such syncretic religions and "classical" cultures (successfully localized

---

20 As shown in note 5, religious groups played important roles in Japanese *kenmon* system in political and economic spheres. Such was also the case of Southeast Asian "solar polities," though it is not well studied whether Southeast Asian religious powers played significant military roles, as did the Japanese religious *kenmons*.

21 For Dai Viet, see Cuong Tu Nguyen (1997). In Japan, the belief in indigenous deities (not yet organized as *Shinto*) was quite dependent of *Kenmitsu* Buddhism (in which *kenkyo* or text-based Buddhism including Zen and *mikkyo* or tantric Buddhism merged with each other), which dominated the religious life of Medieval Japan. According to Kuroda Toshio (1994b) and Taira Masayuki, the so-called "Kamakura New Buddhism" advocated by Honen, Shinran, Nichiren, and Dogen was by no means influential in their lifetimes. Their thoughts became influential in the early modern era when powerful new sects emerged and created histories which treated these priests as founders. The histories of Theravada Buddhism in Burma and Thai countries and Zen Buddhism in Dai Viet were also reconstructed (or created) in more or less similar ways in the early modern period.

imported civilisations), rulers tried to create their own imperial ideology and world order. Besides dependent chiefs and neighbouring monarchs, foreign merchants were often treated as tributary vassals (Yamauchi 2003: 195-228). Japanese *tennos* were thought to be not only *cakravartins* but also the purest beings in the world, and Japan was regarded as the divine country[*22]. The emperors of Dai Viet always claimed that the Southern Country (Dai Viet) was in equal status with the Northern Country (China). Java in the Majapahit Period, depicted in *Desawarnana* (*Nagarakertagama*), "was the most praised country in the world along with India."

2.2.6. The Fourteenth-Century General Crisis

The Eurasian-wide general crisis in the 14th century, with which the *Pax Mongolica* or a World System (Abu-Lughod 1989)[*23] collapsed, hit both mainland Southeast Asia (the fall of "charter polities")[*24] and Northeast Asia (the civil war and pirates of Japan, the Korean dynastic change caused by the Japanese pirates). Judged from the strength of Majapahit and Champa in the 14th and the early 15th centuries (Whitmore 2004), maritime Southeast Asia appears to have experienced less damage[*25]. A number of irreversible changes occurred in mainland Southeast Asia and Northeast Asia. Not only elements that had appeared after the 9th or 10th century, but also enduring systems since the "ancient" times disappeared. For this reason, the 14th century is sometimes regarded as the most important watershed in the course of pre-modern history. In Dai Viet, the "Southeast Asian" state and society were replaced with more tightly-organized "East Asian" ones (Wolters 1988). In Japan, while the dependent labour (a slavery system?) became less dominant after the 14th century, the "primitive" freedom of the people, which had been maintained until the Kamakura Period (1185-1333), was lost (Amino 1987), and a new form of dependency (a feudal system?) was about to prevail.

---

22 Such ideas could not override the popular thought that Japan was just a tiny peripheral land in the Buddhist World, which had two centers, namely India and China.

23 Concerning the "globalization" of the Mongol Era and the Mongol imperial systems, recent scholarship on Japan led by Sugiyama Masaaki (Kyoto University) should be consulted. See Sugiyama (ed. 1997), for example.

24 As already argued by Lieberman (2003), the decline of Cambodia and the rise of the Thai people, the core facts of Cœdès's "13th-Century Crisis", should be understood in the context of the 14th-Century Crisis.

25 The 14th-Century Crisis seems to have been more serious in some aspects than the 17th-Century Crisis. Why maritime Southeast Asia did not suffer requires more study.

3. From the 15th Century to the Late 17th Century

3.1. Fundamental Changes in the 16th Century?

Southeast Asia and Northeast Asia (not only China but the whole region[*26]) were tied to each other most directly and profoundly in these centuries. It was, of course, "the Age of Commerce" phenomenon that connected the two regions. However, it is not so easy to treat these centuries as a coherent period in both regions. As Lieberman points out, an apparent fundamental change occurred in the late 17th century only in maritime Southeast Asia (and in maritime Northeast Asia, too?), while a seemingly more drastic change took place in the 16th century, at least in mainland Southeast Asia and Northeast Asia. Kishimoto Mio, a specialist on early modern China, argues that East and Southeast Asia shared historical rhythms from the 16th century to the 18th Century (Kishimoto 1998). She also deals with the worldwide "Post-16th Century issues" to settle the social unrest and turmoil caused in the 16th century (Kishimoto 2001). Although she emphasizes the impact of the world trade boom in the 16th century more directly, her view apparently corresponds with Lieberman's, which is concerned with the disintegration in the mid-16th century.

In Southeast Asian historiography, the task of replacing the conventional periodization, according to which a fundamental and overall change took place after the arrival of Europeans in the 16th and 17th centuries, was almost achieved successfully through the "Age of Commerce" thesis (Reid: 1988, 1993a) and the "strange parallels" thesis (Lieberman 1999, 2003). Speaking more generally, both Asianists and global historians now understand the impact of European expansion in the early modern period as a limited one, whether they agree or disagree with the extreme arguments of Frank (1998). On this ground, reassessments of both internal dynamics and external impacts (the most important of which were caused by Europeans and the Chinese all the same) in early modern Southeast Asia are now being done, as shown in the studies of overseas Chinese and the Chinese

26 Direct contacts with Southeast Asia were first recorded in the late 14th century, both in Japan and Korea, including contacts at Peking between tributary missions from Vietnam, Ryukyu, and Choson Korea (Cho 2004; Ha 2004; Shimizu 2000-2005).

Empire (Reid (ed.) 1995; Cooke & Li (eds.) 2004; Sun & Wade (in print)). In this context, changes during the 16th century, not only in the mainland but also in the archipelago, like the decline of the Ming-centered world order[*27] and the appearance of new actors (Europeans and the Japanese) should be positioned properly.

The nation-state oriented historiographies of Northeast Asian countries after the 15th century were integrated into a regional approach under the scrutiny of global historians. In their framework, the conventional view of the period from the 15th to the 17th or 18th centuries as the "last glory" of isolated "feudal" or "traditional" states was replaced with common regional trends (e.g., state consolidation influenced to a greater extent by maritime trade). However, the political and social disorder and subsequent restoration of stability during the 16th to 17th centuries, the importance of which was acknowledged in the conventional history lesson, still seem to serve as a landmark in our new periodization. After a century of fragmentation in the end of the "late medieval period [*28]," Japan entered a new stage (the early modern era) in the 16th century with the rise of new polities of *sengoku-daimyos* and the formation of the "unifying powers" led by Oda Nobunaga, Toyotomi Hideyoshi, and finally by Tokugawa Yeyasu (the unification was completed with the *bakuhan* 〈the shogunate and feudal domains〉 system and the *sakoku* or "seclusion" system during the second quarter of the 17th century). In Korea, the transition from the early Choson Period to the late Choson Period through the turmoil caused by the invasion of Japan in the 1590s and that of the Manchus in the 1630s can be regarded as the start of the early modern period (Yoshida 1998). From China-centric or Mongol-centric viewpoints, it can be said that China already entered the early modern era during the Sung or Yuan period, but a big change did occur in Chinese society in the late Ming Period during the 16th and the early 17th centuries. Political and social order in Northeast

---

27 ——— An earlier argument of Kishimoto (1995) suggested that the efforts of the Chinese Empire from the mid-16th to the mid-18th centuries to settle the 16th century turmoil were at the same time efforts to "soften" the extremely solid system of the early Ming state. The collapse of the early Le regime (especially that of the Hong Duc Era (1470-97) in the 16th century and the "literati revival" (Taylor 1987) in the mid-17th century in northern Vietnam may also be understood in two ways simultaneously.

28 ——— According to the common historiography, Japan from the end of the 14th century to the mid-16th century is called the late medieval period, while the one hundred years of political fragmentation after the end of the 15th century is also regarded as the transition period from the medieval to the early modern eras.

Asia as a whole was restored after the mid-17th century.

Judged from the perspectives mentioned above, it is possible, either in Southeast Asia or in Northeast Asia, to regard the 15th to the 17th centuries as a single period (with a minor change during the 16th century) only when (a) we periodize this period based on the synchronic phenomenon of "the Age of Commerce," and/or (b) we treat these centuries as a long and dynamic "transitional" period between the "charter" era before the 14th century (when "classical" societies and cultures were formed) and the late early modern era (when "traditional" societies and cultures were crystallized, mainly based on what emerged during the 15th to 17th centuries). Otherwise, it is more adequate to divide these centuries into different stages. In this case, two major pictures can be drawn: (a) The first stage is the mid-14th to the early 15th centuries, and the second is the late 15th to the early 17th century, namely the "long 16th century." In this case, the former stage (which can include the 14th-century crisis) is treated as the transitional period[*29] from the charter era to the "long 16th century." (b) The first stage is the late 14th to the early 16th centuries and the next stage after the mid-16th century. In this case, the latter phase can also be linked with the period from the late 17th century onward (as Kishimoto and Lieberman have done).

3.2. Changing Frameworks

3.2.1. The Early Ming System

Intraregional and supra-regional interactions were most dynamic in the period during the 15th to 17th centuries both in Southeast and Northeast Asia. The early Ming imperial system, especially *haijin* (a maritime prohibition) combined with a tributary system, created the framework of interactions during the late 14th and the 15th centuries. The main body of the maritime prohibition, by which the government prohibited Chinese people from "going out to the sea privately," was enforced for the sake of political stability, while the imposition of the tributary system resulted from the Confucianistic fundamentalism of the Hongwu Emperor (Danjo 1997, 2006). However, because early Ming emperors also inherited much from the Yuan system, the inward-looking maritime prohibi-

29 The situation in Java may support this periodization rather than a simple discontinuity in the 14th century, because Majapahit was powerful from the 14th century until the late 15th century.

tion/tribute system functioned in expansionistic ways during the reign of Yongle (r. 1402- 24) with state-monopolized trade and the imposition of a Ming-centric world order[*30]. The fleets of Zheng-he were embarked upon no more peaceful missions of friendship than were those of Khubilai (sent to Japan, Champa, Maabar, and Java). Along with the successful recovery from the social and economic crisis in the 14th century, East Eurasian trade also developed rapidly.

The early Ming system caused two different effects in the East Eurasian rimlands (Sun & Wade in print; Murai 1988). First, trade-based polities like Malacca and Ryukyu (Shuri/Naha) developed in the maritime world as hubs of the tributary trade network. Even in peripheries like the eastern part of the Southeast Asian archipelago, Manchuria, northern Korea, and the land of Ezo (Ainus), local hubs emerged, such as Brunei and Tosaminato (the northernmost port of the Honshu Island). Second, small but strong empires developed in Choson Korea, Japan (Muromachi Shogunate), Dai Viet (the Le Dynasty), and Siam (Ayutthaya) as major vassals of the Ming. Choson Korea and Le Dai Viet (both established an administrative system of Lieberman's pattern D) obviously borrowed much from the early Ming state system and Ming-modelled firearms (Sun 2000, 2006). Japan [*31]and Siam also profited from the Ming world order, mainly through tributary trade (and trade among Ming vassals).

Trade, both maritime and inland, played important roles almost universally in the process of political consolidation and in the enhancement of rulers' power during this period[*32], although

---

30 ——— That official letters between Ryukyu and Southeast Asian countries (including polities like Ayutthaya, Malacca and Palembang), Ryukyu and Korea, and Japan and Korea were all written in classical Chinese (though letters between Muromachi Shogunate and Ryukyu were written by *hiragana*) is usually explained not only with widespread overseas Chinese networks but also with the effectiveness of the Ming world order because those letters often followed the format of Ming official documents.

31 ——— From the 6th to the 13th century, no ruler of Japan received an investiture of China. After the 10th century, even tributary missions were not sent. During the civil war in the 14th century, however, certain rulers dared to send tribute to the Ming (Prince Kaneyoshi in Kyusyu dared to receive Ming's investiture) to seek an aid of the Ming. And after the unification of the state, Ashikaga Yoshimitsu, the third ruler of Muromachi Shogunate received an investiture of the Ming (to the King of Japan) in 1404. The intention of Yoshimitsu is usually understood as trade, while the approval of the confucianist Ming Empire may have helped him establish an absolute power. After Yoshimitsu, Muromachi Shogunate conducted tributary trade with the Ming and official trade in equal status with Choson Korea, while *daimyos* and merchants in western Japan conducted tributary trade with Korea. So family, the lord of the Tsushima Islands, thrived as an intermediary between Japan and Korea.

the internal dynamics of respective polities/areas were also important. Even the small empires and those rulers were deeply involved in international trade. Dai Viet and Korea were not exceptions, despite the reluctant attitudes to commerce and trade of their rulers and the Confucianistic elites[*33]. Not only Siam but also Dai Viet expanded to subjugate port polities and trade networks. Benefiting from the increasing demand of Chinese ceramics in international markets, Dai Viet and Siam (and probably Champa and Lower Burma) produced and exported a considerable quantity of ceramics[*34] (Mikami 1988; Brown in print).

3.2.2. The Flood of Silver

China suffered military pressures from the north, and probably an economic depression in the latter half of the 15th century (Atwell 2002). However, Southeast and Northeast Asia saw an unprecedented economic boom in the 16th century, partly thanks to the Europeans. A great deal of silver flowed from Japan (after the 1530s) and Spanish America (after the 1560), mainly into China. The use of silver currency had already been introduced into China during the Yuan Period. In the 16th century, however, silver became the state standard of values of China and the measure for settlement of international/ supra-local transactions in Eastern Eurasia instead of copper cash (issued in the Sung and the Ming Periods) for the first time. In other words, silver was the first import commodity through maritime trade that directly influenced the daily lives of commoners. In the case of Korea, the Cho-

---

32 Trade did not necessarily bring about state formation in peripheral areas. In the case of the Ainus, it is not clear whether they had the potential to form their own polity or not, though a broad political integration appears to have already been possible during the 15th to 17th centuries, with powerful leaders like Koshamain in the mid-15th century and Shakushain in the mid-17th century. If such political evolution did not mean a movement of primitive state formation, it may have been partly due to the dependent trade system on Japan through which Ainu people imported necessities like rice and iron from merchants from the Honshu Island in exchange for export products like animal pelts, eagle feathers, and seaweed.

33 Dai Viet during the early Le Period (1428-1527) sent tribute missions to China almost every year. The nationalist historiography of Vietnam explains ahistorically that all tribute missions were sent to China for the purpose of national security. However, regardless of subjective intentions and a later decline of trade, such frequent tribute trade in this period must have brought about certain economic impacts. See Momoki (1999a, 1999b). Choson Korea sent tribute missions to Peking more frequently (with ginseng and marten skins), while a great deal of commodities (like cotton and printed Buddhist sutras) was exported to Japan and Ryukyu. Such trade was still important for the state and society.

34 Production of export ceramics in these countries appears to have already emerged in the late-Yuan Period, probably due to the commercial development.

son government was reluctant to use silver and exploit silver mines. However, after the Ming reinforcements brought silver to purchase war supplies during the war against Japan in the 1590s, the use of silver as a currency became popular in Korea (Sukawa 1998). Dai Viet seems to have been an exception, since the state began to use silver as the measure of state expenditure only in the 18th century (Whitmore 1983). It is not clear where the imported silver (in exchange for raw silk bound for Japan, for instance) went, although it is likely that silver was re-exported to China.

Prosperous trade accelerated the social change in the East Eurasian peripheries. A number of new focal points of trade appeared, such as Ternate and Ambon, Manila, Hirado and Nagasaki, and so forth. State formation was stimulated in Manchuria (Iwai 1996)[*35] and in the eastern part of insular Southeast Asia (Hayase 2003). A Chinatown was established in every port city in Japan, including former peripheral areas like southern Kyusyu (Nakajima 2004).

3.2.3. New Challengers

In the 16th century, the old systems in Southeast and Northeast Asia collapsed with the appearance of new actors and the flood of silver. Portuguese occupied Malacca in 1511, but they couldn't inherit the hegemony of Malacca. Subsequently, a multipolarization took place in maritime Southeast Asia. The Ming administration could no longer suppress smugglers and pirates in the China Seas. The local government of Guangdong had already been trying to admit non-tributary trade since the beginning of the 16th century. The central government had to open the port of Zhangzhou (Fujian) for Chinese merchants going abroad in the end of the 1560s before the storm of *Wako* (Japan-based pirates rather than Japanese pirates) and the rise of the Manila trade. The Ming was forced to adopt *hushi* or a "mutual trade" system instead of a rigid tributary trade system (Ueda 2005).

With the decline of oppressive old political orders came a period of "free competition" from the 16th to the early 17th centuries, when ambitious challengers emerged from the peripheries one after another. They all relied upon the power of silver and firearms. In Southeast Asia, the success of polities like Taungoo, Aceh and Mataram were so spectacular. A trans-national regionality

35 ——— A considerable portion of silver imported from Japan and Manila (via ports in Fujian and Zhejiang Provinces) was sent to the Great Wall for the supply of munitions. A part of the silver on the Great Wall in turn, flowed into Manchuria in exchange for pelts.

was formed in the China Seas (the East Asian Mediterranean) (Murai 1988, 1997; Arano, Ishii and Murai 1992). Merchant/pirate powers, often multi-ethnic, like those of Wangzhi rose there. In Manchuria, military powers in Liaodong like Li Chengliang prospered with pelt trade, while in the Ezo-land, the Kakizaki (Matsumae) family began to monopolize Japan's trade with the Ainus. In central Japan, Oda Nobunaga and Toyotomi Hideyoshi won the civil war of the "Warring States Period", thanks to their superior commercial and military bases.

These powers and polities were often tightly organized in military and administrative spheres compared with former polities. In Indianized Southeast Asia there appeared some polities which had an administrative system of Lieberman's Pattern C (Lieberman 2003), with which the area directly controlled by the central government was widened to a considerable extent. In Japan, strong control systems of retainers combined with segregation policies of *samurais* from peasants were introduced, especially by Toyotomi Hideyoshi, who demilitarized people other than *samurais* and conducted a nation-wide cadastral survey.

On the other hand, these powers and polities were more or less challenging to the political old orders and authorities. If European powers still had to compromise with existing authorities in Eastern Eurasia, Toyotomi Hideyoshi of Japan (who invaded Korea and dreamt of occupying Peking) and Nurhaci- Hong Taiji of Manchuria posed straightforward challenges to the authority of the Ming.

3.2.4. Social Changes

Features like urbanization and the development of text-oriented orthodox religions, which were regarded as typical phenomena of the Age of Commerce in Southeast Asia (Reid 1988, 1993a), were also witnessed in Northeast Asia. However, it is also important to emphasize the importance of the 16th-century change. Many of Japanese commercial and political cities like Osaka, Nagoya, and Odawara that would thrive throughout the Tokugawa Period emerged in the 16th century. New Buddhist sects, such as Jodo shinshu (one of pure-land sects), Nichiren-shu, and Soto-shu (one of the Zen sects), became independent of medieval sincretic *kenmitsu* Buddhism by the 16th century and began to represent the "early modern" Buddhism of Japan[*36]. On the other hand, Shintoism also

36 ——— All these sects were not mystic but rationalistic. Jodo shishu (mainly based among the peasants and lower class of *samurais*)

became independent of *kenmitsu* Buddhism. Neo-Confucianism advanced in China and Korea after the 16th century[*37], while the propagation of Christian Roman Catholicism was also successful in China and Japan in the late 16th century.

The change of agrarian societies in the Sinic World (Northeast Asia and northern Vietnam) from the 14th to the 17th centuries has been a major issue concerning periodization. Steady population increase was followed by intensive (often commercialized) agricultural production in the heartlands of Korea (Yi Taejin 1989) and Japan after the 14th century. The reclamation (often large-scaled) of alluvial plains along the mainstreams of big rivers and coastal areas were conducted in many places in Korea and Japan in the 16th to the 17th centuries. Large-scaled embankment systems in the Red River Delta in northern Vietnam were basically completed in the 13th to the 15th centuries, and thereafter commerce and handicrafts developed in delta villages. The reclamation of the Yangtze Delta was almost complete by the early Ming Period, and the commercialized production of cotton and silk developed there after the 16th century.

Based on such developments, earlier scholars have had a number of debates about the formation and development of "feudal" society in respective countries. While the majority thought that the change from "slavery" to "feudal" systems in Northeast Asian countries had already taken place by the 14th century, Araki Moriaki (1953, 1954)[*38] for Japan and Oyama Masaaki (1992) for China have argued that the "feudal mode of production" was established only after the 16th century. What they argued can be paraphrased with recent theories of peasant economy, which generally divide pre-capitalist agrarian societies into two stages. In the first stage, the technology of agricultural production was primitive and population was scarce. The production of smallholders was so unstable that it could not endure without the aid of powerful landlords or the government, while the large-scaled production of landlords with dependent labourers (which varied from slaves to depen-

---

challenged the old social order violently with revolts called *Ikko-ikki*. After they were suppressed by Oda Nobunaga and Toyotomi Hideyoshi, however, early modern Buddhist sects usually stood apart from secular affairs.

37 According to Yi Taejin (1989→2000), the early Ming Confucianism which influenced Korea was not Neo-Confucianism but rather a revival of the ancient Confucianism of the Han-Tang Era, which mystified the ruler's transcendental power. The ideal of the social self-discipline of subjects held by Neo-Confucianism began to prevail only after the 16th century.

38 According to Araki, the nation-wide cadastral survey by Toyotomi Hideyoshi (*Taiko kenchi*), with which previous multi-layered proprietorships were reduced to two layers, the upper one belonging to *samurais* and the lower one to peasants, was conducted in order to fix "feudal" proprietorship.

dent smallholders) was more enduring. In the second stage, technology developed but land became scarce due to population increases. Then, the production of smallholders, basically conducted by a nuclear family, became more stable (but was bound more tightly with the land), while large-scaled production with dependent labourers could no longer be advanced due to the weaker incentives of labourers (Nakamura 1977; Aoki 1995). What Araki and Koyama argued seems to have been the transition to the second stage. And the second stage, which recent Japanese scholars call "peasant society," clearly took shape in Northeast Asia by the 16th century (Miyajima 1994), partly taking advantage of the economic boom in the "long 16th century."

3.2.5. The 17th-Century General Crisis?

The unprecedented economic boom in the "Age of Commerce" was often also accompanied by unprecedented disasters. In this sense, the "Age of Commerce" was by no means a period of monotonous development. The turmoil in mainland Southeast Asia and Japan in the 16th century can be partly explained by the centrifugal tendency stimulated by the economic development in the peripheries. After the price of silver sharply decreased in East Eurasia in the mid-16th century, production of raw silk and ceramics in Japan were almost extinct, partly due to the price gap with the products imported from China (Wakita 1992, 1994). The standard of levying taxes and granting income rights to retainers in Japan changed from ligatures of copper cash to volumes of rice after the 1560s despite rapid commercial development. It can be explained as a countermeasure to the temporary vacuum of value standard caused by the flood of silver (before then, Chinese copper cash had long functioned as the value standard) (Kuroda 1999, 2005).

The "Age of Commerce" ended with the "General Crisis of the 17th Century," at least in maritime Southeast Asia, where the hegemony of the VOC was almost established (Reid 1997a; Lieberman 1995), despite strong activities of certain maritime powers like the Bugis throughout the 18th century. A crisis appears to have enveloped Northeast Asia (Atwell 1997) and northern Vietnam, as well. There, the decline of long distance trade, mainly due to the warfare in mid-century China and the decline of Japan trade at the end of the century, was accompanied by severe population pressures and agricultural overexploitation in core areas. New polities that had emerged in Southeast and Northeast Asia after the 16th century with full challenging spirits generally became bureaucratic and formalistic in the 17th century so that they could settle the liquidated society, of-

ten with strict control of trade and immigration. Merchant/pirate powers in the China Seas lost their bases in Japan due to successive policies of Japan's unifying powers (though they were still allowed to come to trade), and finally collapsed when the Zheng family in Taiwan surrendered to the Qing. Ryukyu was subdued by the Shimazu clan of the Satsuma domain. The multi-ethnic and trans-national regionality of the China Seas was dismantled.

4. From the Late 17th Century to the Early 19th Century

4.1. Dynamic Late Early Modern Histories

In a conventional East-West dichotomy, stagnant, declining, and passive features after the 18th century used to be overemphasized in any region of Asia. Indeed the revolutionary development of the West ("the Great Divergence") did not occur in the East. However, recent scholarship has paid more attention to the dynamic, developing, and autonomous features of both Southeast and Northeast Asia. Although direct contacts between the two regions decreased dramatically after the end of the Age of Commerce, there is still room for comparative analysis.

Southeast Asian dynamism after the late early modern era has been one of the major topics in recent scholarship of Southeast Asian history, especially after "the origin of Southeast Asian poverty" was put at the end of the 17th century by Reid (1988; 1993a). Port cities (Cathiritambi-Wells & Villiers eds. 1991), new economic development (Reid ed. 1997b), the consolidation of mainland polities (Lieberman 2003), the water frontier of the South-China Sea and the Gulf of Thailand (Cooke & Li eds. 2004), and many other issues have been studied in recent publications. Japanese scholars have also been interested in this period, mainly in such topics as the development of peripheral areas, the advance of Chinese networks, and the new integration (of both the indigenous states in the Mainland and the colonial states in Insular Southeast Asia)(Sakurai ed. 2001).

Isolated, stagnant images of Northeast Asian countries have also been revised successfully. Japan's *sakoku* or seclusion system is now regarded as a variant of Chinese-originated *haijin* or maritime prohibition system (Arano 1988). Under a strict control system of diplomacy and foreign trade, which never meant isolation, Northeast Asian countries experienced dramatic

changes[*39]. In the case of Japan, the premises of modernization after the Meiji Era, such as a nation-wide market economy, a more developed technology of agriculture and handicrafts, and a proto-national consciousness, were clearly formed.

Scholars of any region in East Eurasia, and the Global History as well, cannot help but be impressed by recent developments in the research on Qing China (Mori ed. 1997; Wong 1997; *Acta Asiatica* 2005). The mechanism of increasing emmigration and expanding economic networks beyond the imperial borders from the 18th century on has been studied from various angles. Population increase was related to many elements, such as (a) agricultural technologies, new plants, and ecological conditions, (b) commerce and handicrafts, (c) local communities and family institutions, and (d) legal and taxation systems. The economic/market/currency policies of the state also pushed the limitless expansion. Not only Southeast Asian countries but also Korea and Japan faced strong economic and cultural pressures from China. It influenced the formation of collective identities in these countries in various ways.

4.2. The "Age of Production" and the Crystallization of the "Traditional" Societies

4.2.1. Peasant Society

When the "Age of Commerce" ended at the end of the 17th century, almost all arable lands were already reclaimed in the traditional core areas of the mainland of Southeast Asia (typically in the mid-Irrawaddy valley and the Red River Delta), Java (central and eastern regions), and Northeast Asia. In Japan, Korea, northern Vietnam and of course in China, even the reclamation of coastal plains and deltaic areas had already entered the final stage. More and more villages suffered severe land shortage and population pressure. Regardless of the possibility of outward migration[*40], small-scale

39 ——— See Kishimoto (1999) and Ueda (2005) for China; Hayami & Miyamoto eds. 1988 and Hamashita & Kawakatsu eds. 1991 for Japan, Lee (1997) for Korea; Miyajima (1994) for all three countries.

40 ——— Japanese peasants had the least possibility of immigration, not only due to the *sakoku* system (which prohibited immigration abroad), but also due to the strict land and household register systems of the villages and the feudal domains, which became effective by the mid-17th century. The population pressure was mitigated by other factors, such as the steady labour flows from villages to cities, often of a circulating nature, and the *ye* system, which allowed the restraint of the population increase. Approximately 12 million population in the year 1600 increased by 150 % in the 17th century, but remained at the same level throughout the 18th century, not only due to famines and abortions but also because of late marriages and

and labour-intensive production run by nuclear families, often accompanied by commercialization or proto-industrialization, became dominant, especially in areas of wet rice cultivation. Large-scaled production with dependent labour was seldom productive, though large-scaled land ownership based on the accumulation of small plots often developed (except in Japan, where the *ye* of peasants as the unit of possession/production/taxation was carefully maintained). The relationship of the peasant society with the urbanization and market economy showed various patterns. One extreme was the "industrious revolution" (Hayami & Miyamoto 1988; Sugihara 2004), a labour-intensive path to a modern capitalist economy, which occurred in Japan. Another extreme was the "agricultural involution." If the 19th century Java of Geertz (1963) was not the case, northern Vietnamese villages after the 18th century (Sakurai 1987) appear to have indeed shared poverty in the process of limitless population increase and labour intensification[*41].

4.2.2. The Development of Frontier Areas

Many frontier areas were developed with immigrant labour forces. Large deltas (which mainly produced rice and sugar) and mountainous areas (which produced forest products, opium, tea, silver, and copper) in mainland Southeast Asia, tropical rainforests (forest products, coffee, tin, and gold) and seas (sea cucumber, bird's nest, and so on) in maritime Southeast Asia saw equally rapid development[*42]. The development, production and exports were often organized and conducted by the Chinese, in similar manners as had been the case in the mountains of southern China. They established some semi-independent polities like the Mac family in Ha Tien (Kangkao), the Wu family

---

the inheritance system, in which only the eldest son inherited all the properties of the household. In the case of Korea and Burma, the frontiers (the Northeast regions in Korea and Lower Burma) absorbed a considerably large population, while northern Vietnamese villages had little outlet due to the North-South political division until the beginning of the 19th century and the limited capacity of the surrounding hilly areas. Moreover, the Chinese immigrants had already penetrated there more strongly.

41 ——— The villages of the northern Vietnamese lowlands after the "Age of Commerce" no longer had significant export products like ceramics and raw silk. Although some professional villages of commerce or handicraft production (for domestic consumption) appeared, cities and the major flow of commodities were controlled by Chinese merchants. Mountainous areas in northern Vietnam had important commodities like silver and copper, but the production and exports were totally in the hands of the Chinese (including ethnic minorities). Under such unfavourable conditions, the famous communality of northern Vietnamese villages was solidified.

42 ——— Reid (ed.1996, 1997b); Cooke & Li (eds. 2004).

in Songkhra, or the *congsis* in Borneo. In Northeast Asia, the northern frontiers of Korea, especially the Hamgyong-do area, absorbed many immigrants from the south. The Ezo-land (present-day Hokkaido) became a colony of the Matsumae domain (and later of the Tokugawa Shogunate itself), where every Ainu household was obliged to collect and deliver commodities (like pelt and fishes) levied by merchants who farmed the *akinaiba* or trading centers[*43]. Production of new commodities like herring and sea cucumbers also developed. Japanese immigrant labourers operated in some sectors, like the large scale herring fishery. In parallel with these events, Russian colonization reached the eastern Siberian coasts, Sakhalin, and the northern Pacific waters.

Development was realized mainly for the purpose of commodity production, but sometimes for subsistence. In the former case, a coercive labour (forced delivery or forced cultivation) system was often enforced effectively, as was the case in West Java (coffee), in the Sulu seas (sea cucumbers and pearls), in Luzon and the Visaya islands (sugar and tobacco), in the Ryukyu and Amami islands (sugar)[*44], and in Hokkaido. Even in core regions like Central/East Java (under the Cultivation System after 1830), and in some *han* domains in late Tokugawa Japan, the governmental monopoly of export commodities could result in de facto forced production systems. Of course, commodity production by coerced (slavery or feudal) labour was not rare even in ancient times. However, it was operated better in a larger scale in the late early modern period, thanks to the more developed administrative systems of not only European colonial governments but also of indigenous Asian polities.

---

43 Till the beginning of the Tokugawa Period, the Ezo-land, except for the southernmost area where the *Wajin* or Japanese people including the lord Matsumae occupied, were not regarded as part of Japanese territory. In spite of a territory indicated by certain amount of rice production, the Matsumae family was granted by the Tokugawa Shogunate the right of trade with the Ainu people beyond the territory of Japan. However, the Matsumae took advantage of the policy to seize trading points in Hokkaido. At first, those trading points were bestowed to Matsumae's retainers. Ultimately because these retainers were too greedy to manage the trading points in sustainable ways, the bestowal system was replaced by a farming system run by Honshu merchants in the latter half of the 17th century.

44 After the Satsuma Domain (of the Shimazu family) subjugated the Ryukyu Kingdom in 1609, the Amami islands were incorporated into the Satsuma Domain, while other islands remained under the control of the Ryukyu Kingdom. After the late 17th century, while tributary trade with China stagnated, agricultural reclamation for the production of sugar and turmeric (accompanied by the reclamation for staples like wet rice and sweat potatoes) developed. The Satsuma government directly collected the sugar of Amami (where farmers were even prohibited to plant other crops), while Ryukyu sugar was collected through the taxation system of the kingdom. Satsuma merchants brought sugar to Kamigata (Osaka and Kyoto) to obtain large profits.

4.2.3. The Crystallization of "Traditional" Societies

Recent scholarship tends to deny the "timeless" nature of "traditions" in pre-modern societies. Indeed, many elements of "traditional" societies and cultures in Southeast/Northeast Asia were crystallized or invented in (and often after) the late early modern period. If "traditional Japanese" *ye* (patrilineal/patriarchal family/household) and *mura* (corporate village) systems, which used to be attacked by modernists and feminists but are more recently praised by nationalists, became universal only in the late Tokugawa Period, "traditional Vietnamese *lang xa* (collective village) and *dong ho* (patrilineal clan) systems, which have also caused many disputes among modernists and traditionalists/nationalists, have become more widespread only after the 18th century. The "traditional" mentality of a weak "self" and a preference for "stability without freedom" in Japanese society could only take root long after medieval self-reliance faded away under the peace realized by Toyotomi and Tokugawa. A similar process appears to have been set in motion in other countries under discussion.

This does not mean that the crystallization/invention of "traditions" occurred in a vacuum. Rather, many things resulted from efforts to cope with external conditions, including foreign pressures. For instance, the cultural expansion of China caused a deep influence (sinicization), not only upon Northeast Asian and Vietnamese cultures, but also upon other Southeast Asian cultures (in foods, music, dances and plays, and so on). Domesticating or coping with the Chinese influence, the "original" cultures of surrounding countries were formed, as was the case of *Kokugaku* (or National Studies) and the Edo literature of Japan. Colonial regimes also stimulated similar crystallization/ invention, as in the cases of Java (the "Hindu" culture) and Ryukyu. In core areas of mainland Southeast Asia and Northeast Asia, many "traditions" were tied to the state consolidation. The consolidation of a state was usually perceived as that of a regional empire. However, it also bore a "proto-national" nature as the social and cultural homogenization in respective states progressed to a considerable extent in terms of social hierarchy (witness the sharp increase of *yang ban* in Korea[*45], for instance), and ethnic/regional divisions (as Korea, and Japan to a lesser extent, became "a country of one single ethnicity").

45——— See Miyajima (1995); Lee (1997).

4.2.4. The State after the Late 18th Century

Not only polities in maritime Southeast Asia (with some exceptions) but also Northeast Asian polities declined after the 18th century. Despite the economic growth (and not the simple decline of a "feudal" economy) in the early 19th century and some efforts at modernization (they were not always conservative or irrational), these polities could not survive the high colonial period. Even in Japan, the self-modernization of the Tokugawa Shogunate failed. The Chinese Empire appears to have lost control of the ever-expanding society after the end of the 19th century. In other words, it took successive measures of adaptation to the social change, before it finally to "melted down."

The effect of the expansion and consolidation of mainland Southeast Asian polities (such as Burma, Siam and Vietnam) after the warfare and political disorder in the late 18th century cannot be understood as a simple development. Siam indeed maintained and developed the consolidation after the second half of the 19th century. In the case of Vietnam, however, the society seems to have been exhausted by the aftermath of the Tayson War (1771-1802) and the too rapid expansion/centralization of the Ming Mang Emperor (r. 1820-40). Neither inward-looking northern villages nor trade-oriented southern villages were strictly controlled by the Hue government (Woodside 1971). On this point (not in the conventional criticism of the conservative or incapable rulers), the nationalists' blame of the Nguyen Dynasty for French colonization is not wrong (probably the Konbaung Dynasty is to be blamed in the same way). To take a longer view, the regional diversity created since the period of the Trinh-Nguyen political split was as important as the unity from the North to the South under the Nguyen Dynasty for modern Vietnamese people to fight against France and then the United States.

5. Conclusion

During the medieval and early modern periods, Northeast Asia had many common features and direct relations with Southeast Asia. For this reason, Northeast Asian history has many implications, not only for the mainland but also for maritime Southeast Asia. The reverse is also true. The uniqueness of Northeast Asia can be well understood through comparisons with Southeast Asia. For example, a "great divergence" appears to have occurred in late early-modern Northeast Asian countries,

when compared to their Southeast Asian counterparts.

［ももきしろう・大阪大学大学院文学研究科教授］
[Professor, Graduate School of Letters, Osaka University]

［はすだたかし・大阪大学21世紀COEプログラム＜インターフェイスの人文学＞特任研究員］
[Designated Researcher, the 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University]

[References]

Acta Asiatica 2005 (vol. 88). A Special Issue of Ming-Ch'ing History Seen from East Asia.

Abu-Lughod, Janet L. 1989. *Before European Hegemony: The World System A.D. 1250-1350*. New York: Oxford University Press.

Amino, Yoshihiko網野善彦. 1987. *Muen, Kugai, and Raku: Freedom and Peace in Medieval Japan*. Revised Edition, Tokyo: Heibonsha. (『増補　無縁・公界・楽　日本中世の自由と平和』平凡社)

Aoki, Atsushi青木敦. 1995. Resource Endowments and Labor Allocation in Pre-Modern China: A Post-Walrasian Approach. In *Standards and Customs in the Song* (Research Report of the Song History Research Group: Issue 5). Edited by Song History Research Group, Tokyo: Kyuko Syoin. (「ポスト・ワルラスからのアプローチ——要素賦存・労働力分配・時代区分論——」宋代史研究会（編）『宋代の規範と習俗』(宋代史研究会研究報告第五集)、汲古書院)

Araki, Moriaki安良城盛昭. 1953. Historical Premises for Taiko's Land Survey (1)(2). *Rekishigaku Kenkyu* 163, 164. (「太閤検地の歴史的前提 (1) (2)」『歴史学研究』163, 164)

Araki, Moriaki安良城盛昭. 1954. Taiko's Land Survey. *Rekishigaku Kenkyu* 167. (「太閤検地の歴史的意義」『歴史学研究』167)

Arano, Yasunori荒野泰典. 1988. *Early Modern Japan and East Asia*. Tokyo: University of Tokyo Press. (『近世日本と東アジア』東京大学出版会)

Arano, Yasunori荒野泰典, Ishii, Masatoshi石井正敏, and Murai, Syosuke村井章介. 1992. A Review of the Periodization. In *Asia and Japan* (*History of Japan in Asian Perspectives*, Vol.1). Tokyo: University of Tokyo Press. (「時期区分論」『アジアと日本』(アジアの中の日本史1)、東京大学出版会)

Atwell, William S. 1997. A Seventeenth-Century 'General Crisis' in East Asia? In *The General Crisis of the Seventeenth Century*. 2nd ed. Edited by Geoffrey Parker and Lesley M. Smith, London & New York: Routledge.

Atwell, William S. 2002. Time, Money, and the Weather: Ming China and the "Great Depression" of the Mid-Fifteenth Century. *JAS* 61(1).

Aung-Thwin, Michel. 1995. The "Classical" in Southeast Asia: The Present and the Past. *JSEAS* 26(1).

Benda, Harry J. 1962. The Structure of Southeast Asian History. *JSEAH* 3(1).

Brown, Roxanna. In print. A Ming Gap? Data from Shipwreck Cargoes. In *Southeast Asia in the 15th Century: The Ming Factor*. Edited by Sun Laichen and Geoff, Wade.

Cathiritambi-Wells, J. & Villiers, John. (eds.) 1991. *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.

Cho, Hungguk 趙興國. 2004. Historical Relations between Korea and Thailand in the Late 14th Century. Paper for Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia. 29-30 October 2004, at Naha, Okinawa, Japan.

Cœdès, George. 1964. *Les états hindouisés d'indochine et d'indonésie*. Paris: E. de Boccard.

Cœdès, George. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*. Edited by Walter F. Vella, Translated by Sue Brown Cowing, Honolulu: University of Hawaii Press.

Cooke, Nola & Li, Tana (eds.) 2004. *Water Frontier: Commerce and the Chinese in the Lower Mekong Region, 1750-1880*. Singapore: Singapore University Press.

Cuong Tu Nguyen. 1997. *Zen in Medieval Vietnam: A Study and Translation of the Thien Uyen Tap Anh*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Danjo, Hiroshi 檀上寛. 1997. The Imperial System of the Early Ming. In *The Integration of Central Eurasia* (*Iwanami History of the World*, Vol. 11). Edited by Masaaki Sugiyama, Tokyo: Iwanami Shoten. (「初期明帝国体制論」杉山正明（編）『中央ユーラシアの統合』（岩波講座　世界歴史11）、岩波書店））

Danjo, Hiroshi 檀上寛. 2006. *A Comprehensive Study on the Maritime Ban and the Local Society in Coastal Areas during the Yuan-Ming Periods* (Report for Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Grants-in-Aid for Scientific Research). Kyoto: Kyoto Women's University. (『元明時代の海禁と沿海地域社会に関する総合的研究』（平成15～17年度科学研究費補助金研究成果報告書））

Frank, Andre Gunder. 1998. *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*. Berkeley: University of California Press.

Fukui, Hayao (ed.) 1999. *The Dry Areas in Southeast Asia: Harsh or Benign Environment?* Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University,

Geertz, Clifford. 1963. *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.

Ha, Woobong 河宇鳳. 2004. Cultural Interaction between Korea and Vietnam in the Choson Period: Intellectual Exchange between Envoys from Choson and Vietnam through Letters and Poems. Paper for Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia. 29-30 October 2004, at Naha, Okinawa, Japan.

Hall, Kenneth R. 1985. *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Hall, John Whitney. (ed.) 1991. *Early Modern Japan* (*The Cambridge History of Japan* vol. 4), Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Hamashita, Takeshi 浜下武志 & Kawakatsu, Heita 川勝平太. (eds.) 1991. *Intra-Asian Trade and the Industrialization of Japan 1500-1900*. Tokyo: Libroport. (『アジア交易圏と日本工業化1500-1900』リブロポート)

Hasuda, Takashi 蓮田隆志. 2003. Aspects of Early Modern Southeast Asia: A Review on Vols.3 to 5 of *Iwanami History of Southeast Asia*. *Southeast Asia: History and Culture* 32. (「東南アジアの近世をめぐって」『東南

アジア 歴史と文化』32)

Hasuda, Takashi蓮田隆志. 2004. Seeing Mainland Southeast Asian Experiences from the Early Modern Empire Perspective. Paper for the 18th IAHA Conference, 8 Dec. 2004, at Academia Sinica, Taipei.

Hayami, Akira速水融 & Miyamoto, Matao宮本又郎. (eds.) 1988. *The Establishment of an Economical Society: the 17th to 18th Centuries* (*The Economic History of Japan*, Vol. 1). Tokyo: Iwanami Syoten. (『経済社会の成立——17-18世紀』(日本経済史1)、岩波書店)

Hayase, Shinzo早瀬晋三. 2003. *History of a Maritime Muslim Society: An Ethno-history of Mindanao*. Tokyo: Iwanami Shoten. (『海域イスラーム社会の歴史　ミンダナオ・エスのヒストリー』岩波書店)

Ishii, Yoneo石井米雄 & Sakurai, Yumio桜井由躬雄. 1985. *The Formation of the Southeast Asian World* (*Visual History of the World*, Vol. 12). Tokyo: Kodansha. (『東南アジア世界の形成』(《ビジュアル版》世界の歴史⑫)、講談社)

Iwai, Shigeki岩井茂樹. 1996. Frontier Society in Sixteenth and Seventeenth Century China. In *Society and Culture of the Late Ming and the Early Qing China*. Edited by Kazuko Ono, Kyoto: Institute for Humanities, Kyoto University. (「十六・十七世紀の中国辺境社会」小野和子 (編)『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所)

Iwanami History of Japan. 1993-6. 25 vols. Tokyo: Iwanami Shoten. (『岩波講座　日本通史』全25巻)

Iwanami History of Southeast Asia. 2001-3. 10 vols. Tokyo: Iwanami Shoten. (『岩波講座　東南アジア史』全10巻)

Josei-shi Sogo Kenkyukai (General Research Society for Women's History)女性史総合研究会. (ed.) 1982. *A History of Women in Japan*. 5vols, Tokyo: University of Tokyo Press. (『日本女性史』東京大学出版会)

Kikuchi, Isao菊池勇夫. (ed.) 2003. *Ezogashima and the Northern World* (*Stages of Japanese History*, vol. 19). Tokyo: Yoshikawa Kobunkan. (『蝦夷島と北方世界』(日本の時代史19)、吉川弘文館)

Kishimoto, Mio岸本美緒. 1995. The Qing Dynasty and Eurasia. In *The Road to the Modern World: Changes and Conflicts* (*Lectures in Modern World History*, Vol. 2). Edited by Rekishigaku Kenkyukai (The Historical Science Society of Japan), Tokyo: University of Tokyo Press. (「清朝とユーラシア」歴史学研究会 (編)『近代世界への道——変容と摩擦』(講座世界史2)、東京大学出版会)

Kishimoto, Mio岸本美緒. 1998, The Formation of East and Southeast Asian Traditional Societies. In *The Formation of East and Southeast Asian Traditional Societies* (*Iwanami History of the World*, Vol. 13). Edited by Mio Kishimoto, Tokyo: Iwanami Shoten (「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」岸本美緒 (編)『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』(岩波講座 世界歴史13)、岩波書店)

Kishimoto, Mio岸本美緒. 2001. Eighteenth Century China and the World. *Nanakuma Shigaku* 2. (「一八世紀の中国と世界」『七隈史学』2)

Kuroda, Akinobu黒田明伸. 1999. The Pan-China-Sea Economy and Monetary Movement in the 16th and 17th Centuries. In *Money Beyond Borders*. Edited by Rekishigaku Kenkyukai, Tokyo: Aoki Shoten. (「一六・一七世紀環シナ海経済と銭貨流通」歴史学研究会 (編)『越境する貨幣』、青木書店)

Kuroda, Akinobu. 2005. Copper-Coins Chosen and Silver Differentiated: Another Aspect of 'Silver Century' in East Asia. In *Acta Asiatica* 2005.

Kuroda, Toshio黒田俊雄. 1994a. *Studies on the Kenmon System* (*A Collection of Kuroda Toshio's Works*, Vol. 1),

Kyoto: Hozokan. (『権門体制論』(黒田俊雄著作集 第1巻)、法蔵館)

Kuroda, Toshio黒田俊雄. 1994b. *Studies on the Kenmitsu Buddhism* (*A Collection of Kuroda Toshio's Works*, Vol. 2). Kyoto: Hozokan. (『顕密体制論』(黒田俊雄著作集 第2巻)、法蔵館)

Lee, Hochol. 1997. Agriculture as a Generator of Change in Late Choson Korea. In *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. Edited by Anthony Reid, London: Macmillan Press; New York: St. Martin's Press.

Lieberman, Victor. 1995. An Age of Commerce in Southeast Asia? Problem of Regional Coherence —— A Review Article. *JAS* 54(3).

Lieberman, Victor. 1999. Transcending East-West Dichotomies: State and Culture Formation in Six Ostensibly Disparate Areas. In *Beyond Binary Histories: Re-imagining Eurasia to c.1830*. Edited by Victor Lieberman, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Lieberman, Victor. 2003. *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c.800-1830. Vol.1: Integration on the Mainland*. Cambridge: Cambridge University Press.

Marr, David G. & Milner, A.C. (eds) 1986, *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Mikami, Tsuguo三上次男. 1988. *Studies on the History of the Ceramic Trade* Vol. 2. Tokyo: Cyuokoron Bijutsu Syuppan. (『貿易陶磁史研究(中)』中央公論美術出版)

Miyajima, Hiroshi宮嶋博史. 1994. The Emergence of Peasant Societies in East Asia. In *Long-term Changes in Asian Societies* (*Series Asian Perspectives* vol.6). Edited by Yuzo Mizoguchi et al., Tokyo: University of Tokyo Press. (「東アジア小農社会の形成」溝口雄三ほか(編)『長期社会変動』(アジアから考える6)、東京大学出版会)

Miyajima, Hiroshi宮嶋博史. 1995. *Yang-Ban: The Privileged Class in the Society under the Choson Dynasty*. Tokyo: Cyuokoron Sha. (『両班——李朝社会の特権階層』中央公論社)

Momoki, Shiro桃木至朗. 1999a. Dai Viet and the South China Sea Trade: From the Tenth to the Fifteenth Century. *Crossroads: An Interdisciplinary Journal of Southeast Asian Studies* 12(1).

Momoki, Shiro桃木至朗. 1999b. Was Dai Viet during the Early Le Period (1428-1527) a Rival of Ryukyu within the Tributary Trade System of the Ming? In *Commerce et navigation en Asie du Sud-Est (X IVe-X IXe siècle)*. Edited by Nguyen The Anh & Yoshiaki Ishizawa, Paris: L'Harmattan.

Mori Masao森正夫. (ed.) 1997. *Fundamental Issues on the History of the Ming-Qing Period* (*Fundamental Issues on the History of China*, Vol. 4). Tokyo: Kyuko Shoin. (『明清時代史の基本問題』(中国史学の基本問題4)、汲古書院)

Murai, Syosuke村井章介. 1988. *Medieval Japan in Asia*. Tokyo: Azekura Shobo. (『アジアのなかの中世日本』校倉書房)

Murai, Syosuke村井章介. 1997. *Japan in the Sengoku Period Seen from the Sea: From the History of the Archipelago to the World History*. Tokyo: Chikuma Shobo. (『海から見た戦国日本——列島史から世界史へ』筑摩書房)

Nakajima, Gakusyo中島楽章. 2004. South Kyusyu during the Age of Commerce: A Node of Northeast Asian Maritime Trade. Paper for Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast

Asia. 29-30 Octorber 2004, at Naha, Okinawa, Japan.

Nakamura, Satoru 中村哲. 1977. *The Theory of Slavery and Serfdom: A Reconstruction of the Historical Theory of Marx-Engels*. Tokyo: University of Tokyo Press. (『奴隷制・農奴制の理論——マルクス・エンゲルスの歴史理論の再構成』東京大学出版会)

Osawa, Masaaki 大澤正昭. 2005. *Family, Marriage, and Women during the Tang-Sung Period: "The Wife is Strong."* Tokyo: Akashi Shoten. (『唐宋時代の家族・婚姻・女性——婦は強く——』明石書店)

Oyama, Masaaki 小山正明. 1992. *Studies on the Socio-Economic History of Ming-Qing China*. Tokyo: University of Tokyo Press. (『明清社会経済史研究』東京大学出版会)

Reid, Anthony. 1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680. Vol. I: The Land below the Winds*. New Haven & London: Yale University Press.

Reid, Anthony. 1993a. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680. Vol. II: Expansion and Crisis*. New Haven & London: Yale University Press.

Reid, Anthony. 1993b. Introduction: A Time and a Place. In *Southeast Asia in the Early Modern Era: Trade, Power, and Belief*. Edited by Anthony Reid, Ithaca & London: Cornell University Press.

Reid, Anthony. (ed.) 1996. *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. NSW, Australia: Allen & Unwin.

Reid, Anthony. 1997a. The Seventeenth-Century Crisis in Southeast Asia. In *The General Crisis of the Seventeenth Century*. Edited by Geoffrey Parker & Lesley Smith M., 2nd ed. London & New York: Routledge.

Reid, Anthony. (ed.) 1997b. *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. London: Macmillan Press; New York: St. Martin's Press.

Rekishigaku Kenkyu-kai 歴史学研究会 & Nihonshi Kenkyu-kai 日本史研究会. (eds). 2004-5. *Lectures in Japanese History*. 10vols, Tokyo: University of Tokyo Press. (『日本史講座』東京大学出版会)

Sakurai Yumio 桜井由躬雄. n.d. *Land, Water, Rice, and Men in Early Vietnam: Agrarian Adaptation and Socio-Political Organization*. Edited by Keith W. Taylor and translated by Thomas A. Stanley.

Sakurai Yumio 桜井由躬雄. 1987. *The Formation of Vietnamese Village: Historical Evolution of the Công Điền (Communal Rice Field) System*. Tokyo: Sobunsha. (『ベトナム村落の形成——村落共有田＝コンディエン制の史的展開——』創文社)

Sakurai Yumio 桜井由躬雄. 2001. Introduction: The Origin of Southeast Asian History–the Birth of Historical Circles. In *The Origin of Southeast Asian Historical World* (*Iwanami History of Southeast Asia*, Vol. 1). Edited by Tatsuro Yamamoto, Tokyo: Iwanami Shoten. (「総説　東南アジアの原史——歴史圏の誕生」山本達郎(編)『原史東南アジア世界』(岩波講座　東南アジア史1))

Sakurai Yumio 桜井由躬雄. (ed.) 2001. *The Development of Early Modern Southeast Asian States* (*Iwanami History of Southeast Asia*, Vol. 4). Edited by Yumio Sakurai, Tokyo: Iwanami Shoten. (『東南アジア近世国家群の展開』(岩波講座 東南アジア史4))

Shimizu, Taro 清水太郎. 2000-2005. Chance Meetings of Vietnamese and Korean Tribute Missions in China (1)-(5). *Hokuto Ajia Bunka Kenkyu* (*Journal of Northeast Asian Culture, Tottori College*) 12, 14, 16, 18, 22. (「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅 (1)～(5)」『北東アジア文化研究』12, 14, 16, 18, 22)

Sukawa, Hidenori 須川英徳. 1998. Currency System of the Choseon Dynasty. *Rekishigaku Kenkyu* 711. (「朝鮮

時代の貨幣」『歴史学研究』711)

Sugihara, Kaoru 杉原薫. 2004. The Emergence of the Industrious Revolution Path in East Asia. *Osaka Economic Papers* 54(3). (「東アジアにおける勤勉革命径路の成立」『大阪大学経済学』54(3))

Sugiyama, Masaaki 杉山正明. (ed.) 1997. *The Integration of Central Eurasia* (*Iwanami History of the World*, Vol. 11). Tokyo: Iwanami Syoten. (『中央ユーラシアの統合』(岩波講座　世界歴史11)、岩波書店)

Sun Laichen. 2000. Ming-Southeast Asian Overland Interactions, 1368-1644. PhD. Dissertation, University of Michigan.

Sun Laichen. 2006. An Age of Gunpowder in Eastern Asia —c. 1390-1683—. *Toyoshi Ronsyu (Oriental Studies, Kyusyu University)* 34, Translated by Nakajima Gakusyo. (中島楽章訳「東部アジアにおける火器の時代：1390-1683」『九州大学東洋史論集』34)

Sun Laichen & Geoff, Wade. (eds). In print. *Southeast Asia in the 15th Century: The Ming Factor*. Singapore: Singapore University Press.

Takara, Kurayoshi 高良倉吉. 1998. The Development of Ryukyu Kingdom. In *The Formation of East and Southeast Asian Traditional Societies* (*Iwanami History of the World*, Vol. 13). Edited by Mio Kishimoto. Tokyo: Iwanami Shoten. (「琉球王国の展開」岸本美緒 (編)『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』(岩波講座世界歴史13)、岩波書店)

Tanigawa, Michio 谷川道雄. (ed.) 1993. *Disputes on Chinese History in Post War Japan*. Nagoya: Kawai Institute for Culture and Education (『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所)

Tarling, Nicholas (ed.) 1992. *The Cambridge History of Southeast Asia*. 2vols, Cambridge : Cambridge University Press.

Taylor, Keith W. 1987. The Literati Revival in Seventeenth-Century Vietnam. *JSEAS* 18(1).

Ueda, Makoto 上田信. 2005. *The Sea and Empire: The Ming-Qing Period* (*A History of China*, Vol. 9), Tokyo: Kodansha. (『海と帝国——明清時代』(中国の歴史9)、講談社)

Wakita, Haruko 脇田晴子. 1992. The Character of the Trade between Japan and Ming Seen from Prices. In *State and Society in Japanese History*. Edited by Syuichi Miyakawa, Kyoto: Shibunkaku. (「物価から見た日明貿易の性格」宮川秀一 (編)『日本史における国家と社会』、思文閣)

Wakita, Haruko 脇田晴子. 1994. The Distribution of Medieval Earthenwares. In *Iwanami History of Japan, The Middle Ages, Part 3*. Edited by Naohiro Asao et al. Tokyo: Iwanami Shoten. (「中世土器の流通」朝生直弘ほか (編)『岩波講座　日本通史　中世3』、岩波書店)

Watabe, Tadayo 渡部忠世 & Sakurai, Yumio 桜井由躬雄. (eds.) 1984. *Rice Growing Culture in Jiangnan Region of China: An Interdisciplinary Study*. Tokyo: Nihon Hoso Shuppan Kyokai (『中国江南の稲作文化——その学際的研究』日本放送出版協会)

Whitmore, John K. 1983. Vietnam and the Monetary Flow of Eastern Asia, Thirteenth to Eighteenth Centuries. In *Precious Metals in the Later Medieval and Early Modern Worlds*. Edited by J.F. Richards, Durham, North Carolina: Carolina Academic Press.

Whitmore, John K. 2004. The Last Great King of Classical Southeast Asia: 'Che Bong Nga' and Fourteenth Century Champa. Paper for Symposium on New Scholarship on Champa. 05-06 August 2004, at Asia Research Institute, National University of Singapore, Singapore.

Wolters, O.W. 1982. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Wolters, O.W. 1988. *Two Essays on Đại Việt in the Fourteenth Century*. New Haven: Yale University Council on Southeast Asia Studies, Yale Center for International and Area Studies.

Wolters, O.W. 1999. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Revised Edition. Ithaca: Cornell University Southeast Asian Program.

Wong, R. Bin. 1997. *China Transformed: Historical Change and the Limits of European Experience*. Ithaca & London: Cornell University Press.

Woodside, Alexander B. 1971 (1986). *Vietnam and the Chinese Model*. Cambridge (Mas.): Harvard University Press.

Yamamura, Kozo. (ed.) 1990. *Medieval Japan* (*The Cambridge History of Japan*, Vol.3), Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Yamashita, Norihisa 山下範久. 2003. *Japan in the World-System Perspective*. Toyko: Kodansha. (『世界システム論で読む日本』講談社)

Yamauchi, Shinji 山内晋次. 2003. *Japan and Asia during the Nara and Heian Periods*. Tokyo: Yoshikawa Kobunkan. (『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館)

Yi Taejin 李泰鎮. 1989. *Discussions on the History of the Choson Neo-Confucian Society* (in Korean). Jisik Sanup Publications Co., Ltd. (A Japanese version translated by Yutaka Rokutanda, Tokyo: Hosei University Press, 2000.『朝鮮王朝社会と儒教』六反田豊（訳）、法政大学出版局）

Yoshida, Mitsuo 吉田光男. 1998. Status and Social Groups in Choson. In *The Formation of East and Southeast Asian Traditional Societies* (*Iwanami History of the World*, Vol.13). Edited by Mio Kishimoto, Tokyo: Iwanami Shoten. (「朝鮮の身分と社会集団」岸本美緒（編）『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』（岩波講座世界歴史13）、岩波書店）

Maritime Trade and Edo Material Culture:

The Long-Term Trends in Textile Imports and Metal Exports of Tokugawa Japan, ca. 1600-1800[*1]

Fujita Kayoko

Introduction

Over the past several decades, a considerable number of studies have been made on the development of the Japanese cotton industry from the mid-19th century, with a particular emphasis on its connection to the nation's industrialisation as well as the realignment of international commercial networks in modern Asia. At the same time, the economic importance of the expanding cotton production and consumption in early-modern Japan under the Tokugawa regime (1603-1867) has also been thoroughly investigated. However, only a few attempts have hitherto been made at an analysis of cotton textile imports and their impacts on the domestic cotton markets of early modern Japan when foreign trade was under the strict control of the Tokugawa government. Economic historians have so far paid much more attention to silk imports from China, Southeast Asia, and India, and import substitution that gradually took place through the 17th and the 18th centuries.

Cotton imports and silk yarn and textile imports were inseparable when we survey the currents of foreign trade and the domestic market situation as well as the manufacturing industries of Tokugawa Japan. In this paper, I would first like to show the long-term statistic trends in the import of silk yarns and various fabrics (i.e., cotton, silk, wool, and linen) to Japan by the two governmentally-authorised trading agencies, the Dutch East India Company (*de Verenigde Oostindische Compagnie* or the VOC; 1602-1799) and Chinese maritime traders, focusing mainly on the 17th century when silver had a primary importance in Japan's foreign trade. The VOC manuscript docu-

1 The earlier version of this paper was presented at the Global Economic History Network (GEHN) conference on "Meanings of Trade: Textiles and the World Economy, 1500-1820" (Pune, India, 18-20 December 2005). I appreciate Professor Tirthankar Roy, the organiser of the conference, and Professor Sugihara Kaoru and Professor Om Prakash for their various comments on the paper.

ments, stored at the Nationaal Archief in The Hague, the Netherlands, give us a fair amount of information to follow the trends in their two-century-long commerce in Japan. In addition, the records of the trade items imported and exported by their rivals, the Chinese maritime traders, which we can find in the *dagregisters* or the diaries kept by the heads of the VOC factories in Hirado (1619-1641) and Nagasaki (1641-), supplement the often fragmented Japanese records.[*2] Focusing mainly on cotton and silk goods from diverse places of production (i.e., India, Java, China, England, and Holland) and considering their roles in Japan's growing consumer markets will give us a clearer insight into the pre-industrial development of Japan's textile consumption and manufacturing[*3].

Japan's overseas trade from the mid-16th to the mid-19th century may be envisaged in two periods in early-modern global networks. A series of trade-reforming edicts promulgated by the Tokugawa government in the latter half of the 17th century, initiated with the silver embargo (1668), which aimed at reducing the outflow of silver currencies, was the turning point. Mass production of Japanese silver began during the 1520s, and around the end of the 16th century Japan exported 130,000 to 165,000 kilograms of silver annually, equivalent to 30 to 40 percent of the world silver production at that time[*4]. The Dutch newcomers in the East Asian maritime world engaged in the Chinese silk-Japanese silver trade that was the typical trading pattern in East Asia around the end of the 16th century, as Chinese and Portuguese traders had been doing previously. Since the end of the

---

2 — I am currently making a database of the VOC's Japan trade during the 17th and 18th centuries, and will present updated statistics in the future.

3 — It is unable to dwell on the issue of the causal links between textile imports and the changes in the domestic textile production system in this short paper. As for silk, with a large supply of Chinese silk thread in exchange for silver since the mid-16th century (which is estimated at 3000 to 4000 piculs or 180,000 to 210,000 kilograms per year in the 1630s), the consumption of domestic textiles produced by skilled Japanese weavers spread from the upper class to the lower level of the society. The earliest cotton textile imports from China were recorded in 1204, and cotton textile became the most important of the import commodities from Korea during the 15th century. Cultivation, spinning, and weaving can be observed in various parts in Kyushu and Honshu by the end of 16th century (Nagahara 2004, 216-17, 220-21, 230-62). See a comprehensive explanation on the technological progress and production system of the cotton industry during the Tokugawa period in Abe Takeshi's paper for the GEHN Padua conference (http://www.lse.ac.uk/collections/economicHistory/GEHN/GEHNPDF/ABEPadua.pdf). For the proliferation of trade within the textile (cotton and silk) sector and its meaning for growth in pre-industrial Japan in the 18th and the 19th centuries, see Saito 2005.

4 — Kobata 1976, 7-8; Iwao 1958, 328-30, Iwao 1959, 66. This silver was comparable in value to two million *koku* (180 litres) of rice, equivalent to around 10 percent of Japan's national farming output (Shinbô and Hasegawa 1988, 234-35).

1630s, which coincides with the end of the Potosí-Japan cycle of global silver flows[*5], the VOC had devoted its full attention to establishing Indian silk and cotton on the market in Japan (see Section 1).

During the second phase, while a consumer culture flourished during the late 17th century and proto-industrialisation in rural areas could be observed particularly from the mid-18th century, Japan's foreign trade contracted, both in values and in volumes. My focus will be on the ways in which the Japanese coped with the contradicting conditions of the decline of metal production, the sustention of overseas trade, and the development of agriculture.

1. At the end of the Silver Century: The Indian connection[*6]

Graph 1[*7] shows changes in the annual values of gold, silver, and copper exports by the VOC based on their account books and invoices, and silver exports by Chinese traders and the Tsushima domain recorded in Japanese sources. This bar chart clearly shows that the staple of the Dutch factory shifted from silver to gold in the 1660s, and then from gold to copper in the latter half of the 1670s.

The Taiwan factory, or *Kasteel Zeelandia* at Taijouan, was a base for the VOC's commercial activities in East Asia from its foundation in 1625 to the Dutch surrender to Zheng Chenggong (Coxinga) in February 1662. As a result of the collision between the authorised Japanese traders and the VOC in Taiwan in 1628, the Tokugawa government suspended the business of the Hirado fac-

---

5 Flynn and Giráldez argue in their recent works that all heavily populated continents became deeply connected by the flows of silver during the "Potosí/Japan Silver Cycle" (1540-1640) and that the high price of silver in China finally descended to world silver price at the end of the Cycle due to the silver influx throughout the world into China. See Flynn and Giráldez 2002.

6 The analysis of Dutch metal trade in this paper is mainly based on my working paper, *In the Twilight of the Silver Century: A Re-Examination of Dutch Metal Trade in the Asian Maritime Trade Networks* (Osaka, 2005).

7 All data on silver exports by the VOC are based on Fujita 1999, 131-41. The annual volumes of gold and copper exports by the VOC were calculated from data in Suzuki 2004, Table 1 "The values and volumes of copper exports by the VOC", 147-68, and Table 2 "The values and volumes of *koban* (small gold coin) exports", 228-37. Chinese silver exports were from Iwao 1953, Table 1, p.28. and Yamawaki 1964, p.214. The volumes of silver exports by the Tsushima-han are Tashiro 1981, Table II-10, 271, and Table II-19, 325.

tory in Japan. From the political settlement in 1632 and the re-opening of the Dutch trade in 1633 to the end of the 1630s, the amount of silver exports grew remarkably. As a result of the banishment of the Catholic Portuguese after the uprising of Catholic farmers in Shimabara and the Amakusa region in Kyushu in 1637-1638, the Dutch became the only European agents allowed to trade in Japan. The Tokugawa government prohibited Japanese overseas navigation in 1639 and ordered the Dutch to break down the factory in Hirado and to move to the governmental city of Nagasaki in 1639. Now the outflow of Japanese silver was limited to three routes via Nagasaki (by the Dutch and the Chinese), Tsushima-Korea, and Satsuma-Ryukyu.

The decline in trade volumes and values in 1640 and the following dip were caused by the state of affairs both in Japan and in China Sea: business in the Western area of Japan became greatly depressed in 1639 and prices fell sharply (combining the economic crisis during the Kan'ei period). First, sumptuary regulations of 1639 now applied to the military class of intermediate and lower ranks, as well as to the merchant class, so prices for products made from imported silk spiralled downwards. Second, since the Portuguese were expelled in 1639, it became impossible for Japanese merchants to recoup their investments from them. As a result, many merchants in big cities in western Japan who had been engaged in foreign trade went bankrupt. Moreover, due to cold weather damage in 1641 and 1642, around 50,000 to 100,000 people died of famine throughout Japan during the following years (Yamamoto 1989, 192-94, 197-99).

At the same time, there was conflict between the Zheng family and the VOC. The Zheng family, which engaged in the silk-silver trade with the Taiwan factory, began to export the silk and silk fabrics from trade ports within their sphere of influence, such as Anhai and Xiamen, directly to Japan at the beginning of the 1640s. Furthermore, the destabilisation in mainland China following the downfall of Ming (1644) deeply affected the production system of raw silk in South China with special severity (*Dagregisters Japan* 9:194-95). As a result, VOC supplies from China were cut off. Now Dutch mercantilists were forced to find a replacement for Chinese raw silk of good quality at their settlements in the East Indies, such as Tonkin, Persia, and then Bengal (See Graph 2[*8]).

It was an obvious divergence from the China-centred economic system of East Asia based

8 All data on the VOC silk imports are originally based on Negotie Journalen, NFJ 836-861, and Facturen, NFJ 763-788, Nationaal Archief Den Haag. 1 picul=100 cattij /100 斤 (60 kilograms)=125 pounds (1697), =120 pounds (1698-).

on the Chinese World Order and its tributary trade system, in which Japan had been involved down the centuries. As for trading items, since the opening of the Iwami silver mine circa 1526 and other Japanese silver mines, the staples of maritime trade by private traders in the East China Sea area were Chinese silk and Japanese silver.[*9] Thus, Japan's economy had never experienced structural connection with the Indian Ocean economic zone through a large-scale and continuous influx of South Asian products into its realm. In 1640, the VOC further attempted to export gold coins from Japan as funds in Coromandel and Surat to supplement the shortage of Chinese gold obtained in Taiwan. If the Tokugawa government had not issued a gold embargo right after this exportation, the VOC would have continued to supply funds for its South Asian factories in the form of Japanese silver and gold along with Chinese gold.

Let us closely examine how the VOC coped with the situation. Until the final seizure by the Zheng clan in 1662, the Dutch settlement in Taijouan was the vital base for the VOC's commercial activities in East Asia. Silver exports were standardised as *chôgin* or *schuijt zilver* with 80 percent of purity in 1636, and the prohibition of silver exports was promulgated by the Tokugawa shogunate in 1668. According to my calculations, 71.9 percent of the total amount of silver (558,713 kilograms out of 777,281 kilograms) was directed to Taiwan between 1636 and 1667 (Fujita 2005, Table 1).

One must note, however, that VOC silver exports to Taiwan included silver that was supposed to be re-exported via Taiwan to other factories, especially to those on the coastal areas of India such as Coromandel, Bengal, Surat, and also to Persia. Direct shipment of precious metals from Taiwan to Surat was initiated in 1638, although Chinese gold had already been shipped via Taiwan and Batavia to India in the 1630s. Later in 1641, the VOC shipped Japanese gold coins (*ôban/koban*) and silver as well as Chinese gold to the coastal areas of India.

Table 1: Re-exports of Japanese silver from Taiwan to India and Persia, 1638-1661 (in 1,000 taels[*10])

	Coromandel	Bengal	Surat & Persia	Batavia	Other	Total Re-exports	%	Taiwan In total
1638-1649	503	0	1,375	145	75	2,098	22.9	9,180
1650-1661	1,073	1,503	508	30	407	3,521	89.0	3,955

Source: Fujita 2005, Table 2.

The influx of Japanese silver via Taiwan to the west of Malacca rose drastically in the 1650s. Malacca, over which the Dutch gained control in 1641, was one of the most important trade centres of precious metals in Asia, along with Batavia. According to Gaastra, "treasure-fleets" of Japanese silver/Chinese gold from Taiwan sailed straight to India via the Strait of Malacca, bypassing VOC headquarters in Batavia. Later this route was also utilised for gold shipments from Japan to India (Gaastra 1983, 464). Between 1638 and 1649, only 22.9 percent of silver was re-exported to other factories, mainly in India and Persia. Thus, we can say that the rest was paid to Chinese merchants and brought to China between 1638 and 1649. In contrast, 89 percent of the silver passing through Taiwan was transferred to India and Persia by the VOC between 1650 and 1661. I estimate that around 44 percent of Japanese silver exports to Taiwan was transmitted to other VOC factories in the East Indies between 1638 and 1661.

By comparing Graph 1 and Graph 2, we see that changes in the place of origin of silk imported into Japan influenced the changes in the destination of silver exports.[*11] For example, the market in Tonkin held relative importance up to the middle of the 1650s. According to P.W. Klein, silk imports into Nagasaki consisted of Bengali silk (19 percent), Tonkinese silk (68 percent), and Chinese silk (13 percent) between 1641 and 1654 (Klein 1986, 166-68, 171-72). From 1655, however, the VOC shifted their staple from Tonkinese silk to higher-quality Bengali silk. Between 1655 and 1668 silk imports to Nagasaki consisted of Bengali silk (77 percent), Tonkinese silk (18 percent), and Chinese silk (5 percent).[*12] We can clearly see in Graphs 2 and 3 that Bengali silk be-

---

9 For the theoretical framework of Qing China's tributary trade system and its silver absorption, see, for example, Hamashita 1991, 33-41.

10 1 tael=2 guldens 17 stuivers (1636-1665), 3 guldens 10 stuivers (1666-1743). 1,000 taels=10 kan (貫).

11 Om Prakash, who investigated various intra-Asian trade routes in *The Dutch East India Company and the Economy of Bengal, 1630-1720,* demonstrated a close correlation between the VOC's silk yarn and textiles exports from Bengal and precious metal and copper exports from Japan, both of which grew rapidly between 1656 and 1672 (Prakash 1985, 118-41). Tapan Raychaudhuri's study of the VOC trade in Coromandel shows that Taiwan was the second largest factory after Batavia in supplying capital, mainly Chinese gold, in the first half of the 17th century. Moreover, he points out that there was an influx of Japanese silver to this area at the same time (Raychaudhuri 1962, 133 and 186-89).

12 Klein 1986, 171-72. Between 1636 and 1640: Bengali silk (0 percent), Tonkinese silk (37 percent), Chinese silk (63 percent); between 1641 and 1654: Bengali silk (19 percent), Tonkinese silk (68 percent), Chinese silk (13 percent).

13 Graphs 3 and 4 are based on Yamawaki Teijirô's analysis of account books, which is for the moment the most comprehen-

came the key commodity of Dutch trade in Japan.[*13]

Generally speaking, there was a high demand for silver in Bengal and Surat and for gold in Coromandel. Until the middle of the 1650s Surat and Persia were the most important destinations for silver (Fujita 2005). At the same time, according to Glamann, Surat was the largest consuming area of Japanese copper (Glamann 1981, 175). At the beginning of the 1650s, silver exports to Coromandel increased rapidly although, as Tapan Raychaudhuri points out, Chinese gold was preferred to Japanese silver on the Coromandel Coast (Raychaudhuri 1962, 186-89). Simultaneously, silver exports to Bengal also rose from the late 1640s.

2. The effect of the Direct Trade system on Chinese and Dutch trade

In 1655, the Tokugawa government abolished the *itowappu* system and introduced direct trade between Japanese and foreign traders, which resulted in inflated import prices and an increase of the outflow of metals. One can see a rapid increase of silver exports from Japan by the Chinese in the latter half of the 1650s (Graph 1). In contrast, silver exports by the VOC during the same period were rather stable, while copper exports grew swiftly. When comparing Japanese silver and copper exports by the VOC during 1650-1654 and 1655-1659, we see that copper exports rose by 130 percent, while silver exports rose by only 9 percent. Thus, I conclude that Chinese merchants used silver to receive for increased import prices in Japan, while the Dutch preferred copper.

Why did copper take precedence over silver for the VOC? We must consider the rise in copper prices in the Amsterdam market, as well as the business depression at the Taiwan factory because of friction between the VOC and the Zheng family in South China. In the *Generale Missive* of 1657, the Governor-General and his Council in Batavia informed the Directors in Patria that Batavia had increased Japanese copper orders for Holland in the event that supplies of Chinese gold to

---

sive research on the fibre product trade of the VOC, which has appeared in any language. Yamawaki 1978, Table 35 "The values and volumes of textile imports at Deshima", 216-17, and Table 36 "The shares of textiles, silk yarn, and sugar at Deshima", 218-19. The statistics here, however, leave room for revision. For example, silk and cotton mixed piece goods do not form a separate category in his tables. As for Bengali textile exports, we should consult Om Prakash's work (see Table5.3 "Bengal textiles exported to Japan, 1669-1718" in Prakash 1985, 138-39).

Taiwan could not be expected, noting that the export of Japanese gold was not permitted even under the new free trade system in 1655 (Generale Missive, 31 January 1657, NA, VOC 1217, ff. 18v.-19r., 21r.).

Although there was no way the Dutch could know this at the time, it was actually good for the company that it began to shift the staple of its Japan trade to copper: Japan had used up their own deposits of the mineral resource in exchange for foreign products, raw silk and fabrics in particular, by the middle part of the 17th century (Kobata 1976, 1). Copper and high-grade gold coin, of which exportation was reopened in 1664, gave the VOC another several decades to make profits from the silk and cotton of Bengal and Coromandel, as seen in Graphs 3 and 4.

Table 2: Textile imports to Nagasaki by the VOC in 1672 (in taels)

	Bengal		Coromandel		Gujarat	
	taels	pieces	taels	pieces	taels	pieces
Cotton	28,034.15	15,304	98,064.15	32,270	7,163.46	17,171
Silk	9,424.00	4,950	0	0	0	0
Wool	0.00	0	0	0	0	0
	37,458.15	20,254	98,064.15	32,270	7,163.46	17,171

	Cochin		Tonkin		Netherlands		Total	
	taels	pieces	taels	pieces	taels	pieces	taels	pieces
Cotton	3,903.00	1,315	0.00	0	0	0	137,164.76	66,060
Silk	0	0	29,146.30	9,886	0	0	38,570.30	14,836
Wool	0	0	0.00	0	9,153.32	133	9,153.32	133
	3,903.00	1,315	29,146.30	9,886	9,153.32	133	1,848.86	81,029

Source: Yamawaki 1978, Table 34, 210-12.

A rapid growth of Bengali silk yarn imports characterises the period between 1656 and 1672, as Om Prakash points out in his analysis of Bengali-Japanese trade of the VOC (Prakash 1985, 124-26). At the same time, however, textile imports were also on the rise. Showing an increase by 78 percent in total from 1650 to 1672, the success of textile imports was primarily due to the 907 percent increase of cotton textiles, chiefly from Coromandel (See Graph 3 and Table 2).

I would like to emphasise that these Indian textiles were for the first time imported in quantities to Japanese markets and at prices that made them more available to a wider range of in-

habitants of the archipelago. The list of textiles imported by the VOC in 1672 (Yamawaki 1978, Table 34, 210-12) shows that an overwhelming share of cotton and silk textiles from India were categorised into [1] textiles with striped or checked patterns (27,207 pieces out of 81,029 pieces; 33.6 percent), or [2] printed textiles such as chintz (16,819 pieces; 20.8 percent). This contrasts remarkably with the composition of textile imports by Chinese traders. More than 90 percent of textiles imported by twenty-four Chinese vessels in total in 1682[*14] were plain-coloured or ribbed fabrics, gold or silver brocades, or fabrics with inwrought figures, produced in mainland China. In this year, thirteen Chinese ships brought [1] silk or cotton textiles with striped or checked patterns (11,171 pieces) and [2] diverse sorts of *sarasa*[*15] (8,478 pieces) in total. The VOC's report on Chinese import items and registered home ports of the vessels reveals, however, that technically all [1] striped or checked textiles were produced in India (e.g., Coromandel, Bengal, and Madras) and were purchased by Chinese traders at one of the emporia in Southeast or East Asia (e.g., Batavia and Guangdong). In some cases, Indian Muslim merchants brought Indian textiles via Ayutthaya by a Siamese ship. This fact suggests that Dutch mercantilists and Chinese maritime traders provided different sets of value and choice for Japanese consumers in the mid-Edo period, which eventually filtered into the preferences of the people of diverse social strata under the Tokugawa regime. This issue will be discussed in Section 4.

3. Towards the "closed" economic system: The silver embargo and the recoinages of currencies

The year of 1668 was epoch-making in terms of foreign as well as the economic policies of early modern Japan. The reduction of metal outflow and the promotion of the import replacement were the two fundamentals from this year on. First, in order to curb the outflow of silver currency, the

14 ——— No records of Chinese import goods between 1666 and 1682 are available. The production places of *sarasa* that Chinese ships imported cannot be identified. (Nagazumi 1987, 96-100).

15 ——— Indian and Javanese printed textiles with exotic flowers, birds, human figures, and geometric patterns, (and later European ones in the same style as well) were collectively called *sarasa*, which is conventionally said to have derived from "Surat" (Ishida 2004, 171).

Tokugawa government prohibited silver exports by Chinese and Dutch traders in 1668.

From the beginning of the 17th century to the mid-17th century, according to Hayami and Miyamoto, the long-term price of rice in Japan was on an upward trend after the surge and the fall during the lean years in the 1630s and the 1640s. One of the reasons for this is assumed to be an insufficient money supply for the growing market economy. As the amount of precious-metal deposits was still relatively hearty in the first half of the 17th century, the quantity of money increased more than four times throughout the century in total. It is estimated, however, that 80 percent of silver currencies and 13 percent of gold coins left the realm of Tokugawa Japan through foreign trade in the same century (Hayami and Miyamoto 1988, 66-67). As seen in Graph 1, particularly large portions of national currencies must have flowed out during the periods before 1640 and after 1655. While the amount of silver outflow, chiefly by Chinese ships, was rapidly increasing after the abolishment of *itowappu* in 1655, the production of silver in Japan began to decrease by the mid-17th century at the latest. For the first time, the central government in Edo became aware of the necessity of securing the monetary metal to maintain domestic economic activity.

The VOC managed this situation amazingly smoothly, by switching their staple Japanese export from silver to gold. According to Oskar Nachod, the VOC had already started to export gold coins in 1663 (immediately after the loss of Taiwan in 1662) without the permission of the Japanese authorities (Nachod 1897, 357). In 1664 the Dutch officially applied to the Japanese government for permission to export gold. It was granted and the VOC officially began to export gold at a price of 6.8 taels per piece in 1665. When silver exports were prohibited in 1668 and the price of gold was reduced to 5.6 or 5.8 taels, which was the domestic market price at the time, gold exports boomed, as we can see in Graph 1. This resulted from the fact that, unlike the Chinese who made a plea for the resumption of silver exports (and were permitted some years later), the VOC had already shifted the emphasis of their commercial activities based on Japanese metals during the 1640s and 1650s from the silver-oriented Chinese market to markets west of Malacca, where gold and copper were more profitable.

In Japan, the Tokugawa government reformed the trade system in Nagasaki completely in 1672 in order to prevent the outflow of minted currency. The new system was called *shihô shôhô*, taxation trade, in which the prices of all imports were decided by the office of the Nagasaki Governor who was appointed by the central government. During this trade reformation, the price of gold

was raised again to 6.8 taels (Suzuki 2005, 240). As for the Bengali-Japanese trade, the proportion of Japanese gold coin to the total value of precious metals imported from Bengal was reduced from 90 percent in 1674 to 42 percent in 1674 (Prakash 1985, 132). We can observe a steep decrease of gold exports and Bengali silk yarn imports after trade reformation in Graphs 1 and 2.

In 1685, the Tokugawa government issued the quantitative restriction at 940,000 taels on Japan's foreign trade ([1] 600,000 taels for the Chinese in total, [2] 300,000 taels for the VOC, and [3] 40,000 taels for the VOC personnel) in order to restrain the export of precious metals after Qing officially allowed its subjects rights to overseas navigation and trade in 1684. As for the first two categories of trade, each import value of (i) silk yarn (including Bengali silk), (ii) textile fabrics, and (iii) other import goods was not allowed to exceed one-third of the prescribed total import values. In 1695, the VOC again suffered losses when facing the gold recoinage through which the Tokugawa government reduced the purity of gold from 84.29 percent to 57.36 percent[*16], and ordered the Dutch in 1697 to purchase it at 6.8 taels, the same price they had paid for the old purer coins (Suzuki 2005, 242). In 1715, new restrictions were issued on the commerce of the Chinese and the Dutch: the number of trading vessels of the former was limited to 30 and those of the latter to two per year. The maximum amount of Chinese silver export was not allowed to exceed 12,000 taels.

The successive recoinage of gold and silver currencies of Japan in and after 1695, which increased currency supplies by 85 percent, was to revitalise the stalled domestic economy. Since the 1660s, the rising price of rice slowed and finally plateaued up to the end of the century, due to an increase in capacity of the rice supply from countrywide agricultural development and from a shortage in the money supply. Hayami and Miyamoto suggest that the success of the monetary reflation, which resulted in the rise of real income but *mild* price increases, was due to both external and internal reasons: the series of trade system reformations had decreased the relative importance of precious metals as a commodity in Japan's external trade so that the Tokugawa government received little foreign pressure to change the quantity and the quality of its national currencies (except from Choson Korea, who refused to receive degraded silver mints for raw silk exports). In addition, the domestic precious metal production, in whichever domain, was under the control of the central gov-

16 ——— The purity of silver currency was at the same time reduced from 80 percent to 64 percent. In the recoinage in 1706, it was degraded once more to 50 percent.

ernment in Edo (Hayami and Miyamoto 1988, 69-70, 73-74).

Through these new trade regulations, according to Prakash, Japan's role as a precious metal supplier for the VOC ended practically with the 17th century (Prakash 1985, 135-41). The last record of Bengali silk import to Nagasaki can be seen in 1747. During the 18th century, the VOC extracted meagre profits from Javanese sugar, dye (sappanwood) from Sumbawa Island, and a small portion of woollen textiles from Europe (Graphs 3 and 4).

As for the trade by Chinese maritime merchants, we can observe the effect of the 1685 regulation in the steep decline in silk yarn imports (Graph 2). To counteract the lack of silver, the Tokugawa government promoted the exportation of bar copper by permitting the barter trading of copper and import goods in 1695 (equivalent of 100,000 taels in silver) and increased its value five times in 1696 (500,000 taels in silver). Along with the gradual increase in the domestic silk yarn production, however, the difficulty of collecting copper to Nagasaki, the production of which was also decreasing, also affected the commerce. During the 18th century, the China trade in Nagasaki was maintained in exchange for copper and, increasingly, dried marine products, and the last silver export by the Chinese is recorded in 1763 (Yamawaki 1964, 214).

At the same time, tighter regulations were set on foreign trade by the central government in Beijing. The Qing government issued a prohibition of maritime navigation to Southeast Asia in 1717 (which was eventually lifted by 1727) and ordered western vessels to trade solely in Guangdong in 1757, which resulted in intensified governmental control on China's maritime commerce and in the realignment of overseas trade routes: Ningbo and Shanghai became the gateways for the trade with Japan, Xiamen with Southeast Asia, and Guangdong with the European traders. Consequently, the import volumes of Southeast Asian sappanwood (a typical natural dye for red colour), which had to transit Xiamen or Guangdong and then Ningbo or Shanghai in the Lower Yanzi, dropped sharply, and the VOC supplemented their short supply with their cargoes (Shimada 1999, 65-67). Another visible change in trade goods was that the gradual quantitative increase in and the diversification of European-made woollen textiles brought by the Chinese vessels to Nagasaki in spite of the explosive quantitative increase had to wait until the 19th century (Ishida 2004, 150). Cotton and silk textiles were consistently the most popular import items due to the inimitable quality and variety through the 18th century, even after the increase in textile production in Japan.

As a consequence of the decrease in Chinese and Bengali silk yarn since the late 17th cen-

tury, the Japanese silk textile industry, particularly the weavers of quality fabrics in Nishijin, Kyoto, faced a serious shortage of white raw silk material. The importation of Chinese silk yarn was implemented by the Tsushima domain via its trade with Choson Korea, and it is estimated that 4.7 percent of the silver currencies degraded in 1695 outpoured via Tsushima[*17] (Tashiro 1981, 329-30; See also Graphs 1 and 2). Thus, until the completion of the import substitution process through which Japan achieved a sufficient supply of high-quality domestic silk thread, which took place roughly until the middle of the 18th century, there was no measure to stop the silver outflow from Japan.

4. Cotton textiles as everyday luxuary: Import substitution, imitation, and the changes in processing and marketing process

Let me turn to the influence of the mass imports of cotton textiles on the material culture of non-elites and the manufacturing industry of Tokugawa Japan. Japanese researchers who are working on the historical development of textile manufacturing agree that it is most likely that striped cotton textiles, which were imported by the Portuguese since the mid 16th century and by the Dutch since the early 17th century stimulated the domestic production of cotton textiles with striped patterns in numerous parts of Japan during the Edo period (Ishida 2004, 156). The importation of cotton textiles of such types was therefore continued even after the establishment of the domestic cotton manufacturing industry since there was a constant demand for Indian cotton as luxuries and as samples (Ishida 2004, 156). In 1736, the value of striped cotton textiles (706,600 taels in silver for 698,747 pieces) occupied the second position in the total value of the commodities shipped from the central market in Osaka (9,579,900 taels).[*18] Because foreigners had been strictly forbidden to set foot in the territory of Tokugawa Japan (except in the Chinese and the Dutch enclosures in Nagasaki) since the 1630's, unlike Southeast Asian countries, Japan could not expect Chinese engineers to transfer

17 —— It is estimated that around 10 percent of silver currencies, the purity of which was improved to 80 percent in the 1710s, flowed out via Tsushima and Ryukyu to China (Tashiro 1981, 330).

18 —— The list of commodities transported from the Osaka market is as follows: rapeseed oil (27.1 percent), striped cotton textiles (7.4 percent), copper for exportation from Nagasaki (6.9 percent), white cotton textiles (6.5 percent), cotton seed oil (6.4 percent), and second-hand clothing (6.3 percent). Shinbô and Hasegawa 1988, 240-45.

advanced technologies and skills from China. Therefore, the technology transfer regarding weaving and dyeing had to rely exclusively on manuals imported from China and their popular editions devised by the Japanese, as well as the inventive ideas and unrelenting efforts of Japanese manufacturers, craftsmen, and farmers.[*19] As a result, we can see that home-grown silk and cotton fabrics of striped patterns with brilliant colour rhythms had been established for the use of outerwear for the fashion-conscious Japanese by the opening of the nation in mid-19th century (Tamura 2004, 9-10).

While tie-dyeing and embroidery were the most common techniques of producing ornamental designs in textiles at the beginning of the 17th century, the importation of multi-coloured and printed textiles had a great influence on the development of the dye art in Japan, such as *Yûzen-zome* (Yûzen dyeing) in Kyoto. However, Japanese craftsmen invented various manufacturing techniques different from the original methods in India or Java: motifs were first outlined with paste resist by using paper tubes coated with persimmon tannin, and then the natural dye was applied. Another popular technique used paper stencils, made with laminated *washi*-papers coated with persimmon tannin, when a mixture of paste and dye was put on a plain fabric; the fabric was then steamed to infiltrate the colours, and finally the paste was washed off.

It is said that copying foreign *sarasa* was initiated in the Nabeshima domain in North Kyushu, like some other manufacturing industries such as the porcelain industry in Arita, by abducted craftsman from Korea during the invasion of Choson Korea by Japan's ruler Toyotomi Hideyoshi in 1597. Tsuranuki Hidetaka counts eleven production centres of *wa-sarasa* (和更紗, literally "Japanese *sarasa*") established from the 1630s to the 1860s. Most of the production places were located in provincial capitals or populous cities (e.g., Osaka, Sakai, Edo, Hiroshima, and Tottori) for the daily use of discerning city dwellers. By contrast, the production of *Shibori-zome* (絞り染め; tie-dyeing), with comparatively easier techniques, developed mainly in towns and villages in rural areas. The difference in diffusion patterns seems to have reflected the difficulty of manufacturing technology and the demand from consumers (Tsuranuki 1994, 525-26 and 541-42).

It is also noteworthy that the import of semi-processed cotton textiles from China stimulated the development of textile manufacturing in Japan. In 1711, Chinese ships imported to Naga-

19 Christian Daniels examined the patterns of the transfer of manufacturing technology from pre-modern China to East and Southeast Asian countries, taking sugar production as an example. See Daniels 1991.

saki 7,342 pieces of cotton and linen textiles including 3,989 undyed cotton textiles (素木綿). It is most likely that the unfinished cotton goods were produced in Suzhou, Jiangsu, and brought for dying in Nagasaki and for sale. It was to meet the volatile taste of Japanese consumers that the finishing process was not conducted in the manufacturing districts in China with more advanced technology (Yamawaki 1964, 232-33).

Conclusion

Around 1640, Dutch mercantilists established a new trade pattern in Asia by linking the East China Sea maritime zone and the Indian Ocean zone through the medium of Japanese and Chinese metals and Indian and Persian silk and cotton. Japanese domestic markets thereby received a large and stable supply of Indian textile products, along with Chinese silk supplied by Chinese sea merchants and the domain of Tsushima, for the first time in history. Since Indian textile goods suited the tastes and the requirements of Japanese consumers and weavers, the VOC forwarded nearly 90 percent of the silver via Taiwan to its trading posts in India and Persia during the 1650s. The Dutch therefore could smoothly switch their principle Japanese export items from silver to gold and copper after their withdrawal from Taiwan in late 1661 and the subsequent ban on silver exports in 1668, as the VOC had placed the full weight of their commerce on Indian textile goods before the 1660s. The series of policy changes by the Tokugawa government (i.e., successive recoinages, quantitative restrictions on foreign trade, and the promotion of import substitution) since the late 17th century decimated Japan's external trade, and inevitably Japan's economy gradually reduced the degree of its dependency on foreign trade.

For this historical context, Japanese consumers in the Edo period associated exotic Indian textiles, that is, stripes, checks, and various *sarasa* motifs. By the beginning of the 18th century, domestic cotton textiles with striped patterns became affordable for ordinary town people, thanks to the developing commercial cultivation of cotton as well as the popularisation of high-status consumption. Maxine Berg discusses this pre-industrial European phenomenon as follows: [W]hile import substitution appeared to be the first priority of invention, the imitation to which inventors and projectors aspired was also a process of adaptation, of finding cheaper methods and sources of sup-

ply and of creating distinctive producers adaptable to broader markets for semi-luxuries (Berg 1999, 80). "Imitation" was no doubt a key word for the spread of home-made Indian-style textiles in the Japanese Archipelago during the 17th and 18th centuries.

[ふじたかよこ・大阪大学21世紀COEプログラム<インターフェイスの人文学>特任研究員]
[Designated Researcher, the 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University]

[WORKS CITED]

Berg, Maxine. 1999. "New commodities, luxuries and their consumers in eighteenth-century England." In *Consumers and Luxury: Consumer Culture in Europe 1650-1850*, ed. M. Berg and H. Clifford, 63-85. Manchester: Manchester University Press.

Dagregisters Japan. See Historiographical Institute. 2004.

Daniels, Christian. 1991. "Seisan gijutsu iten: Seitô gijutsu o rei toshite" [The transfer of production technology: A case of sugar production]. In *Ajia kôeki-ken to Nihon kôgyôka 1500-1900* [Inter-regional trade zones in Asia and Japanese industrialisation 1500-1900], ed. T. Hamashita and K. Kawakatsu, 69-102. Tokyo: Libro.

Flynn, Dennis O., and Arturo Giráldez. 2002. "Cycles of silver: Global economic unity through the mid-eighteenth century." *Journal of World History* 13(2): 391-427.

Fujita, Kayoko. 1999. "Oranda Higashi Indo Gaisha no Nihon-gin yusyutsu [Japanese silver exports by the Dutch East India Company]." In *Iwami Ginzan Rekishi Bunken Chôsa-dan saishû hôkoku-sho* [Final report of the historical research of Iwami Ginzan Silver Mine], ed. Iwami Ginzan Rekishi Bunken Chôsa-dan, 4: 131-141. Matsue, Shimane, Japan: Shimane Prefectural Board of Education.

—. 2005. *In the twilight of the silver century: A re-examination of Dutch metal trade in the Asian maritime trade networks. Global History and Maritime Asia Working and Discussion Paper Series* 1. Osaka: Global History and Maritime Asia.

Gaastra, Femme S. 1983. "The exports of precious metal from Europe to Asia by the Dutch East India Company, 1602-1795." In *Precious metals in the later medieval and early modern worlds*, ed. J.F. Richards, 447-475. Durham: Carolina Academic Press.

Glamann, Kristof. 1981. *Dutch-Asiatic trade 1620-1740*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

Historiographical Institute (*Shiryô Hensan-jo*), The University of Tokyo, ed. 2004. *Dagregisters gehouden bij de opperhoofden van de Nederlandse factorij in Japan* [Diaries kept by the heads of the Dutch factory in Japan]. Vol. 9, 1645-1646. Tokyo: Tokyo University Press.

Ishida, Chihiro. 2004. *Nishiran bôeki no shiteki kenkyû* [A historical analysis of Dutch trade in Japan]. Tokyo: Yoshikawa Kobunkan.

Iwao, Seiichi. 1953. "Kinsei Nisshi bôeki ni kansuru sûryôteki kôsatsu" [A study on the Chinese trade with Japan

in the XVIIth century – Chiefly on their volume and quantity]. *Historical Journal of Japan* 62(11): 1-40.

—.1958. *Shuinsen bôekishi no kenkyû*. [A research on the history of the vermilion-seal ship trade]. Tokyo: Kobundo.

—. 1959. "Japanese gold and silver in the world history." In *International Symposium on History of Eastern and Western Cultural Contacts, 1957 Tokyo-Kyoto, Collection of Papers Presented,* 63-67. Tokyo: Japanese national Commission for UNESCO.

Klein, P.W. 1986. "De Tonkinees-Japanse zijdehandel van de Verenigde Oostindische Compagnie en het inter-Aziatische verkeer in de 17e eeuw." In *Bewogen en bewegen: de historicus in het spanningsveld tussen economie en cultuur*, ed. W. Frijhoff and M. Hiemstra, 152-178. Tilburg: Gianotten.

Kobata, Atsushi. 1976. *Kingin bôekishi no kenkyû* [A study of precious metal trade]. Tokyo: Hosei Daigaku Shuppankyoku.

Nachod, Oskar. 1897. *Die Beziehungen der Niederländischen Ostindischen Kompagnie zu Japan im siebzehnten Jahrhundert*. Leipzig: Rob. Friese. Sep. –Cto.

Prakash, Om. 1985. *The Dutch East India Company and the economy of Bengal, 1630-1720*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

Raychaudhuri, Tapan. 1962. *Jan Company in Coromandel 1605-1690: A study in the interrelations of European commerce and traditional economies*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

Saitô, Osamu. 2005. "Pre-modern economic growth revisited: Japan and the West." *GEHN Working Paper* 16/05.

Shimada, Ryûto. 1999. "Tôsen raikô rûto no henka to kinsei nihon no kokusan daitaika" [The influence of change in junk trading routes upon production in early modern Japan: The case of sappanwood and safflower]. *Waseda Economic Studies* 49: 59-71.

Shinbô, Hiroshi, and Hasegawa Akira. 1988. "Tokugawa keizai no kôzô" [The economic structure of Tokugawa Japan]. In *Keizai shakai no seiritsu* [The establishment of an economic society in Japan], ed. A. Hayami and M. Miyamoto, 217-270. Tokyo: Iwanami Shoten.

Suzuki, Yasuko. 2004. *Kinsei nichiran bôeki no kenkyû* [A study of the Japan-Netherlands trade by the Dutch East India Company (V.O.C.) in the 17th and 18th centuries]. Kyoto: Shibunkaku Shuppan.

Tamura, Hitoshi. 2004. *Fasshon no shakai keizai-shi: Zairai orimono-gyô no gijutu kakushin to ryûkô shijô* [A socio-economic history of fashion: The technological development of the textile industry and the fashion textiles market in modern Japan]. Tokyo: Nihon Keizai Hyôronsha.

Tashiro, Kazui. 1981. *Kinsei nicchô tsûkô bôeki-shi* [A history of early modern Japanese-Korean relations]. Tokyo: Sôbunsha.

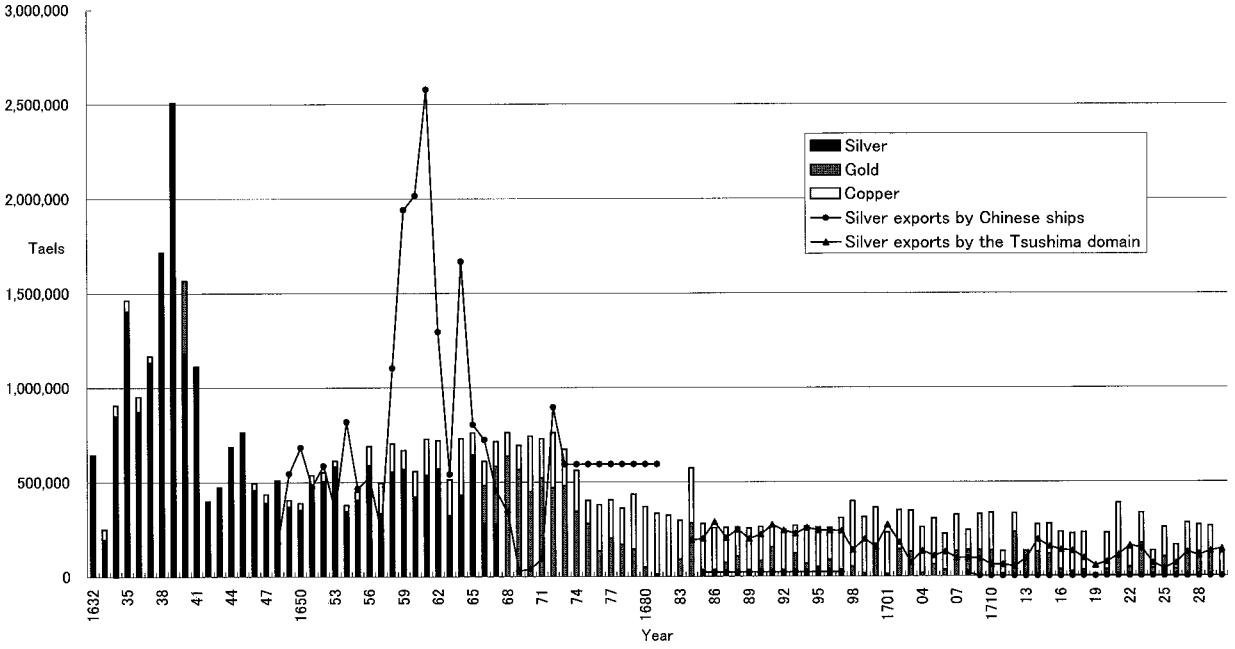
Tsuranuki, Hidetaka. 1994. *Nihon kinsei senshoku-gyô hatten no kenkyû* [A research on the development of dyeing and textile industries in early modern Japan]. Kyoto: Shibunkaku Shuppan.

Yamamoto, Hirobumi. 1989. *Kan'e jidai* [The Kan'ei period]. Tokyo: Yoshikawa Kobunkan.

Yamawaki, Teijirô. 1964. *Nagasaki no tôjin bôeki* [Chinese trade in Nagasaki]. Yoshikawa Kobunkan.

—. 1978. *Kaigai kôshô-shi* [A history of Japan's foreign relations]. Tokyo: Hosei University School of Correspondence Education.

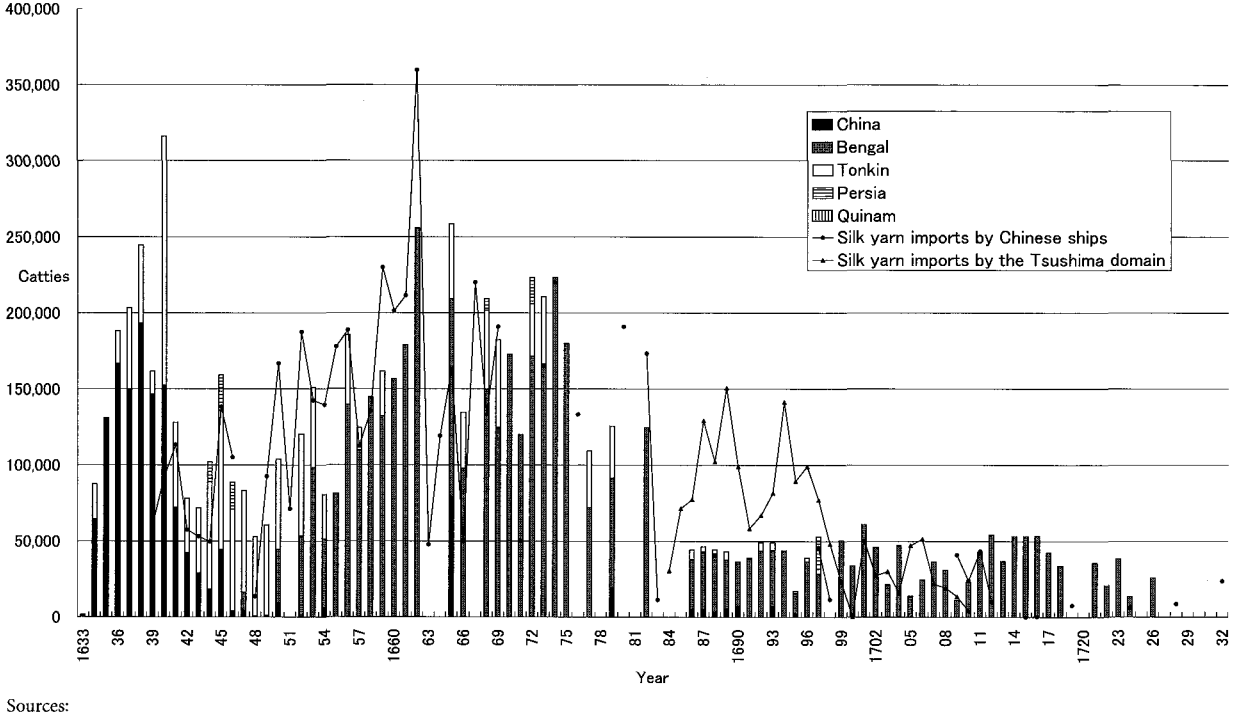
Graph 1: VOC's silver, gold, and copper exports, in comparison with the values of silver exports by the Chinese and the Tsushima domain, 1632-1730 (in taels)



Sources:
Silver exports by the VOC: Fujita 1999, Table 1, pp.137-41.
Gold exports by the VOC: Suzuki 2004, Table 2, pp.228-37.
Copper exports by the VOC: Suzuki 2004, Table 1, pp.147-68.

Silver exports by Chinese ships: Iwao 1953, Table 1, p. 28; Yamawaki 1964, p.214.
Silver exports by the Tsushima domain: Tashiro 1981, Table II-10, 271, and Table II-19, 325.

Graph 2: VOC's silk yarn imports to Japan from major places of origin, in comparison with the volumes of silk yarn imports by the Chinese and the Tsushima domain, 1633-1730 (in catties)



Sources:

From China by the VOC: Nagazumi 1999, Table 4, p.129; Yamawaki 1978, Table 32, p.190.

From Tonkin by the VOC: Nagazumi 1999, Table 4, p.129; Yamawaki 1978, Table 32, p.190.

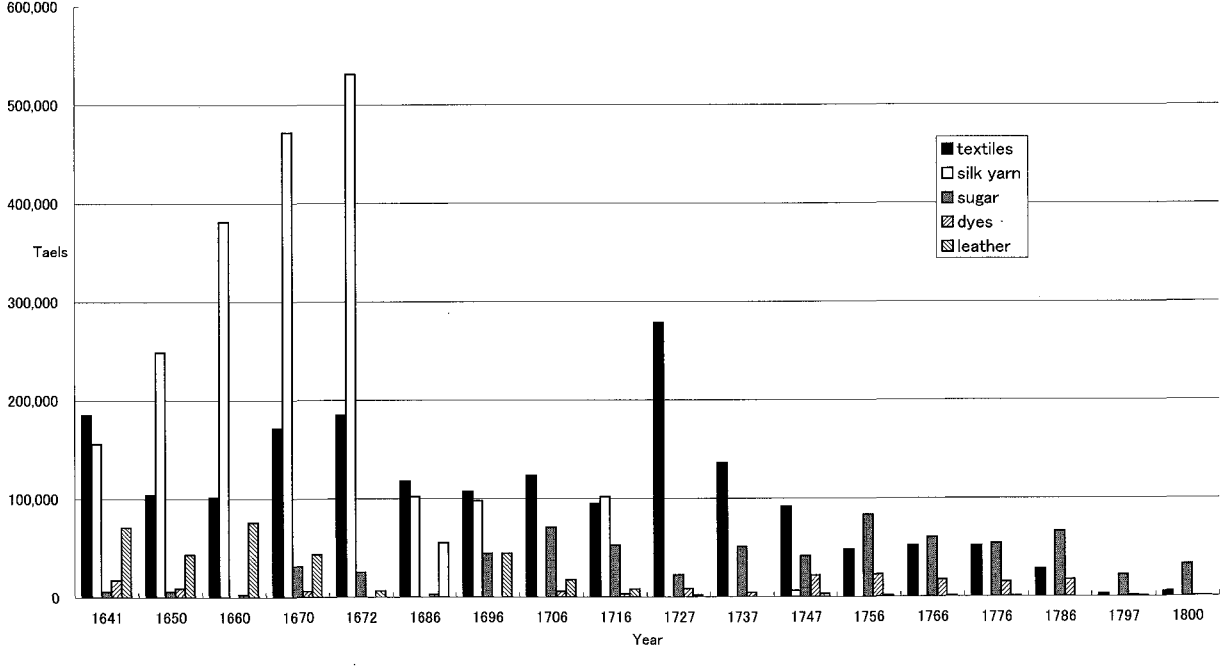
From Bengal by the VOC: Nagazumi 1999, Table 4, p.129; Prakash 1985, Table 5.1, p.126; Yamawaki 1978, Table 32, p.190.

From Persia and Quinam by the VOC: Yamawaki 1978, Table 32, p.190.

From China by Chinese ships: Iwao 1953, Table 1, p. 28; Yamawaki 1964, Table 18, p.229.

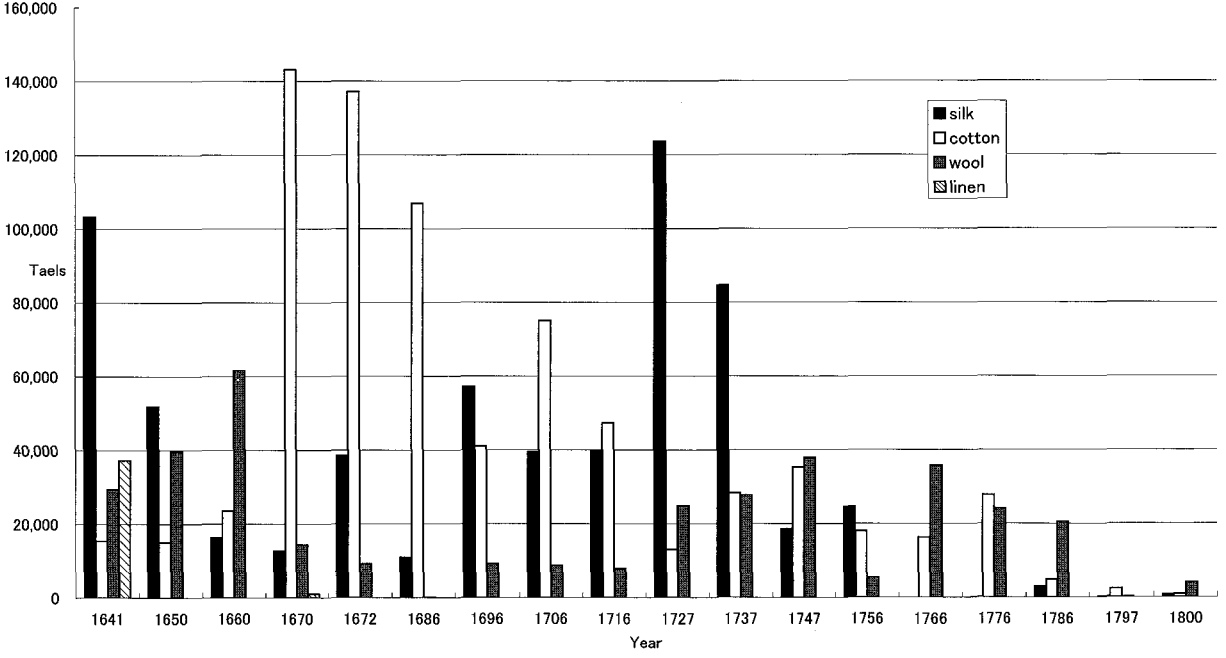
From Korea by the Tsushima domain: Tashiro 1981, Table II-13, p.281.

Graph 3: Trade values of major articles imported to Nagasaki by the VOC, 1641-1800 (in taels)



Source: Yamawaki 1978, Table 36, pp.218-19.

Graph 4: Trace values of VOC's textile imports to Nagasaki, 1641-1800 (in taels)



Source: Yamawaki 1978, Table 35, pp.216-17

第Ⅱ部
新しい歴史学と歴史教育の対話

大学・高校の専門家の協働による歴史教育の刷新にむけて
—第4回全国高等学校歴史教育研究会を振り返って—

佐藤貴保

I. はじめに —開催の趣旨—

大阪大学大学院文学研究科の史学系では、文部科学省21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」の取り組みの一環として、日本史・世界史（東洋史・西洋史）の壁を破る新しい研究と、その成果の高校・予備校など教育現場への反映などを計画し、後者の活動の中心として、全国の高校歴史教員を対象とした夏休みの研究会を過去3回開催してきた（平成15年度「シルクロードと世界史」、16年度「アジア史と日本史の対話」、17年度「新しい歴史学と歴史教育」）。さいわいこれらには、毎年全国から70～110名（3年間の実数で31都道府県200名強）の高校教員が参加し、参加教員や地方の研究会組織と事後もやりとりが続くなど、高大連携の新しい形態として一定の評価をいただくことができた。一方、昨秋には文部科学省の新プログラム「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に大阪大学文学研究科が応募して採択された「ソーシャルネットワーク型人文学教育の構築」（平成17～18年度）の一部という形で、「大阪大学歴史教育研究会」を立ち上げた。これは、上記研究会の成果も踏まえながら、高校教員のリカレント教育への参画を通じて、狭い専門に立てこもらない優れた研究者の養成をはかる取り組みで、小規模の研究会を長期間継続することを意図している。今年度はこの両者が共催する形で、第4回研究会を開催した。

本研究会の中心的なねらいは、なんだかよくわからないままに事項や年代を羅列する歴史教育とは違った、大きな流れにせよ個々の事項にせよ「考え方や背景がわかる」「像を結ぶ」歴史教育を実現するための土台造りにある。それは、通常の学術講演会と教育方法研究会の中間的な位置づけをもつ。主催者側の性格上、高校教育の方法・技術そのものには踏み込めないが、かといって最新の専門研究の紹介に終始するつもりもない。そのため本研究会では、最新の研究をふまえるが、過度に詳細・個別的ではなく、むしろ歴史学の全

体を見すえた巨視的な講義と、それに対する質疑・討論を行なった。また過去3回とも、詳しい質疑を通じて大学側が学ぶこと、考えさせられることが多々あった。今回は、そのような研修の双方向性をさらに強め、研修内容を大学側の教育改善や若手研究者のトレーニングに結びつけるため、昨年同様に過去の研究会の成果を活かした授業実践の報告なども行い、次年度以降の継続開催を意識した経験交流・討論のプログラムを充実させることとした。

新学習指導要領の内容の大きな変化、「世界史のとびら」「主題学習」の導入など高校歴史教育をめぐる最近の動きは、大手教科書の記述の急変が示すように、従来型の「新しい部分は敬遠して受験指導に集中する」(センター入試の場合、リード文は読まない) 対応ではもはや乗り切れないところにきていると思われる。だが、それにしたがって高校教育を刷新するには、受験界の保守性や、教育界・アカデミズム双方が「全体を見渡す」習慣と能力をひどく欠いていることなど、さまざまな障害が立ちはだかっている。その結果、たとえばシステム論・ネットワーク論や社会史などの新しい内容が、古い欧米中心主義や閉鎖的一国史観など「1周遅れ、2周遅れ」の何種類もの枠組みと入り混じった形で教えられ、かえって高校生や受験生を困惑させ、「歴史離れ」を助長しているように思われる。激動する現代世界に、青年たちをそのような状況で送り出すことの危うさは、高校教員も日々感じていることであろう。もとより数回の研究会ですべての主要問題を取り扱うことは不可能だが、本研究会では、個々の「新しいネタ」の提供だけでなく、それを生かせる新しい枠組みの構築と、そのための「古いネタ、古い枠組みの整理」を、強く意識した講演を実施してきた。

過去の研究会ではそれぞれテーマを立ててきたが、とりあえずCOEプログラム最終年にあたる今回は、その主要メンバーが斬新な研究成果を要約して紹介し、「阪大史学」の新しさを示すことを主題とした。その内容が、最近の教科書や大阪大学以外の入試問題にも影響しつつあることを高校教員にも理解できるように試みた。

筆者は、第2回研究会 (当時の名称は「全国高等学校歴史教員研修会」。第3回より現行の名称) 以来、3回にわたり、本研究会の事務局長を務め、企画運営等の実務作業を行なってきた。また、毎回の研究会終了後に参加教員から提出されるレポート・アンケートの回答を基に、本研究会の成果と問題点、ならびに大学における歴史研究と高校における歴史教育の連携の可能性、そして高校・大学双方が抱えている問題点を分析してきた。その分析結果は毎年次に発行している中間報告書で概要報告としてまとめている。

本稿ではまず、今年度開催した第4回研究会の概要を報告するとともに、過去4回にわたって開催した研究会を通じて、大学史学系の専門家が高校の歴史教育の専門家とどのような連携を行なうことが、本研究会のめざす高校歴史教育の刷新にとって有効なのか、事務局長として、そして若手研究者としての立場から私論を述べていきたい。

II. 会場および日程と参加者

1. 会場

大阪大学附属図書館　本館A棟6階　図書館ホール

2. 日程

2006年8月1日（火）

14:00～14:30　桃木至朗（大阪大学教授）「イントロダクション」
14:50～16:30　森安孝夫（大阪大学教授）「世界史上のシルクロードと唐帝国」

8月2日（水）

9:30～10:00　質問回答
10:10～11:50　平雅行（大阪大学教授）
「鎌倉新仏教論はなぜ破綻したか」
12:50～14:30　秋田茂（大阪大学教授）
「1930～50年代アジア国際秩序とイギリス帝国
—グローバルヒストリーの視点から—」
14:50～16:30　桃木至朗
「東南アジア史　誤解と正解」

8月3日（木）

9:30～11:30　質問回答

11:40～12:40　笹川裕史（大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎教諭）
「生徒が参加する世界史授業をめざして」
13:40～14:40　グループ討論会「歴史学と歴史教育の連携について」
15:00～16:15　全体討論会

3. 参加者一覧

本研究会には、41都道府県から230名を超す参加応募があった。この応募者数は、昨年の約2倍にのぼる。このほか、公務の都合で今回の研究会には参加はできないが、関心があるので今後も同種の企画が行われる場合には参加したい、報告書を送ってほしいとの希望者を含めると、総数は45都道府県300名に達する。今回は、これまで参加のなかった16の県のすべての高校に対し、研究会の案内状とポスターを送付した。これらの県では、案内状が届いて初めて、研究会の存在を知ったという教員が少なくなかったようである。これまで案内状は、すべての都道府県の社会科教育研究会事務局に対し送付してきたが、本研究会に関する情報は個々の教員レベルまで伝わっていなかったようである。各高校に案内状を送るという今回の広報活動は一定の成果があったものと判断される。今回は特に関東地方からの応募者が急増し、その総数は京阪神圏3府県の応募者数に匹敵した。

主催者側としては、応募者全員の参加を認めるべく、あらゆる検討を行なったが、会場の収容能力の限界や、予算の都合上、やむなく抽選の末、参加者を37都道府県97名の高校教員、7名の予備校講師・教科書出版関係者・報道関係者・県庁の高校教育関係者に絞り込まざるを得なかった。さらに過去の研究会に参加経験のある教員に対しては、出張費の全額を辞退した上での参加を求めることとした。参加見送りをお願いした応募者の方々に対し、本稿を借りて深くお詫び申し上げたい。

参加者の氏名・所属は北から順に以下の通りである。過去4回の研究会に参加した高校教員の実数（再参加者は数えない）は、43都道府県260名あまりに達する。

佐野祐子（北海道・旭川東高等学校）
竹谷保（青森・青森西高等学校）
伊藤真（秋田・秋田中央高等学校）
池田実（宮城・宮城県工業高等学校）
吉田理（宮城・宮城学院高等学校）
高橋徹（山形・谷地高等学校）
谷山杏子（福島・いわき秀英高等学校）
栗林幸雄（茨城・土浦日本大学高等学校）

飯塚勇一（群馬・富岡高等学校）
岩崎淳（埼玉・鶴ヶ島高等学校）
廣瀬和義（埼玉・所沢高等学校）
廣川みどり（千葉・木更津高等学校）
小豆畑和之（東京・小松川高等学校）
吾妻潤（東京・高輪高等学校）
大見真由美（東京・三田高等学校）
角田展子（東京・町田高等学校）
藤野正和（東京・つばさ総合高等学校）
吉野興一（東京・暁星中学・高等学校）
石橋功
（神奈川・県立外語短大付属高等学校）
大島弘尚
（神奈川・栄光学園中・高等学校）
九鬼逸子
（神奈川・日本女子大学附属高等学校）
小林克則（神奈川・厚木商業高等学校）
佐藤雅信（神奈川・寒川高等学校）
髙橋和子
（神奈川・横浜市立みなと総合高等学校）
袴田潤一
（神奈川・逗子開成中学校高等学校）
早川英昭（神奈川・大船高等学校）
古川寛紀（神奈川・上郷高等学校）
黒川尚美（新潟・湯沢高等学校）
城岡朋洋（富山・高岡高等学校）
滝中清志（石川・七尾東雲高等学校）
杉下憲司（福井・敦賀気比高等学校）
堂森峰春（福井・勝山南高等学校）
盛岡正男（福井・道守高等学校）
石原純（山梨・富士河口湖高等学校）
榊良（静岡・静岡聖光学院中・高等学校）
増田公洋（静岡・袋井高等学校）
小林和朗
（愛知・名古屋市立中央高等学校）
杉藤真木子
（愛知・名古屋市立緑高等学校）
杉本明隆
（愛知・愛知教育大学附属高等学校）
中尾浩康（愛知・南山高等・中学校）
松本圭以子（愛知・桜花学園高等学校）
冨澤要樹（三重・名張西高等学校）
新田康二
（三重・南伊勢高等学校南勢校舎）
大井喜代（滋賀・立命館守山高等学校）
牧雅人（滋賀・膳所高等学校）
水田博之（滋賀・比叡山高等学校）
岩月有行（京都・久美浜高等学校）
内田順子（京都・鳥羽高等学校）
川口靖夫（京都・嵯峨野高等学校）
毛戸祐司（京都・田辺高等学校）
後藤誠司
（京都・京都市立日吉ヶ丘高等学校）
島貫学（京都・京都府立朱雀高等学校）
難波謙一
（京都・京都女子中学校・高等学校）
堀江嘉明（京都・加悦谷高等学校）
松田宏（京都・網野高等学校）
村上直
（京都・京都市立伏見工業高等学校）

宇田川真（大阪・清風南海高等学校）
遠藤和男（大阪・西野田工科高等学校）
大畑正弘（大阪・高津高等学校）
北村素子（大阪・清水谷高等学校）
神於正明（大阪・岸和田高等学校）
笹川裕史（大阪・大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎）
髙橋勝幸（大阪・啓光学園高等学校）
田守隆敏
（大阪・大阪商業大学堺高等学校）
長友健史
（大阪・大阪星光学院中・高等学校）
中西雅子（大阪・清教学園高等学校）
西岡浩美（大阪・松原高等学校）
堀川喜子（大阪・渋谷高等学校）
山下宏明（大阪・園芸高等学校）
若林俊一（大阪・北淀高等学校）
若松宏英（大阪・登美丘高等学校）
上田義人（兵庫・明石清水高等学校）
鵜飼昌男（兵庫・神戸市立六甲アイランド高等学校）
置村公男（兵庫・六甲高等学校）
後藤善弘（兵庫・三木高等学校）
佃至啓（兵庫・日生学園第三高等学校）
矢部正明（兵庫・東灘高等学校）
吉村昌之
（兵庫・神戸市立神戸工科高等学校）
山本雅康（奈良・奈良学園高等学校）
瀬戸博司（和歌山・近畿大学附属和歌山高校・中学校）
間久美子（鳥取・鳥取中央育英高等学校）
山岸裕子
（鳥取・鳥取県立鳥取工業高等学校）
北垣秀俊（島根・隠岐水産高等学校）
大世戸治郎（広島・広島皆実高等学校）
田中英朗（広島・祇園北高等学校）
岡山真知子（徳島・城ノ内高等学校）
豊島修（香川・坂出商業高等学校）
真鍋篤行（香川・高松高等学校）
幸田和洋（福岡・東筑高等学校）
菅満津江（福岡・修猷館高等学校）
徳本次郎（福岡・筑紫女学園高等学校）
吉永暢夫（福岡・城南高等学校）
森永知宜（佐賀・弘学館高等学校）
中須賀浩師（長崎・青雲高等学校）
粟谷昌史（熊本・県立第二高等学校）
竹村茂紀（宮崎・日向学院高等学校）
奥山嘉邦（鹿児島・喜界高等学校）
桜井智之（東京・東京書籍株式会社）
小林一幸（東京・実教出版株式会社）
大矢雅史（東京・株式会社帝国書院）
村田悦和（東京・株式会社帝国書院）
渡辺延志（東京・朝日新聞東京本社）
松山仁史（東京・駿台予備学校）
卯月睦彦（千葉・千葉県庁）

上記のほか、高校との連携に関心を寄せている以下の大学教員が列席した。杉山・山内

両氏には、講演での司会を担当していただいた。

上谷浩一（大阪体育大学）
岡本弘道（大阪大学）
杉山清彦（東京・駒澤大学）
竹中亨（大阪大学）
堤一昭（大阪外国語大学）
中村薫（兵庫・芦屋女子短期大学）
山内晋次（大阪大学）

今回の研究会では、特任研究員のほか、魅力ある大学院教育イニシアティブ「大阪大学歴史教育研究会」（以下、「IAE」と略す）で幹事を務めている以下のリサーチ・アシスタントならびに大学院生に、会の運営の補佐やグループ討論会での司会を担当していただいた。

蓮田隆志（大阪大学大学院文学研究科特任研究員）
水田大紀（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程、リサーチ・アシスタント）
尾島志保（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程、リサーチ・アシスタント）
向正樹（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

このほか、研究会に関心を持つ大阪大学の学部生・大学院生、駒澤大学の大学院生など約30名の大学生が傍聴した。当初は50名近い学生が傍聴を希望していたが、会場の収容能力の限界のため、参加者を大幅に絞った。大学生の間にも、この研究会に対する関心が高まってきたことを示していると言える。

III. 講演・討論会の概要と質疑応答内容

1. 大学教員側の講演の要旨と質疑応答内容

1日目と2日目には、大阪大学大学院文学研究科の4名の教授が講演を行なった。講演の際に配布されたレジュメは、大阪大学文学部東洋史学研究室のホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/toyosi/main/）に掲載している。このため本報告書では講演の要旨のみを掲載する。

講演に対する質疑応答は、各講演の直後にも行なわれたほか、講演終了後に参加者全員が「質問票」に質問事項を記入のうえ提出し、翌朝各講師が書面ならびに口頭で回答した。3日目午前中にはフリートーキングの場を設けて、さらに質問を受け付けた。講演終了後も電子メールでの質問も受け付けており、本稿執筆中にも各講師への質問が参加者から寄せられている。書面回答の全容は、大阪大学文学部東洋史学研究室のホームページに掲載している。ここでは、口頭での質疑応答内容を中心に掲載する。

先に述べたように、今回は過去3回の研究会のような特別なテーマを設定せず、各講師の専門分野における最新の研究成果、ないしは教科書や入試問題の問題点を鋭く突いた内容で講演した。以下の要旨からもうかがえるように、いずれの講演も一国史観や西欧中心史観など従来の歴史の枠組みから脱却した巨視的な内容であった。

これに対する参加者からの質問には、各講演内容を高校の教育現場でどのように活用すべきか、従来高校で教えてきた内容をどの程度改めるべきなのかを確認するものが多数見られる。研究会で得た知見を何としても確実に高校の教育現場へ持ち帰ろうとする参加者の熱意が以下の質疑応答から伝わってくる。そして、質問に対する各講師の回答も、現場での活用における注意点だけでなく、歴史を学ぶことの大切さや学ぶ際の心構え、さらには現代社会の諸問題に対しても踏み込んだ見解を示している。現代社会との接点が無いように見られがちな歴史という学問ならびに歴史研究者が、決して現代社会を無視しているわけではないことを、講演のみならず、質疑応答を通じても示された。

◇森安孝夫「世界史上のシルクロードと唐帝国」

［講演要旨］

この4年間で3回目の講演であったが、毎回前半では、一貫して西欧中心史観と中華主義史観からの脱却を主張し、それに代わって中央ユーラシアに視点を置いた「世界史の構想」を提唱してきた。中央ユーラシアに視座をすえるというのは、火器や蒸気機関の出現以前において、地上最強の軍事力と最速の情報伝達能力を有した遊牧騎馬民集団と、物流および文化交流の根幹をなした陸のシルクロード＝ネットワークの存在を重視するということである。論旨に「揺れ」はないが、最初は6段階にしていた世界史の流れを以下の8段階に設定しなおし、私の主張をより鮮明に浮かび上がらせた。

世界史の8段階（長期波動）

1) 農業革命（第一次農業革命）　約11000年前より
2) 四大文明の登場（第二次農業革命）　約5500年前より
3) 鉄器革命（遅れて第三次農業革命）　約4000年前より
4) 遊牧騎馬民族の登場　約3000年前より
5) 中央ユーラシア型国家優勢時代　約1000年前より
6) 火薬革命と海路によるグローバル化　約500年前より
7) 産業革命と鉄道（外燃機関）　約200年前より
8) 自動車と航空機（内燃機関）　約100年前より

そして前近代の人類史において、シルクロードは決して無視できないこと、シルクロードの本質は軽くて高価な奢侈品の中継貿易であること、重いけれども自分で動く奴隷と大型家畜（とくに馬）も極めて重要な商品であったこと、などを述べた。中央アジア史にとっての画期はトルキスタン化とイスラム化であるが、イスラム化を強調しすぎると、時代区分に無理が生じるだけでなく、遊牧騎馬民族の活躍の舞台であった内外モンゴリアとチベットを中央アジアから排除するという本末転倒が起こることにも注意を促した。ちなみに、近現代の中央ユーラシアを語るときには、シルクロードという用語は使うべきでない。

今回の後半では、とりわけソグド商人が北中国～モンゴリア～河西～天山地方を股に掛けて活躍している実態に注目し、ソグド人の女奴隷を売買していることを明示する契約文書や、北中国で発見されたソグド人の墓なども紹介した。その際、新しい視点として、ソグド人が商人としてだけでなく、武人・外交官・政治家として活躍している点を強調した。

そしてさらに武人としてのソグド人やオルドスにいた匈奴が多民族国家である唐の建国に関わったこと、唐建国の立役者は北魏以来の鮮卑拓跋系の関隴集団であったこと、しかしさらに突厥という強大な遊牧騎馬民勢力との関係を抜きにしては、唐帝国を世界史の中に正当に位置づけることは出来ないこと、等々に論及した。

［質疑応答内容（一部）］

Q. 質問票：森安教授が重視する理科系的歴史学とは何か？

A. 森安：私は、世の中に溢れる歴史物は理科系的歴史学、文科系的歴史学、歴史小説の3つに分けられると考えている。大学の歴史学は、理科系的歴史学を基本とする。それは理科系的理論の証明のように、他人が追実験できるレベルであることを意味する。

文科系の歴史学においても、史料があって、それをどう組み立てていくか、「みなさん、私はこの史料からこのように考えました、どうですか」というふうに見てもらい、検討してもらう。それを8～9割の人に認めてもらったら、それで立派な理論だと私は信じている。

しかしながら、歴史学は史料がなければなにも言えないのも現実である。例えば中央ユーラシアには、中国世界やギリシア＝ローマ世界、ペルシア＝イラン世界、ムスリム世界に比べたら、史料がきわめて少ない。遊牧民族がみずからの文字史料を持ったのが、ようやく8世紀の第二突厥帝国の時代である。それ以前には何も書かれていない。敵側が、自分に都合のいいように書いた史料しか残ってない。つまり中央ユーラシア史については、理科系的歴史学だけで歴史としてのストーリーを語ることができない。分かっていることと分かっていることとの間の、大量の分かっていない部分を推測していかざるをえない。その推測に、責任を持つのが文科系的歴史学、責任を持たないのが歴史小説である。

Q. **質問票**：西トルキスタンより遅れた東トルキスタンのイスラム化について、カラハン朝の勢力は東トルキスタン西部にも及んでいたはずだから、森安教授の説明は不正確ではないか？

A. **森安**：確かにイスラム化したトルコ人が作ったカラハン朝の勢力は東トルキスタン西部にも及んでいる。しかし中部～東部には西ウイグル王国（天山ウイグル王国）が9世紀後半からチンギス汗に服属するまでの300年以上、厳然として存在したのである。そこの原住民（トカラ人や漢人たち）はずっと仏教徒であり、支配者となったウイグル人のあいだでは、最初の100年くらいはまだマニ教徒が優勢であったが、10世紀後半には仏教への改宗が始まり、11世紀には仏教がマニ教を圧倒する。この本物のウイグル人たちがイスラム化していくのは、もっとずっと遅れて、モンゴル帝国が滅んだ後である。それゆえ、モンゴル時代のウイグル商人は仏教徒がほとんどで、一部に景教徒を含むが、イスラム教徒（回教徒）はいない。一方、旧カラハン朝、ホラズム朝など出身のトルコ系商人は、同じトルコ語をしゃべっていてもイスラム教徒であり、それを回回商人と呼ぶ。回鶻（本物のウイグル）と回回との混同・誤解は、中華から見て同じ西方のトルコ系商人であるというところに起因するのである。

なお、回教・清真教という言葉は唐宋代には存在せず、四夷教という言葉もない。史

料に出てくるのは「三夷教」だけである。勝手にイスラム教を押し込んで四夷教などという用語をでっち上げるのは、最終的に全てがイスラム化した東トルキスタンの新ウイグルの状況を過去にまで投影し拡大解釈するもので、これまた本講演で繰り返したような「勝てば官軍」の誹りを免れまい。

Q. 質問票：世界帝国としての唐の確立した年代はいつなのか？ これまでは628年と教えてきたが間違いなのか？

A. 森安：それでも間違いではない。突厥を除く国内の群雄のすべてを平らげたのは628年のことで、ここにようやく唐による漢人中国（本当は唐人中国と言うべき）の再統一が完成する。しかし、中央ユーラシア史全体の流れからいえば、630年の唐による東突厥打倒・併合、657年の西突厥打倒が重要な画期であり、私なら唐の確立を630年とする。つまり唐代史を中国の内側だけから見れば628年、中央ユーラシア全体という外側から見れば630年となるはず。

太宗・高宗2代が唐の絶頂期だが、657年は父の偉業を受け継いだだけの凡庸な君主・高宗の時代であり、評価しにくい。唐帝国を世界帝国にしたのはやはり太宗・李世民。私は本講演で、李世民の悪口をいっぱい言ってきた。彼は歴史を捏造した権力者だからだ。しかし、確かに大きな功績も残した。

Q. 質問票：沙陀とはどういう民族か？

A. 森安：沙陀というのは沙陀突厥の後裔で、やはりトルコ系民族。しかし、10世紀の北中国に五代のうちのトルコ系4王朝（後唐・後晋・後漢・後周）を形成した沙陀族の場合は、そこにソグド人やソグド系突厥の要素も加わっているから、8世紀までの沙陀とは違う沙陀族ということになる。つまり10世紀の沙陀族の中にはトルコ系もいれば、ソグド系も漢人もいる。皆がまとまって、国を作れば、それがそのうち「〇〇民族」になる。

よく誤解されるが、現代の新疆にいるウイグルというのは、私が講演で紹介した前近代のウイグルとは似て非なるもの。20世紀になって「おれたちウイグルになろう」といってなった新しい民族集団。いわば偽ウイグルである。歴史上の民族概念は全てその程度のもの。いまはまだ「アメリカ民族」はいないが、100年200年たてばアメリカ民族ができるだろう。人種や言葉が色々でも、皆英語をしゃべるようになってアメリカ民族

になるだろう。国家が民族を作るのである。

Q. **大阪・大畑正弘**：理科系的歴史学というのを提唱されるが、実証史学という表現でいいのではないか。理科系的という言葉に何らかの価値が入っているように思えるが？理科系重視の風潮を意識してのことか？

A. **森安**：簡単に言えば、実証史学のことを理科系的歴史学と言っている。この言葉は単にわかりやすく学生に教える時のアイデアとして出てきた言葉。戦略的意図は無い。

Q. **三重・冨澤要樹**：唐は、遊牧的世界の中で勝利して、農耕的世界のチャンピオンになったとしたら、その支配は遊牧民が農民を支配するというタイプであると捉えるということになる。これまでは均田制や府兵制を、農民の中で農民を支配する、というタイプと考えられてきた。それがどのあたりから来たのか。均田制・府兵制自身が、実は農耕民的な文化なのではないか？

A. **森安**：学界では均田制・府兵制自体に、古い漢民族由来ではない新しい遊牧民的要素があると指摘されてきている。まず均田制そのものは、北魏の時代からのアイデアで、遊牧民が中国農耕民を支配する時のアイデアではないかという考え方がある。府兵制については、兵農分離なのか兵農一致なのかという大原則自体にも議論があり、まだまだこれからの課題。Cf. 白須浄真、書評：氣賀澤保規著『府兵制の研究』、『東洋史研究』60-1、2001年、pp. 174-185。

（このほか以下のような質問が寄せられ、書面回答が提出された。詳細はホームページを参照されたい。）

・「世界史の8段階」について、あまりに軍事力を前面に押し出すことは、現在の我が国の情勢からみて危険ではないのか？
・「世界史の8段階」に環境史の視点はあるのか？
・10世紀前後のユーラシアに一斉に中央ユーラシア型国家が出現したのは、お互いに情報交換でもしたのか？
・中央ユーラシア遊牧民側の識字率はどれくらいだったのか？ もしそれが高かったのなら、文書行政が中央ユーラシア型国家の成立の重要な鍵であるという説明とどう絡むのか？

・遊牧民であったウイグルが定住していく過程はどうだったのか？
・ソグド人とは？ ソグド人のイメージがつかめない。唐以降のソグド人の動向やソグド人の活動の終末について知りたい。
・経済力も武力もあったのなら、なぜソグド人自身は中央ユーラシアにまたがる国家を作らなかったのか？
・ソグド文字についてもっと詳しく　・ソグド人の宗教について詳しく
・シルクロードの重要商品としての奴隷と、奴隷の供給源について説明してほしい。
・唐を拓跋国家とみなす学説は、日本の学界、さらに中国や欧米の学界では、どの程度認知されているのか？
・ソグド人の安興貴・安修仁兄弟は後には仲違いしたのか？
・唐太宗を支えた山東集団とは何か　・唐太宗の歴史改竄の具体例について
・ソグド人郷団と府兵制との関係については何を参照すればいいか
・蕃君長に関して、当時の日本の扱いはどの程度だったのか？
・大量の鮮卑人や突厥人が北中国に移住してきたときの具体的状況は？
・費也頭について詳しく　・拓跋国家と独孤氏の関係は
・拓跋とトルコ系民族との関係は？　・ビザンツから見たスキタイ人の問題
・均田制・租庸調制・府兵制は隋唐支配の3点セットといわれている。実際にはどの程度、機能していたのか？ また、さまざまな生産形態を持つ被支配民族に対して、唐はどのような支配方法で臨んだのか？
・煬帝と楊姓の関係について　・長安以外にも胡風は広がっていたのか？
・安史の乱を「早すぎた征服王朝」としてとらえる視点をもっと詳しく；宮崎市定の財政国家論の視点が抜けているのではないか？
・中国史の分水嶺について詳しく　・視座を中国からユーラシアへ向ける必要性
・早すぎた「征服王朝」について詳しく　・漢民族の実体、漢化の概念について詳しく
・森安教授は欧米や中国がよほど嫌いなのですか？
・最近の教科書からオゴタイ・ハン国の表記が消えているのはなぜか？

◇平雅行「鎌倉新仏教論はなぜ破綻したのか」

［講演要旨］

かつて私たちは、鎌倉新仏教を論ずれば鎌倉仏教を語ったことになった。鎌倉幕府を論

じることは中世国家を語ることであった。つまり幕府・在地領主制・武家法・鎌倉新仏教の成長と発展を語れば中世を論じたことになっていた。しかしこうした歴史像への批判が提起されて半世紀近くに及んでおり、そこで蓄積された研究成果はようやく歴史教育の現場に及ぼうとしている。近年の教科書が、中世の始まりを鎌倉幕府ではなく、院政時代に改めたのはその一端である。だがこれは、中世の始まりが150年早くなったという話ではなく、古典的な中世史像が崩壊したことを意味している。

たとえば私たちは、鎌倉時代の仏教の動向を、「鎌倉新仏教」と「旧仏教の復興運動」という二潮流で捉えている。しかしその区分に学問的根拠はあるのか。叡尊の真言律宗は鎌倉中後期に爆発的な発展をみせたが、それは古代律宗とは教義も教団も異質であった。とすれば、叡尊を鎌倉新仏教の祖と呼んでよいと思うが、なぜか彼は「旧仏教の復興運動」に入れられている。他方、日蓮は天台宗の復興をめざした。また、室町時代の日蓮宗寺院の多くも延暦寺の末寺であった。とすれば、日蓮は「旧仏教の復興運動」に入るはずだが、なぜか鎌倉新仏教の祖とされている。この分類基準は何なのか？

話は簡単だ。真言律宗は戦国時代に衰退したこともあり、江戸時代には独立した宗派として認められず、真言宗と律宗に分けて組み入れられた。それに対し日蓮宗は、江戸時代に独立した宗派として認められた。つまり「鎌倉新仏教」と「旧仏教の復興運動」を弁別する判断基準は、江戸時代に独立した宗派として認められたかどうかにある。400年後の弟子たちの処遇のされ方によって、鎌倉仏教の弁別基準が定められている。これは学問といえるだろうか。「鎌倉新仏教」「旧仏教の復興運動」の語は、中世仏教の分析概念としては何の有効性もない。「新仏教」の語をもし使いたいのであれば、浄土真宗や日蓮宗を「戦国新仏教」「江戸新仏教」と呼ぶべきである。

では、鎌倉新仏教が中世仏教であり、これによって初めて仏教の教えが民衆の世界にまで及んだとする歴史像のどこに問題があるのか。最大の問題点は、古代仏教・旧仏教の質的変化を見落としていることである。多くの概説書では旧仏教についての叙述は、平安初期の空海・最澄で終わっている。それ以降はまともに取りあげられず、強訴や戦争に明け暮れたかのようだ。しかし、現実には旧仏教は大きく変わっていた。10世紀の律令体制の崩壊、それに伴う宗教政策の変化が、その性格変化を促して旧仏教を貴族や民衆の世界へと浸透させることになった。強訴とは旧仏教が民衆的世界にまで浸透していたことの証しである。また旧仏教が提起した悪人往生や女人救済論は、民衆歌謡（『梁塵秘抄』）に謡われるほど、人口に膾炙していた。つまり仏教の民衆開放は、法然や親鸞がはじめて達成

したのではない。すでに旧仏教が院政時代にそれを実現していたのである。

［質疑応答内容（一部）］

Q. 大阪・若松宏英：旧仏教が教義を民衆化していく時に、元々の支配層からの反発などはなかったのか？

A. 平：教義の民衆化とは実際には「凡夫」の救済をいうが、ここでいう凡夫とは僧侶でない者のことだ。だから凡夫という言葉には、民衆だけでなく貴族も入る。そういう意味では、「教義の民衆化」は「教義の世俗化」「教義の貴族化」と言うこともできる。

Q. 大阪・笹川裕史：10世紀頃に王朝国家における仏教の保護が崩壊したというが、院政期には莫大な資金を旧仏教に投じている。小さい寺院の一部と大きい寺院だけが残ってそこに重点的に投入したということか？

A. 平：院政期に政府が仏教に莫大な資金を投じたのは、旧仏教が国家と仏教との関係をもう一度再構築することができたからだ。その時に重要な役割を果たしたのが、末法思想である。旧仏教は意図的に末法思想を蔓延させた。この末法思想とはどういうものかというと、現状のままでは日本は破滅するという考えだ。

今のままでは仏法が廃れ、日本は末法に飲み込まれ暗黒の戦乱の時代になる。王権は瓦解し、民衆生活も破綻する。そうなることを阻止するには、仏教を盛んにして、信仰の力で末法を克服するしか道はない。荘園を寄進して寺院の経済基盤を安定させれば、日本が暗黒の戦乱の世に転落することを止めることができる。だから東大寺に荘園を寄進するのは、東大寺のお坊さんのためではなく、朝廷のため、民衆のため、そして日本全体のためである。このような理屈で、国の平和にとって仏教が欠かせないことを再認識させることができたために、仏教興隆に莫大な資金が投入されたのだ。いわば国の安全保障にとって仏教が有益だと考えた。こうして旧仏教は院政時代に最盛期を迎えることになる。

Q. 質問票：院政時代を鎌倉幕府の成立より重視する根拠は？

A. 平：院政時代を中世の始まりとするのは、院政時代に成立した社会システムが基本的に応仁の乱まで続くからだ。荘園制（荘園公領制）社会の成立。年貢と公事、そして一国平均役（段銭）という三本立ての負担体系。大田文の作成や大番役の編成などがそ

れである。こうしたものを土台にして、中世の支配のシステムは成り立っている。そしてこのシステムの主導権を握る人間こそ変わってゆくものの、これが応仁の乱まで続く。大田文や大番役は、かつては鎌倉幕府から始まるとされていたが、石井進の研究によってこれも院政時代から始まることが明らかにされた。

Q. 質問票：時代区分へのこだわりは必要か？

A. 平：本当のところをいえば、近年の日本史研究者も時代区分論への関心を失っている。時代区分論はほぼ1970年代で終焉したといえるだろう。私が法然・親鸞の思想史研究へと向かったのも、1970年代の時代区分論に興味がもてなかったからだ。

しかし、時代区分論へのこだわりを棄てたとき、古典的な時代区分論がそのまま亡霊のように生き延びる危険性もある。たとえば、「地頭の荘園侵略」。これが教科書に取りあげられたのは、地頭＝中世、荘園領主＝古代という図式がもとになっている。この図式が崩壊すれば、「地頭の荘園侵略」の項目に意味はない。また浄土教の発展についても、教科書では大きく取りあげているが、法然・親鸞の思想こそ中世仏教の典型であるという議論が崩壊した今、平安浄土教の発展を大きく取りあげる意味はほとんどない。実際には浄土教は、御霊信仰や方違え、ケガレ観と同じ程度の歴史的意義しかない。

時代区分へのこだわりを棄てるだけでは、かつてのこうした古典的図式をそのまま無批判に延命させることになりはしないか。私はその点に危惧を覚える。これらの記述を削除・改訂させるためには、積極的な議論が必要だ。時代区分へのこだわりの放棄がこうした積極的議論を生むことにつながるなら、それはそれでよいと思うが、今のところ私はその点には懐疑的だ。

Q. 質問票：「武士の時代」でないとすると中世は何の時代か？

A. 平：私たちは普通こういう時代の切り取り方をしているだろうか。古代は何の時代か、現代は何の時代なのか。歴史は複雑で、そう簡単に一言で切り取ることはできない。ワンフレーズによる単純化が危ういのは政治だけでない。歴史学においても同じはずだ。

中世を「武士の時代」とする言説は、右と左の2つのイデオロギッシュな危うさを抱えている。神戸大学の高橋昌明の指摘したことだが、日清・日露戦争の頃、鎌倉幕府に対する一つの叙述パターンが形作られた。鎌倉幕府は天皇の支配権を脅かした存在で

あったが、戦前でも必ずしも悪いイメージで描かれているわけではない。清新で質実剛健な鎌倉武士が腐敗した京都を打倒していくという図式ができていた。注意すべきは、この図式の背後には、東亜の新興国家日本が腐敗した中国を打ち破って東亜の盟主となっていくというイメージがあることだ。鎌倉幕府—京都と軍国日本—清朝とがダブルイメージされている。鎌倉武士を「清新で質実剛健な」といったプラスイメージで形容することは、軍国日本の兵隊さんを「清新で質実剛健な」プラスイメージで語ることと同じ機能を果たしていた。その点でいえば、中世を武士の時代と語ることは、近代は軍国日本が東アジアの盟主になる時代であるというメッセージをその背後にもっていた。

もう一つの左の問題点だが、石母田正『中世的世界の形成』は中世が武士の時代であったことをみごとに叙述してみせた。この講演で、石母田領主制理論への批判を一つ紹介したが、実は中世史家の反発はそれとは別のところにあった。石母田正は、古代的抑圧のなかから中世的世界を切り開いていく唯一の歴史的変革主体が武士・在地領主だと主張した。逆にいえば、百姓は歴史的変革主体ではありえないことになる。石母田によれば、古代の奴隷制から中世的な農奴制の世界へと転換させることができるのは、奴隷には不可能であって、領主の力を借りないと無理だ、だから百姓は唯一の歴史的変革主体である武士に協力すべきだ、ということになる。

中世の成立期に、悪僧たちが武士への抵抗運動を組織して強訴を行なった、これが中世仏教の発展の原動力であったという話を私はしたが、こうした武士の支配に抵抗した人々のことを、石母田はあたかも「人民への裏切り者」であるかのように、非常に厳しく断罪している。一般に荘園領主に比べ、武士の支配の方がはるかに過酷だった。だから山城の国一揆のように、中世の百姓たちはしばしば武士の支配よりも荘園領主の支配を望んだ。実質的な村の運営権を握ることができたからだ。ところが石母田領主制論では、武士に対する百姓たちのこうした抵抗は、歴史の進歩に逆行する反動的活動ということになる。この評価に多くの中世史家が反発したのだ。中世を「武士の時代」とする言説は、百姓は歴史的主体たりえないという民衆侮蔑がその背後にある。私たちはこういう言説を無批判にまき散らしてよいのか。

石母田領主制論は、前衛党論の中世版という一面をもっていたと私は思う。現代社会の矛盾を切り開いていく唯一の変革主体は前衛党であり、そこに結集すべきだという古典的な前衛党理論。石母田領主制論がかかえる問題は、前衛党理論がかかえる問題でもあったと思う。

Q. 質問票：平の中世仏教論は現代社会に対してどのようなメッセージをもつのか？

A. 平：私は今回の話を半年かけて大学一年生の共通教育で講義しているが、その時、必ず盛り込む話が一つある。「未来からの眼差し」の話だ。

日本の中世では、鎮護国家と五穀豊穣の祈りに膨大な資金を注ぎ込んで、平和と繁栄を祈りの力によって実現しようとした。今の私たちからみると、荒唐無稽な虚妄に過ぎないが、彼らは大まじめにそれに取り組んでいる。その姿をみて、「中世の人々はバカだった」と嘲笑ってすますのであれば、それは天に唾するものだと思う。私たちは確かに、800年前の人々が抱いていた宗教の迷妄を簡単に見て取ることができる。とすれば、800年後の人々は今の私たちをみて、現代の私たちが囚われている迷妄を容易に見抜くことができるに違いない。

確かに私たちは、宗教の迷妄からは解放されたかも知れない。しかし、国家という妄想、民族という妄想、マネーという妄想、こういう妄想は今や私たちをますます強く縛り付けている。国家や民族やマネーなるものがたとえ妄想であるにしても、今の私たちはそれとの関わりなしに生きてゆくことができないように、中世の人々もまた宗教の迷妄を生きるしかなかったのだ。

800年前の歴史を学ぶことによって、800年後の人々が今の私たちをどのように見るだろうかと想像してみる。それが歴史を学ぶ意味だ。過去の迷妄を前にして現代の迷妄を振り返ってみる、いわば「未来からの眼差し」を私たち一人ひとりが自分自身の中に意識をすること、それが過去の歴史を学ぶ意味ではないか。私は学生たちに、必ずこの話をすることにしている。

Q. 質問票：神仏習合や寺院と神社との関係について詳しく。

A. 平：神仏習合は8・9世紀から始まり、院政時代になると本地垂迹説が登場して、神と仏は見た目こそ違うが本質的に同じだという議論が普通になってゆく。日本中世では基本的に、ほとんどの寺院には鎮守社が設けられ、ほとんどの神社には神宮寺が置かれていた。つまり寺院には必ず神社があり、神社には必ず寺院があって、両者の違いがなくなっていった。その結果、石清水や鶴岡八幡のように、お寺か、神社かわからないようなものが登場してくる。これらは今でこそ神社だが、中世では「石清水八幡宮寺」「鶴岡八幡宮寺」が正式名称であった。

こうした風潮に抵抗して神社の独自性を維持しようとしたのが伊勢神宮であったが、

モンゴル襲来後になると、伊勢神宮の内宮と外宮それぞれの脇に法楽舎という神宮寺が造られた。200人以上の僧侶がいたので、相当大きな寺院であったことがわかる。ほぼ同時期に、天皇の即位に即位灌頂という仏教儀礼が導入され、やがてそれは大嘗祭の時にも行われるようになった。こうして伊勢神宮や天皇までが仏教と習合していった。

このように神と仏は限りなく一体化していったが、しかし異なる部分も残った。それは戦争だ。仏は戦わないが、神は戦争をした。中世の文献に「凡夫の戦」と「神の戦」という言葉がでてくる。つまり人間が行う戦争のほかに、神々の世界も戦争が行われていると中世人は考えていた。「神の戦」の代表的なものがモンゴル襲来の「神風」である。「神の戦」では仏教は神の力をパワーアップさせる機能を果たした。神さんがへとへとに疲れているところでお経を読んだりすると、神が元気になって肥え太るという。仏教の読経は「ポパイのほうれん草」のように、神を元気にした。そして戦う神々を、当時の史料では「神兵」と呼んだ。

さて、靖国神社は戦死者たちを「神」「神兵」として祀っている。靖国神社の登場によって、日本の軍隊は近代国家のなかでもずいぶん特殊な性格を帯びることになった。近代国家はいずれも、自国民を徴兵して戦争に動員をしたが、そこでの徴兵は、あくまで生きている間だけのことで、死ねば終わりであった。死んでからは戦う必要がない。ところが靖国神社は戦死者たちを「神兵」として祀っている。彼らを神に祀ることが、なぜ靖国（日本の平和）につながるのか。それは、英霊たちが「神兵」となって異敵の侵入を防いでいるからだ。私たちの多くは忘れているが、「神兵」たちの護国の戦いは今なお続いている。

日本の兵士は戦場でお国のために戦うだけではない。名誉の戦死をとげた者は神として祀られ、「神兵」となってなお護国の戦いを強いられた。かつて私たちはそれを栄誉と考えた。靖国神社の英霊とは神々の軍隊である。日本の兵士は死んでのちも、戦いをやめることを許されていない。

私たちは今、あの英霊たちに何を語り、何を祈ろうとするのか。もしも彼らに、「これからも私たちを、そして私たちの国を守りつづけてください」、そう願いたい人々は靖国神社に参拝すればよい。しかし彼らに対し、「あなたたちは日本のために十二分に戦った。もうこれ以上、戦わなくてよい。武器をおいてふるさとに帰れ。そして、故郷で家族のもとで安らかに眠ってください」、そう語りかけたい人々は、靖国神社に参拝してはならない。家族や戦友を、靖国神社に祀らせてはならないのだ。

私たちは戦没者に鎮魂の祈りを捧げようとしているのか、それとも今なお護国の加護を「神兵」たちに願うのか。中国や韓国の批判に感情を高ぶらせる前に、私たち一人ひとりが自らの胸にもう一度、静かに問いかけるべきだ。

Q. 長崎・中須賀浩師：「神は戦う、仏は戦わない」と言うが、仏教はインドのヒンドゥー教や在来信仰から来ているのでシヴァ神なども入っている。仏の弟子である十二神将などは戦うわけであるから、「仏は戦わない」というのは正しいのか？

A. 平：四天王や十二神将は仏ではない。仏教の守護神であって、仏そのものではない。日本の神々も神仏習合で鎮守神・守護神となってゆくので、日本の神と十二神将などは性格が近似してゆく。そもそも私たちが死者の成仏を願い、鎮魂の祈りを捧げる時に、亡くなった父母兄弟や友人たちが四天王や十二神将に生まれ変わるよう祈るだろうか。死者を「神兵」として祀るというのは、日本の歴史において異例のあり方である。

◇秋田茂

「1930～50年代アジア国際秩序とイギリス帝国 ―グローバルヒストリーの視点から―」

［講演要旨］

本講演では、新たな世界史の模索である「グローバルヒストリー」構築の一環として、第二次世界大戦をはさんだ1930～50年代のアジア国際経済秩序を連続性の観点から再考した。その際に、戦前の「帝国」秩序の崩壊（脱植民地化）とヘゲモニーの移行（パクス・ブリタニカからパクス・アメリカーナへ）の関連性、世界システム内部でのアジア世界の「相対的自立性」、国際金融面でのスターリング圏の重要性に着目した。

まず、1930年代のアジア国際秩序に関して、30年代の日本と中国が展開した経済外交を再評価した。イギリス帝国との関連では、ブロック経済体制としてのオタワ体制（帝国特恵体制）とスターリング圏の開放的性格を、アジア側から再考した。モノ（輸出入）のレヴェルでは、1933～34年の第一次日印会商に注目した。日印会商では、籠谷直人や木谷名都子の研究が明らかにしたように、大阪に本拠を置いた大日本紡績連合会によるインド棉輸入ボイコットが交渉の行方を左右した。交渉の過程で、日本の綿製品に対する英領インド側の輸入関税率については、帝国特恵を認めたうえで早期に妥協が成立した。最大の問題は、インド政庁が新たに要求したインド棉花の対日輸出拡大（綿布と棉花のリンケイジ問題）であった。本国への円滑な債務返済を行うために、インド側は棉花輸出の安定

化による外貨収入の確保が不可欠であり、日本は本国以上に重要な貿易相手国であった。カネ（金融）のレヴェルでは、1935年の中国幣制改革をめぐる国際関係を検討した。幣制改革の成功は、当事者であった中国国民政府の周到な準備に加えて、英米両国の協力を引き出した中国当局の巧みな経済外交に依存していた。協力したイギリス側からすると、中国を実質的にスターリング圏に包摂して、基軸通貨としてのポンドの価値を高めることができた。ここでも、日印会商の場合と同様に、双方の経済利害は相互補完的であった。

次いで、戦後の1950年代の東アジア（東南アジアを含む）の国際経済秩序においても、スターリング圏が依然として重要性を有したことを日本の経済復興と結びつけて論じた。戦後アジアの低開発のスターリング圏諸国にとって、日本は、本国の限られた生産能力を補完する安価な代替供給源（綿製品・雑貨）であり、同時に、自国の第一次産品の輸出市場（パキスタンの棉花、オーストラリアの大麦、英領マラヤの鉄鉱石）であり、日本向け輸出が圏外輸出の12%を占めた（1952年）。経済復興を進める日本にとっても、スターリング圏諸国向けの輸出は45%を占め、双方にとって貿易とポンド決済を通じた広範な相互依存関係が復活した。この相互依存関係を支えたのが、対日スターリング支払協定であった。また、日本側は、スターリング圏で例外的に優遇された香港の自由為替市場（香港ギャップ）を利用して、米ドルを獲得して戦後復興に活用することも可能であった。

以上のように、1930年代と50年代の間には、スターリング圏とアジア貿易ネットワーク（アジア間貿易）の両面で、ある種の連続性を指摘できる。我々は、こうした関係史的な見方にもとづいて、国際政治経済秩序の側面からグローバルヒストリーを構築できる。1990年代の「東アジアの奇跡」もこうした長期の歴史的射程で考察すべきであろう。

［質疑応答内容（一部）］

Q. 質問票：講演では、大日本紡績連合会によるインド綿の購入ボイコットに触れていたが、インド綿の品質と日本の綿紡績産業にはどのような関係があったのか？

A. 秋田：インド綿は基本的に切れやすい短繊維の構造を有しており、糸をつむぐ際には太い糸に仕上げなくてはならない。それで織物を織ると、少し厚手の、比較的安価な製品が出来上がる。日本の綿紡績産業の主力商品は、どちらかといえばインド綿を用いたこの厚手の織物だった。一方、産業革命の本場ランカシャーでは、長繊維の構造を有し、薄手の織物を織ることができるアメリカ綿が主に原料として使われていた。したがって、英国で産業革命が勃興した後も、インド綿を原料とするアジアの綿紡績産業

と、アメリカ綿を原料とする英国のそれとはある程度住み分けを図ることができたのであり、英国での産業革命の勃興によってインドの紡績産業が壊滅した、というマルクスの主張は言いすぎ。確かに高級品についてはかなりの打撃を受けたが、日用品に関しては、ほとんど影響はなかった。補足すると、日本、特に大阪の綿紡績業の最大の強みは、インド綿とアメリカ綿の混紡技術を有していた点にこそあった。

Q. 質問票：中華民国における幣制改革の後、日本円と中国元はどのような関係にあったのか？

A. 秋田：ともに英ポンドにリンクすることのできる通貨（中国政府は公式には取引を認めていなかったが）で、それにより円も元もともに通貨価値の安定という恩恵を享受することができ、ひいては一種の「東アジア通貨引き下げ圏」とでも呼ぶべきエリアの出現をみることになった。一方、インドに代表される英国の公式植民地では、本国からの投資価値の上昇などをにらんで通貨価値が高めに設定され、「通貨引き上げ圏」が形成されることになった。

Q. 質問票：「ブロック経済」について、どのような理解をすればよいのか？

A. 秋田：例えばこの時代の日本は、朝鮮・満州を中核とする自立的な経済圏「日本帝国圏」を形成している点においては、確かに排他的な経済政策を採ったといえるが、同時に自由貿易原理に基づいた非常に柔軟な経済外交も行なっている。開放性と排他性という、一見矛盾する両面を併せ持っていた点が、1930年代の日本の経済外交の特徴であったといえる。

Q. 質問票：経済外交の観点からみれば、1930年代半ばには、日本は英米との戦争を回避する道があったといえるのではないか？

A. 秋田：確かに経済的な相互依存状況を考えると、少なくとも英国からは日本と積極的に戦争しなければならない理由は見当たらない。特にこの時代の英国では、蔵相ネヴィル・チェンバレンを中心とする対日宥和派が強かったからなおさらである。米国でも、1938年ごろまでは対日宥和論が存在していた。経済外交という側面から見れば、日本が英米との戦争を回避できる可能性はわずかながらあったといえる。

Q. 質問票：1930年代におけるアジアのユニークさとは何だったのか？

A. 秋田：一番特筆すべき点は、自立的な「アジア間貿易」の発展をみたこと。世界史的に見ても極めてユニークな現象で、アフリカやラテンアメリカには見出せないものである。私見では、アジアとりわけ東アジアは、この貿易の存在があったからこそ、近代における世界システムの中での相対的自立性を保つことができたのではないか、と考える。そしてそれを可能にした要素としては、近世からの連続性を持つ「アジア商人ネットワーク」の形成と、19世紀にはいって英国が、アジアに国際通貨ポンドや国際郵便・銀行網といった国際公共財の投資を積極的に行なったことが大きかったのではないか。

Q. 質問票：日本とスターリング圏の経済的相互依存に関して。日本側には、英国に対して積極的な発言、取引を試みる勢力あるいは政治家はいなかったのか？

A. 秋田：岸信介のような、対米自立路線を模索する保守派がその代表。岸は米国に対して自立的な外交を模索するうち、1950年代末に「東南アジア開発寄金構想」にたどり着いた。これは、東南アジアにおけるコモンウェルス諸国への経済協力に日本が積極的に関わり、本国である英国から外交上の協力をとりつけようとするものである。

Q. 質問票：1950年代におけるポンドの基軸性について、詳しく説明してほしい。

A. 秋田：もはや米ドルの世界的優位はゆるぎないものとなった戦後間もなくの時期、英ポンドは米ドルに準じる国際通貨としての地位を模索していた。それは具体的には、米ドルと英ポンドとの相互兌換性の維持である。しかしそのために、当時は米国以外どの国でも米ドル不足が深刻であったため、たとえ英ポンドで決済された国際貿易においても、そのポンドがすぐに米ドルに換えられてしまう事態が多発し、米ドルに対する英ポンドの価値は低下し続けることになった。そのため1947年には米ドルとの兌換が廃止され、1950年代における英ポンドは、米ドルとの兌換なしでいかに国際通貨としての地位を保つことができるかを改めて模索することになった。その結果として英国がたどり着いた答えが、国際貿易におけるポンド決済を増やすための二国間協定の多用だった。ブレトン・ウッズ体制には当初、世界の経済状況が戦前の水準に回復するまでは、国際貿易における保護関税などの保護政策を採ってもよいとする特例が存在し、英国はこの特例を利用した。ところが、朝鮮戦争終結後あたりから世界的なドル不足の状況は急激に改善し、米ドルによる多角的な決済を志向するブレトン・ウッズ体制が本格的に

稼働する状況が整った。また、時を同じくして英国の貿易の志向も、それまでの対帝国を主体としたものから対ヨーロッパ・EEC圏を志向するものへと変わっていき、かくして英国の二国間協定を多用する方針は転換していった。

Q. 質問票：パクス・ブリタニカとパクス・アメリカーナとの「比較と関連性」について、それをどのようなパースペクティヴで捉えているのか？

A. 秋田：縦軸として世界システムにおけるヘゲモニー国家—17世紀におけるオランダ、19世紀における英国、20世紀における米国—を、横軸として世界システムにおける周縁・半周縁としての極東、東南、南アジアあるいは日本を設定し、後者が前者のヘゲモニーの維持のためにどのような働きをしたのかを模索することを通じて、中核と周縁・半周縁との相互関係とはどのようなものなのかという形を導き出したい、と考えている。しかしながら、私はウォーラーステインの世界システム論では問題にされてこなかった13世紀におけるモンゴル帝国、あるいは永楽帝治世下の明で行われた鄭和艦隊の大航海も、地域を結ぶ鍵の一つとして立派に働いた、あるいは働きかけたのではないかと考えているので、これらもヘゲモニーに準ずるものとして考慮に入れた上で、どのようにして地域と地域を結ぶ要素、世界を一つにする要素が形成されたのかを追い求めていきたいと考えている。

Q. 質問票：世界システムにおける英国のヘゲモニーは、いつ頃まで続いていたのか？

A. 秋田：ヘゲモニーとは、通常経済力、軍事力、文化的影響力全ての面において圧倒的な世界的影響力を有している状態あるいは国家・地域のことを指すが、いくら中核の国家・地域とはいえ、全ての分野において世界的な影響力を行使できる時期は限られている。しかし逆転の発想で、では中核の国家・地域が最後まで行使しうる影響力とは何なのかということを考えた際に、それは経済面における金融の分野であり、文化面における影響力はさらに長く行使されうると自分は考えている。私は、以前著書において、極東アジアにおける英国の影響力は1930年代まで健在であったといった論を展開したが、その影響力の中身は、やはり最盛期の英国が行使できたそれとは異質なものであったことは明らかである。こういった衰退期のヘゲモニー国家が依然として行使し続けることのできる影響力を「構造的権力」という別枠で捉える必要があるのではないか、と考える。この論には批判も少なくはないが、現在のヘゲモニー国家である米国のこれ

からの動向を考える上で、重要な指標を提供してくれるのではないだろうかと考えている。また、ヘゲモニー国家の特性として、周縁あるいは半周縁の国家・地域に国際公共財を提供できる、という点も見逃してはならないが、同時に提供された国際公共財を利用することにより、周縁あるいは半周縁から中核へと登り詰める国家・地域が存在しうることを示唆している点も念頭におくべきである。

Q. 質問票：地域間交流を学ばせる授業として、具体的にどのような形式が考えられるか？

A. 秋田：一概にこういった形式が良い、ということは言えないが、一例として、具体的なモノ、カネの流れに視点を置いた授業はできないであろうか。すでに『砂糖の世界史』『茶の世界史』といった、身近な食材から世界経済史を教えるという趣旨の著書はいくつか出ているが、例えば綿に注目するとすれば、従来圧倒的な主流であったヨーロッパ・アジア間の貿易のほかに、日本、中国そしてインドによって担われた三角貿易を中心とする、アジアにおける地域間貿易への視点を盛り込むことができる。その場合、もっとも注目すべき土地はムンバイそして大阪ということになるであろう。アジアへの視点を喚起させる素材としては、中国の主要交易品であった大豆も面白いであろうし、あるいは16世紀まで時代をさかのぼり、ヨーロッパとアメリカ大陸の間で交わされた所謂「コロンブスの交換」とそれに伴うヨーロッパの食生活上の変化などを題材として扱うのもよいかもしれない。

◇桃木至朗「東南アジア史　誤解と正解」

［講演要旨］

最初に東南アジア史で最低限覚えるべき事項（語句数わずか16個程度）、これまでの東南アジア史理解の枠組について紹介した。

ついで本論として、2006年度の東南アジア史に関する入試問題（世界史Bと一部日本史B。一部2005年度）を、代表的な教科書記述（山川、東書、帝国世界史、山川日本史など）および予備校教材（『青木世界史』）と照らし合わせながら検討した。12のテーマに分け、原語主義、英語の翻訳、近世ベトナム史、地図、年代、モンゴル帝国と東南アジア諸国の関係、東南アジアに関する中国の記録、東南アジアのイスラーム化の時期、東南アジアの国家と民族、モンゴルの侵攻とタイ系諸民族などについて、入試や教科書・参考書記述の

問題点、新しい研究にもとづく理解のしかたなどを解説した。東南アジア史の教科書記述や出題はずいぶん増加しているが、細かいところでかえって混乱が広がっている。地域研究の発達によって、よその地域の専門家が片手間で記述・出題することが困難になったのに、東南アジア専門家を執筆陣に加えた教科書はいまだにごく少数である（したがって、用語集頻度には学問的裏付けがない）といった、研究・教育上の構造的問題を指摘せざるをえない。そこで、高校生を混乱させないためには、確実な最低限の事項を教えるにとどめるか、各種解説を詳しく読んで理解したうえで細かく教えるかどちらかにする必要があることを主張した。

一種の「暴露物」の講演であり、高校教員・高校生を不安にする内容だが、他地域の教科書記述や入試にも多かれ少なかれ問題はあり、現行の世界史Bの教科書記述や入試は、研究者・教育者の力量に比してずいぶん無理をしたものであり、研究・教育体制を改善しない限り、必ず不適切な教科書記述や入試問題が出てしまうことを示したかった。

質問は東南アジア史に関して幅広く受け付けることにしたので、質疑は以下のように多方面に向かった。

［質疑応答内容（一部）］

Q. **質問票**：教科書も史料も間違いだらけ、では高校教員はどう対応すればよいのか？

A. **桃木**：分かり易い説明を大学教員が提供する、或いは高校教員と話し合いながらそれを作っていく、或いは高校教員側で取り組まれていることに対して、大学側も地方の研究会にお呼びいただく機会などに発信していく、高校教員の側で製作されたプリントの案に関してアドバイスをする、といった方法がある。そういう活動を充実させていくことが基本である。

Q. **質問票**：東南アジア史の教科書がそんなに間違っているとしたら、何で確認したらよいのか？ 用語の表記はなにを参照したらよいのか？

A. **桃木**：帝国書院教科書と本研究会の過去レジュメ（とくに山川『歴史と地理』論文）以外では、上記の同朋舎刊の各事典、平凡社『改訂東南アジアを知る事典』（2007年刊行予定—現行版はボロボロ）、山川各国史の東南アジア島嶼部の巻（大陸部の巻は編集が雑）など。桃木のホームページでは山川教科書の詳説世界史最新版の東南アジア記述を全部チェックしてコメントを付けたものを掲載している。

しかし、やはり完璧は期し難い。100%を求める考えが、或いは教科書は全て正しい、入試には一つも間違いがあってはならない、入試は完全に公平でなくてはならない、という考え方自体が間違っている。東南アジア史はやや需要が極端で実際間違いが多すぎるが、他の分野でも、多かれ少なかれその様なことはあり、根絶は不可能。従って教科書もなにも完璧ではありえない、入試でも運不運によって数点の誤差は出るのが当たり前である、何十点も誤差が出るようではもちろん困るが、ゼロにはならないということを納得してもらわねばならない。

今までなにか物事には唯一絶対の正解があってそれを覚えるのが高校教育だという様な仕組みになってきた。そこへ本研究会が示すモノの見方をどう持ち込んでいくか。網野善彦は戦後歴史学のある偏りというのをひっくり返すためにワザと反対から見ようとした。日本人の短所は、誰か偉い人がそれだと言うとみんなそれになってしまう、全員がボールに群がり、フィールドの反対側を誰も見なくなるという所。網野はワザと反対から議論した人だと思う。逆に言うと、網野の言っていることが全部実証的に正しいと思ってはならないということにもなる。そのような感覚を、高校生にもいくらか持ってほしい。少なくとも教員には持ってもらいたい。

Q. 質問票：よりよい入試として、「専門外の分野は出題しない」のはよくないし、かといって定番以外の問題が出ない（東南アジア史はたったの20問）というのもよくない。そうならないための見通し・戦略は？

A. 桃木：それぞれに与えられた条件が、例えば大学ごとにある。一般論としてはもちろん、専門外の問題でズッコケないためのチェック体制の充実・情報交換のシステムを永続化させるべき。阪大はやりたいと思っている。ただ、もし力が限られている、使える時間が限られているというようなことを考えるならば、そこで無駄な努力をして不十分な問題を出すよりは、東南アジア史は20問しか出ない、という方がいいと思う。せいぜい20問でも出題形式を工夫すれば随分いい問題が作れると思う。他の地域と結びつける、横に世界の色んな地域と比べさせる、或いは史料の問題とか、やり様はいくらでもある。生徒はみな史学科へ進むわけではないのであるから、東南アジアは16個とか12個覚え、その代わりアンコールワットとか見て、マラッカ海峡の写真などを見て、ああ面白いな、と思わせる方がよほど大事だろう。

Q. 質問票：図説や教科書で前近代東南アジア国家の領域を示す際の基準はなにか？

A. 桃木：示せない。領土支配という観念自体が東南アジアにはそもそもない。東南アジアの支配は人間。あとは拠点とルート。ジャングルをいくら領土だと言っても仕方が無い。領土とか最大版図というと具合が悪い。そこを曖昧に逃げるためには、勢力範囲ぐらいにしておくのが無難。

Q. 質問票：「強制栽培制度」はやはり搾取ではないのか？

A. 桃木：その通り、たしかに搾取である。ただしコーヒー生産地域など「開発が進んで豊かになった」地域もあり（もちろん、外部市場への依存、経営と労働の自律性の欠如など、あくまで「従属経済」である）、どこでも食うや食わずの惨状におちいったというのは、「反対派や独立運動家によるデマ」。問題は、「植民地支配といえば現地人はひたすら暴力的に弾圧・搾取されていた（現地の富の絶対値は減少した）」、「植民地といえば宗主国の工業製品を買い、食糧・原料を（宗主国向けに）生産するだけだった」などの通俗的理解をあらためてほしい、そうしない限り、「われわれは植民地を開発してやったのだ、近代化させてやったのだ」という旧支配国の開き直りとの間では水掛け論にしかならないし、生徒には「かわいそうな、弱いインドネシアの人々」という蔑視と紙一重の憐憫を植え付けることにしかならないこと。帝国書院世界史B教科書272-274、316-317ページなどで、私は植民地支配を糾弾する立場でこの議論をしている。

植民地といえば宗主国の工業製品を買って、宗主国のための食糧生産を押し付けられたモノカルチャー経済などというのは、この議論のモデルになっているインドですらそうではないし、インド綿業、織物は壊滅していないし、まして東南アジアになると、たとえば、インドネシアとオランダが一対一で結びついていたことは絶対にありえないし、ベトナムとフランスも一対一では結びついていない。むしろ、工業製品を売りつけたのはオランダやフランスではなくて、イギリスである。そして、もう一つの問題がアジア各地と結びついていること。一対一で結びついている、これは一国史観の弊害でもある。一国史観というのは、一国だけ見るというものの延長で、対外関係をみんな一対一でしか見なくなってしまう。ネットワークとして見られなくなってしまう。

Q. 質問票：東南アジアの主体性について、第二次世界大戦で日本と宗主国を天秤にかけた動きなども記述すべきではないか？

A. 桃木：1945年の8月13日～9月2日頃に東南アジア各国の独立派がどのように動いたか、調べてみるとよい。日本が攻めてやらなければ、白人を排除できなかった、という考えがいかに間違っているかがわかる。日本は体よく利用されたのだ。

Q. 大阪・大畑正弘：前近代でもずいぶん何百年もたってしまったような話と、当事者が生きている近現代史の場合とでは随分違ってくるという気もするが、注意点は？

A. 桃木：地域研究、ないしは国際理解にA級B級C級という3つのレベルがあると思う。C級とは、日本と先進国の常識でしか相手を見ない、アジアならアジアを、遅れているので助けてやるとしか思わないという考え。B級とは、自分の研究対象や商売相手の特定の国が好きでたまらない。ただしそれが政治的な意味合いを持つような事柄になったときに、その相手の国の代弁者になってしまう。学問でも、その国の人の考え方を無条件に信じてしまう。何から何までアメリカのようにしないといけない、など。A級とは、相手に対して十分な尊敬をはらいながら、でも悪口は言う。しかも、それを二国間関係だけじゃなくて、もう少し深い他の東南アジアと比べたらどうか、他の東アジアと比べたらどうかと考えられる、そういう風な人がたくさん必要である。それを作るために、どういうことをしたらいいかということを、帝国書院の教科書に書いた。東南アジアの場合、アジア間貿易のネットワークがあって相対的な自立性を持つ。ひたすら暗黒の植民地支配という像は成り立たない。ただし、絶対的自立ではない。世界システムによって動かされている。そしてそれがいわば、社会、文化、政治、ナショナリズム、そういうところでどう表れるか。白人支配者が、白人崇拝を植えつけ、支配の手先を作ろうと思って、それなりの学校とか作ると、そこでナショナリストが育ってしまう。白人の東洋趣味が、バカにされていたアジアの文化をよみがえらせてしまう。では全部ナショナリストの思い通りかというと、ナショナリズムに矛盾が、民族対立を作り出してしまったり、宗教対立を作り出してしまったりする。お互いに思い通りにならない。その中で歴史が動いていく。

植民地時代を覚えている人はまだいる。「ああ、いい時代だったよ」とか言う人も中にはいる。それは、協力者とか言う問題ではない。そういう人とか、地域もあるということを具体的に、総合的に捉えるというのは大きな問題である。聞き取りを主な手段として歴史を研究するのも盛んになってきている。

Q. 長崎・中須賀浩師：朝貢体制はヘゲモニーといえるのではないか？

A. 秋田：ヘゲモニーと帝国支配は微妙に異なる。朝貢体制は帝国支配ととらえるべきだと考えている。

A. 桃木：世界システムというものの定義しだいで入ってくる部分があると思う。ただ、問題は朝貢体制というものがいつでも機能していたと考えてはいけない。日本人は制度があると、いつも額面どおりやっていると思ってしまう。杉山正明の言葉を使えば「瞬間最大風速」として朝貢体制がヘゲモニー的な意味を持っていた時期もあると思う。明の初期はそうだと思う。あるいは、別の意味で18世紀後半とか中華帝国の問題ではなくて、華人ネットワークが鎖国をしていない地域、具体的には東南アジアに恐ろしい勢いで広がっていき、むしろ白人による植民地化に先んじて東南アジアの土着経済を握っていく。18世紀後半から、華僑商人は港に来て港と中国と、港とインドとかを結ぶだけだったものが、内陸まで進出していき、中国国内の経済と結びついていく。中国人が勝手に誰も住んでいなかったメコンデルタとかチャオプラヤデルタに入り込んで米を作ってそれを中国に運んでいく、あるいはボルネオの金山を開発してそれを中国に持っていく。そういう状況などを一時的ながら世界システムの枠組みで捉えることが可能ではないかという議論もある。

Q. 中須賀：植民地支配におけるコーディネーターは搾取の対象にならず、富を蓄積させ、社会的地位を向上させたという。吉田茂はアメリカの支援によって政権を維持できたといわれているが、コーディネーターの概念は戦後日本に応用できるか？

A. 秋田：コラボレーター（協力者階層）というのが正しい。エージェントなどと呼ばれることがある。植民地支配にあって、現地のエリート層が結果的に支配を支えていた現実がある。5～6億のインドを数万のイギリス人が支配できるわけはなく、現地人の協力が不可欠であった。彼らの果たした役割を考えないと、植民地支配の実態や脱植民地化は把握できないだろう。彼らは西洋式教育を受けた。ガンジーはイギリス支配の非合理性を西洋的論理から批判していくことになる。リー＝クアン＝ユーやエンクルマも西洋式教育を受けている。

Q. 香川・真鍋篤行：開発や新種の農作物の導入といった地域間交流の進展の結果、東南アジアの生態系はどうなったのか？ 開発と生態系との関係はどうなのか、そのよう

な視点は織り込めないか？

A. **桃木**：そのような研究はあるし、織り込むことも十分可能。大航海時代以降、トウモロコシとサツマイモが入ることで自然景観が大きく変わる。そしてプランテーション時代には、例えばコーヒー、ゴムも外から入ってきて、景観が大きく変わっていく。昔から東南アジアはジャングルが茂っているとか、水田が広がっているとか思うが、そうではない。1800年代以降、開発に伴って人口希薄地帯だった東南アジアが人口過剰地帯へと急速に変わっていく。1600年の東南アジアの総人口は、2000万人くらいだろうと見積もられている。同時期、日本の人口史の推定では1200万といわれている。東南アジアの面積は日本の十数倍あるのに日本の2倍も住んでいない。中国やインドはとっくに1億人を超している。ところが現在、中国やインドよりも決して劣らぬ形で東南アジアの人口は5億人を超している。これはASEANの経済の開発がさらに関わっており、東南アジアに本当の原生林のジャングルは一部の自然公園を除いてどこにもないと言われている。

2. 高校教員側の授業実践報告の要旨と質疑応答内容

3日目午前中には、高校教員側からの授業実践報告の場を設けた。これは、過去3回にわたって開催した本研究会において大学教員側が提示してきた歴史研究の最新の成果や歴史教育に対する提言が高校の教育現場にどのように反映されているのかを検証すること、高校での歴史教育が現在どのようになっているのかを大学側が把握することにねらいがある。

授業実践報告は再参加者の受け入れを認めた第3回研究会から実施している。第3回研究会では3名の教員が報告し、大学側も大いに刺激を受けた。今回は講演時間を前回の30分から50分に拡大のうえ、講演者を第1回・第3回研究会に参加した笹川裕史教諭（大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎）1名にしぼり、質疑応答時間も10分設けた。講演内容の一部は、本報告書後掲の笹川教諭の論文中に盛り込まれている。

なお、本報告は最終日に実施したため、質疑応答は口頭のみであり、書面での回答は行われていない。

◇笹川裕史「生徒が参加する世界史授業をめざして」

［講演要旨］

私は、自分の授業が、その学校だから成立するという独自性に止まるのではなく、普遍性を兼ね備えたものでありたいと考えている。教員になって生徒の歴史の授業に対するマイナス・イメージが大きいことに気がついた。①歴史は虚学、②教養を教えることはできない、③暗記すれば点が取れる、④歴史は面白い。でも、授業は最悪、などである。そこで、発想を転換した。③に関しては、前任校でノートを持ち込んでもよいテストを実施し、その代わり、授業を聞いていないと答えられない問題にした。①②は④の授業のやり方に集約されるが、世界史に対するマイナス・イメージを拡大再生産しないことが、一番大切だと考えている。

普段の授業は一斉講義が中心である。一斉講義には、退屈で単調というマイナス・イメージがつきまとうが、それは工夫次第で改善できると思う。私の授業の基本方針は、①テストがなければ聞いてもらえないような授業はしない、②授業のなかに「感動」をつくる、である。「感動」を大切にしたいのは、それが、教員の知識のユニットを、生徒にそのままコピーする知識構成主義の授業を乗り越える鍵となるからである。

授業の前提としては次の三点に留意している。①生徒との会話のあり方、②教科書の記述の「正しさ」、③生徒の授業感想の把握。

授業での具体的な方策としては、①モノ：一斉講義に変化をもたらす。②話術：情報を知識に変換する。③エピソード：さりげなく授業の本質に触れる。④発問：生徒が何を考え、感じているのかわかるような質問をする。あるいは、イメージが膨らむようなクイズを出す、などである。

非日常的なイベント的な授業の実践例として、今回は史料講読を軸とした授業を二つ紹介した。これは生徒の自由裁量の部分を保障することで、歴史を学ぶ面白さ、あるいは難しさを実感してもらうことを目指している。①753年の大伴古麻呂の報告：出来事を推理していく過程で、生徒が遣唐使の具体的な活動の様子を知り、東アジア世界の外交の実態を考えていくことができる。②1492年のコロンブスの『航海誌』：異文化衝突を乗り越えるには、自分の固定観念を相対化できる寛容さが大切だということを生徒には気づかせようと試みた。

スポーツ選手は記録に残る選手と記憶に残る選手に分けることができるといわれている。授業の場合、記録に残る授業とは、テストで良い点が取れる授業ということだろう

か。授業をしていると、試験と関わっていくことは避けられない。しかし、試験で高得点を取らせることを最優先とする授業には抵抗感がある。私は生徒が感動できる授業、彼らの記憶に残る授業を今後も心掛けたいと思っている。感動があれば、生徒は授業に参加するだろう。

［質疑応答内容（一部）］

Q. 山形・高橋徹：どういった構成で唐代史、遣唐使の授業を実施しているのか？ サプライズを設けるところを中心にして授業を組み立てているのか？

A. 笹川：隋唐時代で6回かけ、6回目に日本や東アジア世界全体との関わりで取り上げる。隋唐の復習も兼ねた授業としている。通史的なところの中で、トピック的に巻き込んでいる。

Q. 長崎・中須賀浩師：授業感想の主題を教員側が提示するのか、それとも生徒が自由に書くのか？

A. 笹川：ローテーションで数名に自由に感想を書かせて、教科通信で名前を伏せて生徒に配布している。

Q. 神奈川・石橋功：文化的に辺境に位置していた大航海時代のヨーロッパ人のイスラム商人に対する意識がどうであろうと、世界史にはあまり関係ないのではないか？

A. 笹川：自分達の常識を相対化する一つの例として挙げたと考えていただいてもよい。そして、イスラムの商人達は言葉や宗教が違っていたとしても、出会う人間はとりあえずは人間だというふうに考えてもよい。

3. グループ討論会

3日目午後には、今回初めて全参加者を無作為に4つの班に分け、特定のテーマについて議論するグループ討論会（分科会）を実施した。今回グループ討論会を実施したのは、過去の参加者から強い要望があったこと、これまでの研究会の意義やこれからの歴史学（主に大学側）と歴史教育（主に高校側）のあり方について参加者から生の声を聴取する必要があると、主催者側が判断したからである。

グループ討論会を実施するにあたっては、司会者や書記を誰がするのか、会期が大学の前期試験及び集中講義期間に当たっていたため、複数の会場をキャンパス内にどうやって確保するか、どのような議題を設定するのか、そもそも主催者側にこのような企画のノウハウが無い、などの様々な問題に直面した。結局、討論会の実施が最終的に決定したのは7月下旬に入ってからとなり、かろうじて大阪大学共通教育棟内に2班分の会場を、さらに本会場の図書館ホールを衝立で2つに間仕切りして、都合4班分の会場を確保した。司会は筆者とIAEスタッフの水田・尾島・向の3氏が担当、書記は各班2名の高校教員を事務局から指名し、討論内容の大要をグループ討論会終了後に実施される全体討論会で各班の代表1名（高校教員より選出）が5分で報告した。

議題はいずれの班も「歴史学と歴史教育の連携について」とした。1日目冒頭のイントロダクション中に、参加者に対して「歴史学と歴史教育の連携について、どのようにお考えですか。また、現在どのような活動をしていますか」という緊急アンケートを実施し、1日目夜に司会者が整理、議論の進め方を検討したうえで討論会に臨んだ。しかしながら各班30名前後の参加者であるうえに、討議時間は60分に限られ、上記のアンケートに対する回答は非常に多岐にわたった。このため、班によっては掘り下げた議論に入らずに、緊急アンケートに関する詳細な説明を個別に求めるのみにとどまった場合もあった。

紙幅の都合により、各班の具体的な討論内容は掲載しない。ここでは、全体討論会で報告された討議内容の大要を以下に掲載する。

◇A班

会場：図書館6階ホール

司会：佐藤貴保（大阪大学大学院文学研究科特任研究員）

書記：杉藤真木子（愛知・名古屋市立緑高等学校教諭）

　　佃至啓（兵庫・日生学園第三高等学校教諭）

全体討論会での報告担当：後藤誠司（京都・京都市立日吉が丘高等学校教諭）

その他の参加者：小豆畑和之、上谷浩一、鵜飼昌男、遠藤和男、大世戸治郎、大見真由美、大矢雅史、置村公男、九鬼逸子、杉山清彦、神於正明、榊良、佐藤雅信、佐野祐子、谷山杏子、田守隆敏、堤一昭、堂森峰春、徳本次郎、冨澤要樹、豊島修、蓮田隆志、廣瀬和義、桃木至朗、矢部正明、吉田理、吉野興一、吉村昌之、若林俊一

［高大連携の現状］

・出前講義、研究授業が中心。
・附属高校では相互に教員が授業。
・神戸市立六甲アイランド高等学校では「高大連携係」が3つの大学と連携：大学側は将来の学生のリクルートのため、高校側は総合学習、双方の教育力・授業のレベルアップが目的。

［高大連携の問題点］

・単発的な点が問題点。個人ではなく、組織と連携しないと長続きしない。

［今後望まれる連携］

・高校でやっていることが大学で役に立っていないというギャップがある。課題としては、大学は高校に何を求めているかを示し、高校側もそれに対して何ができるかを考えるいわば「接続教育」を行い、その成果を協働作業で検証していくべき。
・情報交換：高大で行われていること、高校の教員同士が成果を共有できる横のつながりの場の構築が必要。研究会活動で共有を図っているところもあるが、都道府県によってそうした活動に至っていない例もある。
・今後の展望：教科書の記述の見直し／大学教員が高校の教科書で授業をしてみる／この研究会の内容を副読本・概説書にして高校教員のテキストにしてみる／教案集の作成／各大学図書館の高校教員に対する利用開放

◇B班

会場：図書館6階ホール

司会：尾島志保（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

書記：堀川喜子（大阪・大阪府立渋谷高等学校教諭）
　　山下宏明（大阪・大阪府立園芸高等学校教諭）

全体討論会での報告担当：岩月有行（京都・京都府立久美浜高等学校教諭）

その他の参加者：粟谷昌史、伊藤真、内田順子、卯月睦彦、大井喜代、大畑正弘、岡本弘道、岡山真知子、奥山嘉邦、黒川尚美、毛戸祐司、小林一幸、島貫学、城岡朋洋、菅満津江、平雅行、滝中清志、中尾浩康、中須賀浩師、難波謙一、新田康二、早川英昭、藤野正和、堀江嘉明、山内晋次、吉永暢夫、渡辺延志

［歴史教育者と歴史研究者との関係］

・研究史を踏まえた議論が必要

［世界史と日本史の関係］

・世界史には新しい動きがある一方で、日本史にはあまり変化がない。枠を取り払って東北アジア史のような科目ができないか、との提言あり。しかし、使われている用語・概念の接点が異なる点で障害あり。日本史研究者にそうした意識が薄い。これに対し、高校教員は日本史・世界史両方を担当することが多い。その中で教員の意識が変わり、ニーズに教科書も変わっていくのではないか。ただ、教科書作りは現実問題として難しい。

［高大が連携してできることは何か］

・地域を見なおす視点（例：大学と高校が提携して『金沢学』を出版）。

・本研究会は高大連携の新しいモデルになるのではないか。各地で行われ、ネットワークを構築し、阪大がその中心になることを期待。

・高校側の問題点：高校側の研究会の活動が弱まっている。本研究会の内容を検証していくには、高校側の組織の立て直しが必要。

◇C班

会場：大阪大学共通教育棟A307講義室

司会：向正樹（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

書記：瀬戸博司（和歌山・近畿大学附属和歌山高等学校教諭）

古川寛紀（神奈川・神奈川県立上郷高等学校教諭）

全体討論会での報告担当：西岡浩美（大阪・大阪府立松原高等学校教諭）

その他の参加者：秋田茂、吾妻潤、池田実、石原純、上田義人、川口靖夫、北垣秀俊、北村素子、栗林幸雄、幸田和洋、後藤善弘、桜井智之、笹川裕史、髙橋和子、高橋徹、竹村茂紀、間久美子、廣川みどり、松山仁史、真鍋篤行、森永知宜、若松宏英

［高大連携はどのようにあるべきか］

・高校の現場は、世界史離れ進む、段階を追って論理的に考える力が低下している生徒の現状あり。その背景は小・中学校での生きる力をはぐくむ目的の教育が達成されていない。教育行政の問題もあるが、現場の教員は生徒の考える力の向上、歴史への興味をどうやって持たせるか検討すべき。

・授業に使える教材を大学が提供できないか。一次史料の公開、大学研究成果の公開、用語の解説のホームページなどによる発信ができないか。著作権や管理・運営

面での問題をどう克服するかが課題。高大双方の視点から教材開発ができないか。

・高大の立場の違う者同士が交流の場を持てればよい。トータルな像を結ぶ歴史は高校でしか提示できない。現場ではそれを各教員が独自の観点で提示しているが、それが歴史学的に実証できるのかわからないので、大学側からこれを批評してほしい。

◇D班

会場：大阪大学共通教育棟B316講義室

司会：水田大紀（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

書記：中西雅子（大阪・清教学園高等学校教諭）

村上直（京都・京都市立伏見工業高等学校教諭）

全体討論会での報告担当：角田展子（東京・東京都立町田高等学校教諭）

その他の参加者：石橋功、岩﨑淳、宇田川真、大島弘尚、小林和朗、小林克則、杉下憲司、杉本明隆、髙橋勝幸、竹中亨、竹谷保、田中英朗、長友健史、中村薫、袴田潤一、牧雅人、増田公洋、松田宏、松本圭以子、水田博之、村田悦和、盛岡正男、森安孝夫、山岸裕子、山本雅康

［研究会で提示された研究成果を高校の教育現場で使っているか］

・今すぐに使えるかどうか難しい。使ってみると生徒が混乱してしまう例もあり、授業そのものの枠組みを根本的に見なおす必要ある。継続的に研究会などを通じて検討していく必要があるのではないか。

・生徒に歴史を伝えることについて大きな示唆を受けた。

［参加者には初参加者と再参加者がいる。主催者側として今後研究会でどのような講演を行っていくべきか］

・同じ内容を繰り返し講演しても構わない。受け止め方は回を重ねるごとに変わる。

［高大連携］

・出前講義はあるが、単発的ものに終わってしまう。綿密な打ち合わせが必要。

・本研究会の裾野を広げるために各地で研究会を広げ、あまり意識の高くない教員にもアピールをしていく必要があるのではないか。

・大学では史学系以外の学生にどのような授業をしているのか、シラバスを公開してほしい。

・高校生の疑問に大学教員が答えるネットワークを構築できないか。

・地域ごとの研究会のコーディネーターを阪大ができないか。

・若手教員のリカレントのために本研究会を継続してほしい。

4. 全体討論会

グループ討論会終了後、参加者は再び本会場の図書館ホールに戻り、全体討論会を実施した。

全体討論会では、各班からの報告を受けて、歴史学と歴史教育の連携についてさらに議論を深めようと意図したが、上述のように参加者の意見は多岐にわたり、60分という限られた時間の中で特定のテーマに集約した議論を行うことは難しく、4回にわたる本研究会の成果を大学側がどのように受け止めているのか、大学側が高校教育に対し、どのような期待を持っているのか、などを大学教員がコメントするにとどまった。

発言の概要は以下の通りである。なお、全体討論会の司会は置村公男教諭（兵庫・六甲高等学校）と桃木至朗教授、書記は杉藤真木子教諭（愛知・名古屋市立緑高等学校）と佃至啓教諭（兵庫・日生学園第三高等学校）が担当した。

各班代表：グループ討論会の概要報告（前掲参照）

置村：各班からの報告を聴いたところ、この研究会の意義として2つ大きなキーワードがある。「開かれていること」と「結びつき」だ。A班では「接続教育」という言葉が出てきた。高校・大学の教育の現状が互いにわかっていなかったが、本研究会を通じて高校教員は大学の研究の最先端を知るとともに、大学教育の現状を知ることができた。一方で、大学教員は高校の教育現場の厳しい実情を知った。両者の共通理解が図れたのではないか。

出前講義などは単発で終わってしまうが、本研究会は4年間継続してきた。これは大きな成果であろう。本研究会の内容は毎回同じでよいという意見がD班から出されたが、高校教員は新しい知見を広めるだけでなく、深めていくことも重要だ。本研究会は他の高大連携とは一線を画している。

開かれた点としては北海道から九州まで全国各地から参加していること。この会を通じて各地の研究会の活動や出版物の情報を改めて知った。高校教員と大学教員の交流、

高校教員同士の情報の共有、史学とは違う分野の大学教員による講演も過去にあり、周辺分野も含めてトータルな知見が得られた。トータルな世界史を教えていくこと以外にも、我々が授業に取り組む姿勢、教育のあり方の理解、貪欲に周辺分野を含めた知識を吸収する必要性を感じた。

各地の教員の研究会やIAEのような高校・大学の教員の参加する研究会が継続されれば、その先には意識のレベルを超えた成果が導き出せるのではないか。実践例を踏まえて、本研究会の成果を検証し、活字として著す、大学側の研究成果を踏まえて概説書を作る。高校教員も高校生に発信する点では、研究者でもある。研究のノウハウや研究者としての知見を深める、アウトプットをしていくための第一歩を踏み出せたのではないか。

大学側は本研究会を通じてどんなことを学んだのか、どんな刺激を受けたのか。各講師から発言を求めたい。

桃木：はじめは高校教員に対する啓蒙という目的しか考えていなかった。しかし、我々の側にも役に立つことが沢山あった。例えば、大学には高校のような研究授業は存在しないので、他分野の研究の最前線を知ることができた。

森安：他の大学教員の講演を聴くことは実際ほとんど無いので、この研究会は楽しかった。ここに来られている高校教員は意識の高い方ばかり。私のゼミからも卒業生の中に高校教員となった者が何名かいるが、現場で教員としての勉強がほとんどできないなどの声が寄せられている。教育現場が様々な問題を抱えていることを知った。これからの日本の中核を担っていく高校生の教養の中心に歴史学を持っていく、その萌芽を育てることができるのは高校時代のみ。高校時代に違和感を持ったことは、実際研究してみると間違っている。すとんと落ちることが正しいのだ。本研究会を継続していきたいという参加者の気持ちがよくわかった。私も継続していきたいと考えている。

平：高校と同様、大学の内部でも研究教育面での横のつながりは十分でない。他の大学教員の講演を聴けたことは私にとっても収穫だった。また、教科書を執筆してはいるものの、高校の教育現場のことはこれまでまるで知らなかった。今回、多くの先生方と話をして、教育現場の雰囲気を知ることができた。

歴史学の最終目的は歴史叙述であり、歴史教育である。この点がほかの学問と歴史学

との性格を異にするところだと思う。もちろん、私たち研究者の日常の研究活動は8割以上が実証研究に振り向けられている。しかし、今回こういう機会を持てたことは、私の歴史研究や歴史叙述に必ずや大きな影響を与えるだろう。感謝したい。

秋田：同じ話を何回もやるのは抵抗を感じ、今回は1950年代論を講演した。IAEは桃木教授を中心に立ち上げ8回実施した。少なくとも今年度いっぱいは継続される。その際にどのような講演テーマを設定すれば建設的な議論ができるのか、本研究会を通じていろんな意見を聞くことができて参考になった。阪大は東洋史・西洋史が「世界史講座」という一つの枠に編成されている。大学における世界史のあり方、大学レベルで日本史・東洋史・西洋史がどう相互乗り入れすべきか考えてきた。本研究会は高校でなされている世界史教育と大学で考えている世界史・グローバルヒストリーをどう結びつけていくかを考えていく上で参考になった。アメリカではWorld History Associationという組織があり、高校教員・大学教員が研究しており、いくつかの成果が出されている。日本でも同じような組織の構築が求められているのではないか。本研究会は高校との接続をどう進めていくべきかを考えていく上で大きな示唆となった。

置村：大学の教員間の連携も不充分であったようだ。新しい知見は水平方向に広げるだけでなく、垂直方向に深めていくことも大事であることを感じる。本研究会は大学の若手研究者にも刺激をという目的でも催されているが、どのような成果があったのか？

佐藤貴保：今まで日本史・西洋史・東洋史と専攻分野ごとに縦割りの中での交流しかなかった阪大史学専攻の学生の意識がこの研究会を通じて変わりつつある。すべての専攻の学生が同じ研究会に参加すること自体、これまでほとんどなかった。

若手研究者としてこの研究会を通して学んだのは、専門分野以外の人に研究成果を発信する重要性。そして高校生（将来の大学生）が今歴史に対してどのような思いを持っているのかを、高校教員からの声を通じて把握できたこと。若手研究者は自分の専門にこもりがちだが、それでは研究成果を社会に発信することはできない。生徒の多くが期待している歴史の現代との結びつきを意識した研究ができないものか考えさせられた。また、生徒が理解しにくい原因は、実は歴史研究に欠陥があり、研究の題材になり得ることにも気づいた。

私は大学の非常勤講師を兼務しているが、高校教育と大学教育の間には共通する問題があることもわかり、講義計画を立てる上で参考になった。

置村：問題解決策が見つからなくても、同じ問題で悩んでいる人がほかにもいることを発見できただけでも大きな成果といえるだろう。

ところで、阪大では世界史の入門講義の設定を計画しているようだが、大学側が求めている学生像はどんなものか？

桃木：阪大文学部にはアドミッション＝ポリシーは存在する。高校生が身につけてもらいたいことは3つ。①世の中には唯一絶対の正解があるとは限らない。複数正解がある場合や正解がない場合もある。そうした課題に直面したとき、放り出さずに、ベターな答えを見つけていく努力をしてほしい。あるいは唯一絶対の正解がないことを楽しんでほしい。②自分と異質な者と出会ったとき、忌避したり蔑むのではなく、面白がって接し理解すること。日本の常識に縛られないこと。③自分で学んでわかったことを、自分の仲間以外の人に説明できるようになること。そのための訓練をすること。大学では、そうした訓練を深めていく。

置村：阪大以外の大学はどうか？

駒澤大学・杉山清彦：一般論として、どの大学も一人でも良い学生がほしい。では“良い学生”とはどんな学生か。それは、知識はあるに越したことはないが、無い場合にはどう解決したらよいか、自分の力で進むべき方向を探る意志のある学生である。そのような学生ならば、大学側でも的確な指導ができる。しかし現実には、どのレベルの大学でも、課題を与えられないと何もできない学生が増えている。またパソコン・インターネット等の普及と相俟って知識の断片化が進み、学生の発想・行動が刹那的になっている。自分のしたいこと、少なくともやらなくてはならないことはやるという姿勢を持ってもらいたい。大学側の対応としては、笹川教諭の講演のような、聴き手の関心を引き出すような試みを引き継げるようにしていきたい。歴史学の場合、世界史の履修・未履修や履修のレベルなど、大学と高校のギャップが取り沙汰されるが、もともと高校で教科として存在しない人類学や社会学を学ぶ場合はギャップどころではないことを思う

と、歴史学も、学生の入学時の水準の問題を高校の責任に押しつけるというわけにはいかない。阪大では、基礎セミナーなど1年生から演習が設定されているし、駒澤大学でも、1年生の基礎演習から始まる段階的な教育・訓練のカリキュラムが組まれている。

置村：教育学の立場からご発言をいただきたい。

芦屋女子短期大学・中村薫：阪大で社会科教育法の担当している。私は2度ほど教科書の執筆に携わって感じたことだが、学習指導要領の枠組みをはずれた教科書作りは困難。まずは副読本や資料集の作成だろう。教案作りも進めていくべき。そのときに使いにくかったところは率直に大学側に上げ、高校教員と大学教員が共に討議していくべきである。ある程度教えやすさも考慮せねばなるまい。社会科教育法の講義もこうした方向で進めていきたい。

置村：今後の残された課題は何か？

桃木：ここに来ていただいた方々はまだ少数派のようだ。すそ野を広げるために今後とも交流を続けていきたい。文科系の学問も段階を踏んで戦略を立てる、優先順位を決めて作業を進めていくことが必要であろう。

IV. レポート・アンケートからの分析

本研究会では応募者全員に対し、応募の動機や、研究会に期待すること、教育現場の問題点、教科書の問題点などについて記入するアンケート（以下「募集時アンケート」と略す）への回答を求めた。さらに、抽選の結果研究会に実際に参加していただいた教員に対しては、研究会最終日に感想・意見などを記入するアンケート（以下「開催時アンケート」と略す）にも回答してもらった。

さらに、参加した高校教員全員には、研究会終了後に1000字程度のレポートを提出していただいた。レポート提出はこれまでの研究会でも課してきたが、題材は自由としてきた。今回は、初参加者に対してはこれまでどおり題材を自由とし、再参加者に対しては

「大学の歴史教育と高校の歴史教育の連携について」を大テーマとするレポートの提出を求めた。

レポートやアンケートを通じて、研究会に寄せる期待や、研究会の成果と課題、今後の大学と高校の連携の可能性に関する参加者の意見を詳細に把握することができた。それらアンケート・レポートのすべてを本稿で掲載することは紙幅の都合上困難である。本章では、レポートの一部を引用・分析しながら、今日の歴史教育の問題点や、それらを改善するための歴史研究と歴史教育との連携のあり方について考えていきたい。

1. 高等学校教育現場の現状

(1) 急速に進む「歴史離れ」

(i)「歴史離れ」の現状

◇全国調査（平成15年度、高校3年生約10万人を対象）によると、「当該科目の勉強は大切だと思う」割合は日本史B20.0％・世界史Bが19.1％であったが、現代社会31.9％・政治経済は42.1％と高かった。つまり、公民科目が「現実の社会の仕組みを学ぶものだ」と、生徒が考えているからだと解釈できよう。逆に、歴史は今の自分とは関係のない「過ぎ去った」話だと捉えられているということになる。地理的隔たりが加味される世界史にあっては、日本史より深刻な状況である。（静岡・増田公洋）

◇細かい語句の暗記が主体であり、教師は知識注入の授業に終始しており、膨大な知識理解を求める大学入試の制限がある以上、大枠は変えられないという無力感に覆われている。さらに、歴史は、国語、数学、英語に比べて大学受験教科において配点比率の低い存在である。学ぶ意義、面白さを感じない生徒が歴史から離れていくのは当然であろう。（熊本・粟谷昌史）

◇歴史に関わらず、高校の科目は大学受験のための「手段」であると、生徒に限らず大多数の教員が認識しているということである。特に歴史は、歴史以外の教員からは「覚えることが多い割にはセンター試験での配点も低くやっかいな科目」と思われている節がある。（福島・谷山杏子）

◇語句や年号の暗記が歴史の本題ではない。その奥底に流れているものに興味を持たせ、歴史観を培う事が本筋ではないか、というような指摘を受ける。無論、その通りだが、しかし受験・入試ということを考えると、最低限のことは覚えなくては歴史観も育

みようがないのではないか、と反論する事が多い。しかしそのことが歴史離れや歴史嫌いを増やしているという意見には返答できない。（宮城・吉田理）

◇このまま現行の地理・歴史科体制が続くかどうかは不透明で、「役に立たない歴史の必修は中学のみ」も十分ありえる。（京都・難波謙一）

大学入試の地歴科目で、世界史を選択する受験生の割合が減少傾向にある。その要因としては、歴史科目の暗記量が他の科目に比べて非常に多いため、受験生が比較的暗記量の少ないいわば「点の取りやすい」他科目の受験を志向していることが挙げられる。

だが、問題は大学入試だけではないらしい。歴史が現在・未来を生きる若者にとって役に立たない学問である、学ばなくても生活に支障は無いものと考える傾向があるようである。大学入試での選択の有無に関係なく、高校生の大半は歴史科目に対する関心が低く、社会であまり必要とされない学問であるとの意識を持っているようである。

筆者は近畿地方のいくつかの大学で東洋史の非常勤講師を担当している。東洋史の場合、中国の三国時代に関心を持つ者は男子学生を中心に少なからずいるが、その比率は年々減少している。総じて歴史への関心の低下は大学生の間でも広がっていると感じる。

こうしたいわゆる歴史を軽視する風潮は受験界にとどまらず、社会全般にも広がっているとの意見も寄せられている。

◇生徒のうち一部の者は、大学で歴史学を専攻して初めて、歴史学がどのような学問であるかを知るが、多くの者は、「歴史は暗記もの」という認識を持ったまま社会に出ていく。そしてこの誤解が世間に通用してしまい、「歴史は無駄なもの」という解釈を生み出す結果となっている。（滋賀・大井喜代）

◇「世間」の歴史常識が2極分解し、「マニア」と「無知」の差が激しくなっている。（中略）識者や教養のある人々とは乖離し、自国の歴史すらまるでわかっていない国民の歴史知識ベースの上にどのような「正しい」歴史学が存在できるのか？

（神奈川・佐藤雅信）

◇発達段階の途上にある生徒たちの中に、自らの知識と経験を持って物事を冷静かつ長期的に判断できる者はそう多くはない。（中略）子どもたちは大人たちがどう考えているかということに敏感である。特に大学受験を目指すようないわゆる「優秀」な子どもであればあるほど身近な大人の思考に敏感であり、その期待に沿うようにと努力する。

その身近な大人たちが「歴史は必要ない」と考えていることこそが子どもたちの「歴史離れ」の最も大きな原因であると私は考える。（福島・谷山杏子）

◇地方公共団体における文化財（文書史料をも含む）の保護には「資金的限界」があって、活字化されることなく消え去っていく。（長崎・中須賀浩師）

「就職超氷河期」と呼ばれた一昔前、「社会の役に立たない歴史学などを専攻した者を採用する気はない」と求職者を門前払いした企業はあまたあった。社会一般が歴史は社会に役立たないものと認識している何よりの証拠であろう。

財政難のため、行政が文化財や歴史資料の保護に積極的でない現状を憂う意見もある。これでは、世界史・日本史はおろか、地域の歴史にも関心を待たせるきっかけが奪われることにもなる。いわゆる「平成の市町村合併」は、大阪府ではほとんど実施されなかった（堺市と美原町の1件のみ）が、ここ数年、全国の合併直前の自治体が史書編纂に、なかば駆け込み的に着手した。合併を機に地元の歴史に対する関心は幾分高まったであろう。だが平成17年度で合併は一段落しており、この流れも早晩下火になるだろう。

このように、高校生、さらには社会人の間で、歴史への関心が低下している傾向が報告されている。このほかにも「歴史離れ」の原因はないのだろうか。

(ii)「歴史離れ」のその他の要因

(a) 歴史を学ぶことの意義を伝え切れていない

◇「なぜ、歴史を学ぶのか」「なぜ過去を知る必要があるのか」「歴史を学ぶ意義がどこにあるのか」について我々教える側自身が、混沌とした現代社会において明確に示せないままにあることに問題があるのではないかと考える。（石川・滝中清志）

◇私たち歴史教育に携わるものは、本来歴史が好きであるから、生徒や学生も授業や講義を少し工夫すれば興味関心を示してくれるはず、と思いこんでいるところがあるのではないだろうか。毎時間、なぜこのようなことを学ぶのかを強く意識した授業、学ぶ側に歴史を学ぶ意義を伝える取り組みをしなければ、ますます歴史離れは進んで行くのではないだろうか。（福井・盛岡正男）

(b) 歴史像を描きにくい現行の世界史教育

◇新課程になってから、単元ごとに教授すべき内容を見直すようにしていますが、世界

史の大勢を把握することは難しくなっているように感じています。　（静岡・榊良）
◇生徒の間からも世界史の流れが整理しづらいという声をしばしば聞きますが、世界史離れの重要な原因の一つに「像を結ぶ」歴史像がしづらいという現状があるように思います。　（香川・真鍋篤行）

(c) 小・中学校教育

◇中学校での地理・歴史学習は悲惨な状況である。高校の生徒が歴史学習に際してはほとんど「なんにも知らない」がスタートである。中学地理の「世界の諸地域学習」は諸国のうち「3つ」を選んで学習する（朝鮮半島と中国は別枠で必ず学習する）。多くの教員が取り上げるのは、ドイツ・アメリカ合衆国・オーストラリアの“GDP順に”である。（中略）こんな学習内容のまま高校へ進学してくる。この現実を高校教員はあまり認識しないままである。（中略）そして小学5・6年の社会科学習（世界と日本・地理と歴史）について、中学教員が同じように悩んでいることも付け加えなければならない。実は小中とも「地域学習」は充実している。しかしこのご時世なのに「国際性のなさ」と学習面での「連携のなさ」はどうしたものか？　（神奈川・佐藤雅信）
◇小・中学校で削減された教養知識の欠落は、高校現場では全教科において深刻です。（中略）日本史ですら予備知識がない状態なので、世界史となると（地理的要素も含め）全く初めて聞く事柄ばかり、となります。すべてが唐突に強制的に教え込まれるため、教員の技量不足からそれに耐えうる授業が展開できない場合、「ちょっと聞いたけど面白くなかった歴史授業」として片付けられているように思います。　（大阪・北村素子）

上掲 (a) (b) の意見は、脈絡も無いままひたすら用語と年代を覚えるだけで、歴史をなぜ学ぶかの動機付けがなく、生徒の関心をひきつけられないことに原因が求められている。一方、(c) の意見は、近年実施された中学校の学習指導要領の改定の影響が高校の教育現場に混乱をもたらしていることを伝えている。中学校の地理では特定の地域を選択的・重点的に探求・学習するいわゆる「調べ教育」に変わった。この結果、世界各地のやや詳細な地名や地形などを学ぶ機会はほとんどなくなった。募集時アンケートでも、「中学校の地理教育が大幅に改変されたが、高校の歴史教育にどのような影響を与えているか」という質問をした。この質問に対して、半数が「影響が出ている。授業で各地の地理や自然環境を説明する必要が出てきた」という趣旨の回答をしている。残りの半数は「改変さ

れたこと自体を知らなかった」という回答であった。

(iii)「歴史離れ」を食い止める方法

では、このような「歴史離れ」に歯止めをかけるにはどのような手立てがあるのか。募集時アンケートやレポートにおいて意見が寄せられた。ここではレポートからいくつか引用する。

(a) 歴史を学ぶことの重要性を意識した授業

◇たいそうな言い方かもしれないが、歴史を学ぶことで、高校生・大学生自らが生きている時代を読む、将来の自分を展望できる歴史教育をめざすことが、大切ではないかと考える。（福井・盛岡正男）

◇歴史教育の目標とするところは、高校生を対象とする場合、各教員によって重視する点は様々であろうが、歴史上の事件・現象を原因・発生→発展・経過→終結・消滅→事件・現象の意義付けと評価の変化を重視したいと考える。高校＝「実質的義務教育の場」との視点に立ち、一般的知識（新聞を読み解ける知識）の習得にも力点をおきたいと考える。さらには、メディア・リテラシーを養うことを目的としたい。（兵庫・上田義人）

(b) 生活に身近なもの、生徒が関心を持っているものを題材にした教育

◇生徒たちは、歴史の意外性には関心を持っていますし、衣食住やスポーツなど身近なものの歴史には大きな興味を示します。歴史は、人間の生の営みの記録であり未来への助言を含んでいると思います。生徒たちが、歴史を過去の外国の（世界史の場合）関係のないものではなく、自分たちの生活や考えそして自分が生きる現代社会につながっているのだと感じてもらえる教育ができればと思っています。（鳥取・山岸裕子）

◇私の勤務校は工業高校なので、生徒たちはなぜ世界史を勉強せねばならないのかという雰囲気である。そこで何とか生徒たちに興味関心を持たせるために生徒たちの現状理解とそれぞれの所属している学科に関するトリビアなもの、例えば機械化の生徒には鉄器文化や産業革命で登場する機械類、化学工業科の生徒にはイスラーム文化（錬金術）や宋代の化石燃料の利用などを取り上げて、世界史は「おもしろい」ということを心がけて授業を展開している。（宮城・池田実）

(c) 現代社会と結びつけた授業

◇（南アジア前近代史の授業実践として）現代の南アジア地域の宗教分布を示し、「なぜこのような分布になったのか」というテーマでアーリア人の移住からムガル帝国までを概観した（3時間）。この導入やテーマ設定は、中学校で世界地誌を選択的に学習してきているためか、地理的な基本的知識がほとんど無い生徒が多いことに対応していた。と同時に、ここでも通史的な基本的知識を押さえつつ、現代社会の背景を考察させる形にもしていたつもりである。なお、イスラーム世界についても同様の方策を採った。

（秋田・伊藤真）

(d) 日本史と結びつけた世界史の授業

◇取り上げる地域と日本との関係を紹介することでも、生徒の学習への意気込みが違ってくるようであった。例えば近現代におけるトルコやイランと日本との関係についての話を導入に、その地域の前近代史の授業に入っていった。（秋田・伊藤真）

歴史を学ぶことの意義や現代社会とのつながりを意識した授業展開（これは中学の地理教育を補完する役割をも担っている）、生活に身近なものや生徒が関心のあるものに焦点を当てた授業展開、中学で学習した経験があり比較的に基礎知識を持っている日本史と比較した世界史教育など、上記のような意見が寄せられた。生活に身近なものの教材として、食文化史を授業の教材に多用できないかとの議論が本研究会でもあった。上記の意見は歴史学以外を専攻する大学生向けの講義をする場合に大学教員・若手研究者が実践してもよいだろう。

生徒が興味を持っている事柄の歴史を紐解くことによって、生徒の関心をひきつける効果は充分に期待される。ただし、生徒の趣味・関心は近年急速に多様化し、その移り変わりも激しい。かつては「好きな球団は？」と聞かれれば、無条件で野球の球団名を答えたものであるが、現代ではサッカーの球団名を答える生徒も多いだろう。それらに柔軟に対応できるかどうかが重要であり、生徒の関心の動向を注意深く把握していく努力が必要となる。これをもし大学の授業でも応用するなら、入学する前の高校生の動向を把握することが不可欠となる。

募集時アンケートでも、「歴史離れ」を食い止める方法について尋ねた。多くは上記のような回答であり、そのほか「教科書と板書だけの授業をやめて新しいメディア媒体を

使った授業をすべき」といった意見があった。

なお、本報告書後掲の笹川裕史氏や松木謙一氏の論文は、生徒の関心をひきつける世界史教育の実践例・授業案をまとめたものであるので参照されたい。

(iv) 大学の歴史研究者と歴史教育の関係

「歴史離れ」とは直接関連しないが、大学の歴史研究者が高校の歴史教育に対し働きかけをすべきではないかとの意見も寄せられている。具体的な方策を示したレポートもある。

◇今、歴史研究に期待することは、かつて遠山茂樹氏が『歴史学から歴史教育』で指摘したように「歴史研究と歴史教育の差異がどこにあるのか」を今日的課題として再考察すべき時期にあるのではないか。「歴史学に立脚した歴史教育」でなればならないという遠山氏の意見に異議を唱える歴史教育者がいるはずもないが、これまでの教育方法論に果たして問題はなかったのかを我々現場の教師が今一度考える時期にあるということである。高校教育しかり大学教育しかりである。（石川・滝中清志）

◇大半の高校生は、新書レベルにしても歴史研究に関する書籍を読むことは殆どありません。（中略）入試問題のほうが、多くの読者を持っているとも言い得るのです。その意味で言えば、入試問題を作成することは、大学の先生にとって、歴史教育上の業績として意識して頂きたいと思います。（山形・高橋徹）

◇どのような信念に則って教科書を作成しているのか我々はもっと深く関心を持つべきであろう。そして同様に、その教科書を高校教員がどのように使っているか大学側も知るべきであろう。（宮城・吉田理）

(2) 変化に遅れをとる授業とその要因

中学校とともに高校教育においても新しい学習指導要領がすでに施行されている。これに伴い、一部の世界史教科書の記述も大きく変わり、従来の教科書にはない新しい枠組みに基づいた歴史像を示したものも現れ始めている。では、学習指導要領の改定とともに、実際の高校の世界史の授業内容に大きな変化が生じているのだろうか。レポートによると、実際は大きな変化は生じていない、従来の古い枠組みのまま教え続けている、との報告が多かった。

◇学習指導要領で「歴史的思考力の養成」を強調されても、現実の日々の授業は旧態依然としている。(中略) 最も変わらないのが高校の歴史教師自身と云えるだろう。高校の歴史教師は生徒よりも多少持っている知識だけで授業を成立させようとしている。その知識の枠組みは、教師自身が大学時代に学んだもので構成されており、内容の微調整だけ行えば十年一日の授業の繰り返しが可能となる。 (熊本・粟谷昌史)

◇高校は大学のように研究成果を発表するわけではないので、これまでに学んだことに依拠しているだけでもすんでしまう。新しい学説が出てきても、自ら学ぼうとしない限り、その新しい内容は授業に取り入れられることはない。 (東京・大見真由美)

◇社会の歴史認識は相変わらず西欧中心史観とアジア蔑視の風潮がぬぐいきれていない。こうした傾向を修正する役割を持つ歴史教育や教科書も研究の進展に十分ついて行けているとは言い難い。 (京都・岩月有行)

◇日本史の授業の中にも「ネットワーク」「世界システム」の観点を導入していきたいと模索してきました。(中略) 私たち教員は、国民国家中心の単線的発展史観に基づいた授業を高校で受けてきました。そしてその枠から抜けきれていません。(東京・藤野正和)

今回を含め、本研究会がこれまで実施してきた講演は、いずれも古い枠組みを打破した新しい枠組みで構成される歴史学研究の最前線を提示し、何らかの形で高校の教育現場に活用されることを目指した内容であった。募集時アンケートにおいて、再参加希望者に対して「これまでの研究会で得た知見を、授業に活用したか。生徒の反応はどうか」との質問を行なった。回答の半数は「活用していない」であった。その理由として多く挙げられているのは、「講演の内容を基礎知識の無い生徒向けにどう伝えるのが有効か、なお検討の余地がある」「生徒の反応が良くない、混乱している」である。

もっとも、特定の地域や地域を掘り下げて説き明かし、概ね半年で完結する大学の講義と高校の授業とでは事情はまるで違う。例えば、本研究会で新たに得た唐代史に関する知見を高校の授業の場で使おうと思っても、すぐには使えない。大抵の高校では、中国古代史の単元は夏休み前に済んでしまっているからである。補習授業でも行なわれない限り、次の年の1学期まで待たなくてはならない。新しい知見を活用するチャンスは1年に一度しかないということになる。したがって、本研究会がまだ4年しか経過していない段階で、高校教員にただちに成果を求めることは甚だ酷なことである。

授業内容に変化が現れていない要因として、教員自体が古い枠組みの歴史像で描かれた

歴史を学んだ世代であり、これを容易に改めることが難しいという意見があった。そのほかにも以下のような様々な問題がこれを助長しているようである。

(i) 旧態依然とした大学入試・教科書

◇知識理解だけではない多様な評価観（思考・判断、学ぶ態度、資料活用能力）が導入されても、実際の大学入試問題に大きな変化がないため、高校での学習評価の変動も鈍い。（熊本・粟谷昌史）

◇現実問題として高校現場では受験という制約の中で生徒（受験生）たちが歓迎しているのは、もう答えが決まっている「パッケージ型の歴史授業」であるように思う。勿論、ある程度、高校生としての基礎的なパッケージ化された知識がなければ「何故」という考察もできない訳ではあるが、全てをそういった形で高校生たちに教えてしまうのも、考えなければならない。（大阪・宇田川真）

◇教科書も先の学習指導要領改定で大幅な記述改訂を試みたのだが、教員側から批判が集中した。一つは従来に比べて記述が変わったことに対して教えにくいという保守的な立場からの批判、もう一つは、ネットワークなどの新要素や各地域・各時代の叙述の順番や社会背景の叙述がちぐはぐで通史として読んでみても理解しにくいことである。（兵庫・矢部正明）

(ii) 職場の環境

◇世界史教員は寄り合い所帯である。大学の文学部等で歴史学を学んだ者は、歴史学に傾斜し、歴史学の成果に立脚して、歴史そのものを教えることに重点を置こうとする（教育内容重視型）。これに対して、大学の教育学部等で教科教育学を学んだ者は、歴史を教材と考え、歴史的思考力の育成を目指そうとする（教育目的重視型）。そして、歴史学を学んだ者でもなく、教科教育学を学んだ者でもなく、職場環境によって世界史を教えざるを得ない状況に追い込まれている教員は、途方に暮れつつ何とか乗り切っている。こうしたいわゆる専門外の世界史教員は意外と多い。（京都・川口靖夫）

◇私自身、大学では、法学部に在籍し、歴史学専攻でない社会科教員なので、こうした研究会に参加し最新の研究成果を学ぶことで、新たな視座を得て授業を構成することの重要さを毎回実感している。昨今の教育現場では、私の勤務校のように同僚の社会科教員のうち誰一人として日本史、東洋史、西洋史などいわゆる歴史専攻がひとりもいない

職場もかなりあると思われる。そうした職場でそれぞれが、各々の歴史観に基づいて授業してゆく心もとなさと同時に危うさも感じてきた。（大阪・堀川喜子）

◇免許上「日本史・世界史・地理」を教える立場にあり、大学や大学院時代の専門分野以外や自分自身が高等学校で学んでいない教科を担当することもありえます。こうした中、「教科書」は教師にとっても知識の源泉であり、特に専門分野外の場合、書かれた内容が間違っていることに気づかないこともあります。（鳥取・山岸裕子）

◇元来は地理の専門で、高校在学時にも理系であったことから、歴史に関する知識はあまりないなかで、昨年離島の小規模校に赴任し、たまたま2名しかいない地歴・公民の教員が2人とも地理の専門であったことから、日本史・世界史といった歴史科目を教えることになりました。歴史についてこれまで本格的に教えたことがない私にとって、毎日の教材研究の中で出てくる歴史に関する詳細な記述や諸説が飛び交う歴史の解釈や背景に関する説明は、調べれば調べるだけ生徒へいったい何を重点的に伝えていけばよいのかという悩みを生じさせました。（鹿児島・奥山嘉邦）

新しい枠組みの歴史像に基づいた教科書はまだ少数派である。また、そうした教科書でもところどころに古い枠組みで書かれた叙述が残り、読者を混乱させていることは大きな問題である。速やかに解決されるべきである。

(ii) は、大学時代に歴史学を専攻したことがなくても、勤務先の都合上、歴史科目を担当せねばならない事情があり、歴史の新しい枠組みをどのように理解すべきなのか、何が間違っているのかを教員自身で理解することが難しいことを伝えている。

募集時アンケートにおいて、応募者の大学在学中の専攻分野をたずねたところ、約2割の応募者が、歴史学以外の教育学や法学・経済学・哲学を専攻していた。教員免許を取得するに当たっては、世界史と日本史の歴史学講義の単位取得が必要条件とされるが、1年程度の概説講義で歴史学の現状や方法論、研究の最前線に触れることは難しい。歴史学以外を専攻した教員にとって、高校生に向けて歴史学とは何か、歴史を学ぶことにいかなる意義があるのか、などを伝えることに難しさを感じるのは当然のことといえるだろう。こうした他専攻の教員、ひいては社会一般の人々に歴史研究者が発信していく際は配慮も必要であろう。そして、前掲レポート中にもあるように、この閉塞感を打破するために、多くの教員が最新の研究成果を吸収しようと奮闘していることも見逃してはならない。

(3) 歴史研究に触れる機会の少なさ

◇世界史は「おもしろい」ということを心がけて授業を展開している。しかし、そのためには教師自身の引き出しを豊かにすることが不可欠である。（宮城・池田実）

新しい枠組みで書かれた教科書が登場したとしても、教える側の教員が最新の研究動向を入手し、知識の「引き出し」をより多く持たねば、授業に活用することはできない。各教員はこれを入手しようと努力してはいるものの、障害があるようである。

◇常々、歴史研究と歴史教育の間には溝・断絶があることを実感せずにはいられなかった。前者では、研究の進展を第一の目標とするため、専門的すぎて一般の者には（高校教員にも）わかりにくく閉鎖的な傾向が否めない。後者では、授業実践報告が主であるだけに授業で使える技術や知識を得やすく、その意味で開放的と言えるが、一方でその授業を客観的に批判・検証することが難しかったり、内容的にかなり古い学説に依拠した実践報告も多かったりする。（愛知・中尾浩康）

◇書店に並ぶのが概説書や一部の専門書しかない状況下では、歴史学の最新成果を知っていくことは、名古屋での研究会の参加や学会しかない。各大学の研究紀要までは全く把握不可能なので、本当に不十分です。また、専門書が高額な点や学校現場に時間的余裕もなく、普通の教師は数十年前の成果でしか教えられない状態です。（三重・新田康二）

◇高校までの歴史の勉強と、大学での歴史学の研究は全く異なるといわれている。「事実を証明するには、数多くの史料を発掘し、さまざまな手続きを経ることが必要」（大阪大学文学部案内冊子より引用）である。結局は図書館で閲覧できる書籍や書店で入手できる出版された書籍（勿論日本語）でのいわば自学自習である。しかし素人ゆえに間違った見解、偏った視野で歴史を認識しかねない。（京都・松田宏）

地方では情報の交換・収集がままならない事情もあるようである。大阪府の場合、府域が狭いうえに交通網が発達しており、「情報の過疎」という現象は想像し難いが、府県域の広い地域では教員が一堂に会して研究会を開くこと自体が困難である。

もっとも、仮に独学で情報を得たとしても、その学説が正しいのかどうかを検証する作業は各教員の責任に委ねられることになり、相当な判断力が問われる。大学で歴史学を専攻していない教員にとっては至難の業であろう。

このほか、レポートでは情報収集すらままならない教育現場の現状を訴える声が少なくない。

◇教員は現場に出てしまうと教科教育的（指導技術、指導方法などなど）な研修を受ける機会はそこそこあるが、より新しい学問の知見に触れる機会が決定的に不足してしまう。結果として、自分が高校時代に習った知識で日々の授業をこなしてしまうのだ。
（東京・角田展子）

◇高校側も多忙化や研修不認可のしめつけがきつくなってきているので、多くの人が集まって行う研究集会のようなものは長期休業中しかできない。普段は、大阪府社会科研究会が行う研修にしても、学校の書類作成や生徒指導のため行きたくても行けない。多忙化のため授業の合間に勉強したくても出来ない状況もある。「本を読んでいる間に書類を作れ」の雰囲気がある。（大阪・遠藤和男）

◇「教員の自主的研修」は困難になっている。研修計画書（一週間前までに提出）と研修報告（事細かな内容と授業への「効果」）を求められれば、“こんなにめんどうなら研修しない”。また、研修の時間自体がない。（神奈川・佐藤雅信）

◇小中連携に比べれば、中高連携は難しい。それでも地域による結びつきはある。しかし、「高大連携」となると、その地域性すらない。さらに、高校（教員個人ではなく）間の連携も十分ではない。都道府県によっては研究会が実績を上げている例も見られるが、地方では無いに等しい。（福井・杉下憲司）

◇高校教員の中で自分の研究をやらない人が増加している。大学時代はなにがしかの研究をしていたはずなのに、高校教員になると職務の忙しさ等で放棄してしまっている人が多くなっている。高校教員の研究会活動も弱体化している。（徳島・岡山真知子）

◇学問分野による違いがあるが、世界史の場合、高校教員が歴史学者として研究をするのは、その費用と時間において非常に厳しい環境にある。教育現場を離れて大学院等で研究できる制度が一部にはあるものの、史料にあたりながら継続的に研究をするための十分な環境が高校教員には与えられていないのが実情である。（滋賀・水田博之）

校務の多忙化は高校教員の新しい学問を学ぼうとする時間的・精神的余裕を奪っているようである。各都道府県の研究会活動も地域によっては停滞気味のようである。

前掲レポート中にあるように、本研究会に参加するにあたり、学校側から長文の出張報

告書の提出を求められた参加者が多数いたようである。実際に学校長宛に提出した出張報告書の写しを添付してくれた参加者がおられたが、数千字に及ぶ分量であり、校務多忙な教員にとってはかなりの負担であったものと察する。

本研究会では5月下旬に抽選の末、100名強の教員に参加許可の通知を送ったが、開催直前になって辞退者が10名近く現れた。校務が急に入ったために参加を辞退した例のほか、教育委員会の後援を得ていないという理由で学校長から出張許可が下りず、やむなく辞退した例もあった。中には本学から発送した出張依頼書を握りつぶした学校長もいたという。それだけ高校側には、研究・研修活動に対する制約があるのである。過去3回にわたり事務局長を担当してきた筆者もまた、その傾向が年々強まっていることを実感している。事務局側は、各都道府県・各校の実情に合わせた書類の作成、書類発給のタイミングなどに神経を使わされた。そのような現状にもかかわらず、今回300名近い教員から反応があったことは驚くべきことであり、各教員が本研究会に対して並々ならぬ高い期待を寄せていることがうかがえる。

ここ数年、大学院等の研究機関での長期研修を認める高校は増えている。政府は教員の10年次研修制度を推進する方針を打ち出しており、こうした流れはさらに進むだろう。しかし、こうした動きは今のところ都道府県によってばらつきがあるらしい。研修期間中は休職扱いになるため給与を受けられず、若手の教員にはほとんど有名無実な制度であるとの声も聞かれた。

(4) 高大連携の現状と課題

(i) 大学—高校の学校間の連携

◇理科系の教科などでは、大学の研究室を訪問させて頂き、話を聞かせて頂いたり、また大学の先生を高校にお招きして、講演会を開いたりしている。　(大阪・宇田川真)

◇本校は大学が附属しているため、公立高校に比べれば連繋をとりやすい体制ではある。しかし、2～3年前までは年に一度ぐらい特別講義を講堂に集めて講演してもらうという程度であった。(中略) 昨年度から高校3年科目に大学講義を充当する試みを始めた。(高校から大学へは評定基準を満たせば推薦で進学できる)。ただし、歴史学の講義は今のところ開講されていない。　(宮城・吉田理)

◇高大連携として、よく行われているのが出張講義や大学の授業受講である。これは、生徒が大学の先生の授業を受ける体験学習を中心としており、生徒の進路選択に利用し

ている。この他、利用しているのが総合学習において指導助言してもらうことである。いずれも、主体は生徒であり、高校教員を対象としたものではない。最近、10年次研修等で、大学の教官が研究を一部指導されることがある。私も一度地理のGISの授業を受けたことがある。ところが、歴史ではそうした機会があまりない。

（徳島・岡山真知子）

高校と大学の学校間の交流（いわゆる「高大連携」）は、理系科目を中心に各地で行われている。本研究会第1日目に行なった緊急アンケートで挙げられた各校の高大連携の実践例の多くは、上記のような大学教員が高校で授業を行なう「出前講義」や単位互換制度である。COEプログラムのメンバーも出前講義や模擬授業を引き受ける例があり、筆者も2006年10月15日に京都市立堀川高等学校と六甲高等学校（兵庫）の生徒を大阪に招き、桃木教授と印牧定彦氏（京都市立堀川高等学校教諭）と共同で模擬授業を行なった。

このような、高校生を対象とした高校と大学の学校間交流は、高校の教育現場にどのような効果をもたらしているのか。レポートによると、肯定的な意見よりもその効果を疑問視する声の方が多いのである。

◇本校でも大学の模擬講義を実施している。寝てしまう生徒はいるが、なかには、普段の授業と違って目を輝かせながら聴いている生徒も存在する。やはり、専門家の講義は強い確信と自分で得たオリジナルの見識のもとでおこなうので、生徒の心を捉える場合もある。これは、常に二次的資料で授業を展開している我々には出来ないことである。

（神奈川・古川寛紀）

◇これまでのところ、高大連携の効果は限定的であるように思われる。その要因としては、①大学側から高校側への最新の研究成果の紹介という形をとり、双方向性を持たないこと、②高校側に、ただ知識を得ることを目的とした受身の意識があったこと、の二点が考えられる。（島根・北垣秀俊）

◇現任校でも年に一度、出前講義という形で事前に生徒たちからアンケートを取り、興味のある講座に分かれて2時間授業を受けるものがある。ただ、どの講義を聴いてもどうしても堅い理論になってしまい、いつも生徒の集中力が最後まで続かないのが現実である。逆にその学問に興味をなくしてしまうケースも多々見受けられるのである。

（兵庫・後藤善弘）

◇大学における歴史学と高校における歴史教育との連携はこれまで一部では行われていたが、政治的な党派性をともなったものであったという印象が強い。そのため学校内では一部の教師の個人的な取り組みに終わって広がりを持たなかった。（福岡・吉永暢夫）

◇平成11年の中教審答申において、初等中等教育と高等教育の接続の改善について提言されて以来、数々の実践がなされている。その一方で、「高校生が大学の授業を聴講したり、大学教授が研究の中身や大学教育について講演することで、相互の教育が良くなったり、制度の谷間でつまずいている生徒や学生が救われたりするプログラムとは思えない。まるで高大混乱である」といった批判的な意見もある。（千葉県庁・卯月睦彦）

◇「高大連携」という場合、従来よく実施されているのは、高校生を対象にしたものであると思う。例えば、大学の先生による「出前授業」や「講演」である。（中略）また、「総合的な学習時間」での行事の一つという位置づけでしかない場合も現実的には多いのではないか。このような行事的な連携、つまり、単発の連携、にとどまっているのでは、高校側と大学の先生側の負担の割には、あまり成果があがらないのではと思う。

（大阪・神於正明）

◇高等学校側の感覚では、高大連携といえば「対生徒」という観念で行っているということである。高大連携＝大学側からの高校への出張出前講義or高校生の大学での単位取得という図式が出来上がっているのである。その中では高校教員の役割はそのパイプ役に過ぎないのである。今やそのコーディネートを行う業者も多く介在している。

（兵庫・矢部正明）

◇現在においても「高大連携」は、まだ十分に理解された教育企画とはいえないようである。多くの高校では出前講義と進路体験をセットで考えた進路指導的企画と受けとめている。このスタイルは大学側の負担と単発講義での授業効果の薄さによって、発展性はあまり見込まれないと考える。そこで、高大双方により教育的な効果を狙った連携スタイルで、本校では高大連携の再構築を図ってきた。（中略）高校教育改革の進展によって各校は教育の特色化に取り組み、教育課程の改編と共に学校設定科目（特色科目）の構築が進んできた。一時的に「総合的な学習の時間」での活用も考えられたが、その運用の難しさと総合の時間の位置づけの曖昧さによって、いまやこの枠での特色化や高大連携は縮小している。現在の各高校が持つ学校設定科目は、特定の教員が持つ知識や経験に頼った特殊なもの、または科目名を変えながら実質は受験対応の補習的な内容が多く、必ずしも高校教育の改革に結びついていない現状がある。（兵庫・鵜飼昌男）

◇私も進路部として高校に大学の先生方を招いて模擬授業を多数実施していただきましたが、本当に高大連携で必要なのは高校教員の学びの場であり、高校の教員と大学研究者（教員）の連携であると考えます。（東京・藤野正和）

「出前講義」は生徒の関心を一定程度引き上げてはいるものの、かえって生徒の間に混乱をもたらす場合もあるなど、高校側にかなりの負担を強いており、今や閉塞感も漂っているようである。本研究会に対して、かつて「臨床的な試みをするならば、大学教員が高校の教壇に立てばよい」という意見があったが、筆者はそうすれば教育現場を混乱させ、高校と大学との間で不信感を抱かせることになるのではないかと危惧していた（2004年度報告書参照）。どうやらその危惧は現実のものとなっているようである。

さらに、対象が生徒となるため、高校教員が大学の最先端の研究成果をどう生かすべきかという面の解決にはほとんどつながっていないという問題が残されている。

(ii) 大学教員と高校教員の連携

では、本研究会のような生徒を対象とするのではなく、大学教員と高校教員を対象とする歴史学と歴史教育に関する連携はどのようになっているか。2003年夏に本研究会が発足した当初、類似の研究会は管見の限りほとんど存在していなかった。しかし、4年を経た現在、同種の研究会が各地で立ち上がっている。その具体例をレポートから紹介する。

◇歴史学研究会と東京都歴史教育者協議会が共催している「歴史学・歴史教育研究会」は2003年10月25日の第1回からすでに10回以上の例会・研究集会を開いています。大学と高校を結びつけて活動しています。（実教出版・小林一幸）

◇東京と神奈川の教員（中学と高校）・大学院生で構成されるグループ「社会科中東研究会」がある。月例の研究会にはスポット的に中東調査会・マスコミ関係者が参加、オープンな講演会や報告会も開いたり大学院生が修士論文のプレゼンを行うことやフィールドワークの報告などもあり、高校生に対する対ムスリム意識調査を行なったりもしている。このようなグループが他にもたくさんある。しかし個人を越えた教科としての、そしてそのグループに属していない教員の共通認識＝共有財産になっているかというと怪しいものがある。ヨコの連携を同時に作ることを継続しないと結局「大多数の高校生」に歴史が降りて行かない。「個人＋ヨコ＋タテ」を備えた活動という視点で歴史教育の

組織を構築する必要がある。　（神奈川・佐藤雅信）

◇第1回研究会終了後、このまま終わらすのはもったいないと考えた大阪の高校教員同士で声を掛け合い、その年の11月にIF（インターフェイスにちなむ）の会が5人で発足しました。現在は16名で、2ヵ月に1回程度の割合で会合をもち、順番に発表を行い、批評しあっています。内容は「高校世界史の授業に関すること」という条件を満たすものとしています。（中略）そして会合の形式・参加者等が安定した頃に、大学関係者に高校教員のメンバーと同じ立場での参加を呼びかけようということになり、その趣旨に添って呼びかけたところ、第11回に1名が快く参加してくれました。ざっくばらんな討論にとけ込んでもらえ、この試みは成功したと思います。今後とも、高校・大学双方の遠慮無い討論を行えたら有益であろうと考えています。　（大阪・若松宏英）

◇昨年より大阪大学に学ぶ形で、九州大学と福岡県高等学校歴史研究会の連携が実現し、「歴史学・歴史教育セミナー」が開催された。今後、全九州さらに西日本地区の大学・高校の研究者や教員の連携の輪が広がっていくことを希望し期待したいと考える。

（福岡・菅満津江）

このように、全国規模ではないものの、地域・研究領域ごとに新しい研究会が発足している。このほか管見の限りにおいては、和歌山大学が地元の教育委員会と提携して研究会を組織している。立命館大学は高大連携室を設置、近畿を中心とする複数の府県と提携して様々なプロジェクトを立ち上げている。専修大学は本研究会とほぼ同じ日程で、大学の歴史教員が高校教員向けの講座を開いた。岡山県でも地元の高校教員と大学教員が研究会を立ち上げる計画が進んでいるという。京都府では本学や府内の大学の教員・学生と高校教員が一堂に会する研究会が実施されている（詳細は、本報告書後掲の堀江嘉明氏の論文を参照されたい）。それらの試みの多くは、本研究会が発足して以降に発足したものであり、そのいくつかは本研究会を参考にしたものである。本研究会の活動が一定の支持を受けた結果、他大学でも個々の特長や地域性を生かしつつ実施しているのである。本研究会の活動の成果は、各地の大学・高校に確実に刺激をもたらしているのである。

2. 研究会の意義

前節で述べたような高校の教育現場における様々な問題を抱えながら、100名近い高校

教員が本研究会に参加した。グループ討論会の設定など、開催直前になってスケジュールの変更があり、参加者には例年に無い負担を強いることになったが、今回もほとんどの参加者から高い評価を得ることができた。しかし、研究会に対して指摘された問題点も皆無ではない。本節では、研究会が高校教員にどのような点で意義深いものとなったのか、またどのような課題が残ったのかを分析していく。

(1)「新しい枠組み」に基づく講演内容

◇歴史というものは一定の時間や空間の中の事実という観点では正しい理解はできないし、また中国史と東南アジア史においてどちらが主でどちらが従であることもなく、為政者が残した記述を基にした歴史の一部を、われわれがすべて鵜呑みにしてはいけないということを実感しました。（鹿児島・奥山嘉邦）

◇世界システム論など歴史を捉える新たな枠組みを歴史教育に浸透させる前にまず、歴史教育の場でいつの間にか暗黙のうちに前提としてしまっている概念（平教授や森安教授が指摘された「国家」「民族」などを含めて）を対象化して、それらが歴史的に作られたいきさつを明らかにすることが、今歴史教育で求められると考える。（福岡・吉永暢夫）

◇モノの見方・考え方が変わり、批判的に納得の行く形で見据えるようになったことは確かである。（大阪・髙橋勝幸）

◇私が最も衝撃を受けたことは、高等学校用歴史教科書（日本史・世界史）の記述がすべて真実ではないということでした。（中略）もしそれが間違った歴史だとすれば大きな意味を持ってくると思います。（佐賀・森永知宜）

◇多くの講師がご自分の研究テーマを話されているだけでなく、現代の政治認識にまで言及されていることである。大学教員が仰っていた「現代を教えていない」に対する一つの答えであるかもしれない。（宮城・吉田理）

◇歴史を複眼的・批判的にみなければいけないという学問的姿勢、研究成果を広く伝え、発信していかなければいけないという使命感と熱意。大阪大学のスタッフが、高校教員と共に新しい歴史学、歴史教育を構築していこうとする真摯な姿勢がよく私たちに伝わってきた。（中略）まさに「腑に落ち」「目からうろこが落ち」私の頭の中にはっきりと「歴史の像が結ばれた」。（香川・豊島修）

◇講演の中で繰り返し強調されていた、広範な知識、批判精神、バランス感覚は是非身につけておきたい。そして、「今の世の中を何とかしたい」という問題意識が、歴史学

を小手先の実学ではなく長期のスパンで社会を変革しうる実学へと昇華させるであろうと信じてやまない。（三重・冨澤要樹）

◇研究と現場のずれが生じやすい部分を的確にわかりやすく講義して下さったことで、先端の研究の一端に触れられたことが有意義だった。（中略）私の教材研究は基本的に大学入試問題のチェックと生徒へのフィードバックとなっているが、その根底は以前に勉強した歴史であり（基本的に私の知識ベースは古い岩波講座世界歴史で止まっていた）、最新の歴史研究とのギャップが増加していることを自覚させられた。

（駿台予備学校・松山仁史）

大学教員が一国史観や西欧中心史観など従来の「古い枠組み」を打破した「新しい枠組み」の歴史研究の最前線を紹介し、さらに高校教員からの報告を基に過去の研究会での成果が教育現場でどう活かされているのかを検証する場も設けた本研究会は、参加者から高い評価を与えられた。以下、授業実践報告や討論会を含め、個別の講演に対する反響のいくつかをレポートから掲載する。

(i) 森安講演

◇講演の中で、「中国史は漢民族史ではない」と論説されました。これまで教科書をそのまま鵜呑みにしていたので、インパクトが強く、同時に疑問が解決しました。五胡十六国時代は華北に異民族が分立、融合していたこと、また金の支配や元朝に至ってはモンゴルが全中国を支配されたこと、にもかかわらず漢民族の歴史が中国史を支配的に教科書は教える。「唐文化」は「漢民族の文化」なのか、このことは否定に値する。日本に至っては弥生時代、古墳時代より朝鮮半島から民族移動があり、多くの文化の痕跡を残している。日本も複合民族国家であることは当然のことである。最後に「いずれアメリカもアメリカ民族ができる」と説得力のある論説に共感しました。（大阪・田守隆敏）

◇これまでユーラシアについては教科書どおりに区切り、王朝支配の後退も一つの民族が滅ぼされて、次が立つような発想であったが、支配者は数パーセントに過ぎず、大部分の民衆（民族）は生き残り、混血を繰り返しながらもそれぞれの文化が溶け込んでいく壮大な大陸の歴史の渦巻いていることを教えられた。（大阪・高橋勝幸）

◇講演中に紹介された第一次史料（例　女奴隷売買文書等）は高校現場でも十分活用でき、口語訳とともに詳しい注釈も追加すれば理解を深めることができる。ソグド人が唐

代のオアシスの道を舞台に活躍した商業民族であるというだけの平板な理解にとどまらず、進んだ契約社会も示していたことを雄弁に物語るからである。　（京都・堀江嘉明）
◇古代日本とソグド人との関わりを調べてみた。いろいろ文献を探ってみると、安如宝というソグド人僧が754年（天平勝宝4）2月に鑑真と共に来朝し、奈良末から平安初期の仏教界において指導的地位にあることがわかった（東野治之『遣唐使船』、東大寺教学部編『シルクロード往来人物辞典』）。「安」姓を名乗るのでブハラ出身であろう。（中略）古代日本の歴史を中央ユーラシア情勢や研究の進展の著しいソグド人の活動を視野に入れるとき、新しい歴史像が描けるようになることは間違いない。戦後、日本古代史学は「東アジアの中の日本」という観点を共有し豊かな歴史像を描き出してきたが、21世紀に入ってやや行き詰まりをみせている。それを打破するため「ユーラシア世界と日本」の観点を持つことが有効なのではないか。本研究会に参加して得た最大の成果はそうした新しい歴史の見方を獲得したことにあった。　（富山・城岡朋洋）
◇ソグド人が商人のみならず、武人・外交官・政治家としても活躍していたことなどの指摘も刺激的でした。唐王朝については安史の乱を早すぎた征服王朝と位置づけられていることは、この反乱に対する認識を新たにすることができました。中央ユーラシアを舞台とした遊牧騎馬民族の動向が世界史に相互連関を与えたという視点で世界史教育の教材化を図る予定で、このような諸点を参考にさせていただきたいと考えています。
（香川・真鍋篤行）

(ii) 平講演

◇「歴史的事象から、現代へのメッセージを読み取れ」とか「現在の私たちは未来へどのようなメッセージを発すべきか？」という熱い講義を聴いた。これはまさに歴史学の本質ではあるまいか。　（広島・大世戸治郎）
◇学校現場では、鎌倉幕府の成立によって社会が劇的に変化したという考え方や、法然や親鸞の説いた思想は、従来のいわゆる旧仏教とは全く異質なものである、という考え方が主流で、私もそれに沿って授業を行ってきました。そうした中で、自分の知らない研究成果に触れることができ、また単に新しい知識を提供する、というのではなく、歴史を通したものの見方や考え方、歴史認識のあり方について、示唆に富んだ講義を聴くことができ、私自身大変勉強になりました。　（鳥取・間久美子）
◇私が中学校・高等学校で学習し、真実だと確信していた鎌倉時代の宗教界の実態を大

きく覆すものでした。鎌倉時代の仏教界をリードしていたのが、本来古代の象徴とされていた旧仏教であり、浄土宗・禅宗などのいわゆる「鎌倉新仏教」は後代に鎌倉新仏教と認定されたもので、鎌倉時代当時はほとんど影響力を持たなかったという事実は、教科書と見比べると大きな隔たりがあります。しかし、現在でも旧仏教の寺院が日本中に見られ、しかも大寺院が多いという実例と照らし合わせれば、平教授の考えは十分な説得力があります。その意味では、私がいかに教科書に載っている歴史的事実を鵜呑みにし、疑問も持たずに学習し授業してきたのかを気づかされ、恥ずかしい限りです。

（佐賀・森永知宜）

◇「時代区分論争」の不毛性はあるものの、歴史の流れを観ることで時代の変化を認識できた。結果としての時代区分ではなく、過程としての時代区分論は「有りき」なのかという思いを持った。その延長線上に残ったのは、「それならば近代の始まりをどこに考えるのか」ということである。これは自分自身の課題として持ち続けていきたいと思う。（兵庫・吉村昌之）

◇平安＝旧仏教、鎌倉＝新仏教という二項対立するような構図をつくり出したのは、教える側が理解しやすいように意図的に詳細な部分には目を瞑って敢えて対比するように仕立てたのではないか。（中略）そもそも人の行いは「断絶」するものではなく、次第に「変化」するものであるという、ごく当たり前のことを理解することができればこのようなことは起こり得なかったであろう。（愛知・杉本明隆）

(iii) 秋田講演

◇講演を参考にして、地域経済間の関係性に視点を据えつつ、それぞれの地域経済をより重層的に捉えていくような形で世界史の理解を深めていきたい。（滋賀・水田博之）

◇現代史ということもあり、今まではアメリカの政策を中心に東南アジア・東アジアを見ていたため、知識不足を感じた。（三重・新田康二）

◇英領インド産綿花が日本（大阪）の繊維産業と大きく関わってことは、今後の授業を行なううえで大きな示唆を受けた。（宮城・池田実）

開催時アンケートによると、秋田講演は内容が極めて高度であるため、授業への活用が困難であるとの意見が多かった。

講演を受けて他地域の現代史への応用例を示したレポートも寄せられている。

◇北欧諸国は近代世界システムにおいては「半周辺」に位置づけられ、グローバルヒストリーにおける主要なアクターとはいえない。しかし現代世界におけるプレゼンスは決して小さなものではなく、特に日本においては一種のユートピアとして美化され、福祉・教育・外交などの諸政策とその成果がやや見境なく賞賛される傾向にあるといえるであろう。しかしもちろん、北欧は完全無欠のユートピアではあり得ない。2005年9月30日にデンマークの左翼的な高級紙Jullands-Postenが掲載した風刺画を発端とする一連の騒動は、デンマーク国内のムスリム会議によるいささか扇情的な宣伝 によってイスラーム諸国の憤激を買い、イスラーム世界の人々の西欧諸国に対する潜在的な不満や屈辱感を刺激して収拾のつかない状態に陥っている。(中略) デンマークの政策転換を、社会統合担当の閣僚が厳しく批判したスウェーデンにおいても、国内では住民投票の場において反移民の言説が表面化するなど、移民問題は北欧諸国においても深刻である。「ムハンマド肖像画事件」は「文明の衝突」の文脈で理解されがちであるが、その衝突は遍在する他者への無理解を発端として、一体化された世界におけるバタフライ効果の様相を呈しつつ大爆発に至ったものとして理解できるであろう。　(愛知・杉藤真木子)

(iv) 桃木講演

◇歴史を学び、教える楽しさとともに、その怖さを学んだ。何気なく常識として使用している用語、細かく調べもしないで説明していることなど、私自身あるのではないかと思い、今後に生かしていきたい。　(埼玉・岩崎淳)

◇我々高校教員が「教科書にこう書いているから」という安直な理由で誤りをそのまま教えてしまっているという高校現場での問題点を分かりやすく指摘して下さり、良い勉強になりました。　(大阪・宇田川真)

◇高校世界史では歴史の表層を広く教える訳ですが、間違った知識・事実を教えることは最低限避けたいことの1つです。そのために、教科書以上の正確な部分を教えていただき、迷い無く授業で指導できそうです。　(福岡・徳本次郎)

◇桃木教授が高校の教科書や他大学の入試問題を研究していることには驚かされた。画期的・先進的とされる研究も日々の地道な活動の連続であったのだと感じた。そして、桃木教授のこういった地道な作業は高校教育と大学の研究の「溝」を埋めていく大切な営みであると痛感した。　(広島・大世戸治郎)

教科書や大学入試問題の記述に誤謬があることを明らかにした桃木講演は、参加者に大きな衝撃を与えた。

このほか講演及び質問回答では、世界史を学ぶことの意義や、東南アジア史で最低限何を学べばよいかの指針が示された。それらに対しては、以下のような反響があった。

◇“教えるなら最小限なにを教えるか”の提示があり、とても役立った。各地域史にこのようなマニュアルの提示があるととてもたすかる。（神奈川・髙橋和子）

◇「正解のない問いに出会ったとき、投げ出さない人間になって欲しい」「自分と異質の者と出会ったとき、おもしろがって欲しい」「自分の仲間以外の人にその面白さを説明できるようになって欲しい」の3点も教壇に立つ上で、私自らが常に意識してゆきたい言葉だと思いました。（神奈川・九鬼逸子）

◇「自分と異質なものに出会ったとき怒らない。日本の常識をあてはめない」という原則を高校生教えることは、世界史教育の緊急の責務であると、恐れながら認識しました。（大阪・北村素子）

◇大学入試に見られる誤解の具体例、表記の問題など、教科書の記述にも関連して大変参考になりました。（実教出版・小林一幸）

◇自分は東南アジアを「世界史の鬼門」と呼んできた。これは歴史を学ぶ者として言ってきたのではない。世界史を教える教員の立場として東南アジアが外の地域と比べて非常に教えにくいということである。（中略）桃木教授が言われた「3つのいとぐち」から入ることで生徒の東南アジア史への理解も進むのではないだろうか。地図を書かせること、日本とのつながり・共通点を紹介し、映像等を使用してエスニック料理・踊りや音楽を見せることにより生徒も関心をもつのではないか。（山梨・石原純）

(v) 笹川講演

◇世界史Bにおいて、現状は旧態依然とした受験対策の知識注入型授業から脱却できていない。（中略）笹川教諭の授業実践報告を受けて、歴史的思考を養う授業は生徒の積極的な授業参加を促し、当然の帰結として知識の定着度も増し、受験にも十分対応できると考えるに至った。今後は具体的な単元を選び出し、具体的な教材化と年間計画の再編を進めていきたい。（兵庫・上田義人）

◇高校側がより多くの優れた授業案を提示していく必要を強く感じた。（中略）私は、

歴史研究と歴史教育が本質的に同じものであると思う。なぜなら、それは両者ともに「わかりやすさ」であり、常識的に納得いく形であれば、実証研究であろうと、一つの世界史授業であっても、優れたものになるからである。「わかりにくい」ものは、歴史研究としても精彩を欠くし、高校生を対象とした授業としても完成度の低いものになってしまう。しかし、そのわかりやすい授業とは、非常に高度な歴史認識を踏まえていないと浅薄なものになることは、笹川報告で痛感した。簡単な用語を使うことがわかりやすいことにはならない。easyではなくsimpleな授業・研究が有効であることを学んだ。

（茨城・栗林幸雄）

◇一般的に知られているいわゆる定説や教科書に書かれている事案はついつい無条件に信じてしまうものだが、実情はずいぶんいろんな事柄で歪んで伝わっているものだと改めて知ることができた。日々雑務に追われている教員としては、久々に研究者根性を呼び起こされるものだった。（埼玉・廣瀬和義）

◇勿論実践報告のレベルも高かったが、単なる実践例ではなく、豊かな知識と、教育観に裏付けられたものを感じ取ることができた。願わくば、大学側からの率直な御質問・御感想などもたくさんいただければ良かった。（京都・松田宏）

◇正しいことを「正しい」と言っても通じない風潮、真実の知だけが世の中を動かしているのではないという現実が存在しているように感じられる。その意味で、笹川教諭の報告は一つの方向性を示していたと思う。乱暴に言えば、授業は歴史の雰囲気をどれくらい伝えられるか、ということであろう。正しい知識に基づく、独創的な授業展開の必要性、つまるところ、授業とは教師と生徒との共同作業、笹川教諭のいう「生徒の参加する」ものである。主体者と被主体者の対比から生徒に考えさせるという、例示としては大変優れた提案だと思った。今後の自分自身の授業に反映させることができればと考えている。（兵庫・吉村昌之）

笹川教諭の講演に対する大学側からのコメントは質疑時間が取れなかったために、研究会の中では行なえなかった。研究会終了後、講師陣や聴講していた学生・大学院生に意見を求めたところ、「大学の教養科目講義並みのハイレベルな授業だった」「生徒の興味をひきつけるという点では成功している」「しかし、引用されている史料の解釈が妥当かどうかは検討の余地がある」といった意見が大勢を占めた。本研究会には、教員を目指す大学生が多数傍聴していたが、笹川講演は学生たちに皆大きな刺激を受けている。

(vi) グループ討論会

◇物足りなかった。1時間では全員の意見も聞けず、残念でした。（神奈川・大島弘尚）

◇試みは良かったと思うが、いかんせん1グループの人数が多すぎて発言できない参加者も多かった。課題解決型ワークショップをの手法を取り入れて人数を10人程度で行えばよかったと思う。（宮城・池田実）

◇本研究会四年の総括と、来年度以降の高大連携としての発展的将来について意見を出し合うはずであったが、あまり具体的な方向性を見出すにはいたらなかったのではないか。（兵庫・矢部正明）

今回急遽新設された3日目午後のグループ討論会は、1時間という限られた時間、各班約30名近い出席者、さらに多岐にわたる提言の前に、議論の集約ができないまま終わった。主催者側としては、多様な意見を聴取することができて有意義ではあったが、高校教員側から見ると「不完全燃焼」といわざるを得ない内容であった。

ただ、討論会そのものの必要性は参加者の多くが感じているようである。以下のような建設的な提言も出されている。

◇参加が決定した教員に事前に希望を取って、関連したいくつかのテーマで分科会を行うほうが有益であると思う。私たちも事前にそれぞれのテーマに関して参考文献を読んできたり、意見をまとめたりする時間があれば、さらに内容のある分科会になるだろう。（宮崎・竹村茂紀）

◇大単元、小単元レヴェルでの授業化をどうすればよいのかを、講師陣を交えて議論し、アウトラインを作っていくワークショップ形式の時間がとれないか。（中略）小グループに分かれて実施するとして、アウトラインだけなら2時間あればできるのではないでしょうか。そして全体会で発表するという手も考えられます。（広島・田中英朗）

(2) 緊張感のある研究会

◇参加して痛感したのは、「生の講義に勝るものなし」ということである。研究成果を教授陣の口から、表情や動作を交えて丸ごとぶつけられる印象は、文字だけから受けるのとはまるで違う。（東京・大見真由美）

◇今回の研究会の教授陣がレジュメだけの裸一貫の講義で勝負していることに少なから

ず感動した。我々高校教員はとかく教材の「本質」よりも「形式」や「形態」にこだわってしまう。一番ポイントを置かなければならない授業の中心となる結論や命題に力点を置くことをおろそかにしてしまう。「形式よりも内容で勝負」ということを改めて痛感した。（広島・大世戸治郎）

◇参加して感じたのは、よく勉強させる研究会だったということです。参加者は事前に参考文献によって予習することが求められます。また、参加者が提出した質問票には、翌日各教授から回答レジュメが出されるという具合で本当に緊張感のある3日間でした。（静岡・榊良）

◇事前に送られた講演要旨を見てさらに期待が高まり、参考文献の通読を開始した。文献がなかなか見つからず、県内の図書館の横断検索でやっと手にした本のコピーを読みながら考えた。「参考文献は必ず読んでいることを前提に講義を進める」という講演とは、どんなものかと。実際に聴いてみて、なるほどこういうことかと理解し、100分の講演でこんなにも中身の濃い話が聴けるのかと感心した。4本の講演全てが研究の最先端を含み、内容の凝縮されたもので、大阪まできて本当によかったと実感した。（千葉・廣川みどり）

◇この研究会が公開講座と違うのは、丁寧な質疑応答（特に翌日に30分もかけて応答して下さるのは素晴らしい！）、3日間かけてのつめこみ講義などが用意されていることであろう。（東京・角田展子）

◇歴史学の最先端の成果を提示し、これまでの「常識」（教科書記述など）に挑むそれぞれの講師陣の姿は、刺激的であり魅力的であった。また、質問票への誠実な回答にも驚嘆した。教える者としてのあるべき姿勢を否応無く再認識させられた。大学教員が研究者で私たちが教育者などと、単純な分け隔てをこの会ではすべきではないと感じるとともに、私自身探究者としての意欲を失わず、生徒に対しより真摯に向き合っていこうと決意を新たにすることができた。（秋田・伊藤真）

◇最もよいところの一つは、私たちの質問への丁寧な回答です。概説書でさえなかなか読む暇もなく意欲もわかない、多忙を極める現在の教師たちにとって、打てば響くようなやり取りができる大阪大学、これは今や財産です。（神奈川・小林克則）

◇講師陣の話には迫力があり、大事なポイントを聞き漏らすまいと一生懸命メモを取っていた。キャンパスを出てからも、展開の流れを把握するために復習をしていた。（中略）歴史研究の最新の成果に触れる機会、世界史を教える教員の交流の二つの点から、

自分ができることを考えていきたい、その出発点となったのが今回の研究会であった。

（東京・吾妻潤）

本研究会では第3回研究会以来、5月末に参加者を抽選で決定した後、当選者に対し、抽選結果の通知とともに、各講演の要旨と参考文献を通知して事前に通読しておくことを課し、文献を通読していることを前提として講演を進めた。講演終了後には質問票に疑問に思ったことを記入してもらい、それらの質問に対し、各講師が半ば徹夜をして翌朝までに書面で回答するというスタイルは本研究会発足当初から採用している。これは高校教員と大学教員とが少しでも長く対話の「ラリー」を続けていくことを図ったものである。こうした手法に対しては高い評価を受けた。また質問に対し詳細に回答を行なう講師陣の姿勢に、教育者としてのあるべき姿を再認識されたとの感想も聞かれる。

主催者側としても、過密な校務の合間を縫って、さらに多大な経済的負担をしながら大阪大学まで足を運んでいただく以上、その負担に見合った研究会になるよう、かなりの緊張感を持って企画・運営にあたってきた。主催者側の本研究会にかける思いは確実に参加者に伝わったようである。そしてこの緊張感が「しゃべりっぱなしでおしまい」の講演会とは違う独特の雰囲気を作り上げていると言えよう。

(3) 3日間という会期

本研究会は、大学教授陣の講演が1・2日目にあり、3日目には2日目の質問に対する回答と高校教員側の講演、および討論会という、3日間の会期で行なわれた。会期日数は第1回以来変わっていない。校務の事情もあり、3日間もの長期にわたり休暇をとって参加していただくことはかなりの負担になるのではないか、と主催者側でも会期を短縮すべきではないかという議論が内部であったことも事実である。

しかしながら、講演に対する回答を行なおうとするならば、どうしても翌日に時間を割く必要が生じてくる。2日程度では講義の内容が充分に理解できず、質疑応答を通じてようやく内容が理解できたという参加者も少なくないようである。また、全国から集まった教員同士が情報交換をしようにも1～2日程度の会期では相手の名前も顔も分からずじまいで解散してしまう。何よりもかなりの経済的負担を強いている以上、それに見合った講演と対話を実施する場合、やはり3日程度の会期が適当ではないかとの結論に達した。この3日間集中の会期に対しても、一定の評価が与えられている。

◇「高大連携」は高校の教員が歴史学の最先端の研究を「体感」し、それぞれが持ち帰って具体的に教材化するというのが理想的な形であると思う。その際、大学での研修や講義がばらばらのテーマ、一話完結のテーマでなく、全体として歴史教育の方向性を示すものであることが重要であると考える。一話完結型の講義を聴く機会は、教育委員会や地元の研究会でも得ることができる。しかし、数日間にわたり、大きな共通テーマにそった話を聴くことのできる機会はほとんどなく、それだけに本研究会の持つ意義は大きい。（福井・堂森峰春）

◇ユーラシア・海域アジアなど専門外で書物を手にすることもなく、この会についていけるようにと必死になった。これだけでも知識・認識の幅を広げ、通り一遍の教科書ガイドの範囲内だけだったものが、随分と深く見ることができた。それにも増して教授陣の迫力ある講演に圧倒され、これまでの考え方・常識と思っていたことが覆され、二日目まではただ聞くだけで頭の整理がつかない状態であった。（大阪・髙橋勝幸）

(4) 知的好奇心の惹起

研究会を通じて、歴史についてもっと勉強をしていきたい、その意欲を生徒たちに授業で伝えていきたいとの声が寄せられている。限られた授業時間数で、本研究会で扱ったような内容をすぐに現場に還元することは容易なことではないだろう。だが、教える側が歴史を学ぶことの面白さ、重要さを伝えられなければ、それを聞いている発達途上段階の高校生に、歴史は暗記物のつまらない学問であるという意識を与えかねない。まずは、教える側が「歴史は用語の暗記ばかりではない、考える面白い学問である」と感じることが、授業への還元に向けての第一歩なのである。

◇大学側は、研究成果を学会や学術雑誌といった閉じられた世界ばかりでなく、社会全体へ向けて発信していくことの必要性を感じたであろうし、高校側は、日々の雑務を言い訳にしている己の勉強不足を猛省し、まずは私たち高校教師が知的好奇心を持ち、可能な限り歴史学の研究動向に敏感になり、自らも研究テーマを持ち、研鑽することの必要性を痛感させられるものであった。（宮崎・竹村茂紀）

◇教師自身がもう一度歴史学の魅力と意義を認識することが必要である。歴史学の魅力、意義を再認識した教師は、それを何とか生徒達に伝えようと情熱を持ち、工夫に努めるであろう。即ち方法は内容についてくるものである。歴史学を学びなおす最も良い

方法は、最先端の歴史学研究者からその成果をインターフェイスで学ぶことである。この研究会は画期的な研修の場であった。まさしく、停滞する高校の歴史教育に対する「阪大史学の挑戦」だった。（熊本・粟谷昌史）

◇「教える」という教師の仕事は、一生「勉強する」ことが絶対必要な仕事である。この「勉強」の場を教師に提供してくれているこのような研究会は今までにないものでした。教育委員会が提供する研修は、多くの場合「教育技術・方法」に主眼を置いたもので、それはそれで大事なのですが、学問内容を深めるための勉強の場としては物足りないものでした。教師の知的好奇心を刺激し、さらに、勉強する意欲を刺激し、生徒へ伝えたい・教えたいという気持ちを刺激してくれるこのような研究会が教員向けの高大連携としての一つの成功例なのではと思う。（実教出版・小林一幸）

◇講演を通じて、純粋に自分自身が「もっとわかりたい」「もっと勉強したい」という気持ちになりました。この「もっとわかりたい」という気持ち、知的好奇心こそが学問の基盤であり、私が今目の前にしている生徒たちに少しでも感じて欲しいことだということ、そしてそれは決して教壇に立つ者から一方的に与えられるものではない、というごく当たり前のことに改めて気づかされました。（北海道・佐野祐子）

(5) 歴史を学ぶことの意義、教えることの使命の確認

歴史離れの一因として、歴史を学ぶことの意義が生徒にも教員にも理解されていないことが前節で引用したレポートから明らかになった。本研究会を通じてその意義を再確認したとの感想が多く寄せられている。

◇歴史の認識・内容以上に指導者としての心構えを説かれたことの方が、驚きが大きかったのも事実です。高校教育で歴史を好きにさせる努力をしてほしいというメッセージには、私たち高校教員に対する期待と使命感を改めて感じました。（福岡・徳本次郎）

◇世界史はまったく素人で、独学で勉強すればするほど「木を見て森を見ず」の状態になっていることに自分でも気づいていた。世界史なのだからもっと大きな流れがあるはず、と思うのだが教科書、参考書、学術書どれを読んでも私にその流れは見えなかった。講義を受け、知る喜びを久々に感じた。（新潟・黒川尚美）

◇この研究会の原点でもある「最新の歴史研究の成果を高校教員にコンパクトに提示する」ことこそ一番重要であると考えます。高校教員が最新の歴史学をまとまって学ぶ機

会がいかに少ないか、自ら学ぼうとしてもいかに障害が多いか（教育現場の多忙化や管理主義の強化など）を考えると、この研究会が形を変えてでも継続されることこそが望まれると思います。（大阪・若林俊一）

◇教育内容とともに、教育方法（歴史をいかに学ぶか）の連続性を考えるべきだと思う。今回の研究会で提示されたように、実際の歴史は科学であり、研究者が資料を基に実証を積み上げて描きあげ、新出の史料や理論によって学説は日々検証され書き直されている。そこで生徒と科学との繋ぎ役を果たさねばならないのが、われわれ歴史教育者なのである。歴史教育者自身が最新の研究そのものと出会い、歴史のまさに科学の部分と接することができる本研究会は、非常に貴重な機会を与えてくれるものと言わねばならないだろう。（大阪体育大学・上谷浩一）

◇講師陣が「なぜそれを研究するのか」、「そこから現代や将来に向けて何を語れるのか」を明確にし、それを熱く語っておられたことは印象的であった。（静岡・増田公洋）

◇若い時は、出身大学の史学発表会や、学界にも顔を出していましたが、授業実践にはあまり役に立たず、次第に遠のいていました。（中略）講演と、我々の質問への教授陣の丁寧なお答えが本研究会の真価ではないでしょうか。教授陣の熱意ある研究と歴史の見方を我々高校教員が直接吸収し、各自の授業実践に生かせていけることが、高校・大学の連携の第一の目的と思います。（神奈川・大島弘尚）

◇教職についてから、歴史について「研究する」という姿勢を忘れてしまっていた。（中略）「研究する」ということは、真実を求めることであり、物事を疑問視すること、あるいは批判的に見ることから始まるのであって、そこに本来あるべき歴史のダイナミズムが見出せるのではなかったか。（中略）歴史に対する姿勢を見せることも大切な歴史教育なのである。（福井・杉下憲司）

◇私たちの目の前にいる生徒は決して歴史に興味がないわけでなく、逆に「知りたがっている」と思う。そのような生徒に対して、私たち歴史教育にたずさわる者は、小手先の教授法や方法論を駆使するのではなく、真っ向から勝負していかなければいけない。そのような思いを、本研究会を終えてあらためて強く持つようになった。今回の研究会で得た新たな知識と歴史学の考え方を、生徒の興味や関心を掘り起こし、知への探求心をかき立てるために今後活用していきたい。（香川・豊島修）

◇社会科教育法の講座や予備校の高校教員対象のセミナーでは得られない「本物に対する感動」こそが、大学と高校の連携の根本だと思う。中等教育の現場で自分が中学生や

高校生に接するとき、研究の最前線で挑戦されている阪大の教員のように真摯でありたい。（奈良・山本雅康）

(6) 高・大教員による新しい連携モデルの提示

大学教員と高校教員が歴史学と歴史教育の連携を目標とする本研究会の活動に対し、高校教員のみならず、他大学の教員、教科書出版関連会社からも、新しい連携のモデルケースとして高い評価を受けている。

◇この研究会は一石を投じた。すなわち一般的な高大連携事業と異なり、史学科進学者以外の社会人が系統的に歴史を学ぶ最後の機会として高校世界史を位置づけ、研究成果を社会に伝達するための文字通り「インターフェイス」として高校教員を利用しようとするものである。言いかえれば、高校側の要望に応じて、大学人が研究の「一端」を披瀝するのではなく、研究者が社会の歴史認識を変えることを目標に、高校歴史教育を積極的に変えようとしているのである。（京都・岩月有行）

◇歴史教員の個人的資質を高めるとともに歴史研究と歴史教育を連携させようという歴史学者の強い思いが込められているものであった。さらに、「生徒―歴史教員―歴史学者―歴史学」をつなごうとするもので、我々に歴史の中に生きていることを実感させようとするものでもある。（福岡・幸田和洋）

◇学力、意欲、カリキュラムなど、今日の教育現場が抱える問題は、もはや個人では対処しきれなくなっている。今回のように全国規模の研究会を中心にネットワークを構築し、その中で対策を探っていくことが不可欠であろう。その先鞭をつけた大阪大学には、ぜひ今後も本会の継続と更なる発展を期待したい。（大阪体育大学・上谷浩一）

◇歴史学と歴史教育の連携なしに、高等学校の世界史の教科書を作成することはできません。これを実感するのは、編集会議での大学の先生と高校の先生の議論です。大学の先生が最新の学界の動向や研究成果を紹介し、高校の先生が教育現場の状況を報告する。こうしたことから、具体的に教科書の記述をどうするかという議論が展開されていきます。高校の先生にとって最新の研究成果を知ることはなかなか難しいでしょうし、大学の先生には底辺校といわれる高校の生徒の実態はわかりにくいでしょう。大学の先生と高校の先生が対話することによって、こうしたことを克服することができます。歴史学と歴史教育の連携の必要性は、このような点から理解できると思います。大阪大学

での全国高等学校教育研究会の意義もこうした点にあります。　（実教出版・小林一幸）

◇「高大」双方の熱意に素直に驚かされた。私は、ここで言う「高校」にも「大学」にも相当しない者だが、教育者・研究者ともに、ある種の危機感と使命感を持ち、しかも、それが高い次元で共有されていることは新鮮な驚きであると同時に、自らの認識不足に恥じ入るばかりであった。　（東京書籍・桜井智之）

(7) 全国の教員との情報交換

◇歴史学も歴史教育も人が行うもので、それに携わる全国の人間が直接会う機会がなければ、有効な「連携」は行えない。阪大の全国高等学校歴史教育研究会はそのような機会を提供してくれる、日本で唯一の会であると信じる。　（福井・堂森峰春）

過去最多の37都道府県から参加のあった今回の研究会は、教員同士の交流の面でも大きな役割を果たした。前述のように、各都道府県には高校教員による教科研究会があるものの、実際に研究活動を行なっている組織ばかりではないらしい。休憩時間中には、活発な研究活動している各地の研究活動内容や出版物を紹介する場面もあった。また、この会を通じて隣県の活動を初めて知り、「越境」して交流を始めた参加者も複数名いると聞き及んでいる。本研究会が全国の研究会活動を橋渡しする、いわば「ハブ研究会」としての存在価値も生まれてきている。

◇他校の現職の先生方からも刺激を受けた。私の勤務校は小規模校で、初任者として赴任してから他に歴史専門の教員は一人もいず、「歴史」の教育について誰にも教えられることも刺激を受けることも無かった。（中略）参加しなかった人たちにどうすればこの成果を還元できるのか、考えていかなくてはと感じた。　（新潟・黒川尚美）

◇「歴史と歴史教育」に興味を持つ人々との出会いは収穫であった。日本各地から集まった先生方との会話は新鮮で、多くの示唆に富んだものであった。たとえば新しい研究会の存在を知って、今後参加させてもらう機会を得ることができたし、また同様の問題意識を持って生活している方々と新たに接点を持てた事も有意義であった。

（千葉・廣川みどり）

◇北海道をはじめとする他地域の高校教師の研究成果を知り、自分の住んでいる宮崎県だけでなく、九州全体で北海道の教師たちの研究に負けないことができないものかと大

いに刺激を受けた。　（宮崎・竹村茂紀）

(8) 課題

(i) 最新の研究成果を教育現場に生かすことの困難さ

◇誤解を恐れずに言えば、最新の研究成果を授業に取り入れても、必ずしも良い授業にはならないというのが実感である。教員の自己満足に陥らないよう自制しつつ、生徒の理解力や納得性、教科書との整合性や授業構成上の問題などをクリアするのは、相当の労力と技量を要するのだ。　（大阪・山下宏明）

◇研究会を主催する大学の期待に（結果として）、高校教員が応えていないのではないかという危惧を抱いています。世界史の教員であっても、学校現場によって「世界史の授業を担当できない」「担当しても当研究会で研修した箇所は他の教員が教える」といったことは非常に多いのです。　（大阪・笹川裕史）

◇今回の講義内容を、授業に今すぐ反映できるかといったら無理があるだろうが、教員として知識は必要である。この会で学んだことが私の中でしっかり消化できたとき、その成果はあらわれるだろう。授業に反映させようと無理をするのではなく、自然な形で授業に取り入れていけたらそれが一番良い。　（新潟・黒川尚美）

◇「学んだ研究成果を必ず授業に活かせ」という宿題は、多くの教員にとってかなりしんどい。第3回研究会で「冊封体制」の授業実践報告をしたが、そうした機会がなければ、これまで学んだ事を少し無理して現場でやってみる（さらには報告をまとめ関心にある方々に聴いてもらう）貴重な経験を得る事はできなかっただろう。（中略）意欲的な研究の成果とパターン化された授業との段差はやはり大きい。　（京都・毛戸祐司）

◇今、考えられることは教科・科目間での連携強化、特に世界史でしたら日本史・地理との関係、近現代史における現社・政経との関係をそれぞれ強化していくことになるのですが、だだ、それが果たしてどの程度明確な形で成果が出るのか、ということが問題です。（中略）進学校を目指す現勤務校の中で、これらの取り組みが大学入試結果にどう反映されるかが実証されないと公認された取り組みにはしにくいのが実情です。ただ、その中でも「他校はこうしている」「公立や進学校はこう取り組んでいる」ということを職場で共有できれば、生徒への取り組みにも変化が起せるのでは、と思っています。　（兵庫・佃至啓）

◇これを高校の世界史・日本史の授業の場で生かそうと思うと、教員の力量が問われる

ことになります。(中略) 教える側の教員が幅広い知識を持ち合わせていなければ、生徒に対して歴史の醍醐味を伝えることはできないでしょう。今回、私の感じた「知る喜び」を生徒にも伝えるべく、今後も研修を重ねていきたいと思います。(鳥取・間久美子)

◇私自身の理解をより深めること、そして大阪大学の諸先生方の研究と勤務校を少しでも結ぶ(高大連携)ことを目的として、今回の各教授の講演を私なりにまとめた形で勤務校の世界史担当教員の学習会で報告して議論したい。 (滋賀・水田博之)

(ii) 授業実践報告のあり方

前回の研究会から始まった高校教員による授業実践報告については、前回同様、拡充を求める意見と、大学側からの講演のみで十分とする意見の2つの意見が対立している。

大学側としては、これまでの研究会の成果がどのように活用されているのかを検証するためだけでなく、高校の現場でどのような試みが行なわれているのかを知ることによって、やがて大学へ進学してくるであろう高校生がどのような授業を受け、どのような考えを持っているのかを把握できる。その状況を把握することによって、彼らを学生として迎える大学側の授業での対応も変えられ、「歴史離れ」への歯止めを大学でかけられる可能性が出てくるからである。

ただ、過去の研究会で得た知見はすぐに現場に導入できるものではなく、実践結果の検証には相当の時間が要することを考慮せねばならない。性急に結果を求めることは禁物である。授業実践報告の目的をこれまでの研究会での成果を検証することに絞りこむのなら、長期的かつ反復的に効果を検証する場を設ける必要があるだろう。

◇まず高校教員の出番を増やすこと、例えばこの研究会には全国から、しかも各都道府県の社会科研究会の主だった方々が参加されているので、研究活動を紹介して互いの交流を更に促進すること。次いで、大学側の最新の研究成果を基にした教案を高校教員に作成してもらい発表していただくというのはどうでしょうか。

(芦屋女子短期大学・中村薫)

◇教員養成系の大学でない大阪大学が歴史「教育」研究会を開催する意図を感じさせられた。授業方法に関する研究は教員がそれぞれ地元で仲間の教員たちと協力すればよい。『阪大史学の挑戦』は旧来の授業内容に関する挑戦であるはずだ。歴史教育の体系そのもの、21世紀の日本に生きる人間の基礎教養の提言であるべきだ。(滋賀・牧雅人)

(iii) 双方向性のあり方

授業実践報告以外にも、討論の内容をより工夫することによって、研究会の双方向性を深めることができるのではないかとする以下のような提言もある。

◇歴史教育に関する双方向の議論が出来たかというと、不完全燃焼に終った感が強い。テーマの設定について大学側も検討が十分ではなかったと思う。そして我々高等学校の教員側の参加意識にも責任の一端があるというのが私の見解だ。つまり、勉強熱心には違いはないが、高大連携の担い手としての意識が低いと共に、一部の方々を除いて受身的・待ちの姿勢が大きかった。各地の教員の抱える共通の数ある問題点で、大学歴史学側からコミットし、解決の糸口を両者で見つけることが出来そうなテーマを見つけ出すことは出来なかったのだろうか。例えば、「高校生の歴史離れの現状把握と解決について」と言うテーマなどはどうであろう。そして、その解決に向けて本研究会でどのようなことができるか、という問いかけをすれば、それまで受身的であった高校教員側からも意見が出たであろうし、大学教授陣や、場合によっては大学院生からも広く意見を聞くことが出来たのではないだろうか。 (兵庫・矢部正明)

3. これからの高校・大学教員の連携

本研究会は21世紀COEプログラムの一環として実施されてきたが、今年度をもってプログラムは終了する。大阪大学は今後どのような活動をしていくべきなのか。あるいはどのような活動の可能性があるのか。再参加者を中心にレポートでの提言を求めた。

(1) 研究会の継続

◇今後とも日本史・世界史の枠にとらわれない研究会であり続けてほしい。そして私見に過ぎないが、「三年間」を「問題提議の年」「問題討議の年」「問題総括の年」に区分し、歴史研究の最前線にある立場から歴史教育に欠ける点を指摘するなり、歴史研究成果の幅広い普及のあり方を考えていただきたい。 (石川・滝中清志)

本研究会の継続を求める声はほとんどの参加者から寄せられている。その理由をいくつかのレポートから紹介する。

(i) 直接対話の有効性

ほとんどの参加者は、歴史研究の最新の成果を吸収していくことの必要性を感じてはいる。しかし、書物やインターネット・電子メールでの情報交換ではその成果を吸収しにくいという。教授陣が講義形式で高校教員に語りかけ、質問に回答する本研究会の「顔の見える」「緊張感のある」対話のスタイルが有効であると、参加者の多くは認識している。

◇継続的に、そして、著書を通じてだけでなく実際にお話を伺うという形で設けられることを切に望みます。というのも、講義を受けることでイメージが鮮明になった部分も数多くあったからです。（神奈川・九鬼逸子）

◇インターネットは世界につながっているため、その気になることはできるかもしれません。けれど、直接交流の場をつくる（顔を見て話を聞く）重要性は無視できないはずです。その刺激は測りしれないからです。（中略）ぜひ大学側からの新鮮な刺激をお願いしたいと思います。（大阪・北村素子）

◇このような研究会が継続的に続けられることが何よりも大切であると思います。教科書・図表をつくり世界史をリードしている大学の研究者からの生の声を聞くこと、本や活字では表せないその人の立場や考えを聞くことは非常に貴重であり、現場の教員の分からないことや複雑な事象も適切に応対して頂けるこのような研究会があれば、私共も心強いです。そして現場の教員同士の意見の交換も高校教員だけでするのと違って新しい見方・考え方という展開があるので、中身の濃いものになります。（大阪・長友健史）

(ii) 高校・大学双方の教員の連携の重要性

IV-1-(4) でも紹介したように、従来の高大連携には閉塞感が現れている。今後の連携の対象は「大学対高校生」ではなく、「大学対高校教員」という形の本研究会の連携のスタイルが教育現場に求められているのであり、この方針を維持すべきであるとの意見が多数寄せられている。

◇いささか逆説的な結論になるが、私は大阪大学と高校の「連携」は必要ないのではないかと思う。あえて大阪大学と限定したのは教員養成系大学ではないという意味である。大学と高校の連携は出前講義、体験入学などなど生徒のレベルではもう出尽くした感があるし、教科教育的な連携も十分である。不足しているのは大学での知の最前線が

高校の教員に伝わっていないという点である。この方法を継続することそのものが立派な「連携」であろう。（東京・角田展子）

◇そもそも、歴史学で行なわれているような、与えられた資料から事実を見抜き、更にその背景について論理的解釈を行う作業は、現代社会を生きる上で必要なことであろう。（中略）多くの者が高等学校における歴史教育を最後として社会に出るのだから、大学での研究方法やその成果の一端を生徒に伝え教えることは、必要不可欠である。そのために、高校教員は大学の研究から常に学んでいく姿勢が必要であるし、大学の側も高等学校の授業の現状を理解しつつ、高校教員に研究現状を伝える場を積極的にもってもらえれば有り難いと思う。（滋賀・大井喜代）

◇今は「大学と高校生」だけではなく、「大学と高校教員」の連携こそが必要であり急務であることを実感しています。大阪大学におけるこの研究会の試みは、大学と高校が問題意識を共有している点が、他の研究会との大きな違いだと思います。このような研究会の継続の必要性を強く感じています。（北海道・佐野祐子）

◇基本的には、高校の教員の歴史認識の底上げを図ることがもっとも大切なのだろうと思います。（中略）考えてみると、歴史をひも解く作業は楽しいことであり、史料の解釈をめぐる意見を聞くことは大いに知的好奇心をくすぐります。歴史教員がもっと原点に帰って、楽しみながら歴史認識を横にも縦にも広め深めることが大切なのだろうと思いました。その意味で、大学の研究者の方々による情報提供を積極的にお願いできればありがたいと思いました。（東京・吉野興一）

◇よく「研究者と教育者の連携」といった言葉が使われるが、大学教員も歴史教育に携わっていることに変わりはない。とくに教養課程の講座であれば、高校生に教えるのとどれほどの違いがあるだろう。研究会を通じて、歴史学研究・歴史教育の双方でインタラクティヴな交流が生まれれば、双方にとって得るものがあると考えられる。

（島根・北垣秀俊）

(iii) 長期的な連携によって高まる研究成果の現場への還元の可能性

本研究会での成果がすぐには教育現場に還元できない事情があることは前にも述べた。だが長期的な視野に立って高校・大学の教員が対話を重ねることにより、還元への糸口が見えてくるのではないかという意見も少なくない。

また、研究が日々進展している以上、絶えず情報の収集を図る必要性があり、本研究会

を高校教員への最新研究の発信の場として今後も存続すべきであるとの意見もある。講演の内容は、同じものを継続しても構わないという意見も出されている。

◇高校教員はみな勉強したい、いろいろな知識や自分の知らないことを知りたいという願望を強く持っている。高校教員と大学教員がお互い理解しあえば、それはおのずと生徒に還元されるのではないか。今後はできるだけ高校教員に現在の大学の研究成果を披露することで大学の現状を知ってもらい、逆に高校教員も大学に行ってもっと勉強してみたいという気持ちになることで新しい形の高大連携が可能になるように思われる。

（兵庫・後藤善弘）

◇毎回新しい発見がある。講演をしていただく先生方にも毎回同じテーマで話をしても良いのかというお話があったが、一向に構わない。膨大且つ濃い中味の講演内容を全て理解することなどありえない。また、自分の興味･関心の変化や、研鑽によって少しは耳が肥えて以前に比べて理解して聞くことができる、など受講する側の事情がある。仮に同じような講演であっても、極めて高度な内容ゆえ、毎回新しい発見・感動がある。音楽にたとえるなら、サイモン・ラトル指揮：ベルリン・フィルのベートーベンのシンフォニーの生演奏を「1回聞いた、後は一緒だからもういいや」などというファンが果たしているだろうか。ありえない。仮にいるとすれば、それはベートーベンを理解していない、あるいはラトルやベルリン・フィルを理解していない人である。

（京都・松田宏）

◇本研究会のような高校教員の学びの機会や高大教員の交流の場がありますと、歴史を研究している大学とそれを広く伝える（教える）高校との間で、教科書や歴史教育を考え歴史学の成果をよりよく生徒たちへ伝える方法なども検討でき、大変有用であると思います。本研究会の今後の継続を強く望みます。（鳥取・山岸裕子）

◇われわれ歴史教育をする側、つまり高校教員としては教科書や歴史書に書かれていることはすべて真実であるという立場ではなく、歴史とは様々な立場や理由でつくられたという「構築主義」の立場で語ることではないだろうか。その立場から見た疑問を大学側に回答してもらい、ともに疑問を考察するという「開かれた」形での歴史教育を高校段階で行うことができれば、その継続としての歴史学がより充実したものとなり理想とする高大連携の歴史教育ができるのではないだろうか。（愛知・杉本明隆）

◇史学科を専攻した教員でも自分の専門（地域・時代）以外について詳しい教員はそ

れほど多くない。大学と高校教員のあいだの直接の「タテ軸の連携」が、教科書という「フィルター」を通してではなく、アップトゥデートのものとして生徒に教えることを可能にする。（神奈川・佐藤雅信）

◇歴史離れ（歴史に対する軽視）や教科書の内容の改編に伴う混乱、社会全体において見られる相対的な「知」の低下。捉え方は様々あるが、こういった社会を席巻する大きな流れを堰き止めようと、高校側と大学側双方が共通して進むべき方向を模索している。これには当然の如く、長期的な視野が必要である。したがって、今後もこの研究会が存続することを切に願う。（大阪・中西雅子）

◇歴史を学ぶことによって、現代および未来をしっかりと見つめて考える力を高校生に養っていく教育を、激しく変化する現代社会の中で展開していくためには、常に最新の歴史学の研究成果が歴史の授業に反映されなければならない。このような研究会が、高大連携の一つの形として継続されることが望まれるのである。（滋賀・水田博之）

(2) 研究会の活動強化

◇大阪大学の取組みは、文部科学省が重視している「高等学校教員と大学教員の相互理解を促進していくための、高等学校教員と大学教員の交流ネットワークの構築」そのものといえよう。少人数の参加で3年前に始まった歴史学と歴史教育の連携が、さらに大きなネットワークとなるとき、「歴史」を取り巻く諸課題の解決の糸口も見えてこよう。（千葉県庁・卯月睦彦）

本研究会の活動をさらに拡大すべきであるとの提言がいくつかのレポートで示されている。具体的には参加者を大幅に増やし、多くの教員に本研究会の試みを周知することを目指そうとするものである。

◇大阪大学が主催する事業としては、初参加の者に限定した形でこのような会を継続するべきではないかと思う。（中略）リピーターの参加者と研究協議を深めるよりも参加者の裾野を広めることが大切ではないだろうか。（滋賀・牧雅人）

◇この研究会の次の段階として、裾野を広げる必要があるように思う。研究会に参加している教員は非常に意識が高く、参加者の数や討議される内容からもそれが伺える。しかし問題はそれ以外の人々ではないだろうか。この研究会の精神をいかに広めていくか

が重要であろう。　（大阪・中西雅子）

研究会の活動強化にあたっては、既存の教育行政機関や研究会との連携を図るべきではないかとの具体策を示しているものもある。なお大阪大学では、既にいくつかの府県の社会科教育研究会と提携し、模擬授業や講演などを実施している。

◇都道府県教育委員会は各都道府県の小学校、中学校、高校の各教員の教職経験年数に応じた体系的な研修を実施している。大学と高校現場との連携にとどまらず、教育行政（都道府県教育委員会）との連携という視点も不可欠である。　（京都・堀江嘉明）
◇しっかりとした「組織」をつくる必要があると考える。ここでいう組織はピラミッド状に大学（支配者）を頂点として隷属する高校（被支配者）の関係ではなく、連携を強めたものということである。当然ながら、全国から参加者を広く公募するこのような研究会を継続するのは当然のことであると思うが、各都道府県に存在する地理歴史部会と連携する必要がある。（中略）県の組織はどちらかと言えば中立的立場であるし、加盟者はその県のすべての教員である。まずは今回の成果を送付したり、講師派遣案内等の資料を配布することから始めてみたらどうだろう。　（青森・竹谷保）
◇私が所属する県の歴史部会では今年度からの方針として教科書執筆者である研究者を招いて講演をお願いしている。教科書の内容が現在の最先端の研究をどのように反映しているのか、どのように教えてほしいのかを執筆者本人からレクチャーされれば、刺激を受けない教員はいないはずである。それに加えて、今回の研究会に参加した教員が、その内容を生かした授業の実践報告を行うなどの方法も考えられる。（群馬・飯塚勇一）
◇神奈川の社会科部会歴史分科会においては、今年3月、桃木教授を招き、神奈川の歴史教員100人以上の前で、東南アジア史をどう教えるかの示唆をいただいた。明年の3月は、森安教授に同じ企画で来てもらい、神奈川の歴史教員にショックを与えてもらう予定である。さらに本年8月には外語短大付属高校、栄光学園等の生徒を対象に、桃木教授に東南アジア史の授業をしてもらい、それを見た神奈川の高校教員が学ぶ研修の機会も用意している。　（神奈川・石橋功）
◇各都道府県の教科研究会（社会科部会）は「公的に認められた組織」。これを利用しない手はない。（中略）次に「非公式・私的な研究組織」がある。（中略）同じ時代や地域に関心のある有志の教員が私的に作っている研究会のほうが効果的である。そのほうがア

カデミズムと直接コンタクトがとりやすく、また都道府県の垣根を越えた活動が可能である。（神奈川・佐藤雅信）

ところで、今回の研究会は、百数十名の応募者に対して参加の辞退を乞わねばならない事態に陥った。現状のままで研究会を継続していたのでは、参加できない教員がますます増えていくことになり、わずかな参加者しか恩恵を受けないことになる。そこで研究会を大阪以外でいわば「巡業」形式で講演会を開くことにより、近畿地方以外の遠隔地にいる教員へも活動の裾野を広げていく方法も検討すべきではないかと、筆者は考える。

(3) 他大学・研究団体との連携

◇各都道府県単位または地域ごとに類似の研究会が開催されることを望む。その場合は主管大学が高校現場（都道府県教委や高校の歴史研究会）をまきこみ「共同（共働）」で実施するという視点が不可欠であろう。高校教員が受講者としての立場にとどまるのではなく「当事者意識」を持つことが求められるからである。（京都・堀江嘉明）

◇阪大のような試みを、全国の多くの大学で実施していただきたいと思う。（中略）高校教員はその中から、近場の大学であったり、遠くても興味のある講座や講師を選択して参加すればよいと考える。（東京・大見真由美）

◇各県の研究会や高校教職員の交流の場を大阪大学がコーディネート。県の研究会からの要望に応えて、最低限、声掛けだけでもしていただければ助かります。もちろん、教官や研究生のかたが加わって下されば幸いです。（京都・村上直）

◇今回の研究会のような全国規模の大会を通じて高大双方向のつながり、大学・高校の教員の横の連携・交流を促進する。そこから派生して地方ブロックごとの研究会が生まれるであろう。活動を通じて、研究会のスクラップアンドビルドが行われるかもしれない。（福井・盛岡正男）

◇私たち高校教員では都道府県を越えた活動は難しいものですが、大学教員ならば可能だと思います。これまでの成果を活用し、各都道府県に大阪大学を起点とした地道な人的ネットワークづくりをして欲しいと思います。それは、阪大COEという原体験を持つもの同士のつながりとして高校教員にも大学教員にも有益なものとなり、ひいては高校生・大学生に有益なものとなると思います。（大阪・若松宏英）

◇この「阪大史学の挑戦」がすばらしい挑戦であり、実効性の伴うものであるのならば、

これは阪大のみの挑戦で終わらせるべきではない。日本の歴史学界の挑戦となってほしいものである。阪大が核となって、日本の中枢大学（旧七帝大など）が提携して、このような取り組みが幅広く実施できないものだろうか。また、その企画には、歴史に興味を持つ高校生を参加させる場が設定されてもよいのではないだろうか。そうすることで一層、「生徒―歴史教員―歴史学者―歴史学」の連携が深まっていくのではないかと思う。（福岡・幸田和洋）

各地の大学が本研究会の活動を評価し、同種の企画を始めていることは前述の通りである。大阪大学が各地の大学の研究会と提携した企画を立ち上げることができないか。大阪大学は現在各地の大学との連携を打診しているが、現在のところこの提案に賛同する大学は現れていない。今後も同種の研究会は各地に発足することであろう。そうした研究会との連携ができないのか、これからも検討を続けてもよいだろう。

(4) 新しい連携事業の開拓

本研究会の継続・拡大のほか、全く新しい活動を行なってはどうかとの提言が数多く寄せられている。高校・大学の専門家同士の協働作業には、まだまだいくつもの可能性や、未開拓の分野が残っているのである。すぐに実行に移せるものも少なくない。以下、具体例をレポートから引用する。

(i) 授業実践結果の検証作業

本研究会で行なわれた授業実践報告を報告のみに終わらせるのではなく、高校側・大学側がその結果を検証し、問題点をあぶりだしていく作業である。そのためには、本研究会で築き上げられた教員間のネットワークを活用して、各教員の実践結果を集約・共有を図ることがまず必要となる。

◇まず必要なのは、各人が「せめて1つは……」とやってみた実践を大切にする事である。職場、都道府県等の研究会、大阪大学歴史教育研究会等で、そうした実践が取り上げられ、広められ、評価・批判されなければならない。次いで必要なのは、これまでの歴史教育の実践や理論、教育内容開発のいわば研究史をふまえて、これからの実践を位置づける事である。（京都・毛戸祐司）

◇高校歴史教育の実践の場「授業」への反映ということでは、本研究会を受けた授業実践例を蓄積することも提言したい。昨年度・今年度の本研究会でも高校教員による授業実践の報告が行われた。一部の県では、高校教員の研究会（社会科研究会など）で実践例が報告され、それをまとめた冊子が今年度の研究会でも配布されたこともあった。しかし、全国広域への発信・相互利用・普遍化には至っていない。授業実践についての情報共有化を図り、全国高等学校歴史教員・あるいは大学・大学院による相互利用が可能となれば、本研究会の「大学歴史学と高等学校歴史教育の双方向的研究」の成果がよりアピールできるのではないか。さらに、大学院教育の一環でもあるIAEの活動ともタイアップすれば、大学院・大学教育と高等学校歴史教育との三者双方向の新しい連携ができるのである。（兵庫・矢部正明）

◇実践結果を高校教員が次回の研究会で発表するというのはどうであろうか。つまり一つの授業事例を摘出するのではなく、年間のスケジュールや講義項目を提示し、皆で検討するのである。このようにすれば、大学側からは「高校で学んで欲しいこと」を具体的に授業時数の配分まで考えて示唆できるし、高校側も教科書教授資料の時間配分や学習のねらいの「ねらい」がわかるというものであろう。（宮城・吉田理）

◇研究会では大学での歴史学の最新の内容について提供していただいたわけだが、それを今後の具体的な授業の中でどのようにいかしていくのか、どのように教材として取り入れていくかを話し合う、あるいは実際に指導案をつくって模擬授業をしてみる、といった時間が持てれば、われわれ高校教員にとってはさらに充実した機会となる。この取り組みは歴史教育のあり方、学習指導要領の問題点などについても高大連携で話し合っていくことにつながっていくことになるであろう。（愛知・松本圭以子）

◇講師の研究領域に該当する部分の授業の実践例や教材としてのプリント類を持ち帰り、教育者と研究者で相互の批判検討を進めるという企画も面白いのではないかと考えます。その際、微視的には、1時間の授業の中でこのようなイメージで授業を展開したいという形で、巨視的には、検討する領域と他の領域との論理的な相関という形で世界史全体の歴史像の形成に関わる問題を議論する場を設定できないでしょうか。

（香川・真鍋篤行）

(ii) 小・中・高・大一貫の新しいカリキュラムの策定

◇阪大の文学部史学科という歴史の専門家集団が、新しい高大連携を探ろうとするなら

ば、斬新かつ普遍性のある学校設定科目（特色科目）の構築が最適ではないだろうか。現在、本校では世界史Bまたは日本史Bを履修してきた生徒に対しての発展科目（＝日本史と世界史の総合）として、「国際交流史」を試行して5年目を迎えている。日本史を世界史の中で位置づけ、多角的な視野の育成を狙って通史的にエピソードを選んで講義している。また、現代の海外情勢で注目されている地域について歴史的に遡って解説するなど、日本史B・世界史Bの発展科目として、現代を考えるためのベースを講義している。このような高校の従来までの科目を発展させたものは、実は理科系や語学系にはしばしば見られるが、社会科系にはその例を知らない。大学の学部教育と高校地歴公民科の内容とに漠然と溝が確認されつつある中で、地歴B科目を学んだ生徒に対する発展科目の構築は、思考力や学際的な能力の育成とつながり、この溝を埋める一つの試みとして有効であろう。また大学受験から乖離しない点に留意して普遍性を持たせれば、特に進学校ではニーズが生まれるのではないか。（中略）大学の学部教育と高校地歴公民科との溝の確認から始まり、地歴B科目を学んだ生徒に対する発展科目の構築のためのワークショップを提案したい。（兵庫・鵜飼昌男）

◇高校現場や大学の先生方の負担増になるであろうが、高校のカリキュラムに組み込み、半年・1年間の授業の中にしっかりと位置づけられて行われることができるようになるまで連携できたらと思う。現実的には無理と考えていたのだが、グループ討論会の際に、神戸市立六甲アイランド高校が試みていると聞いて不可能ではないのだと認識を新たにした。（大阪・神於正明）

◇教育者としての高校教員と大学研究者・教員とが連絡を密に取るべきである。共通理解を前提に、中学から高校、高校から大学、大学内での導入教育（嘗ての教養教育）から専門教育へと、一貫性のある円滑な教育体系を構築すべきである。大学教員は高校の現場・現状を知るためにも高校教育現場の見学や高校教員との情報交換の場を多く持つことが必要である。一方、高校教員も大学での導入教育や専門教育について、現場を踏まえた意見を大学に向かって発信すべきである。特に、圧倒的に多い歴史学を専攻しない学生の教育が重要である。そのような観点に立てば、「導入教育」という語を用いるよりも「接続教育」と呼ぶ方が適切かも知れない。高校教育と大学教育を円滑に行うための教育である。（兵庫・置村公男）

◇今回のこの交流で浮かび上がってきたことはいくつかあるが、特に私が注目したのは「中間教育（つなぎ教育）」の必要性である。受験世界史で入ってきた学生のほとんどは

大学では役立たないという事実は、いったい高校で何を教えているのか、と批判を受け受けるべきことである。どのような学力やものの考え方を身につけた学生が大学側から求められているか、一度はっきりと具体的に提言されるべきだと思う。

（埼玉・廣瀬和義）

◇高校と大学が連携し、日本の歴史教育で最低限必要な知識をしぼって、マニュアル化し、時間を作っていくことが必要なのではないだろうか。これだけは知識として知っている。「こうゆうところで考えて面白かった」という感動。近代世界システムのなかで、「周辺」となった地域は文化も価値のないものとして認識されがちであるがその中に感動をみつけることができれば、価値観の多様化になる。（神奈川・高橋和子）

本研究会を通じて、高校教員は大学側が描いている歴史像と、高校で教えている歴史像に大きなずれがあること、教科書の記述に誤謬のあることを知らされた。同時に対話を通じて大学側は、高校の歴史教育の現場の状況を知るに至った。大学側は、世界史は必修なので、大学に進学してくる学生は皆、最低限の知識を知っているものと思い込んで授業を進めてきた。しかし、実際には授業数の削減などによって、充分な基礎知識を習得してきた生徒が多くはないことを知った。一般教養レベルの講義でもついていけていない学生が実際に増えていることを感じ、単純に学力が低下しているものと考えていたが、それだけではないようだ。高校側にも様々な事情があるのである。このような現実を大学側は本研究会の活動を通じて初めて知ったのである。大学と高校の教育は縦割りなのである。

中学での地理教育の改変を知らない高校教員が多数いたことはIV-1-(1)-(ii)-(c)でも述べた。高校と中学もまた縦割りなのである。小・中・高・大とそれぞれの学校間の交流はほとんど行なわれていない。そもそも現場でどんなことを教えているのか自体がわからないのである。それぞれの溝を埋めるべく努力をしなければ、中学から高校、高校から大学へと進学するたびに生徒や学生は混乱することになる。各種学校の専門家が対話を重ねることによって、その溝を埋められないだろうか。

本学は附属高等学校を持っていないため、直ちに小・中・高・大一貫のカリキュラムを実行に移すのは難しい。各種学校との提携を進めていく必要がある。ただ、実行に移すかはともかくとして、カリキュラム案自体を小・中・高・大の教員が協働で策定していくことはできるだろう。桃木講演での指摘を受けて各学年で最低限何を学べばよいのかを示したガイドラインを策定し、高校教員と教案を検討していくことは、そう難しいことではな

い。それが最終的に一般に広く明示されれば、いたずらに用語の暗記をさせられる旧来の教育法から生徒を解放することができるのではないか。

(iii) リカレント教育の場のさらなる提供

本研究会は、高校教員にとって毎年1回3日間という短期集中型で実施したリカレント教育の場ともなっていた。このような場を恒常的に、頻度を上げて開催することにより、高校教員に対する最新の研究成果の提供していく必要があるのではないかとする意見が出されている。本研究会を共催したIAEは、大学教員による大学院生向けの講義ではあるが、高校教員にも研究報告をしていただく条件で聴講を認めており、高校教員に対するリカレント教育の場としての役割をも果たしている。高校教員側、大学院生側も学問的刺激を受けているようである。政府は教員の10年次研修を制度する方針でいるが、その際の研修の場は教育系の学部に限らず、歴史教員の場合は歴史学系の学部を選択肢に入れるべきではないだろうか。教授法に磨きをかけるのが高校教員のまずなすべきことだという意見もあるかもしれないが、いくら教授法が優れていても、古い枠組みのまま、誤った研究成果に基づいたままの教案では、真の歴史教育とはなるまい。

◇高校生を最初に学問の世界に誘う立場にある高校教員の質的向上は高校生の教員や学校教育への信頼獲得の第一歩であると考える。高校教員へのリカレント教育は研究者としての大学教員による最先端の知見を示すという点と、高校教員同士の切磋琢磨、刺激を与え合うという点と二つある。前者においては、一般の大学生同様、一方的な知識注入や教授という方法だけでなく、研究者としての自立支援や研究活動の後方支援という形態もある。 (兵庫・置村公男)

◇とにかく高校教員のリカレント教育こそが最も重要であると考える。例えば、私自身大学の専攻が文化人類学だったため、歴史学の手ほどきを受けていない。また、高校教員が日々の教材研究の枠を超えて勉強する時間は限定されている。日常の業務に流されてとても困難である。しかし、今回のような研究会があれば、それがきっかけとなり、専門書も読み学会の最新情報にもふれる機会が持てる。(中略) その上で、高校教員側から実際の授業展開の技能を提供する形で、例えば教科書や副教材の編集に協力することが出来るのではないかと考える。 (愛知・小林和朗)

◇多くの世界史の教員は、新しい歴史学の成果を学ぶ機会 (学ぼうとしない姿勢もある)

もなく、自分の高校時代に学んだ世界史を再生産し、その現実離れが生徒もうすうす感覚的に気づいているようにも思われる。歴史学は現在に起こっている事象が過去との関連に解明する学問であるという前提に立つなら、新しい歴史の見方かたや新しい研究成果は、当然、現実の世界を生きていく生徒に受けいれるはずである。教員の多くが新しい鋭い問題意識を持った新しい歴史学の成果を取り入れることがないことも歴史離れの原因でないかとも考えられる。そこで、大学の側からは、最新の研究成果を発信し、是非とも教員のリカレントの学びの場を提供して欲しい。（神奈川・古川寛紀）

(iv) 大学への教授法の提供

◇大学側からの要請があれば、生徒指導の経験と授業展開のプレゼンス能力を提供したい。ロールプレイを利用した参加型学習形態や効果的な対話を通じて生徒の考え方や能力を引き出し、目標に向けて自発的な行動を促すコミュニケーションの技術であるコーチング・スキルなど新しい教授法も紹介したい。こうした教授法は学部生や大学院生にとっても有効であると思う。（神奈川・古川寛紀）

講義内容・教授法を学生が匿名で評価するいわゆる「授業評価」が近年ほとんどの大学の教養科目で施行されるようになった。教授法の項目では学生から厳しい注文がつくこともある。非教育系の大学の研究員は研究活動を優先することが多く、教授法の研究は疎かになりがちである。研究成果によってカバーすればよいという考え方もあろうが、ハイレベルな教授法を日々研究している高校教員の経験を、大学関係者は軽視してはならないだろう。高校と大学は縦割りになっている現状があるが、進学してくる学生はそのような状況に関係なく、高校で習得したことを引きずって大学で学ぶことになる。ならば、大学での講義内容・教授法も逐次見直していかねばなるまい。本研究会での授業実践報告を通じて、本学の関係者はその重要性を強く感じている。

(v) 教材や出版物の作成

◇教育は、畢竟個別指導である。そのような教材開発を心掛けているが、生徒への訴えかけに成功するためには、明確な意識と正確な事実確認が必要である。しかし、高校教員が多くの資料を自ら入手し分析することは困難で、大学側からの提供に頼るのが現実である。研究論文・書籍、教科書会社のパンフレット、出前講演、そしてこの研究会の

開催等、資料やそのコンテクストを知りうる機会を是非増やしていただきたい。

（静岡・増田公洋）

研究成果を高校教育現場に還元していくためには、本研究会のような連携活動を継続していき、その成果を教材開発や出版物を作成することによって広く周知させるべきであるとの意見が多数寄せられた。当班でも何らかの「成果物」を眼に見える形で発信していく必要性を感じており、高校教員向けにも読める『海域アジア史研究入門』（2007年、岩波書店より刊行予定）の出版を準備している。

新しい研究成果が授業に還元されない理由の一つとして、授業のよりどころとなる教科書の記述が古い枠組みのままであることが挙げられる。では、直ちに新しい教科書を作成すればよいのかというと、日本史では東アジア・北東アジアとのかかわりを重視した教科書の可能性は多少あるものの、世界史の場合はそう容易ではないとの意見が大半を占めている。検定問題や教科書採用の決定権が個々の教員にはないためである。むしろ、まずは教材や副読本、概説書の形で高校生や高校教員に発信していくべきではないかとの意見が多い。世界史の場合は書物によってまちまちな用語の表記統一も検討する必要がある。

レポートによると、教科書の誤った記述を高校教員側から出版社側に指摘できる環境があるという。当面は大学側が記述のどこに問題があるのかを高校教員側に示し、高校教員が出版社側に働きかけていくのが有効なようである。

以下、レポートでの意見を媒体別に紹介する。

(a) 教科書（教科再編を含む）

◇大学の歴史学は、史料講読や仮説立論、実証やフィールドワークなど、歴史好きに限定されない魅力がある。森安教授の言う「自由主義と民主主義の根本たる、権力批判としての歴史学」の一端に、高校生や高校教員がじかに触れる意義は、計り知れぬほど大きい。こうした交流連携の中から、世界史・日本史の枠を超えた高校歴史教科書や副読本が誕生したならば、素晴しいではないか。（大阪・山下宏明）

◇中期的には、このような取り組みの成果をもとに新しい教科書をつくることを目指すことになろう。各時代・各分野の専門家を広く結集する必要があるが、これは阪大の先生方に坂本龍馬の役割をお願いするしかないとして、執筆には高校側からもさまざまな貢献が可能であろう。私はとりあえず、各レベルでの用語表記を一貫したものにし、学

界の最新動向から10年ほど遅れ、完全に定説化したものを中心とする記述を期待する。合わせて教科書に合致した日本の通史概説・講座、及びそれらを簡略化した教員用教授資料も作成される。現状では教科書の内容を解釈しようとしても、概説書・講座に書いてなくて、教員が場当たり的に解釈することも多く、当然間違った解釈をしがちである。より専門的で大部な書物にのっていないのに教科書には書いてあるのは不思議な話だが、これは連携を深める中で克服されてゆくであろう。（京都・難波謙一）

◇学界で定説化した内容が教科書に反映されることの「遅さ」や記述の誤り等は、早急に克服されるべき大きな課題であると考える。（中略）教科書会社は年に1度、教科書採択の要請に高校を訪問しており、その際に自社の教科書に対する感想や意見を教科担当者に尋ねている。この機会を利用して「記述内容の不備」や「地域や分野における取り上げ方の偏り」等を我々教員が伝えることで、少なくとも明らかな事実誤認に関しては次の改訂版で書き改めさせることは可能であるし、多くの同様な意見が提出されればもっと内容に踏み込んだ改変も実現できるかもしれない。（中略）「歴史研究は今どうなっているか」を我々がきちんと認識する意味でも、高大連携は重要である。

（福岡・菅満津江）

◇昨年の研究会に刺激を受けて、「世界史における旧説と誤解」を、昨年10月の神奈川県教科研究会社会科部会歴史分科会の研究発表で報告しました。（中略）これらの作業の中で、これはとても一人の人間でやり切れることではないことに気づきました。仲間もそれぞれにネタを抱えていますので、それを出し合って突き合わせる作業も大切です。そして、今回、桃木教授が展開されたような誤解を指摘して正解を示す作業が、専門家からなされることが不可欠です。一人の作業では、自分の方に誤解があるのではないか、新しい提言が教科書に載せてよいくらいに定説となっているといえるのか、不安になるからです。（神奈川・小林克則）

◇高校の歴史教育は現行の“日本史と世界史”という枠組みではなく、“東アジア史（含む東南アジア）”と“世界史（東アジア史少々）”という科目設定にしたほうがよいのではないか。子どもたちが小中で学んだことを基礎に高校で発展させ、外の世界に関心を持つためには東アジア史という科目設定のほうがよいのではなかろうか。高校・大学教育の現場で検討し、おおまかなカリキュラムができるなら学校設定科目や総合の授業でやってみたらどうだろうか。（神奈川・高橋和子）

◇現在の地域史、各国史、日本史的なバラバラな歴史構成では、グローバルな視野をも

つ歴史観の育成はやはり困難なのではないだろうか。高校社会の科目でいえば、将来的には、日本史、世界史の枠をこえた「歴史」として編成された教科が必要なのではないだろうか。（大阪・堀川喜子）

◇今回強調されていたのは「開かれた世界史」であった。それに比して浮かび上がるのは「閉じた日本史」である。（中略）分科会の討論でも世界史と日本史の壁を取り払う、また東北アジア地域の歴史としてとらえては、という意見も出た。しかし日本史の用語の中に「身内」でしか通用しない「閉じられた」言葉を使用しながら世界史との壁を取り払うことは混乱を招くことになるのではないか。「身内意識」の延長上に世界を捉えると、意識下の「五族共和」、日本的オリエンタリズムを作ってしまい、真の異文化理解には程遠くならないだろうか。そこで世界史と日本史を単純に統合するのではなく、接点における用語の検討を、大学と中・高の教育現場と共同で行なってはどうかという提案をしたい。（京都・内田順子）

◇「真に新しい歴史教科書」の編修というものを目標に据えては如何だろうか。（中略）しかし、検定制度もあり教科書への各種の規制も厳しいものがあるだけに、それは容易ではなさそうだ。そうであれば、「検定」の外にあって、「真の新しい歴史教科書（阪大版）」として市販され、高校生から成人にいたるまでの、日本人の教養としての歴史のテキストとして、「一家に一冊」をキャッチコピーに、各家庭の書棚を飾るようなものを目標にしたら如何だろうか。（中略）第一段階として、歴史学と歴史教育が当面、次のテーマで共同研究しては如何だろうか。

ア）高校生などの若い世代の社会意識を踏まえて、何を、どのように記述するか。テーマの設定。

イ）自学自習のための、読んで面白い通史記述、切り口、語り口の在り方。

ウ）他国の歴史教科書から学ぶための国際比較。（京都・島貫学）

◇教科書を作ろうと意見が出ていましたが、まず単元レヴェルの授業開発をした上で教科書を作らないと、難しくて敬遠される教科書になるのではないかと危惧します。

（広島・田中英朗）

(b) 副読本・概説書

◇教科書は学習指導要領の制約を受けますので、教科書作りについては困難な提案であると思います。大学側と高校教員が協力して教科書とはいかないまでも副読本や概説書

を作ると、学習指導要領を作成している人たちにかなりの影響を与える事ができるのではないかと思います。（芦屋女子短期大学・中村薫）

◇高等学校世界史の教科書を読めば、世界歴史の概観が高校生に分かるかというと、現行のどの教科書もその役割が出来ているとは言い難い。凝った地図資料や写真資料を多用した資料集には、なかなかよく出来たものが多く、多くの教員が支持するものもいくつかでてきている。他方、一般向け、あるいは高等学校教員向けや歴史学を目指すものへの概説書も出版が相次ぐが、大部冊であったり、ある程度歴史の知識がないと取り付きにくいものがほとんどである。制約の多い教科書を「補助」すべく、新成果を取り入れ、歴史学の面白さを伝える内容にこだわった高校生にも分る概説書的なものを生み出すことは出来ないか。（中略）高校教員側が叙述に携わり、阪大歴史学の教授陣や関係研究者に監修していただくという方法はどうだろう。教員側が叙述するのは、授業を意識した叙述ができるからである。（兵庫・矢部正明）

◇新しい視点の「概説書」（新書版でよい）の出版をぜひ積極的に行なっていただきたいと思います。「概説書」を読み、疑問点を執筆者に質問できれば、より一層素晴らしいと思います。（大阪・若林俊一）

(c) パンフレット

◇かつて高校の県レベルの社会科研究会で世界史の副読本をつくっていたところがあったが、指導書のような文字ばかりのものだった。教科書くらいの厚さでA5の判型だったが、生徒が読む気になるものではなかった。したがって、中高連携でそうしたものを作るにしても、薄いパンフレットで読む気になるものが求められる。（大阪・遠藤和男）

◇生徒がイメージを描き易い授業をしようと思うほど、実証されていないことを言っているのではないかという不安がつきまといます。そこで、高校側で日本史も最新の学説も取り入れた挑戦的な授業案をどんどん開発し、大学の先生方にコメントをいただくということはできないでしょうか。インターネット上でも、本にするでもいいと思います。テーマごとの解説本と併せて、解説と授業案を載せた冊子などはどうでしょうか。（大阪・西岡浩美）

(d) メディア媒体

◇学力の高い高校では、補習として土曜日に予備校の授業のビデオやインターネット中

継を見せているところがあるので、大学の授業（今回の講義のようなもの）をビデオやインターネット中継で高校の生徒に見せることもできる。（大阪・遠藤和男）

(e) 教材開発全般

◇「大学教員と高校教員が協力して教材開発を行なう」：教材開発というと、ついつい「新しい教科書の作成！」と気負ってしまいますが、まず身近なところから始めればよいと思います。たとえば19世紀末までの東南アジア史を4回で教えるなら、どのような史料が有効か検討していく。あるいは「産業革命」の再構築とアジア間貿易の具体相が見えてくる、近代インドの綿工業の実態を示す統計資料を作成するなど……。さまざまなレベルで利用できる教材を開発し、ブックレットのような形で出版する。誰でも手軽に利用できる形態で教材がストックされていくことは、現場の教師にとってきわめて重要です。（大阪・笹川裕史）

◇現実に教科書を大幅にスクラップ・アンド・ビルドすることは現在の検定制度では、阪大の先生方が指導要領作成に参加しない限り難しい。また正直言って、経験を積んだ教員は、教科書にそれほど束縛されて授業をしているわけでもない。むしろ、進学校の高校生レベルを念頭に、教科書を超えるスタンダードとなりうる教材を作る試みを、高大の協力で進められないだろうか。（京都・岩月有行）

◇大学の研究者と高校の教員が共通意識も持って、新に教科書を作っていこうとの意見はあるが、両者とも時間的制約があるので、いきなりは無理である。研究者は、教えることと同時に研究を更に深めていくのが仕事であり、高校の教員も明日の授業の準備や生徒指導や行事などの特別活動や分掌など学校経営に関わる仕事がある。その中で共に無理なく教材作りをしていくためには、過去、4回に渡って大阪大学が提供した講義内容をとりあえず、教材化して生徒に提供してはどうかと思う。高校の教員が教材作りを行う際、得てして生徒に興味をもたせるため分かり易くする作業の中で、正確な歴史的事実をから逸脱する場合がある。その時には、研究者からの鋭い批判や批評を行えば、学問的な背景をもった教材が完成すると思う。（神奈川・古川寛紀）

◇高大連携の具体的提案に、「高校生新教材の作成」がありました。すばらしい取り組みではあるが、この「新教材」の対生徒用ターゲットはどの部分を目指すのでしょうか。せめて「史学科志望者向け」だけでなく、「文系志望者向け」あたりにまで広げられないでしょうか。文系学部での共通認識のもとで作成されたものであったら現場としても使

いやすいと思います。もちろん、ターゲットが理系志望者まで、あるいは大学進学を希望しないものまで、という所まで広げられたらもっとよいのですが。（兵庫・佃至啓）
◇グループ討論会中、教材の高大共同開発について、ある高校教員から、研究者と教育者の「相克」が必要なのではないか、という発言があった。すなわち、単に高校教員が研究者から最新の研究・学説を入手するだけではなく、双方の意見を忌憚なくぶつけあうことにより、「連携」や「交流」を、「相克」というさらに一段の高みに昇華させる必要がある、という趣旨だと私は理解した。まさに至言だと感じている。教科書の編集においては、すでにある種の「高大連携」が行われているものも少なくないが、その場合、この点は常に意識されていると思う。（東京書籍・桜井智之）

(vi) 資料集・文献情報の提供

本研究会の参加者の中には、独自に史料を読み込んだり、研究論文を収集・整理して教材開発を試みたりする教員が少なくない。こうした教員の活動を支援するような日本語に訳された史資料集や研究文献の情報を大学側が発信してほしいという要望が寄せられた。

◇グループでの史料解釈やディベートなど、テーマによっては楽しく自分の手で自分の歴史認識を形成するという醍醐味を味あわせることができるように思います。しかし、現実には日本語訳されている史料や手ごろなテーマは限定されています。今回の講義にも紹介されたような、最新の第一次史料類を日本語に訳したものなどが、大学の研究者の皆様から直接に紹介されたら素晴らしいと思います。（東京・吉野興一）
◇まず整備すべきことは、世界史教育関係の書誌情報であり、世界史教育関係の文献目録ではないだろうか。例えば、歴史教育関係の雑誌がこれまで、どのようなものが発刊され、現在も発刊されているものにどのようなものがあるのかを、熟知している教員は極めて少ないのではないだろうか。こうした作業は、個人の情報収集力には限界があるため、学会あるいは研究会で行なってもらいたい。（京都・川口靖夫）

なかでも、インターネットや電子メールを活用してリアルタイムに情報交換ができる環境の構築が有力な案として出されている。

◇夏休みは比較的参加しやすい時期ではあるが、実際に3日間の時間を作り出すことが

困難な教員はたくさんいる。したがってより多くの高校教員を巻き込んでいくためには、インターネットによる交流機会も整備していくことが望ましいと思われる。

（愛知・松本圭以子）

◇大学も図書館も少ない県の教員のためにも、インターネットによる研究論文の発表や最新の研究動向の配信がさかんになってもらいたいと思います。　（佐賀・森永知宜）

◇さらなるインターネットの利用も考えられるであろう。メールマガジンの発信、ブログでの意見交換、ホームページで様々な情報の蓄積などである。たとえば、大学の研究成果、高校のシラバス案、授業実践報告、授業に生かせる参考図書リスト等を蓄積していける、歴史教育に関する情報バンク的なホームページがあれば、多くの歴史教育に携わるものが利用でき、大きな成果を上げられるのではないかと思う。（福井・盛岡正男）

◇生徒たちに、教科書の記述がどのような根拠でなされているか、つまり史料をもとにした歴史叙述の成り立ちを語ることには、一定の意味があると考えている。しかし、一般にアクセスできる史料は多くない。たとえば、米国では主な史料をWeb上で閲覧することができる（USヒストリカル・ドキュメントhttp://www.usda.org/）。こうしたサイトは他国にもあるのだろうが、言語の壁もあり、アクセスは難しい。ましてや前近代の史料であれば、なおさらである。大学側で、そうした史料の翻訳をWeb上で公開することはできないだろうか。Web発表も業績として評価されるようになれば、大学院生や若手研究者は行なっている史料翻訳を公開することで、研究業績を得られ、それを広く利用することで、高校教員も授業の材料を得ることができよう。　（島根・北垣秀俊）

◇大学側と高校側が協力して、教材の研究・教科書の批判・授業の実践とその報告と反省・日常の授業の中で発生してくる高校教諭の質問に対する大学側からの専門的知識に基づく助言などを行う場として機能するような組織作りを期待している。ありきたりではあるが、インターネットの利用は有益であり、同時にインターネット上で上記のような活動をするためのコスト＝人的・経済的コストは大学側と高校側がともに負担していくことを前提とすべきではないかと考える。　（兵庫・上田義人）

◇第一次史料を大阪大学文学研究科等のホームページに公開し、第1回～第4回研究会参加全教員に添付メールにて一斉に送信する、さらに第一次史料（史料は指定）を活用した授業実践論文を公募するということも可能であろう。　（京都・堀江嘉明）

◇教科書に載っている、或いは入試に出る世界史の問題点を紹介するホームページが欲しい。ネット上で正しい「用語集」を作るのも面白い。その場合には教員向けだけで

なく、高校生（受験生）の閲覧に堪えるものが望ましい。ウィキペディア式に双方向で討議できるのもよいだろう。また研究向けには例えば『史学雑誌』の回顧と展望の様なものをやはりネット上で紹介してもらえると大変有り難い。費用や人員がかかることは重々承知の上で、ぜひ実現して頂ければと思う。（駿台予備学校・松山仁史）

(vii) 高校生が参加する企画

いわゆる出前授業とは一線を画した、次のような高校生との対話のできる場を設定してはどうかという提言も出されている。一般の人々からの質問に対し研究者側が回答するという試みは理系を中心に始められている。市民向けの「科学カフェ」のような議論の場を歴史学に応用する余地もあるだろう。

◇高校生からの質問を県単位研究会として受け止め整理したうえで大学側が回答。だだし、ルールをきちんと定めて、大学側に過大な負担とならぬように。（京都・村上直）
◇数学オリンピックのように、研究者と教員とが協力し、ある程度の権威づけをした“高校生のための歴史コンペティション”を毎年実施する。内容は、たとえば、高校生に読んでもらいたい書物を紹介し感想文を募集する。あるいは特定のテーマ（○○の△△周年記念など）に関する小論文を募集するなど。そして入選者には、史学科を受験する際には（どの大学でも）一定のアドバンテージを与える。（大阪・笹川裕史）

(viii) 入試改革

◇今後さらに要望したい点は何か。それが解答基準の一部公表である。（中略）当然公表とした場合、解答基準に対する質問・反発もあろうが、現在の社会状況を考えると、今後の大きな流れとしては、解答基準ではなく解答例の公表にまで進んでいくのではないだろうか。また公表した場合、大阪大学が、入学を希望している生徒・学生にどんな能力を要求しているかを伝えることが出来る。これこそが高校教員も生徒も、大きくいえば社会も知りたいことではないか。（東京・小豆畑和之）
◇「政治・経済」、「倫理」、「現代社会」、「地理A」といった科目の教科書の分量が、「世界史B」や「日本史B」のページ数の半分くらいで、センター試験の点数もとりやすい、ということになれば、たとえ歴史嫌いでなくとも、刹那的にそちらに流れるのが人情というものではないでしょうか。しかも、「国公立大」の2次試験に地歴・公民を課してい

るところがとても少ない（＝センター試験さえ切り抜けられればいい）とくれば尚更です。この点、受験生の目線を視野に入れた、「世界史」や「日本史」の「大学入試のあり方」の再検討を是非ともお願いしたいと考える次第です。　（大阪・大畑正弘）

歴史教育の刷新が進まない要因の一つとして、大学入試問題が旧態依然としたままであることが挙げられる。入試問題を通じて各大学がどのような人材を求めているのか、どのような大学教育を行なう方針でいるのかを明示することが社会から求められているようである。「大学全入時代」の今日、各大学はそれぞれが特色を明示して学生を集めることに取り組まねば生き残れない。その入試問題を高校教員と協働で検討する、高校生向けのセミナーを各大学が実施する、入試対策の問題集を作成するといった提案が出されている。

◇もっと大学の個別試験を研究すべきである。極論になるかもしれないが、大阪大学文学部は「東南アジア・中央ユーラシアの歴史に関心と強い好奇心のある生徒を基礎的な語学試験等だけで20名募集する」などである。現実的にはオールラウンドな知識を持つ生徒を募集するのとは別にOA入試を充実・拡大することがいいかもしれない。仮にそのような入試があれば、授業以外で高校教員が大学との研究会を土台としながら、生徒対象の東南アジア・中央アジア等のセミナーや講座を開き、もっとセンター入試にとらわれない個性的な生徒を育てられる可能性がでてくる。　（和歌山・瀬戸博司）

◇志望大学の教授の研究を知ることが大学入試の研究になり、高校の教室で学んだことが入試で問われ、入試で問われたことが、大学での学問に役立つという関係が成立する歴史の入試問題を、全ての大学の全ての文系学部が、出題して欲しいと思います。また、そうした歴史の入試問題は、一問一答や選択式ではなく、論述問題こそが相応しいと思います。それでこそ、高校教員が研究の最前線にふれることの意義が、高まります。そして、歴史教育の高大連携は、こうした前提を得ることによって、ようやくその本格化の端緒を得ると言えます。　（山形・高橋徹）

◇入学試験問題には出題者側からの受験生へのメッセージが籠められている。（中略）ものも多くある。大学側（複数の）と高校の現場が、大学入試問題の分析・検討を行う機会があれば（そして増えていけば）、高大連携という問題についての論議は抽象的なレベルをこえて、現実的なところで深まっていくのではないだろうか。（中略）大学側で主体的に、出題の方針や意図を世間に向けてはっきりと示すことによって、大学は開

かれたものになるだろうし、高大連携も強まるのではないだろうか。

（神奈川・袴田潤一）

◇問題集を高大共同で作るのはどうでしょうか。受験がらみと称して、新しい学説、枠組みを問う問題と詳しい解説、桃木講演で出された誤解の解説も含めて。これを理解しないと大学での勉強はスタートできないとする大学側が要求する「基礎・基本」の知識の問題を含めて。そして我々高校側にとってもこれだけは理解してマスターしておいて欲しい内容も含めて。（中略）問題集なら少しは保守的な人も関心を持って見てくれるかもしれないと思います。（神奈川・早川英昭）

V. おわりに

◇過去4回にわたる研究会で培った最大の財産は43都道府県約260名の参加者という「人」そして人と人とを結ぶネットワークである。高校と大学の円滑な接続を図るためには「人」の共働は欠かせない。高校教員には各都道府県での教科研究会や各高校現場での「伝導者」としての役割が求められよう。「受講者意識」を払拭し、「当事者意識」にどのように変化させるか。今度は高校現場が行動を示す番である。（京都・堀江嘉明）

大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」＜世界システムと海域アジア交通＞班（平成15年度までは＜シルクロードと世界史＞班）は、過去4回にわたり、全国43都道府県約260名を超す高校教員・予備校関係者・出版関係者を集めて研究会を開催してきた。

本研究会では、「考え方や背景がわかる」「像を結ぶ」歴史教育を実現するための土台造りのため、大学教員が最新の研究成果を報告し、国家や地域の枠組みを超えた新しい歴史像を高校教育界に向かって提示してきた。高校教員には、最新の研究動向を把握する必要性を感じさせただけでなく、この研究会の活動がきっかけとなって、都道府県の壁を超えた高校教員同士の交流が始まり、類似の研究会も各地で開催されるなどの波及効果が生じている。

また、高校教育現場の現状報告や高校教員による実践報告は、大学教員にも刺激をもたらし、さらに将来の高校・大学教育を担う若手研究者に対しても、学界だけでなく社会へ

向けて自己の研究成果を発信する訓練も必要であることを認識させた。筆者は、本研究会のような場で自己の研究成果（筆者の専攻は西夏史）を発信する際に、その研究がどのような意義をもつのかを専門外の人々に説明できるか、高校教員や高校生が関心を寄せている現代と過去とのつながりを意識した研究ができないか考えさせられた。大学側の研究と高校側の教育の双方に刺激を与える結果となった本研究会の活動は、「横断的な知」と「臨床的な知」というインターフェイスの構造を解明することを目標とする大阪大学21世紀COEプログラムの活動の一つとして、大きな成果をあげることができたといえる。

しかしながら、歴史教育の刷新という大目標に照らせば、これらの達成は第一段階を意味するにすぎない。研究会を通じて、大学の研究成果を高校の教育現場で活用してゆくために、大学入試のあり方・教科書の記述の混乱など、大学側も無縁ではない様々な問題に取り組む必要性が、具体的に明らかにされたからである。大学と高校との間に大きな溝があることを、我々はこの研究会を通じて知ったのである。

こうした諸問題が解決されない状況は、教育現場にいたずらに混乱を呼び起こし、その渦中で歴史嫌いの高校生を増加させている。この状況を放置するならば、歴史教育や歴史学の存在自体が「非実学」的学問として社会から軽視・排除される恐れがあるだけでなく、異文化との接触がさらに要求されつつある21世紀の社会に適応できない若者を、世に送り出すことにもなりかねない。現にその風潮は高校・大学・一般社会の間で確実に芽生えている。研究会終了後、全国各地の高校で、必修科目の世界史を大学入試で不要であることを理由に教えていないことが報道され、高校教育や大学入試の問題点が指摘された。だが、本稿ならびに過去の報告書で引用してきた参加者からのレポートからもわかるように、教育・入試の諸問題は、本研究会発足当初から現場の教員によって指摘され、それらを解決する方策を模索し続けてきた。かかる風潮を打破するためには、大学・高校間の討議や協働作業を継続・発展させる必要がある。

本研究会の模様は、『朝日新聞』2006年8月22日夕刊（一部地域では翌日朝刊）に掲載され、各地から本研究会の活動に対する問い合わせが相次いだ。本研究会に参加し、記事を執筆した朝日新聞東京本社の渡辺延志記者は、次のようなコメントを末文に記している。

> 「考え方や背景がわかる」歴史教育の実現を目指し、全国から集まった熱意を定着させる方策が、行政にあってもいいのではないだろうか。

もはや全国各地の高校教員から支持を受けている本研究会の活動を今ここで中絶することは、高校教員の期待を裏切るものであり、大学のみならず教育行政にまで不信を抱かせることになるのではなかろうか。

参加者からのレポートを通じて、大阪大学の活動には様々な可能性を秘めていることが示された。4回にわたる研究会を通じて、全国の高校教員と築き上げたネットワークを今後も生かすことはできないものか。筆者は、プログラム実施中のみの任期付きの研究員であるゆえ、今後本研究会がどのような方向に向っていくのか、決定する立場にはない。ただ、少なくとも本研究会の活動は筆者や学生を含む大阪大学の関係者の記憶の中に長く残り続け、研究会で得られた知見は高校・大学教育双方に有益な財産となるであろう。大阪大学の活動が継続されるならば、筆者は今後もこれに参加していきたいと考えている。本研究会の成功に尽力されたすべての方々に感謝の意を表したい。

本研究会最終日の全体討論会で主催者側は、大阪大学大学院文学研究科として今後も歴史学（大学）と歴史教育（高校）の連携に取り組むべく、以下のような活動の推進案を参加者に提案し、全員の了承を得た。その提案を引用し、本稿を終えることとする。

1. 大学側の最新の研究成果を高校教員に発信していく活動を継続する。
2. 古い枠組みと新しい枠組みの入り混じった教科書の内容を改善するための様々な検討を、大学教員と高校教員とが協働で進めていく。
3. 教育技術のみならず、豊富な知識も持たねば、多様化する社会のニーズに対応できない。大学側は歴史学の授業を高校教員のリカレント教育の場として積極的に開放する。
4. 進学してくる大学生に対応するため、大学側でも高校教育の現状を注意深く把握し、それに見合った大学教育を展開していく。

［さとうたかやす・大阪大学21世紀COEプログラム＜インターフェイスの人文学＞特任研究員］

全国高等学校歴史教育研究会に参加して
—大学と高校の円滑な接続を目指して—

堀江嘉明

I　はじめに

大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」の集大成となる今回の全国高校歴史教育研究会は「阪大史学の挑戦」というタイトルが示すように事務局の熱意が感じられるものであり、非常に充実した3日間をすごすことができた。大学側からの最新の研究成果の提示や高校現場からの現状報告、さらには大学院生と高校教員、大学教員等がこの研究会の成果と課題についてじっくりと時間をかけて討議を深めた。「知」の最高峰である大阪大学が再度、国家や地域の枠組みを超えた新しい歴史像を「発信」したことは賞賛に値する。

今後は「受信」した高校教員が旧態依然とした授業を展開するのではなく、21世紀の我が国を支える有為な形成者を創造する一助として、「学び」の喜びに繋がるような歴史教育、授業実践を早急に進めることが切に求められる。つまり、この事業を出発点として高校教員の「授業力」向上のための研修の機会の深化及び相互のネットワーク構築の礎とすべきである。

さらには現行の学習指導要領の趣旨をふまえ、自ら学び自ら考える力などの［生きる力］を育成し、「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う（『高等学校学習指導要領』第2章第2節第1款）」地理歴史科教育の充実・発展の一助としていかねばならない。また、この事業の成果を教員の各勤務校の生徒らに還元していく指導方法、教科書も含めた有益かつ適切な教材・教具の研究や開発も急務であろう。

高校教員は指導方法の一層の改善に努め、個性を重視した指導を推進し、教育（学習）

内容の精選によって基礎・基本の一層の徹底を図るとともに、生徒が生涯にわたって主体的に学び続ける意欲と能力を醸成しなければならない。京都府の場合は、京都府教育委員会および京都府総合教育センターによる体系的な初任者研修や教職経験に応じたきめ細やかな研修を実施し、公教育を推進する教員の資質・向上の深化が図られているところである。

私は、京都府立高校長会の裁可を受けて推挙された校長を会長とする京都府立高校地理歴史科公民科研究会（以下、府地公研と略）の歴史部専門部長である。当研究会歴史部では会長の指導の下で上記の趣旨に沿って公教育に課せられた使命と責任を全うすべき立場である教員に必要な教科指導力（授業力）向上のための取組を模索してきた。

過去4回実施された全国高校歴史教育研究会での指標である「インターフェイス」をふまえて、ややもすれば従来には陥りがちであった「大学教員からの講義を高等学校教員が受講する」だけといった片方向の「研修」ではなく、高校教員、大学教員、さらには予備校教員、大学生なども一堂に会して、「双方向」で意見交流することにより「知の拡大」を図った。

今回の全国高校歴史教育研究会の全体討論後に採択された『総括』には「大学・高校間の討議や協働作業を継続・発展させる必要がある」とある。拙稿で紹介する取組は「継続・発展」を期するささやかな試みの一つである。

Ⅱ　予備校教員と高校教員とのインターフェイス事業「日本史・世界史教員のスキルアップ講座」

ア．開催の趣旨

これは平成15年度の府地公研の事業の一つである。この年度の入学生から新学習指導要領に基づく教育活動が開始されている。地理歴史科の「世界史B」の場合では、新たに「地域世界」という概念が提唱され、ウォーラーステインの「世界システム論」、各地域世界の「ネットワーク」論などをふまえた教科書記述がなされた。また、従来の「絶対王政」の概念が「主権国家」体制へと変容するなど新たな歴史学の成果も取り入れられた。さらに主題学習が体系化され、中学校と高等学校の学習の接続を図るものとして「世界史への扉」が冒頭に出されるなどの新しい動きも見られた。

当講座では、代々木ゼミナール西部本部教務部副部長である佃幸夫氏が「新学習指導要領を見据えた今後の世界史指導について」という全体像を巨視的に概観する講演を行った。また、第3回センター模試、第3回記述模試の世界史・日本史を叩き台としての出題意図や狙い、今後の傾向、問題分析なども引用しながら今後の世界史指導についての道筋も提言した。

新学習指導要領の「世界史への扉」や課題学習などをどのようにふまえて作成するつもりなのか、世界史教員に求められる今日的な視点や世界史指導に関する専門性という観点からの資質を如何につけていくべきなのかという部分も問題提起した。日本史・世界史教員のスキルアップの一助とするという視点から当講座を企画した。

さらに代々木ゼミナール世界史、日本史の授業見学も取り入れた。「センター世界史」「センター日本史」では1年の最終講義（まとめ）であり、特に現役生が不得意であるといえる現代史に関わる単元の授業および「コンプリート世界史・日本史」の授業も続いて見学した。（「コンプリート」は国公立大2次や難関私大志望者を対象としたもの）。なお、参加予定の高校教員には当日の講義テキストの抜粋コピーを郵送し、受講前学習を義務づけた。

イ．会場および日程と参加人数

1. 日程　平成15年12月4日（木）12：40～16：40（～18：30）
2. 場所　代々木ゼミナール京都校　21教室および授業見学教室
3. 主催者　京都府立高校地理歴史科公民科研究会長　丹保重雄
（京都府立東稜高等学校長）
4. 後援　代々木ゼミナール京都校
5. 当日進行

12：40～13：20	受付
13：20～13：30	開会
13：30～14：30	講演：「新学習指導要領を見据えた今後の世界史指導について」 （代々木ゼミナール西部本部教務部副部長　佃幸夫）
14：30～14：50	質疑応答
15：10～16：40	授業参観①「センター世界史（上住友已）」 「センター日本史（松本恵介）」 ＊この講義は全員どちらかを選択して受講する。

17：00～18：30　　授業参観②「コンプリート世界史（上住友巳）」
「コンプリート日本史（松本恵介）」
＊この講義は希望者のみ受講する。②は難関国立大2次、難関私大向け

6. 参加概況

当講座には14の京都府立高等学校の教諭26名が出席した。また、大阪大学文学研究科から森安孝夫教授および杉山清彦日本学術振興会特別研究員（当時）が指導助言者として列席した。大阪大学第1回全国高等学校世界史教員研修会で学んだ成果をふまえて、当講座でも「出会う」場としての意味を持たせることに努めた。予備校側でも新学習指導要領を意識した授業づくりや「像を結ぶ」歴史教育を模索していることなどが伺われ、高校側と共通の課題も見えてきた研修であった。なお、この模様は平成15年12月5日付けの京都新聞朝刊にも掲載された。

7. 世界史授業概要

（以下は府地公研の『平成15年度研究紀要』に掲載した原稿の転載であり文責は府地公研にある）

「90分間の講義の中で取り上げられたのは、①第一次国共合作、②北伐と国共内戦、③満州事変と満州国、④西安事件と第二次国共合作、の部分で、国民党、軍閥、中国民衆、共産党、日本など、さまざまな主体が絡み合い、状況が複雑に変化する、受験生にとっては手ごわい時期だった。（「さまざまな試行錯誤の末、正しい中国革命を毛沢東が成功させる」という教え方でいいのか、という検討も必要になっている分野と思われる。）

上住先生の講義の方法や内容の特徴として、3つの点をあげると、

A）横長黒板を効果的に活用し、板書事項を写させる

例えば①第一次国共合作への流れについて、予備校大教室の横長黒板（幅約10ｍ）左側4ｍに、ものすごい速さ（5分以内）でびっしり板書し、受講生のA5横置きサイズ？のルーズリーフに写させる。受講生たちが必死に書き写していて、そのたくさんのシャープペンシルが出す、小さな音の草原の上を、先生のチョークの音が機関銃のように響きわたる。その1回分の板書量とルーズリーフ1枚分がぴったり対応している。

約2/3の受講生が写し終わった頃に、書くのを止めさせて、その内容を口頭で10分程度で説明する。次に、②北伐と国共内戦の部分を、黒板の右側約4mにびっしり……、とい

う板書（5分）→説明（10～15分）を、90分の中で4回繰り返す。黒板の中央には、必要な地図などが、これもかなりの速さで書き込まれる。

B）因果関係を重視した詳しい説明

例えば「1912中華革命党→1919中国国民党→1924第一次国共合作成立」の部分では、「民衆運動としての五・四運動の高揚や日貨排斥の広がりをみて、中華革命党のような秘密結社に限界を感じ反省した孫文は、大衆政党の設立を目指して国民党を作った。」「ロシア革命後、ソヴィエト側の帝政時代の侵略を否認するカラハン宣言をみて、孫文はヨッフェとの会談を経て、連ソ・容共・扶助工農の三大政策を打ち出した」といった、因果関係を中心とした詳しい説明がなされていた。

そこでは、中華革命党、カラハン宣言、孫文・ヨッフェ会談といった（センター試験ではおそらく出題されないであろう）事項を多くとりあげている点と、「近代国家の形成を目指して試行錯誤するカリスマ孫文」という、説明の軸となる主体（主人公）を設定している点が、きわだった特徴と思われる。

同様に西安事件を説明する際も、張作霖爆殺事件や八・一宣言だけでなく、遵義会議の内容や冀東防共自治政府、蔣介石が校長だった黄埔軍官学校に教官として周恩来がおり、その両者の関係が事件に微妙な影響を与えたことまでとりあげていた。

C）擬態語、擬声語、話し言葉を多用する語り口調

記憶の断片をもとに（失礼ながら）あえて誇張して書くと、板書に入る前置きとして、

> 簡単に言うと、蔣介石が国民革命軍を率いて北伐をガンガン行きながら、浙江財閥とつるんで上海クーデタをドカンとやる。日本側は北伐による中国統一阻止！のノリで山東出兵し、北伐軍の満州侵入を避けることと恐慌打開のノリもあって、張作霖爆殺事件をドカンとやる。そのへんをザーッと押さえちゃいます。

といった調子で、ガンガン、ドカン、ザーッなどのオノマトペ（擬声語、擬態語）を多く用い「一連の行動の意図」をノリの一語で済ましてしまう、語数を節約しながら受講生にとって身近な話し言葉に置き換えていく工夫が、語り口調の特徴としてあげうる。

こうした特徴をそなえた上住先生の講義は、国共合作や西安事件の経緯に限らず、現代史の複雑に展開するさまざまな局面について、史実に基づいた掘り下げた説明がなされている点で高く評価できる。また精緻な教材研究と入試問題研究を背景とした正確な事項整

理と明快な説明によって、先生が受講生のあつい信頼を得ていることも強く感じられた。

佃幸夫先生の講演をふまえて、こうした講義方法の背景にあるものを推測すると、「センター試験で高得点をとるには（私大入試に比べてかなり絞られた）基本的な事項の確実な定着が必要となる。そのために一番効率が良いのは、なぜそうなるか納得しながら、因果関係や出題されない関連事項を含めて受験生が自分の手で書き表すことだ」という受講生が納得しながらの書写作業を重視する考え方があると思われる。ただ学習定着のために受講生から一応の納得をうるには、孫文、蒋介石、毛沢東、関東軍司令部といった（最高）指導者を主人公として、それぞれの主観に触れながらその行動を説明していけば、複雑な事件の推移を比較的明快に説明できそうである。それ以外の視点もあわせ持とうとする必要はなく、出題可能性の低い事項を更に増やすだけで、「日本の指導者の目に映らなかったものは何か」まで問うことは明快さを損なうかもしれない。

自らの授業でできていないことを予備校の講義ではしっかりなされていると痛感しつつ予備校ではできないことを高校ならできる可能性があることも考えさせられた。

「センター試験世界史B」に続き、私大・国公立2次対策の「コンプリート世界史B」も、上住先生の講義を受講させていただいたが、①ヴェルサイユ体制　②ワシントン会議　③1920年代の欧米　④ルール占領とドイツの賠償問題　について、やはり詳しくかつ明快なものであった。ワシントン会議で結ばれた九カ国条約の締結国の覚え方を「イイポチ、アベフニオ（英伊葡中、米白仏日蘭）」と紹介しつつ、四カ国条約や海軍軍縮条約の意味についても、具体的で掘り下げた説明がなされた。またルール占領時点のドイツの状況を「メッチャやばい」と印象づけながら、賠償問題については、ドーズ案、ヤング案、フーヴァー＝モラトリアム、ローザンヌ賠償協定などの内容や意義について、金額や年限をおさえながら詳細に説明されていた。「コンプリート世界史B」では、こうした条約や協定に関して細かい説明がなされている点をのぞけば、「センター試験世界史B」との大きな違いは無いように感じられた。

上住先生の「納得させられる」内容と工夫された授業方法は大変勉強になった。今後は入試問題や教科書等についても、予備校の研究を学び交流する機会を持てたらと考える。

8. 参加者からのアンケート一覧

◇センター試験の授業については戦後史の内容がコンパクトにまとめられており、また経済の観点からの授業でわかりやすいが判りやすかったです。授業の背後にかなりの準

備を伺わせるものがありました。ただ、内容がある一定レベル以上の生徒を想定したものであり、現在私が担当しているクラスの生徒であるなら、語り口やパフォーマンスで気を引きつけることができても、それで終わるだろうと思います。

◇講演に関しては地域的な私大の出願傾向など、参考になりました。また、受験対策など判りやすい内容でした。授業については受講者の気持ちをそらさないで効率よく、印象づけながら整理し、また熱弁・演技等で大量の内容を飽きさせずに……。大変参考になりました。「文化史」や「産業史」等を扱う講義について、現代史以上に多くの事項があると思いますが、どのような授業をなさっているのか聴きたいと思いました。

◇最近の生徒の授業での集中力が、一昔前の生徒とは変化してきていることが我々の教育現場と同じであると感じました。作業などの体験や体感をさせながら知識を理解するというスタイルで興味関心を重視してやってきた生徒の姿が予備校にも影響しているなと感じました。そのため講師の先生も講義での内容説明と関連のある内容の余談では、ついてこれていない生徒を惹きつけるため板書や発問するといった工夫も絶対的に必要になってきていると感じました。内容のまとめ方は個性的で学ばせたい部分が十分に反映されていたと思いました。

◇過去にも予備校で授業見学をしたことがありますが、久しぶりと言うこともあって、少々びっくりしました。昔より語り口が大変ユニークになっていてパフォーマンスにも惹きつけられました。語り口や余談の入れ方、板書の方法も大変参考になりました。特に正式な板書以外の板書で、生徒が理解しにくいであろう部分を丁寧に解説されているところは感服しました。例えば寄生地主制と植民地獲得の関連はシンプルで判りやすかったです。

◇戦後史の授業でもツボを押さえた整理の仕方であり、多分、生徒さんは後でノートを見直しても大変、よく判るだろうと思いました。1講座の内容を我々は3時間ぐらいでやっているような気がしました。授業時間が少なくなっている中、まとめ方やスピードの上げ方なども参考になりました。

◇板書事項や板書方法は我々が進学補習を行っていく上で参考になりました。一講座のために多大な事前学習をされていることが、よく判りました。私達もそんな姿勢は見習わなければならないと思いました。

◇お招きにあずかり有り難うございました。私は予備校の授業は初めて参観しましたので、高校の授業とも大学の講義とも異なり、色々な意味で新鮮でした。受験そのものに

せよ、生徒・学生に何某かを伝えるという意味においての授業・講義という営為にせよ、高校・大学・予備校で、それぞれ目的が異なるということは言うまでもなく、その点（高校・大学が予備校の講義技術に倣う必要はないでしょうし、高校・予備校と大学では「入試観」が違うでしょう。）を踏まえた上で相互に交流し情報交換、あるいは刺激し合う重要性を改めて感じました。

◇世界史の先生の話には感心してしまいました。センター対策とはいえ、かなり深い所で、背景や繋がりを話されており、大変参考になりました。今回の企画は大変良かったです。

◇授業を参観させて頂いた中で自分の授業の反省点や今後の工夫授業を参観させて頂いた中で自分の授業の反省点や今後の工夫についてのヒントが得られました。講演の内容については少々落胆しました。卒業生にも会えました。高校生の学力変化について。公立高校で出来る教科指導は何かというテーマを私自身が持っています。もっと勉強しようと思っています。

◇大変勉強になりました。教材のつかみ方、板書の仕方、展開など非常に参考になりました。90分授業の2講座、集中して受講し疲れましたが良かったです。

Ⅲ　大学教員と高校教員と教員志望の大学生のインターフェイス「京都橘女子大学の正規の授業に参画～新しい歴史像の構築を目指して～」

ア. 開催の趣旨

これは府立高校という従来のフィールドを離れ、「学習知」の集大成としての「大学」に研修の舞台を移した平成16年度の府地公研の事業の一つである。21世紀は「人権の世紀」でもあり、男女共同参画社会の実現が求められているところである。

さて、新学習指導要領に基づく世界史Bでは冒頭に『世界史への扉』が登場し、「女性」、「家族」「子ども」といったテーマが取り上げられている。しかし、「歴史の陰に女性あり」の台詞の如く、女性は陰にとどまり、女性を視座にすえた単元や教材もあまり見られないのではないかという声も見られる。そこで新時代の諸潮流をふまえた新しい高校歴史教育の在り方を考える一助とすべく設定した。

京都橘女子大学（当時）文学部歴史学科は、本格的な女性史の研究を通じて男女共同参

画社会をみすえた新しい視点から歴史をとらえ、1回生の女性史関連ゼミ、2回生以降の「女性史特講／講読」などといった多くの講座を設置し、歴史学科の学生の30％は地理歴史科教育法の授業を履修している。

今日の変化の著しい社会の中で、教育の更なる充実・発展が期待され21世紀の子どもの教育に関わる教員は不断の研鑽と組織的な教育実践が求められている。したがって教員を養成する大学の責務は大きく、教員の資質の養成に寄与する教職関連科目の充実・発展が求められている。

今回の集会の企画にあたり、京都橘女子大学の関係者と協議し、「女性史」と「双方向」という2点をコンセプトとして設定した。従来は「講演を聞くだけ」といった片方向、一方的な「研修」に終始したのではないだろうかという反省もふまえて、今回の集会では、大学教員、高校教員そして大学生という三者が一同に集い、双方向で情報を送受信するワークショップや大学生による模擬授業などを実施した。

まず、京都橘女子大学から女性史の視点からの歴史像の見直しに資する問題提起をおこない、府立高校教諭から日本史・世界史教科書の女性記述の概況や大学入試問題などをふまえて実情報告した。その後、「大学生による模擬授業」を実施した。学部学生の「地理歴史科教育法」の正規の授業を振りかえ、授業者、高校教員、大学教員が「模擬授業」に関する質疑応答をそれぞれの立場からおこない、最後に「今後の高校歴史教育はどうあるべきか」を今回の研究集会の帰結点にした。

イ. 会場および日程と参加人数

1. 日程　平成16年12月15日（水）12：50～17：50
2. 場所　京都橘女子大学
3. 主催者　京都府立高等学校地理歴史科公民科研究会会長　大林弘
（京都府立鴨沂高等学校長）
4. 後援　京都橘女子大学
5. 当日進行

13:15～13:25	開会挨拶
13:25～14:40	基調講演：『高校歴史教育に望むもの～女性史の視点から～』 （京都橘女子大学文学部歴史学科教授　松浦京子）
14:50～15:10	高校からの現状報告Ⅰ（日本史）

（京都府立農芸高等学校教諭　川口敬二）

15:10～15:30　高校からの現状報告Ⅱ（世界史）

（京都府立田辺高等学校教諭　毛戸祐司）

15:30～16:30　学生による模擬授業　『産業革命』

（京都橘女子大学文学部3回生）

16:30～17:40　ワークショップ（討議）

ア．模擬授業に関する質疑応答

イ．今後の高校歴史教育はどうあるべきか

ウ．まとめ

6. 参加概況

当事業には17の京都府立高等学校の教諭22名が出席した。また、京都橘女子大学の田端泰子学長のご臨席も賜った。また、大阪大学文学研究科から桃木至朗教授の指導助言も得ることができた。また、京都橘女子大学学術振興課（リエゾンオフィス）の全面的な協力の下、同大学文学部教授7名、学生23名、計53名が参加し白熱した議論を展開した。この事業も「双方向」を意識したものとなったが、「出会い」を有意義なものとするには統一したテーマを充分に検討して設定する必要にも迫られた。なお、この模様は平成16年12月16日付けの京都新聞朝刊に掲載された。

7. 講演概要

これまで、私は高校の歴史教育を意識せずに学生に講義してきました。高校での知識を無視するわけではありませんが、学生の知識は千差万別で、ばらつきがあるので大学の講義は学生に未知の授業であるというスタンスで取り組んできました。高校の現状を推察するに時間数不足で近現代まで十分に学習できていない場合が多いからです。

私の担当している女性史は新しいジャンルで、現在の男女共同参画社会にいかに寄与できるかという現代的課題をも意識した研究スタンスをとっている分野です。女性史成立の背景には1960年代の第二次フェニミズム運動や社会史ブームがあります。例えば、男女不平等の起源を探求することで女性史はフェニミズム運動を裏面から支えるジャンルであり、今まで無視されてきた部分や新しい発見を見いだすことに強い使命感をもつものであります。

男女共同参画社会を構築するには、現状が参画社会でないということを認識する必要があります。参画社会とは女性の不利益を認識せずにすむ社会、男性から見ても性差にもとづく反感が認識されない社会であります。また男女区別はあるが差別は是正されるものと思われている社会です。アメリカのある学者は学生に、「現代社会は先人たちの努力の成果であること、そして、今なお、過去の不平等社会の残存物があるということを教えていくのが女性史の役割である」と述べています。確かに歴史的には性別の役割分担が存在しましたが、このような性差による社会的区別の差別について、高校の教科書は記述が少なく、特に古い時代ほど少ない傾向があります。家族関係に言及した部分もありますが、ほとんどが近代の例であります。また近代ヨーロッパで初めて登場するものも多いようです。今回は産業革命が女性に与えた影響、また女性の存在が雇用の場や公領域に、いかに影響を与えたかを考えていきます。

Ⅰ　産業革命研究史

「産業革命」という言葉はイギリス・オックスフォード大学のチューターで社会改良家でもあったアーノルド＝トインビーが使い始めた言葉です。トインビーが1880年代に講演した内容が活字になり、その中で18世紀末から19世紀初頭に生じた社会・経済変動を指して、はじめて「産業革命」なる言葉が使用されたのです。トインビーは社会改良家ですから、産業革命を論じるにあたって、「産業革命悲観論」を基調としています。「囲い込み運動を前提とした伝統的農村社会の崩壊と工場労働者の出現」というのが典型的な論旨ですが、これに影響されてハモンド夫妻が「資本主義体制下の労働問題」を著し、スラムの実態や低賃金などの様々な労働問題を論じました。これが古典学説で、後に生活水準論争に発展していきます。過去の日本の教科書にはトインビーの古典学説に基づく記述が見られます。

1920年代には成長論・楽観論が現れます。現在の教科書では進歩史観・成長史観に基づき、社会を前に押し出す原動力としての産業革命という捉え方をしているものが多いようです。戦後は開発モデルとしての産業革命論が現れます。経済史家のクラパンが、この論の代表で、どんな地域でも「Take-Off（急成長）」は可能であり、現在の低開発国の発展モデルとするためにイギリス産業革命の原因を探り出そうとする姿勢につながりました。

1980年代になりますと「工業化はあったが、産業革命は本当にあったのか。」という懐疑的な論議が活発化してきます。「すべての地域にTake-Off（急成長）は起こるのか」、「革

命というものはなかったのではないか」という論議であります。さらにジェントルマン資本主義論に代表される文化史的批判からの反産業革命論も起こってきます。開発モデルとしての成長史観の観点で見たとき、「Take-Off（急成長）」の証拠はどこにも見いだせないという研究も出てきました。同時に、当時のイギリスでは、いわゆる「イギリス病」をどう扱うかという論議も活発でしたので、計量経済史では説明できないことへのまなざしが強まってきます。そこで「残余の分野」としての社会史に関心が高まり、これが女性史・家族史研究成立の契機となりました。

Ⅱ　産業革命と女性史（19世紀イギリス女性史の前提としての産業革命）

プロト工業化期から産業革命期にかけての女性労働と家族の変容について話します。プロト工業化期、いわゆる農村家内工業期の繊維工業の労働力の中心は女性でした。都市の商業資本と結んで世界市場向けの製品を生産していました。なぜ女性の労働力に依存していたかというと農業構造の変化（囲い込み）が1世紀かけて進行し、豊富で低賃金の女性労働力を生み出していった結果であったと言えます。

農業構造の変化（囲い込み）は女性に大きな影響を与えます。農場の大型化と合理化で人員の削減がなされ、共有地も消滅しました。これにより成立した資本主義的農業経営で雇用されるのは男性であり、女性は生き残れませんでした。それまでの未婚女性の雇用は男性と同じく若年時から生家を出て住み込みで雇用される「ライフ・サイクル・サーバント制」が主流でした。この制度では雇用する家庭が若者（男女）を保護監督し修行させるという機能をもち、同時に女性の早婚抑制機能ももっていました。日本の徒弟制度に似た制度ですが、雇用する家庭にとっては身内の人間よりも他人のほうが労働効率が良いという事情もありました。しかし、資本主義的農業経営においてはこの「住み込みサーバント」は雇用されなくなり、ここに生じた失業人口が農村家内工業に次第に吸収されたというわけです。

農村家内工業が衰退し産業革命期になると、これらの女性労働力は、産業革命の各部門に吸収されていきました。つまり農業構造の変化（農業革命）が産業革命を生んだとも言えますし、資本家にとって低賃金で雇用できる女性は大変メリットがあったとも言えます。産業革命は安価な女性労働力が支えた、女性史としての産業革命という視点をもっと認識する必要があると思います。

工業化と女性労働についてお話しします。従来の考え方は、楽観論と悲観論に二元化さ

れていました。楽観論では個人賃金を基本とする工場労働が女性に経済的自立の機会を与えたと説かれました。しかし、実際には労働市場の需給関係や伝統的観念によって女性の賃金は低く抑えられたままであって自立には程遠かったのです。悲観論では職住分離により女性が労働市場から撤退し、女性の就労率が低下し、妻が家庭に入り家事と育児を行う男女役割分担が定着したと考えました。しかし実際は働かない妻はミドルクラスだけで、夫の給料で足りないときは妻が働くという状況は下層社会では多く見られました。このことは妻の給料は家庭の補助的・周縁的存在であるという認識を生み、低賃金を固定化するという状況を生みました。女性の賃金は男性の1/2～1/3に抑えられ生涯一人暮らしはできません。さらに女性は家事・育児と労働の二重負担に苦しむことになり、この過重負担に対応するべく断続的就労パターンや家内労働を常態化させました。これはまた、低賃金の連続性を生み出すことにつながり、女性を特殊労働力として固定化させることになりました。つまり、女性は低賃金の労働力予備軍として潜在化することとなり、この豊富で低廉な女性労働が工業化の進展を支えていたのです。まさに、現代に通じる課題が産業革命期に現出していたのです。

以上のように「産業革命と女性」について様々な分析を加えると、新しいことが色々とわかってきます。このような問題を、女性史としてどう提示し、どう評価するかによって男女共同参画社会の諸問題を浮き彫りにすることができると考えています。

8. 高校からの現状報告Ⅰ（日本史）

平成15年度から新学習指導要領が施行され、高等学校の日本史A、日本史Bの内容も一新された。両科目に共通する顕著な変更点は「主題学習」の積極的導入である。また、日本史Aにおいては原始・古代・中世が事実上、割愛され、江戸時代のダイジェストを含めて、幕末からの叙述になった。

日本史Aの主題学習のテーマは「歴史と生活」で小項目として「衣食住の変化」「交通・通信の変化」「現代に残る風習と民間信仰」「産業技術の発達と生活」「地域社会の変化」の5項目が取り上げられている。

日本史Bの主題学習のテーマは「歴史と資料」「歴史の追究」である。「歴史と資料」の小項目は「資料をよむ」「資料にふれる」である。「歴史の追究」の小項目は「日本人の生活信仰」「日本列島の地域的差異」「技術や情報の発達と教育の普及」「世界の中の日本」「法制の変化と社会」である。

教科書の主題学習の記述は、この小項目に準拠して記述されているので、女性史を特別・別個に取り上げている項目はない。副教材の資料集については、各社とも工夫をこらした内容になっているが、一部の出版社で女性史を取り上げているものもある。

教科書における女性史の記述を考察するに当たって、山川出版社の『日本史B用語集』における女性に関する人名・作品名・用語を抽出して、その傾向を分析した。抽出方法は作品名については女性を題材としたものとし、仏像関連は除外した。用語は女性に関する物に限定した。用語集に所載されている用語等の総数は約10600語であるが、女性に関するものだけ抽出すると約240語であった。各人名・作品名・用語には教科書19種類の内、何冊の教科書に記載されているかを示した頻度がついている。頻度「⑲」は19冊すべての教科書に記載されているという意味である。頻度や時代別の人名・作品名・用語を分析すると、女性史のウェイトがあまり大きくないという現状が伺われる。頻度についても、「⑤」以下のものが全体の半分を超えている。

《原始・古代》

原始の女性崇拝や女帝の存在、宮廷文学など、比較的多く記述されている。全体としては約3割のウェイトを占めているが、頻度の低い人名・用語も多く見られる。最近の教科書の傾向は近現代重視であるので、この傾向と原始・古代の女性の地位などを鑑みると、ある程度妥当な記述量と思われる。

《中世》

女性史としての位置づけでは、中世の女性の地位は比較的高く、武家の相続の問題や後家の地位などを鑑みても、記述量は著しく少ないといえる。頻度⑯以上のものは殆どない。

《近世》

女性の地位が低下したという説のため頻度⑯以上のものは4つしかなく、全体の記述量は中世よりは多いが、人名以外では「駆込寺」などの地位低下を示すマイナス要素の用語が多いのが特徴といえる。

《近現代》

近現代重視の傾向から、約半数の人名・作品名・用語が集中している。しかし頻度「①」の人名・用語も多数見られ、各出版社が特色を出そうとしている様子が伺われる。内容では社会運動家や労働運動、戦争関係の人名・用語が目立ち、若干の偏りを感じる。

基本的に教科書本文を追って授業をする限り女性史が授業に登場する機会は限られてしまう。主題学習で教員が主体的に教材開発して取り上げる方法もあるが限界もあろうかと

思う。今後はいかにして学界の成果を教科書に取り入れていくかという点に関して、歴史教育の長い伝統という重みもあるが、大学・高校現場との連携を深めて、女性史の研究内容・成果を積極的に教科書記述に反映できるよう考えていく必要がある。以下に教科書記述の中で感じている点について私見を述べる。

中世においては、女性の地位が比較的高かったが、登場する人名や用語は少ない。乳母や後家の地位、相続の問題など様々な学界の研究成果があるにもかかわらず、教科書の記述内容は不足している。家族関係の問題を通じて、女性と社会の在り方をもう少し記述しても良いのではないか。例えば女地頭や女戦国大名などがいたことに触れることで、生徒の歴史観にゆさぶりをかけることができる。

近世については、女性の地位低下を示す用語が大変多く記載されている。しかし、実態としては、結構奔放に生きた女性が多かったことや、朱子学に規定されている女性の立場や身の処し方については、多分に建前であったともいわれている。例えば「離縁状」については悲惨なイメージがつきまとうが、一面、女性への「再婚許可証」であったという見方もある。また、商家の跡継ぎには婿養子を迎える風習が結構あった。個々の研究成果の積み重ねが教科書記述に反映されているとはいえず、「近世女性悲惨史観」一辺倒から抜け出していけるかが今後の課題ではないか。

近代についても社会運動家や労働運動、戦争関係の人名・用語が目立つ。女性の文化史上の業績もあまり扱われない。頻度の低い人名などの登場が多くなることは、各出版社が独自性を出そうする努力の賜であろうかと思われるが、ともすれば現場の指導の蓄積が少なく、適切な扱いができずに用語の丸暗記に終始してしまう危険性もある。また、社会運動家ばかりでなく、他にも積極的に歴史に関わった人物の発掘も望まれる。

男女共同参画社会を目指して、今後の歴史教育の在り方も変わっていくだろう。生徒に「女性＝社会的弱者」というイメージを定着させてしまう恐れも多分にあるのではないか。今後は女性史研究の進展と、そのことの教科書への反映、主題学習の有効的活用、現場教員の意識の活性化が大きな課題となろう。

9. 高校からの現状報告Ⅱ（世界史）

手もとの世界史教科書の見本をめくった限りでは、次のような傾向がみられた。

①世界史Aの教科書の方が、女性史の視点を積極的に取り入れている。代表例は東京書籍『世界史A』で、フランス革命期の先駆者グージュ、ウルストンクラフト、日本の平塚ら

いてう、シャネルやカルティニまで登場させている。受験対応型？の世界史Bの分厚い教科書は消極的で、とりあげても本文ではなくコラムで（東京書籍『世界史B』）ということとなる。その点、山川出版社『詳説世界史』（新課程版）が現代文化の部分で「性差別批判では、フェミニズム運動の役割が大きい」とした点は、注目される。

②女性史の観点からの記述がみられる部分が限定されている。

a 産業革命での女性労働と、近代の性的役割分担

b フランス革命での女性の参加と、人権概念の限界

c 第一次大戦の総力戦での女性の役割と、女性参政権の実現

の3つのポイントにしぼられ、それ以外の部分での女性の視点は見あたらない。

③新課程に伴っての今後の改善の方向

世界史Bの「世界史への扉」や冒頭の写真ページ部分で、女性や家族を取り上げるケースを増やすことも考えられる。例えば帝国書院『高等世界史B』は、「扉」の1つとして産業革命期の家族を取り上げているが、女性からの視点が不充分な記述となっている。また第一学習社『高等学校世界史B』は、「衣装特集」で多くの女性を登場させているが、説明抜きの写真だけになっている。

用語集に登場する個人名を見ると、男女間に極端なアンバランスがあり、その傾向は現代史でも変わらない。（現代のアジアの女性政治指導者が少し目立つ程度）結局、生徒に対して意識せずに（留保なしで）「男たちの歴史」を教えてしまっている現状があるのではないか。各国の「民族の母」や女性解放運動家など、もっと登場させるべき女性もいるはずだ。しかしその分、多すぎる男たちを、教科書からどう「退場」させるかも考えなければならない。さらに言えば、多くの女性は固有名詞として残らない「名もなき人々」だったが、そうした「人々」をどう教えるか、という課題も大きい。「モノから学ぶ世界史」が流行しているが、「モノや金の流れ」で終わらずに、モノを作る、売り買いする「人々」（たいてい半分は女性）にたどり着くだけの教材研究が求められる。

センター試験世界史での女性、女性史の取り上げ方が突出している。「リード文や写真図表で問題提起して、設問は（平均点維持のため）平易に」を特徴とするセンター世界史は、1999年AB共通第一問の津田梅子とカルティニから、2004年のサンシモン主義者？まで、多くの女性を登場させ、女性史の観点を盛り込んできた。その点私大入試では、テーマ出題で取り上げようとしても、「用語集での頻度でみれば、則天武后やジャンヌ＝ダルクぐらいしか出せない」状況に制約されていると考えられる。

10. 学生による「模擬授業（産業革命）」報告

大学教員、教員を志す大学生、高校教員の三者による「双方向参加」を実現するための理想に近い方法として、学生による模擬授業が企画された。（教育実習での研究授業ならともかく）専門とする高校教員多数を前にしての模擬授業を、実際に引き受けてくれる大学生がいるかどうかが最大の心配事であったが、大学側の御努力と大学生ら御協力で実現できた。

当日の模擬授業は、担当してくれた3回生にとって更に厳しい条件で行われた。授業では「産業革命」を扱ったが、その前に松浦京子教授が講演の中で産業革命について要を得た研究史を述べ、女性労働の重要性を鋭く指摘した。あとで授業する際のプレッシャーは増大した。さらに100人規模の講義室の教壇から見ると、目の前の22名の生徒役の学生の後ろに、田端泰子学長、梅本裕副学長をはじめとする多数の大学関係者、22名の高校教員、大阪大学の桃木至朗教授まで目に入るという、「ありえない」状況に立ち向かわなければならなかった（「双方向」をさらに追求すると、高校教員による模擬授業なども当然考えなければならず、翌年の平成17年度の研究集会では府立高校教員による示範授業を実施した。「大航海時代（世界史）」と「鉄砲とキリスト教の伝来（日本史）」という2つの授業を実施したが、「16世紀」の時代に日本史と世界史の両側から迫ることを目指した。その「両側から」という新たな枠組みの提示もこれまでの大阪大学歴史教育研究会の問題提起により明らかになったことである。著者註）。

「身の回りにあるものから産業革命を発見する」ことをねらった授業は、

①「産業革命」から何を連想するか（発問）

→生徒役の学生たちは積極的に答えていた。

②イギリスの海外進出と資本の蓄積

→アジアの地図を板書したのが効果的だった。

③農業の革新　「農業革命」

→人口の統計資料や絵画資料を使用していた。

④技術革新　綿工業を中心に

自宅から持参した綿製品、麻製品、毛織物を教卓前に並べ、生徒たちに実際に触らせ、その感触を発問した。更に当時イギリスで日常的に使われた繊維を発問し（正解は麻）、今との違いやインドキャリコの普及、技術革新の必然性やその過程を説明していった。

⑤ジョセフ＝ライトの絵画の紹介

製鉄の場面や錬金術、空気ポンプの実験など（18世紀後半イギリスのロマン主義の画家）を描いた作品のコピーを数枚回覧させたが、生徒役（受講の学生）は惹きつけられていた。

休憩後のワークショップでは、高校教員の側から、物を触らせ、絵画資料を効果的に使った点などを評価しつつ、いくつかの改善すべき点が指摘され、さらに梅本教授が①テーマ分析の不足　②授業方法選択での配慮不足　③生徒の経験に即して理解させる為の具体的な説明の不足　の3点から、的確に批判された。教授はさらに③に関わって、生徒の経験や実感から離れた言葉を充分理解させないまま積み重ねてしまう「コトバ主義（用語主義）」の病弊が現場に拡がっていて、「歴史嫌い」を増やしている点も指摘された。ただ「コトバ主義」をどう克服するかについては、

①モノを見せたりさわらせる。

生徒の経験や読解力、想像力が乏しくなると、いくら具体的に説明しても、しんどくなる。「体験」を志向させる

②使う用語を減らしながら、具体的な説明で用語を活性化する。「用語のリストラ」という2つの方法が考えられる。

11. 参加者アンケート

（学生編）

◇高校の歴史授業を学習していた時は、まったくといっていいほど、女性について気にしなかったが、今回高校からの現状報告を聞いて、いかに教科書・資料集に女性に関する事柄が少ないかというのを気づき、驚きました。

◇歴史の中に女性を見つける、見直すといったことで、高校の先生がどう考えているか知ることができて、よかったと思う。自分は大学で女性史を学んでいるので、高校の全体史として考えると、女性の登場があまり出てこないことを改めて考えさせられた。名の知れない人物を出せば、消える人物もいる事をふまえて、歴史を教えるのは難しいと思った。

◇教材が興味を示せるものだった。ただ字が小さいと思った。言葉もとめどなく話しているのでどれが重要なところなのかよくわからなかった。でも声が大きくてよかったと思うし、自信をもって授業をしていたと思う。

◇前半は学生が参加する意味があったのかという疑問がわきました。最後のワーク

ショップは、実際の授業を行ったことのない私たち学生に対して、現場の先生方が意見を述べて下さったことは、これから教育実習を行う上で、とてもためになったと考えます。また、教科内容を削るという問題が出たが、入試体制つまり教育体制が変わらない限り、それは理想論にすぎないと思いました。

（教員編）

◇高校の動き、入試などいろいろ紹介され、大変勉強になりました。模擬授業も含め、自分の講義のネタを沢山いただきました。近年の新しい歴史研究の成果は高校教科書や入試にも取り入れられていますが、体系性を欠く一方、旧来の受験暗記教育やヨーロッパ中心史観、日本特殊論も根強く残るため、高校生に過大な負担を強い、かえって歴史離れを助長しているようにすら思います。川口・毛戸両先生のご報告からも「全体を見ながら」「スクラップを大規模に行う」必要は明らかです。その中でエンゲルス＝高群逸枝流の女性史段階論の克服、専業主婦がいけなくて社会に出て働く女性だけが偉いような印象を与えないこと、アジアの女性（産業革命による女性労働の変化もイギリス風には進まない）など、さまざまな課題をクリヤしながら女性史を教えるには、ますます緊密な「高大連携」が必要だと痛感しました。

◇大変有意義な研究会でした。新学習指導要領をふまえた内容で大変参考になりました。今後の授業に活かしてしていきます。

◇はじめて参加させて頂きました。久々に知的レベルの高いお話を集中してきく機会となり、日々の勉強不足を痛感しました。できれば日本史関係のお話も聞きたく思いました。女性史については私も日々の授業の中で気にかけ、折にふれて話しています。（おそらく男性教員よりは多く割いていると思いますが）ただ悲観論かなとも今日思いました。今後の課題が多く見つかりました。

◇生徒の視点で、コトバの説明から始めなければならないなんて、ついこの間まで学生だった私も、教壇に立って初めて実感したことです。今日、3回生の時点で、こんなにもたくさんのヒントをもらい、勉強になったことは、本当に有意義だったことでしょう。私自身が実はすごく勉強になりましたので。府立学校の教育現場でいつかお会いできることを楽しみにしています。

◇3回生で良く大勢の前でまとまった話ができたと思います。それぞれ良い意味の経験をつめば技術だけは上がると思いますが、その元になる考え方、視点は常に関心を持た

ないといけない。分野を広く関心を持って、常にスクラップアンドビルドを繰り返していかねばと肝に命じました。代表のみならず、この機会に、学生2人、教員2人、大学1人ぐらいの小班でのワークショップが可能になればよかったと思います。

◇教員経験のない学生さんということで、よい意味で枠にしばられない切り口の授業であったと思う。綿、毛、麻など（実物、気候グラフ）を使っての説明は、とても新鮮であった。

◇地歴教育は、“ことば主義”に陥りがちであるということは、いい教訓であった。

◇世界史をメインに教えていて、今回の毛戸先生の話は同じ思いをもって聞いていた。最近インターネットなどで世界史に関する人物などをとりこんでプリントなどにはりつけているが、そのなかででもとりこめる人物は非常に少ないと思います。今回は大学生の研究授業ということで興味深いものであった。発問などは今までにない視点であり、いい勉強をさせてもらいました。

◇有意義な研究会であったと思います。大学側・学生側・高校側との違いがいろいろわかり、最後に「歴史嫌いをなくそう」との共通認識ができたように思います。

◇たくさんの企画をありがとうございました。松浦先生の講演については、今までに知らない視点・観点での研究をふまえた話をきかせていただいて、深く勉強してみたいなと感じました。女性の低賃金など雇用条件の改善は、男女共同参画社会にとって不可欠でしょう。模擬授業の交流も含め、最後の交流の時間をもう少し時間をとれればよかったと思います。

◇テーマを立てて、高校現場・大学での研究成果の交流を図ることは意義深いことであり、このような取組を今後も進めていったらよいと思います。京都橘女子大学松浦教授の講演は、新たな視点を持って、産業革命の授業を行う一助となるだろう。大学生による模擬授業もおもしろい企画であったが、双方向ということを考えた時、（学生と高校教員が）小グループに分かれて授業案などをつくるワークショップなどをすると、多くの人が発言できて、学生も多くのことを学び、高校教員側も高校の歴史教育に対する本音の意見などが聞けて、よいかもしれないと思いました。

◇女性史やジェンダーの問題は、現代社会の投げ込み教材としては利用する様には努力していますが、歴史の授業の中では、やはり些末な事象に追われて、受験を気にしたものとなっています。今日の議論、非常に参考になりました。

◇大学、高校、学生、それぞれの立場で参加しながら深められていく研究会に、様々な

可能性を感じます。私自身、高校の教員として、この研究会にはじめて参加しました。興味深い取組には人は集まると思います。そういった意味で、今後も研究集会にできるかぎり参加していきたいと思える時間でした。ありがとうございました。

◇女性史というテーマであれば、模擬授業の「産業革命」に女性は登場しないので、少々テーマがぼけていると思う。できれば、女性の登場する単元の方が良かった。テーマが2つあったような気がした。(産業革命と女性史と) 学生さんが熱心で良かった。模擬授業は熱意が伝わって良かったが、時間配分に難があった。

◇新しい切り口があって面白かった。多くの要素を盛り込んでいたので精選した方が良い。教員の研修として、出張講義、討論を企画してはどうか。双方のメリットがあると思います。

◇実際に大学生、教員 (高校)、大学教員とそれぞれの立場から意見を聞くことは、多忙な教員生活に追われている中、考える視野が狭くなってきていることに気づきました。話では聞くうわさと、実際の意見では、受け取り方が実感がともない、次に活かしやすいです。一方的な講義よりも考えも視野も広まり、大変有意義な時間となった。

Ⅳ まとめ

大阪大学の第4回全国高校歴史教育研究会の大会初日に高校教員全員は「歴史学と歴史教育の連携の取組の成果と今後の課題に関する無記名アンケート」に回答した。それは大阪大学の事業だけではなく勤務校 (県)、所属の各種研究会の取組も含めたもので、アンケート結果は全て会場に掲示された。

筆者は高校教員の様々な取組やその成果や課題の概要を知ることができたが、それを数項目に分類し、高大連携の取組に対して「高校側で何をすべきなのか、何ができるか」と言及している回答に注目した。しかし、回答のサンプル数が残念ながら少なかった。大学側にこの事業の継続を強く求めるものが圧倒的ではあるが、高校側から「情報」を発信する環境が整っていないとする高校教員の苛立ち、または「受講生」意識を払拭することができず、新しい歴史学と歴史教育の創造に自らが主体的に参画するという「当事者」意識を持つことができにくい高校教員の限界を代弁しているのではないか。

ただ、大阪大学の全国高校歴史教育研究会に参加した高校教員が独自のネットワークを

築き、都道府県教育委員会の指導の下で自主的な研究会を立ち上げた例も紹介され、単なる一過性の「出前授業」ではなく長期的な視点に立った［若手研究者による高校現場での「学習指導」］などの取組も提案されていた（教員免許の取得の問題はあるが）。

都道府県教育委員会は各都道府県の初等・中等教育に関わる教員等の教職経験年数に応じた体系的な研修を実施している。「高大連携」を考える際には大学と高校現場との連携にとどまらず、公立学校の場合には、広い視野から教員採用と研修に主たる責務を負う教育行政（都道府県教育委員会等）との相互の連携という視点も不可欠であろう。

初等・中等教育に関わる教員の資質向上については教職大学院の開設やいわゆる教員養成大学・学部等で申請している「教員養成GP」に見ることができる。教員の資質向上と「授業力」向上を目指すこの取組は非常に意義深く、大いに注目しているところである。しかし、資質向上を目指す各校教員と教員養成学部・大学院等との「送受信」にとどまりがちになる場合もあるかもしれない。

広い視野から今日的な教育課題に応え、諸法令や学習指導要領の趣旨をふまえて、実践的指導力を身につけた高校地理歴史科教員を育成するには、歴史学と歴史教育の接続に資するリカレント教育の機能の一層の拡充が必要であり、次年度以降も大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」全国高校歴史教育研究会の継続を強く求めるところである。

さて、教育という営みにおける教師の役割の重要さを述べた「教育は人なり」という名言がある。過去4回にわたる大阪大学歴史教育研究会で培った最大の財産は43都道府県約260名の参加者という「人」そして人と人とを結ぶネットワークに他ならない。高校と大学の円滑な接続を図るためには「人」の共働は欠かせない。高校教員には各都道府県での教科研究会や各高校現場での「伝導者」としての役割が求められよう。

「特色ある学校づくり」には教員一人一人がそれぞれの役割（校務分掌）や自らの果たすべき責務を自覚し、校長を主導とした学校運営に積極的に、「当事者」意識を持ち、「参画」することが求められている。今後も、自らの資質の向上を目指し、「受講者意識」を払拭し、「当事者意識」に変容させる試みを模索したい。

［ほりえよしあき・京都府立加悦谷高等学校教諭］

高校生と考える8世紀の東アジア世界
—世界史教材としての『続日本紀』—

笹川裕史

1. はじめに

2003年、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」の「シルクロードと世界史」班によって、全国高等学校世界史教員研修会が開催された。研修会に参加した筆者は、中国の歴史を「ユーラシア」という枠組からとらえる視点に大きな魅力を感じた。ただし当初は、授業全体の構成を改変するにはいたらず、「ソグド人はシルクロードの交易だけでなく、唐国内の商業活動でも大きな役割を果たしていた」「古代より大陸との交易拠点だった博多に中国人商人が居住していたことが、元が博多を攻撃した一因かもしれない」などの新しい知見を紹介するにとどまっていた。

2004年、大阪府高等学校社会（地歴・公民）科研究会の教育情報共有化プロジェクトは、文部科学省の平成16年度教育情報共有化促進モデル事業の指定をうけた。その取り組みの一環として、筆者はデジタル教材を開発し、実践的な授業を行なうことになった。そこで遣唐使を主題とし、その役割や実態を多角的に考察させようと考えた。具体的には、753年の大伴古麻呂の新羅使との争長事件を紹介し、東アジア世界全体の中で遣唐使の意味を生徒に理解させる試みであった[*1]。

「遣唐使——東アジアの中で考える」と題した研究授業の準備をすすめていくなかで、筆者は二つのことに気がついた。一つめは、7～9世紀の日本外交の主役とみなされてきた遣唐使の派遣数が意外に少なく、遣新羅使や遣渤海使と比較し“相対化”する必要があ

1———大阪府高等学校社会（地歴・公民）科研究会HP内の、共有化事業報告のページhttp://www.oh-syaken.com/edu_share/を参照。またこのときの研究授業の報告としては「世界史教材としての遣唐使」（『研究集録』第47集、大阪教育大学附属天王寺中・高等学校、2005年）を参照。

ること。二つめは、8世紀の東アジア世界と日本との関わりを生徒に考察させるうえで、『続日本紀』の記事が格好の教材となることである。

本稿では、『続日本紀』を用いた二つの授業実践と一つの教材案を報告し、8世紀の東アジア世界（さらには中央ユーラシア）と“遭遇”した高校生の反応を紹介する。

2.「東アジア世界」から「ユーラシア」へ

教育情報共有化プロジェクトに関わるまで、筆者は、隋唐時代の授業には5時間を配当していた。まず「東アジア世界の中での隋唐帝国」という主題にもとづく指導計画を示し、一連の授業を通じてとくに留意してきた三つの点を簡単に紹介しておく。

第1次	隋　拓跋国家としての隋唐帝国　～　隋の統一政策	1時間
第2次	唐代前半　建国　～　律令体制　～　則天武后の政治	1時間
第3次	唐代後半　玄宗の政治　～　安史の乱　～　黄巣の乱	1時間
第4次	唐代の文化と宗教	1時間
第5次	7～9世紀の東アジア諸国	1時間

①拓跋国家について

北魏以降、東魏・北斉、西魏・北周、そして隋・唐と交代していった王朝は、鮮卑系拓跋部、とくに関隴集団が支配層の中核を形成していた。すなわち隋・唐が北方遊牧民族の流れをくむ王朝であったと生徒には強調する。そう説明すると、北魏に始まる均田制や西魏からの府兵制が隋・唐に引き継がれたことを、生徒はすんなりと納得するようである。

隋・唐は鮮卑系の拓跋国家だったとはいえ、漢人社会に同化しながら中国を支配した浸透王朝であり、後の遼・金・元・清のような征服王朝とは異なっていた。もっとも、それがうわべだけの漢化であったがゆえに、“中華の儒教観”からは考えられない出来事をいくつか引き起こしている。

一つの例が、唐の太宗が受けた天可汗という称号である。東突厥が崩壊した630年、その配下にあった諸民族が、天可汗の称号を太宗に奉ったことで、中国の皇帝（天子）が遊牧世界の支配者ともなった。この出来事を説明する際に、筆者は次のようなコメントをし

ている。「“生粋の”中華の皇帝であれば、天可汗の称号を“北狄”から受けとらなかっただろう。理念上、世界のすべてを支配する皇帝が、他人から称号を与えられることなどあり得ないからだ。ところが唐の皇室が北方遊牧民族の出であったために、中央ユーラシア最高の称号を大喜びで受けとった。お里が知れるわけです」。

他の例としては、則天武后の経歴があげられる。武照は14歳で太宗の後宮に入った。27歳のときに太宗が没すると、彼女は高宗に近づき、今度はその後宮に迎えられた。実母ではないが、父の妻だった女性を息子が妻とすることは儒教的倫理からは考えられない。しかし司馬遷の『史記』に記されているように、匈奴をはじめとする北方遊牧民族の世界では、それは決してタブーではなかった。

②女性について

唐代の女性といえば、則天武后と楊貴妃が有名である。前者は「牝鶏司晨」、後者は「美人傾国」として、ともに政治を混乱させた人物というイメージが世間では定着している。しかし男尊女卑に基づいた評価をそのまま授業で繰り返すことは避けたい。

690年に権力を握った則天武后は、自らの権力基盤を固めるために科挙を重視した。関隴系・山東系などの門閥貴族が、身言書判にもとづく官僚人事を行なっていた時代に、皇帝に忠実で才能のある人材を登用するためであった。隋代に始まった科挙が実際に機能しだしたのは、これ以降とされている。そして“圀”などの則天文字を紹介する際には「うっかり“國”と書いた役人は、すぐ左遷だったでしょうね」と言うことにしている。

楊貴妃と玄宗から、白居易の「長恨歌」を連想する生徒は、いまではほとんどいない。そこで楊貴妃を“世界三大美人”の一人として紹介することになる。授業では、唐代の美人はかなりふくよかで、頬が真っ赤になるほど紅をさすのが流行だったと説明する。美の基準が、時代や社会によって異なることを知るのは重要である。また玄宗が政治を軽んじた原因を、楊貴妃に帰すような文言がしばしば見られるが、筆者は「西周の幽王と同じように、失政の責任は政治家本人にある」と強調している。

和蕃公主についても少し述べておきたい。漢代以降、数多くの女性が周辺異民族のもとに嫁いでいった。それが政略結婚であることは言うまでもないが、公主たちを悲劇的な女性と一方的に決めつけるのは誤りとなろう。漢代の王昭君が実際には呼韓邪単于の夫人として幸せに暮らしたこと、あるいはソンツェン＝ガンポのもとに嫁いだ文成公主が唐と吐蕃の友好につとめたことなどは、ぜひ指摘しておきたい。また和蕃公主の大半が仮制公主

であったが、唐代後半にウイグルに嫁いだ三人は、皇帝の実の娘（真制公主）であったことは重要である。当時のウイグルの強勢が理解できよう。

③文化について

唐代の文化と宗教の特色は国際性である。その一因として、支配層が、漢文化や儒教の伝統に固執せず、異文化に寛容だったことが指摘できる。筆者は、ときおり娯楽に焦点をあてて唐文化の国際性に言及している。ここでは三つの事例を紹介したい。

ポロというと、イギリス貴族のスポーツと思われている。しかし、それは本来ペルシア起源で、イギリス人がインドを植民地化していく過程で、現地人より受け入れたものである。イギリスより1000年以上も前に、ポロ（打毬）が唐代の貴族の中で流行していた様子は、「打毬図（章懐太子墓の壁画）」に見られる。

琴棋書画は、唐代貴族の教養であった。「棋とは何？」と尋ねると、ほとんどの生徒は「将棋」と答える。そこで「棋とは囲碁です。高校では芸術科目として音楽・書道・美術があるのに、囲碁がない。だから皆さんは教養が足りない……」と笑いを誘う。皇太子時代の玄宗が留学僧の弁正と碁を打った記録をはじめ、日中間での囲碁交流の歴史は古い。大陸伝来の木画紫檀棊局（正倉院宝物）は聖武天皇愛用の碁盤として有名である。また西域のトルファン・アスターナ古墓からも、小型の棊局が出土している。各地で“土着化”していった将棋（象戯）と異なり、囲碁は東アジア世界共通のゲームであった。そしていまなおコンピュータが人間に勝てない唯一の盤上ゲームが囲碁である。

「漢文・唐詩・宋詞・元曲」といわれる。李白や杜甫などの代表的な詩人を紹介するとともに、科挙の受験科目に詩賦があったことを、詩が発展した背景としておさえておきたい。また東アジア世界は漢字文化圏といわれるが、それはたんに漢字が通用する地域という意味ではなかった。上流階層で漢籍・漢文学の学習が基本的な教養とされていた点を生徒には理解させたい。長安では、周辺諸国から来た使節たちが、宮中での饗宴の際には詩を作り、互いの心情を披露しつつ文才を競い合った。そういった詩の応酬は、日本の奈良や京の都でも、新羅使や渤海使と宮廷貴族との間で行なわれていたのである。

中央ユーラシアと関連させながら、隋唐時代の東アジア世界の歴史を示すために、前述した指導計画を次のように変更する。主題は「ユーラシアの中での隋唐帝国」とし、6時間を配当した。

第1次	隋　拓跋国家としての隋唐帝国　～　隋の統一政策	1時間
第2次	唐代前半　建国　～　律令体制　～　則天武后の政治	1時間
第3次	7～9世紀の東アジア諸国	1時間
第4次	唐代後半　玄宗の政治　～　安史の乱　～　黄巣の乱	1時間
第5次	唐代の文化と宗教	1時間
第6次	遣唐使――東アジアの中で考える	1時間

今回は、第3次の授業で唐の周辺地域の動向を扱い、第4次に唐代後半を割り当てることにした。単元のまとめとなる第6次は、前述した教育情報共有化プロジェクトの一環として2004年に開発した授業の改訂版である。

第2次・第4次・第6次の三回の授業で『続日本紀』を教材として用いる[*2]。日本の東アジア外交の具体的な事例を生徒に示すことで、中国を中心とした「単眼的視角」ではなく、「複眼的視角」から東アジア世界の歴史を理解させることが期待できる。

以下の三つの節では、第2次・第6次の授業実践と第4次の教材案を示していく。

3. 授業実践「“遣唐使”とならなかった遣唐使」

本節では、第2次の授業の後半部を「“遣唐使”とならなかった遣唐使」と題して報告する。授業の前半30分で、唐の建国から則天武后までの時代を手際よく説明した後、702年に遣唐使として渡航した粟田真人の記事（慶雲元年七月甲申条）を提示する。

初め唐（もろこし）に至りし時、人有り、来りて問ひて曰はく、
「何処（いづく）の使人（つかひひと）ぞ」といふ。答へて曰はく、「[a　]国の使なり」といふ。
我が使、反（かへ）りて問ひて曰はく、

2――今回は、教材の底本として『続日本紀』（「新日本古典文学大系」岩波書店）を用い、引用した書き下し文には、さまざまな変更を加えた。場合によっては、宇治谷孟による全現代語訳『続日本紀』（講談社学術文庫）を使用するのも有効であろう。

「此は是れ何の州の界ぞ」といふ。

答へて曰はく、「是は大[b]楚州塩城県の界なり」といふ。

①更に問はく、「先には是れ大唐、今は大[b]と称く。

国号、何に縁りてか改め称くる」ととふ。

答へて曰はく、「永淳二年、②天皇太帝崩じたまひき。③皇太后位に登り、

称を④聖神皇帝と号ひ、国を大[b]と号けり」といふ。

問答略了りて、唐の人我が使に謂ひて曰はく、

「亟聞かく、『海の東に大倭国有り。

これを君子国と謂ふ。人民豊楽にして礼儀敦く行はる』ときく。

今⑤使人を看るに、儀容大だ浄し。豈信ならずや」といふ。

授業者が簡単な説明を加えながら読み上げた後、以下のように授業を進める。

空欄aに関して。「遣唐使の粟田真人は、どの国からの使と言ったのだろう。素直に考えて」と訊く。大半の生徒は、当然のことのように「日本」と返答する。そこで「前漢の時代より、ながらく倭と呼ばれてきた国が、日本という独自の国号を使いだしたことを、中国側が初めて認識したのがこの遣唐使の時であった」と説明する。

空欄bに関して。「空欄bは三か所あるけれども、何という国名が入るだろうか」と質問する。さすがに則天武后の説明をした直後なので、ほとんどの生徒は「周」と答える。筆者は「数多く派遣された遣唐使のなかで、この702年だけは、結果として遣周使となってしまった」と言う。このようなユーモアも、時には必要である。

波線①に関して。「唐が周にかわったことを日本が知らなかったのは、なぜだろう」と尋ねる。返答に戸惑う生徒も少なくない。そこで「則天武后が実権を握って、国号を周と変えた時期は690年から705年まで。ということは、690年以降、日本からは遣唐使が派遣されて……？」と補足し、「いなかった」という返答を誘導する。

［表1］の年表を示し、概説をする[*3]。遣唐使の回数は、研究者によって異なるが、いちおう20回とした。左側の年号が任命または派遣された年である（年号：名目は送唐客使。年号：派遣されなかった遣唐使）。遣唐使の派遣が集中した669年までの時期と、702

3――表1の遣唐使の任命／派遣年は、東野治之『遣唐使船　東アジアのなかで』（朝日選書、1999年）pp.28～29と古瀬奈津子『遣唐使の見た中国』（吉川弘文館、2003年）pp.4～6を参照して作成した。

年以降の断続的な時期があることを、生徒に気づかせる。いうまでもなく東アジア世界の国際情勢や日本の国内状況が、遣唐使の派遣を左右していた。

前者の例が、669年の遣唐使である。これは668年の高句麗“平定”を賀す使節であり、白村江の海戦で悪化していた唐との関係を修復するものであった。白村江の海戦の後、唐が日本に侵攻しなかった理由を知りたがる生徒が多いので、関連させて説明しておく。

後者の例として、壬申の乱後の日本国内の急激な改革期（天武・持統朝）には、遣唐使が派遣されていないことを指摘する。まさにこの空白期の後半と、唐における則天武后の治世が重なるのである。

永淳二年が683年であると述べた後、波線②および波線③に関して、「誰のことか」と質問する。返答の大半は、「高宗」と「則天武后」である。

波線④に関して。「誰のことか」という質問に対し、「則天武后」という答が返ってくる。そこで次のようなコメントをする。「教科書をはじめ一般には、彼女を則天武后と呼んでいる。しかし、清末の西太后と異なり、彼女は皇太后のまま政治をしたのではない。したがって正式には聖神皇帝、または則天皇帝と呼ぶ方が正しいと思う」。

波線⑤に関して。粟田真人をはじめとする遣唐使たちの容姿が立派であることに、中国の役人が感心していることを確認させる。そして当時の日本の朝廷が、派遣した外交使節が東夷の蕃人と侮られないように、体格や容姿の優れた者を遣唐使として選んでいたことを説明する（後にある女子生徒が「遣唐使って、イケメンばっかりだったのですね？」と訊いてきたのには破顔一笑した）。

授業に関する生徒の反応は、さまざまである。たとえば「遣唐使は、毎年派遣された／1回だけ派遣されたと思っていた」という感想が意外に多いことから、遣唐使の派遣回数に無頓着であった生徒が少なくないことに気づかされる。また「外交って、内政の状況と深く関連していることに、あらためて気づきました」といった感想もあった。

4. 教材提案「安史の乱——ユーラシアの中で考える」

第4次の授業の中心となるのは安史の乱である。本節では紙数の都合もあり、全体の授業案ではなく、安史の乱に関する『続日本紀』の記事を教材化した部分を提示する。

授業は【導入・展開1】として、開元の治（節度使の設置・募兵制への切り替え）からタ

ラス河畔の戦いまでを扱う（14分）。ついで【展開2】で、安史の乱をとりあげる（20分）。最後に【展開3・整理】で、両税法の実施・黄巣の乱を紹介しつつ、安史の乱によって唐が前半とはまったく異なる性格の国家となったことを整理・確認させる（16分）。

【展開2】『続日本紀』の記述をもとに、安史の乱を説明する（20分）

発問　安史の乱の原因を簡潔に説明した後、「ところで、安禄山の本名は何だと思うか」

→おそらく誰も答えられない。「安」がソグド人の漢姓で、「禄山」はソグド語のロクシャン（光）の音をとったと思われること、また史思明の「史」もソグド人の漢姓であることを告げる。唐代が、非漢人が活躍することに寛容な社会であった点を指摘しておく。

→ソグド人について説明する。一般には、シルクロードの隊商交易で活躍した商人というイメージが強い。しかし実際には、唐の国内各地にも彼らは商業拠点を有し、辺境の軍事防衛ラインに様々な物資を供給していた。安禄山は、こういったソグド人の交易ネットワークを掌握していたために、その反乱はきわめて深刻となった。

発問　「安史の乱の情報は、いつ・どのような経路で日本に伝わったのか」

→生徒の半数は「遣唐使」と答えるであろう。

→正解は、遣渤海使である。［表2］を示し、当時の日本が、新羅や渤海とは唐以上に通交し、海外情報を得るチャンネルを複数持っていたことを理解させる[*4]。

→698年に建国された渤海は、新羅との対抗上、当初は国防の観点から、後には交易の面で日本との通交を非常に重視していた。日本も、渤海使がもたらす大量の毛皮（貂・虎・羆）を珍重していた。なお第9回渤海使として来日し、交易に敏腕をふるった史都蒙が、その姓から判断して、ソグド人であった可能性を指摘しておく。

→758年の遣渤海使の小野田守の帰朝報告（天平宝字二年十二月戊申条）を提示する。

> 戊申、遣渤海使小野朝臣（あそん）田守ら、唐国（もろこし）の消息を奏して曰はく、
> 「①天宝十四載歳（ほしきのとひつじ）乙未（きのとひつじ）に次（やど）る十一月九日に、御史大夫兼范陽節度使安禄山反（そむ）きて、兵を挙げ乱を作（な）し、②自ら大燕聖武皇帝（せいぶ）と称（なの）る。［略］

4――表2の新羅使と遣新羅使の回数は、『続日本紀』一（岩波書店、前掲書）のpp. 462～464の新羅使表および遣新羅使表を参照した。また渤海使と遣渤海使の回数は、上田雄『渤海国』（講談社学術文庫、2004年）pp. 88～89・91の渤海使来日記録表および送・遣渤海使発遣記録表を参照した。

③至徳元載とす。己卯、④天子益州に至る。［略］

至徳三載四月、王玄志、将軍王進義を遣して来りて渤海に聘し、且つ国故を通して曰はく、「⑤天子西京に帰り、太上天皇を蜀に迎へて、別宮に居らしめ、殄く賊徒を滅さむとす。⑥故に下臣を遣して、来りて命を告げしむ」といふ。［略］」とまうす。

授業者が簡単な説明を加えながら読み上げた後、以下のように授業を進める。

発問 「波線①は何年のことか」

→生徒は、年表を見ながら、755年と答えるだろう。日本に安史の乱の情報が伝わったのが、反乱勃発の3年後であったことを確認させる。

→波線②に関して。安禄山が、唐にかわる王朝を開く意図であったことを確認させる。

→波線③に関して。756年であることを告げる。

→波線④に関して。玄宗が蜀の成都に都落ち（蒙塵）したことを告げる。なお新羅使や渤海使は、玄宗の滞在する成都にまで足を運んでおり、唐との関係が日本よりもはるかに深かったことを補足する。

→波線⑤に関して。西京とは長安のことで、粛宗（天子）が長安に戻り、蜀に玄宗（太上天皇）を迎えにいったことを告げる。

発問 「波線⑥の内容は何か」

→唐が、渤海に対し、反乱討伐への協力を求めていることを理解させる。

発問 「安史の乱に対して、日本の朝廷はどのような対応をしたのだろうか」

→生徒たちは返答に迷うかもしれない。「何もしなかった・国防を固めた・唐に援軍を送ろうとした・その他」などの選択肢を示すのも有効だと思われる。

→実際の経過は、次の通りである。

是に、大宰府に勅して曰はく、

「安禄山は是れ狂胡の狡竪なり。天に違きて逆を起す。事必ず利あらじ。⑦疑はくは、是れ西することを計ること能はずして、還りて更に海東を掠めむことを。［略］

⑧預め奇謀を設け、縦使ひ来らずとも、儲備悔ゆること無からしむべし。その謀れる上策と、備ふべき雑事とは、一一具に録して報せ来れ」とのたまふ。

→波線⑦・⑧に関して。安禄山が反乱の拠点を東方に移す危険性を憂慮し、大宰府に厳重

な警備警戒を命じたことを理解させる。

→さらに、当時の朝廷の権力者であった藤原仲麻呂（恵美押勝）の動向にも言及したい。仲麻呂は、安史の乱で混乱している唐には新羅を援助する余裕がないと判断し、（渤海と共謀した）新羅遠征の準備を命じている。ところが762年、唐が、安史の乱制圧への協力を期して、渤海の待遇を改善した。渤海郡王から渤海国王に昇格させ、新羅王と同等の官位を授与したのである。渤海は対唐関係の好転をみて新羅遠征を辞した。また日本でも、仲麻呂の政権が動揺しはじめ、この遠征は中止されたのである。

→安史の乱に乗じて、吐蕃が長安を一時的に占拠し、その後は甘粛地方を支配するようになったことを告げる。

→反乱の鎮圧には、ウイグルが大きな役割を果たしたことを説明する。ウイグルは、唐と反乱軍とを天秤にかけ、最終的には唐の側について利益をはかったのである。また唐には、大食（アラビア）の軍が支援していたことも補足しておく。

→反乱後、唐の内地にも節度使が設置されたことを告げる。やがてそれらが藩鎮（地方軍閥）となり、唐という国家が藩鎮の集合体となっていったと説明する。

以上、【展開2】では、日本の動向も含め、ユーラシアの東西を広く視野におさめることで、安史の乱の「内乱」におさまらない、「国際戦争」としての側面を強調したい。

5. 授業報告「遣唐使——東アジアの中で考える」

遣唐使に関しては、唐からの先進的な政治制度や国際的な文化をもちかえった外交使節というイメージがつよい。そこで第6次の授業では、遣唐使を迎え入れた唐側の状況にも留意して、8世紀半ばの日本の東アジア外交を考察させてみた。

【導入】　遣唐使についての基本的知識を確認する（3分）

最初に「遣唐使とはどういうものなのか」と尋ねる。多くの生徒は「すぐれた文化を学び、貴重な物品を得るために派遣された」と答える。そこで「遣唐使は長安滞在中に外交官として、唐の人と、あるいは唐に来ている外国の人びとと、さまざまな交渉をしている」ことを指摘する。そして「遣唐使を、唐と日本という二つの国の関係だけでとらえる

のではなく、東アジア全体の中で考えてみよう」と、授業の目標を示す。

【展開1】『続日本紀』の753年の争長事件を紹介し、解説する（13分）

生徒に『続日本紀』が、六国史と総称される日本の正史の二番目であることを告げる。正史とは“正しい歴史”ではなく“政府の公的記録”の意味であり、政府にとって不都合な出来事の記録が時には改変されていることを、遣隋使の例をあげて再確認させる。ついで753年の争長事件の記事（天平勝宝六年正月丙寅条）を紹介する。その際、『続日本紀』は漢文であり、授業では「書き下し文」を用いるが、当時の漢字文化圏において、正式な文書は漢文で記すことが常識であったと指摘しておく。

①大唐天宝十二載［略］正月の朔癸卯、②百官・諸蕃朝賀す。
③天子、蓬莱宮含元殿に朝を受く。是の日、
④我を以て西畔第二　吐蕃の下に次ぎ、新羅使を以て東畔第一　大食国の上に次ぐ。
⑤古麿論ひて曰はく、「古より今に至るまで、新羅の日本国に朝貢すること久し。而るに今、東畔の上に列し、我反りてその下に在り。義、得べからず」といふ。

授業者が読み上げながら簡単な説明を加えていく。波線①は、753年。波線②は、内臣と外臣（朝貢使）のことで、朝賀の儀式に内外の家臣が参列していることを説明する。唐がもっとも盛んであった時代には、ビザンツ帝国をふくむ、70以上の国ぐにから使節が来ていた。「賓客図（章懐太子墓の壁画）」を見せるのも有効である。

波線③に関して。「天子とは誰か」と質問すると、生徒は年表を見ながら玄宗と答える。

波線④に関して。朝賀の儀式では、大相撲の番付みたいに東西の序列（蕃望）が決まっていた。「西の1位が吐蕃、2位が日本。東の1位が新羅で、2位が大食」であることを生徒に確認させる。当時は、吐蕃が強大であったことを強調する。また大食とはイスラーム国のことで、ウマイヤ朝と交代したばかりのアッバース朝であることも確認しておく。

波線⑤に関して。大伴古麻呂の抗議の内容を生徒に訊くと、大半の者は「日本に朝貢している新羅の席次が、日本より上位なのは変だ」と返答する。そこで生徒に問いかける。「朝賀の儀式の責任者は、日本の異議申し立てを受けて、席次を変更したのだろうか」。

【展開2】遣唐使の実態について説明する（12分）

7世紀末を境にして、それ以前の遣唐使船は海難事故が少なく、以後は多発している。生徒に理由を尋ねると「経済的に苦しくなり、船が粗末になった」といった答が返ってき

たりする。前半の遣唐使船は、朝鮮半島沿いに行く北路をとったので、嵐やトラブルの際には入り江に避難できた。ところが後半は、東シナ海を横断する南路であった。距離は短いが、激しい海流や季節風の関係で事故が多くなった。この航路変更は、新羅と日本との関係悪化が原因だった（遣唐使船の航路を図示するとよい）。また一回に出発する船数が、前半の2隻から後半は4隻となった結果、難破船も増えた。

遣唐使船は、およそ幅9m×長さ25mで、約80人の定員のところに120人は乗っていた。船体の構造を無視して、多くの人間や物品を載せたために、海難事故の危険性が高くなったことも指摘する。なお後日「船が一隻沈むと、100人以上の遣唐使が亡くなるのですね」と言う生徒がいた。いわゆる遣唐使は数名に過ぎず、使節団のほぼ半数が船員で、あとは下級役人や留学者（僧侶や技術者を含む）である。こちらから言及しないと、生徒には、使節団の構成員にまで考えが及ばないことを認識した。

南路をとった遣唐使船は、9月後半から10月に出発した。冬の季節風が吹き始め、海が荒れる時期に出発した理由は何であろうか。遣唐使の大切な使命の一つが、朝賀の儀式への参列であった。ところで使節派遣の際、日本が費用を負担するのは大陸到着までで、その後の遣唐使の滞在費・交通費等はすべて唐が負担した。唐は、出費を抑える目的で遣唐使の派遣時期を指定し、それに応じて、あえて危険な10月に出発したのであった。

次に、長安の地図を示し、都の北部にあった宮城で皇帝が生活し、さまざまな政務が行なわれていたことを確認する。ただし玄宗の頃は、宮城の北東部にあった大明宮で政務が行なわれていた。この大明宮の中央部に、朝賀の儀式が行なわれる含元殿があった。含元殿は東西100mをこえる大きな建物であった（復元想像図を示す）。

さらに朝賀の儀式のときの配置図を示し、解説をする。皇帝ただ一人が太極殿に座し、南を向いていること（天子南面）。中央部右側の先頭に皇太子が着座し、その左側に「介公と酅公」が座っている（拓跋国家として、北周と隋の帝室の子孫も皇太子と同列に扱われていた）ことなど。朝貢使は、序列によって着座の位置が異なっていた。皇帝と正面で対面できる“諸方客三等以上”と、横向きの“諸方客四等以下”とに区別されていたのである。日本は西の2位だったので、皇帝とは正面で対面できたが、最前列に着座できなかったことを強調しておく。

【整理】 遣唐使の意義を確認する（9分）

まず唐の遣唐使観を説明する。唐は、日本を東の果ての国、絶域と認識していた。このような絶域の国が朝貢に来ることを、中国側は好ましく思っていた。朝賀の儀式の際に、

皇帝の徳をしたって、海のかなたから使節が来たと強調できたからである。ところが日本も、遣隋使以来の方針で、唐とは対等でありたいと考えていた。その結果、日本は、冊封は受けないが朝貢は許される「不臣の朝貢国」となった。そして日本の遣唐使は約20年に一回とされた。ちなみに冊封国であった新羅と渤海は、唐に毎年朝貢使を派遣していたことを再確認し、日本との対比を明確にしておく。

次に日本の遣唐使派遣の目的を三点に分けて整理する。まず外交面。東アジアの大国であった唐との友好は最重要課題であった。さらに唐および東アジア各国の、さまざまな情報の入手も重要であった。なお［表2］を参照させ、日本の朝廷が、遣新羅使や遣渤海使も派遣しており、しかもその回数が遣唐使よりも多く、新羅や渤海経由の海外情報も日本には貴重であったことを再確認しておく。二つめは、文化面。日本が（道先仏後の唐から取捨選択して）仏教文化を、そして政治文化としての律令制度を導入していたことを指摘しておく。三つめは、交易面。当時、民間の貿易はほとんどなく、朝貢貿易による巨額の利益（回賜）を朝廷が独占した。これらが遣唐使派遣の大きな目的であった。

当時の朝廷は、国内に向けて、日本は唐と対等であるという、ある種の“情報操作”を行なっていた。新羅と渤海が、日本との国交を維持するために、名目上は日本に朝貢していたことも幸いした。しかし実際には、遣唐使は紛れもなく朝貢使としての任務を果たしていた。遣唐使は、国内向けと国外向けとで、その相貌が異なっていたのである。すなわち、朝廷の外交戦略は、ダブル＝スタンダードであったと指摘する。

【発展】 753年の争長事件について、生徒各自に考えをまとめさせる（13分）

最初の史料にもどる。生徒を、朝賀の儀式の責任者の立場におかせて、古麻呂の異議申し立てをどう処理するか判断させる。すなわち、(A) 異議を認めて日本の席次を変更するか、(B) 申し立てを却下するかである。(A) と (B) の生徒の割合はほぼ等しくなる。

(A) の代表的な理由は「儀式での混乱を避けるために、この場は席次を変更する」「絶域からの使節なので特別待遇を認める」などである。一方 (B) の理由としては「唐に毎年、朝貢している新羅の方を重視する」「席次を変えたら、今度は新羅の異議申し立てで儀式が混乱してしまう」などである。実際の経過は、次の通りである。

時に将軍呉懐実、古麿が肯にせむ色を見知りて、即ち
[a]を引きて西畔第二 [b]の下に次ぎ、[c]を以て東畔第一 [d]の上に次ぐ。

空欄aに新羅、bに吐蕃、cに日本、dに大食が入る。古麻呂の剣幕を見た呉懐実が席次を入れ替え「西の1位を吐蕃、2位を新羅。東の1位を日本、2位を大食」としたことを確認させる。結果を聞いて、半数の生徒は少しどよめく。

次に、この争長事件が、唐や新羅の正史では、どのように記されているか生徒に推測させる。多くは「とんでもないことが起こったと記されている」と述べるが、なかには「書かれていない」という返答もある。もちろん「わからない」と言う生徒も少なくはない。

実際には唐の正史にも、新羅の正史にも、この件に関する記述はない（ちなみに唐代の争長事件は他に3件が知られているが、730年の突厥と突騎施との争い、あるいは758年のウイグルと黒衣大食との争いは『旧唐書』に記されている）。そこで「なぜ記述がないのか」と生徒に問いかける。すると「序列の変更は、本来あり得ないことなので、唐では、それを記録に残すことはなかった」といった答が返ってきたりする。

さてここで、古麻呂の争長事件に関しては、研究者の間でも意見の対立があったことを生徒に伝える。つまり、実際にあった事実だという通説と、『続日本紀』にしか記録がないことから、これは大伴古麻呂の捏造であったという虚構説である。通説に従えば、席次の変更は儀式を混乱させないための臨機応変の措置だった。だから唐は記録を残さなかった。新羅にとっては、屈辱的な事件なので、やはり記録に残さなかったということになる。一方、虚構説に従えば、古麻呂の報告にもとづいて『続日本紀』には記されたが、そのような事件は存在しなかったので、唐と新羅の正史には記録されなかったという説明になる。

さらに、この争長事件に関して、通説と虚構説のどちらを支持するか生徒に選択をさせる（過去の授業では、かなり多くの生徒が虚構説を支持してきた）。そして現時点では、虚構説よりも通説の方が有力であることを告げ、その根拠を簡潔に説明する。最後に、一つの事件を多角的に考察し、その全体像を描くことの重要さを指摘して、授業を終える。

やや煩雑ではあるが、生徒の主な感想を列挙しておく。

◇唐・新羅・日本・渤海の関係がとても複雑だと思った。しかし国防のため、渤海や新羅が日本に朝貢するのは普通に考えられること……

◇唐や朝鮮の国々が朝貢を利用して政治的に駆け引きしているのは、海に囲まれている日本の歴史と比べると、新鮮に思えました。

◇日本が“序列がおかしいから変更しろ”なんて要求を唐にして、しかもそれが認められたのか！と意外に思いましたが（ちょっと信じられなかった）、でっちあげとい

う考え方もあると知って、きっとそうだと思いました。ミステリーの意外な結末って感じです。

◇親戚や外国の人やらの莫大な数の人々が序列によってきちんと並んでいるのを太極殿から見渡す皇帝の気持ちっていかほどのものなのだろう、とだいぶ想像した。

◇年表を見ていても遣唐使が送られた回数は多いように感じるのに、毎年送る国は大変ですね……。でも何より唐の太っ腹が凄いです。PRのためといっても、ぎりぎりに来てくれなんて要求を出していては、ちょっと格が下がる気もしますが。

◇遣唐使の人が大食の人を見た時、どう思ったのだろうかと思うと結構面白い。

◇唐にとっても、日本の遣唐使は、他国へのアピールに都合の良い存在だったんだということを知って少しおどろきました。

6. おわりに

ほんの思いつきから、“日本史の史料”を“世界史の授業”で用いてみたが、意外に大きな可能性を秘めていることを、本稿では、多少なりとも示すことができたと思っている。「遣唐使なんて日本史やのにと思っていたけど、こんなふうに世界のこととしても見られるんだなぁと思うと、ちょっと感動」。このような感想に出会える授業をしていきたい。

今回の『続日本紀』の教材化に際しては、大阪大学の山内晋次先生から貴重なご教示をいただいた。また筆者も参加している「IFの会」では有意義な意見交換の場をもつことができた（「IFの会」とは、COEプログラムの研修会に参加した大阪の教員有志が組織した勉強会である）。ここに記して感謝の意を表したい。

［ささがわひろし・大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎教諭］

［おもな参考文献（註に記したものをのぞく）］

石井正敏『日本渤海関係史の研究』（吉川弘文館、2001年）
王勇『唐から見た遣唐使』（講談社選書メチエ、1998年）
金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』（名著刊行会、2001年）

氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国　隋唐時代』(「中国の歴史」06　講談社、2005年)
佐藤信編『日本と渤海の古代史』(山川出版社、2003年)
杉山正明『疾駆する草原の征服者　遼 西夏 金 元』(「中国の歴史」08　講談社、2005年)
堀敏一『中国通史』(講談社学術文庫、2000年)

［表1］　遣唐使関連年表

630年	
	645年　大化の改新
653年　654年　659年	660年　百済滅亡
665年　667年　669年	663年　白村江の海戦　668年　高句麗滅亡
	672年　壬申の乱
	690～705年　周
702年	701年　大宝律令の制定
717年	710年　平城京遷都
733年	
746年	
752年　759年	755～763年　安史の乱
761年　762年	
777年　779年	
	794年　平安京遷都
804年	
838年	
	842～845年　会昌の廃仏
	875～884年　黄巣の乱
894年	

［表2］　日本と東アジア諸国との間にかわされた使節の回数

年代	日本からの使節			日本への使節		
	遣唐使	遣新羅使	遣渤海使	唐から	新羅から	渤海から
680～		3			7	
690～		2			5	
700～	1	4			4	
710～	1	3			2	
720～		2	1		3	1
730～	1	2			3	1
740～	(1)	2	1		2	
750～	2	2	2		1	3
760～	(2)		3	1	4	1
770～	2	1	3	1	2	5
780～			1			1
790～		(1)	3			2
800～	1	4			1	1
810～			1			4
820～						4
830～	1	1				
840～					1	2
850～						1
860～						1
870～		1				2
880～		1				1
890～	(1)					2

（　）は、任命されたが派遣されなかったもの。
表の中の遣渤海使の回数は、送渤海使を含む。

学びの定着をめざす歴史授業の一考察

松木謙一

1 はじめに

大阪大学では、21世紀COEプログラム＜インターフェイスの人文学＞の一環として4年間にわたり全国高等学校歴史教育研究会が行われてきた。現在、他大学を含めさまざまな高大連携が行われているが、全国的な規模で継続性をもっている点、参加者を高校の教員に限定せず、教育関係者まで拡大している点、その内容が日本史・世界史だけの枠に閉じ込められていない点などで高校の歴史教育界にこれほど大きな影響を与えた企画はないと思われる。その一例として私がこの企画を通じて触発されたことや、具体的に深められたことなどを述べたいと思う。

2 教育現場の歴史学習の現状

高校の教育現場といっても、学校の所在地、学校のタイプ・学年などで異なり、一般化できないが、敢えて自分が感じる現状を述べてみたい。

(1) 落ち着きをなくした現場

教員を取り巻く状況が大きく変化してきている。国そして教育委員会における教育行政が教育改革の名のもとに変わってきているばかりでなく、学校内外の環境が激変しているからである。例えば、学校評議員制度の導入にともなう対外的配慮の拡大、学校内の旧来型分掌改変にともなう横断的業務の拡大、多様な価値観をもつ保護者への対応などにより会議の回数が激増し、観点別評価や授業評価の導入、事務職員の削減にともなう学校事務

業務の教員への移管などが教員の事務的仕事を増大させている。このような仕事量の激増は、いろいろな面で深刻な教員の時間不足を生み出している。生徒に接する時間や教材研究に割く時間が減少し、研究や新しい試みが行われにくい環境になりつつある。その結果、上から与えられた改革に従わざるを得ず、本来の意味での改革になりえていない。

(2) 生徒のニーズは多様と一様、そして地理的知識の欠如

生徒には、多様なニーズがあるとともに、マスコミなどに影響される単純さ・画一性も同居している。さらに、近年、入学時における生徒の基本的知識が低下している。それは、地理的知識の欠如に顕著で、入学時や新しい単元に入る前には基本的な地名を再学習させる必要に迫られている。基本的知識、とりわけ地理的知識を欠く生徒に歴史学習を行うのは膨大な手間と時間がかかるのである。

3 対応策のアラカルト

(1) グッズや導入の工夫

●地図や黒板で使用可能な貼りもの

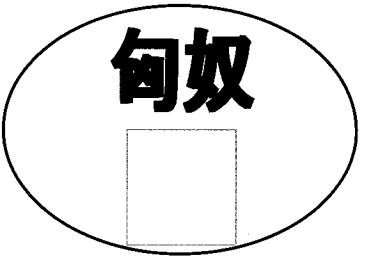
森安教授は、第1回全国高等学校世界史教員研修会 (2003) において、遊牧民、とりわけ遊牧騎馬民族の役割について声を大にして述べられ、前近代における彼らの活動は中国を視座にした歴史像とはまったく異なることを指摘され、教科書記載上の問題点にもふれられた。さっそく、私は、森安教授の指摘内容を取り入れながら授業に取り組んだが、地理的知識がある生徒にも予期せぬ大きなハードルがあった。教科書では、その性格上、地図上に遊牧民の活動領域は示されず、文字でその存在が示される。生徒は、記載された文字の周辺部分を彼らの活動範囲と決めつけてしまうのである。記載の制限が強い教科書とは異なり、わかりやすさを求める図説や資料集では、遊牧民の活動の広さを勢力範囲という形で示している場合が多く、今度は、それが、生徒に彼らの領地であるという認識を与えてしまう。静的に歴史をとらえてきた生徒の習慣は、移動の理解を妨げるのである。また、図説を利用する際、生徒は、開いた頁を見て教師の説明を聞きながら理解する。これも問題で、動きを理解させてから図説を見せた方が良いと感じた。そこで、遊牧民の動きを黒板や地図の上で示すために、マグネットシートにスキャナーで読み込んだペタシート

と名づけたグッズをつくってみた。

［資料1a］［資料1b］は、匈奴の勢力拡大を理解させるために、前者より後者の方を大きくし、前者の上に後者を重ね貼りするものである。文字だけの表現では弱いので、破線の四角の中には匈奴にかかわる図版を取り入れると効果的である。［資料1c］は、遊牧民と彼らの文字を示す一例で、［資料1d］・［資料1e］は建国者名とセットにした例である。［資料1c］のウイグル文字の間には、ウイグル貴族やマニ教徒の絵（『大阪大学21世紀COEプログラム2002・2003年度報告書　シルクロードと世界史』Pl.11, no.19）などを入れて活用した。［資料1e］には矢印のペタシートを使うと動きが示せる。黒板に書くより、貼る方が時間の節約になるだけでなくイメージが広がりやすい。これらは一例で、肖像画、牌符、貨幣、建築物、船の形、国旗などもペタシートにしていろいろな時代や地域に活用すると効果的であった。ただし、図版の著作権、シートの厚みや大きさの調節、さらにコストなど問題が山積している。また、市販の地図では重さや厚みで運搬上使い勝手が悪いので、帝国書院製作の薄い地図にマグネットを貼って活用している。

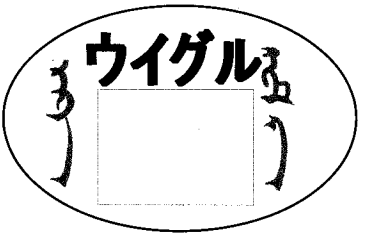
●手作業の活用

全国高等学校歴史教育研究会の講義は坐学に変わりなく、このような形態に慣れているはずの私でも集中力に欠ける時があった（教員は人の話を聞くことに意外と慣れていない）。ちょっとした作業があればリフレッシュできるのにと思い、普段の生徒の気持ちを理解した次第である。そこで考えたのが判子や塗り絵などの手作業で、目新しいものではないが、一授業一体験をモットーとした。［資料2a］は、神聖文字の理解のため、古代エジプト史の授業で生徒に回してノートやプリントに押させた。［資料



［資料1a］

［資料1b］



［資料1c］

［資料1d］

［資料1e］

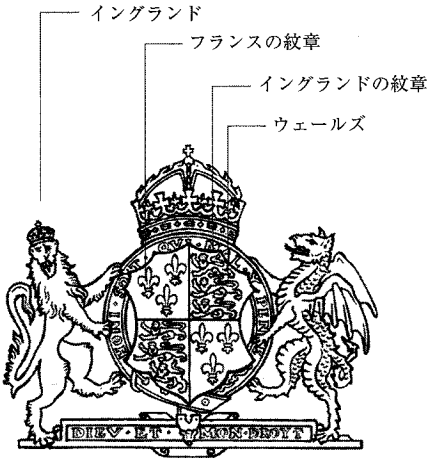
［資料2a］
太陽神を示す文字

2b］の紋章は、生徒に人気があり、手や顔に押して大騒ぎになり、授業への集中に欠ける状況になったこともある。この他、貨幣・肖像画・国旗・建築物・乗り物なども判子にしている。最初は、市販のキットで作っていたが、山川出版社がこの企画にのり、「ノートの友」シリーズのゴム印として世に問うている。［資料3］は川北稔氏がらみのインドのキャラコを授業で扱う際に、サントメや日本の唐桟にからめて導入としたものである。生徒は夢中で作業していた。

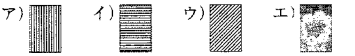
(2) 用語精選や表現の統一の提案

●用語を精選することが必要

桃木教授は、東南アジア史の事項や用語の整理を主張され続けている（例えば第1回全国高等学校世界史教員研修会の「東南アジア史の枠組みを教える方法」）。歴史用語



［資料2b］
エリザベスⅠ世までのイングランド王の公式紋章



【作業1】
左イラストは、美人画の代表作家といわれる鈴木春信の人物像である。江戸時代、センスがいいことを「粋（いき）」とよんでいる。
上のア）縦縞、イ）横縞、ウ）斜め縞、エ）絵模様から、この女性の着物の柄として「粋」と考えられるものを選び、絵に描いてみよう。

［資料3］

については、山川出版社など各社から用語集が出版され、教科書掲載頻度や重要度が示されている。教員や受験生、入試関係者も、教科書掲載頻度の高い用語を受験上役立つとか、役立たないと決める傾向がある。一方、生徒からすれば、用語数の多さから歴史離れをおこしている者もいる。今まで教科書に掲載されている用語が本当に必要なものかどうかについてはほとんど検討されてこなかった。教科書製作では、他社の教科書の用語掲載を参照し、用語集・図説などの用語にも注意を払い、その教科書の目標とする層に向けて用語の落ちがないようにする場合が多い。学習指導要領や学習指導要領解説に、基準となる用語がない以上、仕方ないが、用語に振り回される教科書作りは、学習指導要領の趣旨に反している。教科書が用語集にその用語の根拠をもち、用語集が教科書に根拠をもっているという'循環小数的'な矛盾が生じている。必要な用語は何なのか、どのような方法で精選すべきか検討すべき時期にきたと考える。なお、ここでいう用語の精選とは、必要最小限の用語を示そうとするもので、学校や地域の事情、各教師の授業展開により用語が付加されるのは当然である。それならば現状で良いではないかとする批判もあるが、現在の用語集はすべてを掲載する姿勢であり、一部の受験校を除き消化不良となり、それでは生徒の関心や理解を高めることはできない。

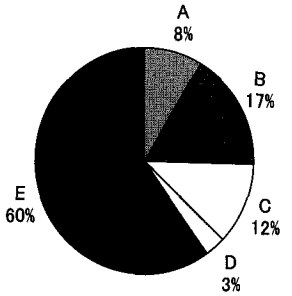
第3回全国高等学校歴史教育研究会（2005）において、用語の精選について自分なりに報告させていただいた。要約して再掲すると、［資料4a］の用語の分類表を作成し、以下の項目について検討した。①テーマごとに掲載されている用語をすべて並べる。②参考までに山川出版などの教科書掲載頻度を載せる。③東南アジア、中央アジア、接触と交流、建築にかかわるというテーマで再度分類する（テーマごとに結果がどれくらい異なるかを調査するため）。④その用語が小・中・高のどの時期で最初に学習するかをチェックする。⑤社会科連携科目に目を向け、その単語が主にどの科目で扱われるかをチェックする。⑥そのテーマにおいて非常に重要と考えられるものに1、重要でないと考えられるものに3、その中間に位置するものに2とする。⑦更に、精選するという視点から再度⑥を行う。⑧⑥と⑦で出した数字を合計し、A～Eに分ける。最重要用語が2（＝1＋1）でA、最も下に位置する用語が6（＝3＋3）でEとする。その結果、重要度については東南アジア（［資料4b］）、中央アジア（［資料4c］）、建築（［資料4d］）のグラフとなり、どのテーマでもEをはずせば5～6割程度の精選は可能となった。

今後、①学会・大学の研究者、高校の教員・部会などで、一定数を精選し、全国から発信する。②教科書会社がたたき台を出して、現場の意見を取り入れながらそれぞれの会社

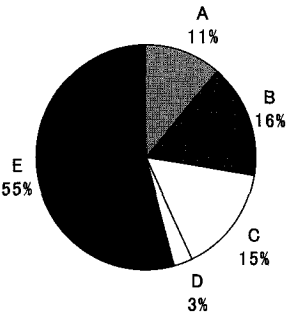
独自の用語選定を行う。この①と②との混交のなかでしだいに使い勝手の良い必要な用語が定着していくと考える。

レベル	① 東南アジアの用語	② 頻度	③ 地域・テーマ	④ 学習時期	⑤ 連携科目	⑥ 重要度	⑦ 精選	⑧ 合計
			1中央アジア 2東南アジア 3接触と交流 4建築 5全体	5小～ 2中～ 3高～	1地理 2公民 3日 4世 5全	1～3	1～3	2～6
E	「17世紀の危機」	6	5	3	4	2	3	5
E	「3世紀の危機」	2	5	3	4	3	3	6
E	「近代世界システム」	4	5	3	4	2	2	4
E	「周辺」	3	5	3	4	2	3	5
E	『大越史記』	1	2	3	4	3	3	6

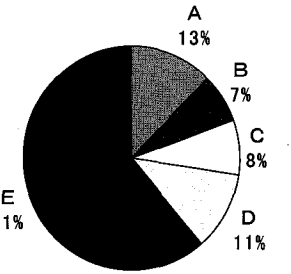
［資料4a］用語分類表（一部）



［資料4b］
東南アジアにおける用語の重要度割合



［資料4c］
中央アジアの用語重要度分類



［資料4d］
建築の用語重要度分類

●人名・地名・事件名の統一表現

教科書・図説・用語集は、出版社（出版物）ごとに人名・地名・事件名などの表現が違う場合がある。現地語や死語を日本語に直す以上、一つだけが正しいとは言えず、学者が表現にこだわることも理解はできる。しかし、義務教育化した高校では、用語の異なる表現につまずく者がいることも事実である。できれば、用語の表現の統一をはかりたい。せめて、「統一表現（著者のこだわる表現）」又は「著者のこだわる表現（統一表現）」という形で示し、その後は括弧なしで表現できるようになれば、使用者側と各出版社の意向とが妥協できると思われる。一出版社だけではその達成は難しく、使用者側の高校教員、大学の研究者側などから声をあげていく必要がある。用語の限定や表現の統一には、国定教科書の作成につながるとする批判がある。しかし、その批判で、歴史用語の増大や異なる表現を放置しておくことは、歴史科目の存続にかかわるデメリットになると思われる。

(3) 他科目・教科との連携（総合化）をはかる

私自身、日本史と世界史との融合を考え、両方を平等に扱いながら、世界史では「～と日本の～」といったタイトルをつくり展開したことがある。日本史・世界史の双方を受験科目とする生徒には好評であったが、大部分の生徒には「混乱する」・「中途半端」と感じられ、見事に失敗した。日本史を担当した時にも挑戦したが、世界史以上にできなかった。あくまで、日本史において外との接点があった時に拾い上げ、日本史を主・世界史を従として扱っただけであった。そのことは教員の専門とするのが世界史か、日本史かで異なってくるが、日本史の立場で世界史を取り込むことと、世界史の立場で日本史を取り込むこととはずいぶん違うと思う。内から外を見るのと、外から内を見る違いなのかもしれない。一人の教員が双方を平等に結びつけて展開するのは荷が重く、アラカルト的な内容の結びつけに終わってしまう。現時点では、世界史は自らの視点で日本史を取り込み、日本史も同様に世界史を取り込んで理解を深め、総合的な学習や補習でテーマ性のあるものを世界史・日本史の双方で連携してみるのが一番落ち着くと考える。それは社会科内の科目だけではなく、美術・音楽・家庭・国語・英語・数学・理科・工業など多くの他教科との連携が可能である。[資料5] は数学との連携でおこなったテーマ学習である。世界史が好きでも数学に関わりたくない生徒には不評であったが、このこと自体に世界史学習の問題点が示されていると思う。

［資料5］　世界史における数学アラカルト

1　指導要領上の位置づけと授業のねらい

(1) 指導要領に基づく位置づけ

指導要領ではその目標に「文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させる」ことを掲げている。この文化の多様性を、「身近なものや日常生活にかかわる主題」の一つとして数字や数学にからむ項目を設定する。

(2) 授業のねらい

数学史や技術史という体系化した学習をはかるのではなく、時代や地域を理解する上でのいろいろな切り口の一つとして数学や数学者にかかわる事項をあげ、理系・文系の壁を乗り越え、生徒に多角的に物事を考える視点を示すことをねらいとしている。

2　授業の内容　　＊世界史の授業中、30分～1時間程度、数学教師に復習・発展授業をしてもらった。

(1) 悪を見破る神の目なるぞ！

ウジャトの目を使い、宗教と数字との関係を理解させる。このウジャトの目は、墓の入り口に描かれていることが多い。それは、なぜなのかという問いから始める。ウジャトの目の示す各パートの和を計算させ、それが1にならない理由を考えさせ、神の存在が介在することを理解させる。

(2) ピラミッドの基準となった単位は腕の長さ？

キュービッドの長さの単位の変遷を理解させ、ピラミッド（クフ王）の辺の長さと数式の変形からある規則性を見つけ出す。帝国書院のタペストリーの解説編にもある。

(3) ヨーロッパの学問はイスラームから伝えられた！

ギリシア・ローマの古典はイスラームで翻訳され、多くの学者を輩出した。数学においても、インドからゼロの概念をとりいれアラビア数字を生み出し、フワーリズミーなどの代数学を発展させた。また、ユークリッドなどのギリシア幾何学を受け入れ、代数学と合わせて、三角法などイスラームの数学は大きく発展する。ヨーロッパはこれを学んだのである。ただし、それもイスラームとの接点にあたる、イベリア半島のコルドバ・トレド、シチリア島においてであった。その後、ルネサンスとして開花する材料は、イスラームからその多くが流れてきたのである。これらを数字や数式などを用いて理解させる。

(4) 複数の顔をもつニュートン、錬金術師、政治家、宗教家、そして陰険！

高校時代に微分記号にy'とdy/dxの2つあるのが不思議であった。前者がニュートンの記号で、後者がライプニッツの記号なのだが、現在では後者がよく使われる。しかし、彼らの生きた時代での勝

者はニュートンであった。ニュートンについては、ケインズが、「最後の魔術師」とネーミングし、従来のニュートン像にメスを入れ、それ以来、万有引力の法則や微積分の発見者という彼の近代人としてのステータスは崩れ続けている。しかし、高校現場では、ニュートンはまだまだ近代科学を開拓した光り輝く偉人として存在している。彼にとっての神の存在の大きさや、学閥のボスとして有為な学者を何人も抹殺してきたことはうかがうこともできない。ニュートンの闇の部分も併せて紹介し、17世紀後半から18世紀初頭のヨーロッパ理解の材料とする。さらに、彼の思想が江戸時代には流入していたことにもふれたい。

(5) 不遇・逆境・差別と闘う、汝の名は数学者！

さまざまな環境にもめげず数学に目覚め、それを貫こうとする数学者たち。しかし、人間関係や家族関係は決して幸福とはいいきれない。彼らの人生を通して、何かに打ち込むとはどのようなことか、理解をはかる。

ア) ガロア　～こんなに才能あるのに短すぎる人生～

ナポレオン没落後の王政復古のなかで、数学の才能をもった一人の男が、コーシーやフーリエに論文を提出しながら、不運にみまわれ、彼の才能は世にでない。父の死をふくめ、世の不合理に彼は憤り、共和制を望むようになる。つまらない理由で決闘にのぞみ　人生を閉じた。決闘前の短い時間のなかで彼が頭に描いたのが群の概念であった。

イ) ハミルトン　～イギリスに虐げられたアイルランドに生まれた第二のニュートン～

イギリスの植民地となったアイルランドから生まれた一人の天才、そして彼の不屈の努力、そして、一人の女性を思い続けた彼の生き方など示唆に富む。彼は光学に数学的な考えを導入し、数学・光学・力学を一体化し、ハミルトンの四元数をうみだした。

ウ) ソーニャ・コワレフスカヤ　～男性中心の社会で輝いた女性数学者～

19世紀のロシア女性で、数学に少女時代から興味をもつ。当時のロシアの状況下、偽装結婚してドイツに向かい、偏微分方程式を研究する。女性の地位が低い時代に、世界初の女性教授となる。ノーベルでさえ言い寄った程の美しい彼女は、社交界の花ともなったが、その激しい人生を41年で閉じた。文学にも造詣が深く、ドフトエフスキーとも交流があった。『罪と罰』のソーニャは彼女にちなんで名付けられたのかもしれない。

エ) シュリニヴァーサ・ラマヌジャン　～カーストにこだわるインドの天才～

19世紀末から20世紀初めの人物。宗教や社会制度にどっぷりと浸かった彼の成長は、西欧の数学とは異なる思考回路をうみだした。素数分布について「ラマヌジャンの予想」や、擬データ関数などの業績があるが、洞察力からでたもので未証明のままのものが多い。32歳で亡くなるまでインドの伝統・宗教にこだわった。

4 日本史と世界史の両方に通じる教材を考える

(1) 日本史と世界史の両方に通じる教材のあり方

初めて世界史を学習する生徒にとり、小・中学校で学んできた日本史と絡めた方が理解しやすい。しかし、3－(3) で述べたように世界史と日本史の両方には軸足をおけないので、世界史主、日本史従という姿勢が必要となる。また、中学校までで歴史嫌いになった生徒には、むやみに年号を使用したり、正確さを重んじるあまり授業内容を複雑化することは避けた方が良い。逆に、大枠だけというのも無理があり、教科書を越えたディテールにまで踏み込んだ方が生徒の理解を得やすい場合もある。さらに、初見の資料は進学校であれば生徒が興味を示しやすい。人物史だと一層理解しやく、新鮮なようである。

(2) 具体的な例

●ジョアン＝ロドリゲスを教材にする

生徒にとって初見資料のジョアン＝ロドリゲスは、イエズス会や明の宮廷とのからみ、天正遣欧使節などと関連させて展開できる。ここでは主題学習として展開したときの教材例（[資料6]）を紹介する。

［資料6］ 主題学習『日本とヨーロッパ』 (1) ジョアン＝ロドリゲス

1. 主題学習『日本とヨーロッパ』(16世紀～17世紀) の指導計画

(1) ジョアン＝ロドリゲス (1時間)

(2) フランソワ＝カロン (1時間)

(3) 鎖国の裏に経済戦争あり (1時間)

2. 本時の目標

16世紀以降、日本はヨーロッパとの接点が生まれるが、イエズス会士の一人、J＝ロドリゲスをとりあげて日本との関わりだけでなく、中国での活動にも目を向ける。

異文化の接点には「ことば」の障壁がある。しかし、J＝ロドリゲスは日本語に堪能であるばかりでなく、日本の文化・社会にも深い造詣があったことを留意させる。

3. 指導案

	学習活動	指導上の留意点
導入	○「徒然草」注に「ロドリゲス日本大文典」とあった。これをもとに、ロドリゲスはどのような人物であったのか、調べていく過程を示しながら謎解きをしていく。	○「徒然草」の第七十四段を使い、最初の三行を訳させる（「生を貪り、利を求めて、止む時なし」を時代の越えた人間の性であることに注意させる） ○注で使われる意味を問う。
展開	○ロドリゲスは1562年にポルトガルの寒村に生まれ、少年時代に東洋に船出、日本でイエズス会に入会した。語学の才があることから会の広報担当的な存在となり、豊臣秀吉にも接するようになった。秀吉の死後、徳川家康に重用され、長崎の商人や役人の恨みをかって1610年に日本を追放された。その後、マカオで日本を追放された原マルチノの助けで、『日本教会史』の編集に従事した。また、マテオ＝リッチと知己となったが、明末の混乱の中で没した。	○生徒に別資料を配布、『ロドリゲス大文典』からIHSの意味を問うたり、当時の発音が現代と違うことに留意させる。例えば「Yononacauo nanini tatoyen, afaboraque Cogui yuqufuneno, atono xiranami.」の歌を平仮名に直したり、意味を問う。 ○原マルチノが天正遣欧使節であったことに留意させる。 ○マテオリッチの業績に留意させる。 ○配布した年表の空欄を埋めさせる。
まとめ	○日本追放後も日本渡航を希望する程のロドリゲスの日本への哀惜。○幕府の通詞・通事の組織化。	＊マイケル＝クーパー著　松本たま訳『通辞ロドリゲス』原書房を参考に作成

4. 評価の視点　【興味・関心】【資料活用の技能・表現】

・人の交流には言語が必要だという観点から、言語に興味・関心をもったかどうか。
・自分のもつさまざまな知識から資料を読み取ったり、作業ができるかどうか。

●フランソワ＝カロンを教材にする（資料6の1（2）にも活用）

［資料7］でフランソワ＝カロンの生涯を概観すると、彼は、一介の料理方の手伝いから、台湾事

件で功をあげ平戸商館長にのしあがる。しかし、幕府のタカ派である井上筑後守が出した平戸商館破却の命令に素早い対応を示し、オランダ追放の口実を幕府に与えなかった。日本語が達者で、日本の慣習を熟知したカロンは、多くの知己をもち、彼らを大事に扱って、多くの贈答品に応じて、目先の利益より大きな利益を得る態度を貫き通した。事態を甘く考えていたポルトガルとは随分違う。セイロン島遠征司令官、台湾長官、バタビア商務総監を歴任して業績をあげたが、彼の激しい性格や、現地人の方を信用して本国人・混血系を軽視する姿勢から、政敵から本国に讒言され、解任されて本国に召喚。飼い殺し同然の扱いをうけたカロンは、コルベールの誘いでフランス東インド会社の理事となり、オランダ東インド会社と対決するようになる。フランス艦隊は、ムガール帝国・バンタム・カリカットに地歩を着実に築き、成果をあげる。しかし、外国人である彼に対して、同僚との衝突や反感は常につきまとった。1672年、リスボン入港の際に浅瀬に座礁。73年の生涯を閉じた。日本人妻との間に6人、後妻のオランダ人との間に7人の子があったといわれる。このように、オランダが日本との交易に残る際、大きく関与したフラソンワ＝カロンは、その後世界を股にかけて活躍し、日本史・世界史の双方で扱える人物なのである。

例えば、[資料8] から平戸の商館長フランソワ＝カロンが幕閣にさまざまな付け届けをしていたことや、当時の生糸交易の根拠地をもたなかったオランダが絹にかわる木綿の交易を手がけていたことなどを手がかりにして、インドのキャラコやコルベールなどと結びつけることができる。

5 おわりに

多くの困難が山積する教育現場で、授業改善をめざすのは大変である。しかし、わかりやすさを求める風潮の中で、歴史の授業だけが旧態依然で良いはずもなく、小・中学校、大学ともっと交流し、知識はもとより技術的なものも吸収する必要がある。その中で、4年間にわたる大阪大学の全国高等学校歴史教育研究会は、学びの定着をめざすいきいきとした歴史授業形成に大きなきっかけを与えてくれた。この試みが広がることを願いつつ、大阪大学の関係者に感謝申し上げる。

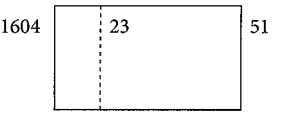
［まつきけんいち・教育プランナー］

［資料7］ アジアとヨーロッパを闊歩したF＝カロン

＜軽々と日本語をものにし、日本の国家論を書き、過労にもめげず、人生をロンした男＞

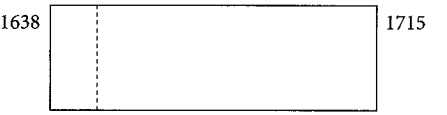
【作業1】カロンと同じ時代を生きたの人々を3色に塗り分けてみよう。

○徳川家光
(1604～51、位1623～51)

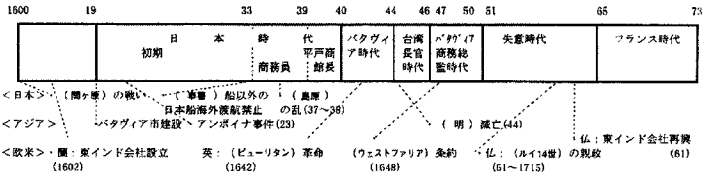


●カロン
(1600～1673))

○ルイ＝14世
(1638～1715、位1643～1715)



【作業2】カロンの生涯と日本を含む世界のできごとの空欄（　）にあてはまる語を記入しよう。 人物史



［資料8］　史料 1640年11月1日

［借方］進物費［貸方］下記諸口　f .4,357:19:14
この金額は、［東インド］総督閣下の命令に基づき。同閣下の書翰に添えて平戸の領主肥前様［松浦鎮信］と長崎代官［末次］平蔵殿に贈呈されたる進物、同様にプレジデント、①フランソワ・カロン閣下の宮廷での拝謁実現に際し、多大の援助を賜わりし下記の殿たちに対し、その謝礼として呈されたる進物、並びに［上記進物を届けた］プレジデント閣下［カロン］の長崎往復と使用人ヘーベエ殿の江戸往復に要したる食費などの旅行経費の総額なり。内訳は以下の如し。

平戸の領主、肥前様［松浦肥前守鎮信］充て
1頭 ペルシア産の馬、1反 緋羅紗　他　　f .1,563:2:-
長崎代官、［末次］平蔵殿充て
1反 緋羅紗、3反 サージ即ち小羅紗、50反 ②奥嶋　縞木綿　　f .943:10:-
閣僚、讃岐殿［③酒井讃岐守忠勝］充て
1反 ペルシア産金羅紗、5反 ②奥嶋　縞木綿　他　　f .455:10:-
閣僚、伊豆守［④松平伊豆守信綱］充て
1反 ペルシア産金羅紗、5反 ②奥嶋　縞木綿　他　　f .317:10:-
閣僚、豊後殿［阿部豊後守忠秋］充て 3反　奥嶋　縞木綿　他　　f .82: 9:-
閣僚、……（中略）……
閣僚、筑後殿［⑤井上筑後守政重］充て
閣僚、備中殿［太田備中守資宗］充て　　各3反 ②奥嶋　縞木綿　　f .21:15:-
閣僚、江戸の市政官［江戸町奉行］2名充て
6反　②奥嶋　縞木綿　　f .43:10:-
（後略）（平戸商館の仕訳帳より抜粋）
※単位はグルデン（f　）1グルデン＝20ストイフェル＝320ペニング
※史料はスペースや授業展開の関係で編集してある。

作業1
下線部①③④⑤の人物について調べてみよう。
作業2
下線部②の奥縞とは何か調べてみよう。

［主な参考文献］

岩井淳『千年王国を夢見た革命　17世紀英米のピューリタン』講談社選書メチエ51、1995
片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』吉川弘文館、1985
杉本つとむ『長崎通詞ものがたり　ことばと文化の翻訳者』創拓社、1990
帝国書院『世界史のしおり』2003年第9号
鳥尾永康『ニュートン』岩波新書 評伝選 岩波書店、1934
平戸市史編纂委員会『平戸市史　海外資料編Ⅲ』1998
藤原正彦『天才と栄光と挫折　数学者列伝』　NHK人間講座、2001
フランソワ・カロン原著　幸田成友訳著『日本大王国志』平凡社、1967
E.T.ベル　田中勇 他訳『数学をつくった人々』東京図書、1975
山川出版社『世界史ゴム印基本セット』貼付パンフレット

大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006〈全8巻〉
文学研究科　人間科学研究科　言語文化研究科　コミュニケーションデザイン・センター

第1巻　岐路に立つ人文学

第2巻　人文学討議空間のデザインと創出 ―若手研究集合―

第3巻　トランスナショナリティ研究

第4巻　世界システムと海域アジア交通

第5巻　イメージとしての〈日本〉

第6巻　言語の接触と混交

第7巻　モダニズムと中東欧の藝術・文化

第8巻　臨床と対話

代表者　鷲田清一（拠点リーダー）

通巻編集　三谷研爾・藤本武司

第4巻　世界システムと海域アジア交通
#Volume 4 Global History and Maritime Asia

発行日　2007年1月31日

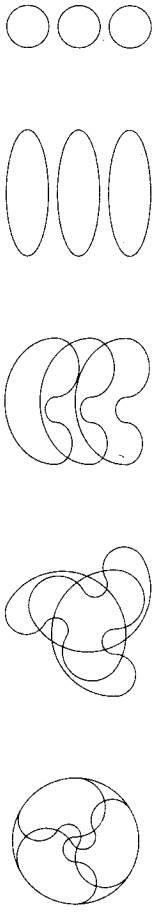
責任編集　桃木至朗

編集　佐藤貴保

発行　大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

大阪大学大学院文学研究科内COE事務局

組版・印刷　有限会社松本工房

表紙デザイン　西田優子